金澤詩人

第１８号　２０２２

２０２１年度
金澤詩人賞
候補作品
目次

011 受賞者

015 選評

作品
金澤詩人賞
017◆飛鳥未紘　茨城県
019◆三原晶子　鎌倉市

候補作品
海外篇
049◆村主ミオ　California
055◆絹江　Dubai, United Arab Emirates
056◆笹森美帆　Barcelona, Spain
061◆綾乃圭人　Australia
064◆Catori Sarmiento　State of North Dakota,USA
064◆弥子　South Carolina,USA
067◆冨永桃子　Toronto, Ontario, Canada
070◆クギベラ　New Zealand
071◆Seulram Lee　Republic of Korea
073◆塚本美咲　Budapest,Hungary
074◆北村千絵　Singapore
076◆阿部静雄　New York

少年少女篇
097◆芝谷映音　５歳（応募時）　山口県
097◆篠崎愛佳　８歳　東京都
098◆一乗陽音　９歳　東京都
098◆ゆうー　９歳　神奈川県
101◆山崎美優　１２歳　長野県
101◆月きらり　１２歳　東京都

102◆藤原明穂　１３歳　　兵庫県
102◆夏野凪　１３歳　　兵庫県
103◆原学志　１４歳　　福島県
104◆なひな　１４歳　　茨城県

一般篇

105◆千葉ミチ　　愛媛県
106◆牛田丑之助　　大阪市
109◆由利日向子　　東京都
112◆コウ　　和歌山県
113◆小俣まお　　埼玉県
117◆凪　　愛知県
124◆鵜殿昭　　群馬県
127◆坂本　　愛知県
127◆片口理恵　　富山県
130◆七まどか　　千葉県
132◆ジェシー・ウー　　東京都
134◆山田奈由子　　兵庫県
135◆スシ・ワラワ　　静岡県
138◆森部英生　　名古屋市
141◆黒田菜月　　茨城県
142◆もっちりもちか　　神奈川県
144◆清水康夫　　愛知県
144◆岩崎淳志　　鳥取県
150◆能美政通　　秋田県
152◆コバタ　　沖縄県
154◆御供文範　　茨城県
155◆小田涼子　　兵庫県
156◆大山星　　東京都
158◆池惠保　　埼玉県
161◆種　　熊本県
162◆柳生たまみ　　神奈川県
163◆三宮千抄　　東京都
165◆椎葉美羽　　福岡県
165◆相馬実　大分県
170◆細島裕次　　栃木県

172◆北澤佑之輔　　京都府
174◆五木國重　　京都府
175◆くるみ　　奈良県
176◆高木俊之介　　静岡県
177◆サクラが咲いた　　愛知県
177◆辰己尚平　　大阪府
182◆じんこ　　神奈川県
183◆小佐治雪　　愛知県
185◆Yubune　　沖縄県
186◆Mちゃん　　長崎県
189◆大坪覚　　横浜市
190◆細川なつ　　京都府
191◆梶原真冬　　東京都
196◆結咲こはる　　千葉県
198◆月野海月　　神奈川県
200◆神谷りん　　静岡県
201◆夏宝洛　　大阪府
203◆田中花林　　静岡県
205◆椎名　　宮城県
215◆松山尚紀　　埼玉県
218◆熊野コエ　　神奈川県
220◆佐藤かしこ　　岩手県
221◆小川流　　神奈川県
227◆山村幽星
235◆夢沢那智　　鹿児島県
236◆疾風向　　長崎県
242◆加納〆　　三重県
244◆藤岡善信　　東京都
245◆安田義明　　京都府
248◆藤原有紗　　京都府
255◆淡水　　大阪府
258◆小山不一　　岩手県
261◆あんのくるみ　　埼玉県
262◆近藤泰地　　千葉県
264◆古川久　　大阪府
266◆みちながまいこ　　栃木県

267◆清水優花　　神奈川県
269◆中振瑞風　　京都市
271◆たまむすび　　千葉県
272◆ナガツキイワタ　　神奈川県
273◆矢城道子　　福岡県
274◆若杉光　　兵庫県
276◆海田あお　　広島県
277◆蜜　　東京都
278◆中原賢治　　岐阜県
279◆星詠橙子　　神奈川県
281◆泰井良　　静岡県
284◆笠健人　　東京都
290◆森由右子　　千葉県
291◆ドビー　　神奈川県
293◆小沢浩太郎　　東京都
296◆牛島敦子　　富山県
297◆清水らくは　　熊本県
298◆文香ヒロ　東京都
306◆小原友紀　　高知県
307◆福田智子　　奈良県
312◆真野慎吾　　茨城県
312◆高遠零　　北海道
314◆七草すずめ　　静岡県
316◆senri49　　神奈川県
317◆柳沢　進　　東京都
319◆入間しゅか　　兵庫県
319◆西山龍喜　　千葉県
320◆神戸唯　　兵庫県
321◆感王寺美智子　　福岡県
323◆永田浩子　　千葉県
323◆蒼井びわ　　岐阜県
324◆奥山綾子　　兵庫県
324◆沼蔵ハロ　　京都府
325◆風見みどり　　東京都
325◆秋永　　群馬県
327◆谷口欧介　　東京都

329◆あさとよしや　　沖縄県
330◆横田篤樹　　東京都
332◆Nostalghia　　東京都
333◆樋口健司　　岐阜県
339◆川﨑愛弓　　大阪府
340◆小川湖子　　愛知県
342◆遠藤さや　　埼玉県
344◆大江豊　　愛知県
347◆坂倉拓実　　大阪府
347◆白澤侑希　　福岡県
347◆湯谷大志　　埼玉県
349◆なづき　　大分県
351◆五島千夏　　青森県
352◆今西美由紀　　奈良県
353◆堀越そのえ　　宮城県
355◆南風原めぐみ　　東京都
356◆青木賢一　　埼玉県
357◆吉岡耕大　　東京都
359◆シアン・クレイ　　埼玉県
362◆安堂　　沖縄県
362◆近藤太一　　兵庫県
366◆こはく　　神奈川県
367◆藤佳　　神奈川県
369◆水月水果　　群馬県
373◆水無月真凜　　福岡県
379◆後藤　順　　岐阜県
383◆三根由真　　東京都
385◆松下友香　　静岡県
388◆伊織　梢　　神奈川県
390◆秋山さや香　　茨城県
392◆嶋田紫文　　東京都
394◆さより　　神奈川県
396◆藤井亜希　　神奈川県
401◆未来　　静岡県
402◆LDR　　東京都
403◆たけ虎　　愛媛県

403◆Ｅ　　静岡県
407◆保田恵　　神奈川県
410◆灰島雷　　神奈川県
411◆大森瑞希　　埼玉県
412◆茉莉亜　　埼玉県
416◆黟　　東京都
417◆豊田隼人　　東京都
418◆cofumi　　北海道
419◆暁夜曖生　　埼玉県
420◆明蓮 陽　　静岡県
422◆岸本知也　　石川県
424◆松本涼花　　千葉県
427◆武中義人　　岡山県
428◆辻洋一　　栃木県
429◆秋乃夜永　　山形県
430◆辻香名美　　愛知県
430◆井川芽衣　　埼玉県
431◆なかむらみほ　　福岡県
432◆塚本貴文　　神奈川県
432◆江口久路　　京都府
433◆はしのぶしげ　　広島県
435◆ツチヤタカユキ　　大阪府
436◆阿多　　秋田県
437◆林やは　　愛知県
438◆ウロタンケツ・ケタ　　青森県
439◆蟹江道悟　　東京都
440◆大島明日香　　愛知県
441◆堀大海　　大阪府
443◆森下万尋　　千葉県
445◆谷町蛞蝓　　大阪府
449◆みつだ桃月　　東京都
449◆坂宮のりつぎ　　兵庫県
450◆油布晃　　竹田市
451◆日比谷プール　　東京都
454◆杉野弘美　　石川県
455◆カンマ　千葉県
456◆伊藤大作　　東京都
458◆永井真水　　京都府

458◆山岳三峯　　福岡県
459◆熊倉省三　　東京都
463◆妄想カフカ　　福岡県
465◆睦月　　栃木県
465◆ヤツキマオ　　茨城県
466◆げん　　神奈川県
468◆八城裕貴　　宮城県
469◆水色綺麗　　福岡県
472◆たたみイワシたかと　　東京都
472◆坂井雄大　　東京都
474◆西いづみ　　熊本市
475◆松塚犬　　神奈川県
477◆若葉　　山梨県
479◆冬埃　　北海道
480◆高梨粋　　東京都
481◆藤井康夫　　東京都
482◆パク　　東京都
483◆かな　　東京都
483◆浅井乃衣　　神戸市
486◆西ヶ開公一　　京都府
487◆小川雄大　　東京都
487◆秋寄歩美　　熊本県
488◆皆川莉穂　　大阪府
489◆皆川明日花　　埼玉県
490◆安食康孝　　埼玉県
490◆武田　和　　香川県
491◆矢野堅太郎　　大阪府
493◆犍陀多　　埼玉県
498◆多田有希　　岩手県
498◆幽玄虎也　　東京都
500◆大日向 美紀　　千葉県
502◆篠崎亜猫　　広島県
502◆Tanio　　秋田県
503◆燐廻　　埼玉県
504◆金閣寺＆茶楽茶丸　　東京都
506◆藤﨑欣也　　群馬県

506◆COSEN　　東京都
507◆岡部將生　　東京都
508◆ひさてる　　北海道
508◆鴉蝶　　三重県
509◆玉井砂帆　神奈川県
510◆械冬弱虫　　東京都
511◆ホック サディアザンナット　　兵庫県
511◆畠山隆幸　　長野県
512◆穴澤由佳　　東京都
512◆極楽浄土ちゃん　　東京都
513◆恵山花　　愛媛県
513◆菅沼きゅうり　　新潟県
514◆kesun4　　三重県
515◆小川勇大　　東京都
515◆みぃ　　愛知県
516◆Yoshi　　埼玉県
517◆羊飼いの財布　　兵庫県
517◆鈴蘭　　石川県
519◆星水かほる　　埼玉県
520◆I.me　　京都府
522◆せせらぎさらさ　　東京都
522◆ギザギザ仮面　　神奈川県
524◆田中楓　　沖縄県
524◆葛飾ロビンソン　　兵庫県
525◆半谷妃菜　　福島県
525◆水越晴子　　三重県
526◆花渕邇湖　　宮城県
528◆るりなつよ　　茨城県
531◆板倉萌　　兵庫県
533◆家事キング　　京都府
534◆おとこのこころ　　茨城県
534◆安部さやか　　東京都
535◆幸亜有美　　大分県
540◆田中教平　　静岡県
541◆張佳晏　　東京都
542◆佐々木千賀子　　大阪府

543◆あけぽむ　　福井県
546◆吉川長命　京都府
546◆岸明日翔　東京都
547◆月　宮城県
548◆雑魂草
549◆玉井秀男　福岡市
551◆岡安啓　平塚市
552◆落知之仁美　神奈川県
554◆伊藤範子　　三重県
567◆舞雪野　　北海道

579 あとがき

二〇二一年度 金澤詩人賞

受賞者

飛鳥未紘（あすかみひろ）

プロフィール

茨城在住。二〇〇三年生まれの高校生。この春大学に進学。読書と食事が好き。

受賞のことば

この詩は、受験生だった過去の私によって生み出されました。確か九月の終わり、受験勉強の傾斜がきつくなってきた頃に書いたものだったと思います。あの頃の私はただ、漠然とした言葉に表せない感情を日々抱えていました。そしてそれは、やがて疲れという形で表出しました。受験勉強に疲れたというのももちろんありますが、それだけではなく、そこに存在していること自体に途方もなく疲れていました。受験に限らず、正解の見えない道をひたすら歩むことに嫌気がさしていました。しかし、それは決して自棄的な思いではなく、私の心を巣食う「何か」を解明したいという強い願望の裏返しでした。

こうした中、ある日私は突然この「何か」を詩で表そうと思い立ちました。今になっても不思議です。なぜ詩を選んだのか。小説や絵は普段からよく書きますが、詩は身近なものとは呼べませんでした。それでもあの時の私は詩以外の選択肢を思い浮かべませんでした。

詩を書くのに時間はかかりませんでした。頭の中にあるイメージを、私の好きな言葉を使って紹介する、そんな感覚で書きました。ほとんど衝動に近い行為だと、振り返って思います。あの瞬間、私は確かに何かに取り憑かれていました。

こうして、私の人生初の詩が出来上がりました。今回、賞がいただけるということで久しぶりに読み返したら、自身の詩に何かしらの熱を感じました。そして詩は一期一会の出会いなのだと悟りました。その時、その瞬間にしか書けないものがあるのだと知りました。

今、詩を書けと言われてもきっと書けないでしょう。また、いつか(ロマンチックな表現になりますが)詩の不思議な力に導かれた時に詩を書こうと思います。

最後になりますが、今回、こうして栄誉ある賞をいただき嬉しく思います。詩の面白さ、奥深さ、そしてなにより刹那的な思考を表象することの楽しさを改めて実感する機会をくださいました事、大変ありがとうございました。

三原晶子（みはらあきこ）

プロフィール

一九八一年神奈川県藤沢生まれ。教会の牧師の二女として生まれる。神奈川県・千葉県育ち（幼少時二年間の英国在住歴あり）。上智大学文学部英文学科卒業（大学三年目を休学し一年半余の英国滞在・就労歴あり）。大学卒業後に統合失調症を発症、その後躁鬱病を併発。二〇一八年父の退職と共に姉家族の住む鎌倉に移住。両親との三人暮らし。鎌倉市内の精神障害者専用の事業所で、ネット記事ライティングやデータ入力などの仕事に従事しながら詩作活動。

二〇二一年に鎌倉市在住の某絵本作家との出会いにより、触発され、物語や詩のようなものを書き始める。物語は一作品に留まり、以降はエッセイのようでもあり、リズムを付けて言葉を紡ぐスタイルの詩を、作品として書き続けている。これまで完成した詩作品は六〇～七〇作品。

趣味：ランニング・美味しいもの・自然観察。

受賞のことば

この度は「二〇二一年度金澤詩人賞」に選んで頂きまして本当に有り難うございます…。このような名誉ある賞を頂き大変光栄に思っております…。昨年二〇二一年春頃より本格的に始まった私の詩作ですが、同年の夏頃より二ヶ月程、詩が生まれる度に当賞に応募しておりました。そしてその後も、変わらず詩作を楽しむ日々を過ごして参りました。先日郵便にて当賞の受賞の通知を頂き、本当に驚きましたと共に、詩を書く者として、然るべき方々にこのようなかたちで認めて頂く事が、こんなにも深く大きな喜びに満ちた事なのかと…感慨を覚えております…。

鎌倉に移住してから三年目の年明け二〇二一年、鎌倉在住の某絵本作家との出会いを通して、不思議な力が与えられ詩作活動が始まりました。文学や言葉、物を書く事への憧れはありつつも、特に文学少女ということでもなく、詩や散文・エッセイ等の経験も持ち合わせませんでした。たまたま英文学科を選び進学・卒業した事を通

じて、文学や言葉への憧れは自然に強まったのだと思います。

　某絵本作家との出会いを始め、出来立ての詩を第一に読んでくれる両親を始め…、読者でいて下さる多くの知人・友人、詩作を始めた頃から応援して下さる鎌倉のカフェ・マスターや所属する蔵書室コミュニティの皆々様の温かい励ましやまなざしに支えられ、この短い一年間があったと言えます。大学の恩師にも勝手にメールをお送りし…作品に目を通して頂く機会とばかりに、新作を添付し励みにさせて頂いてもきました…。知人・友人への手作りの詩集三集、蔵書室コミュニティのイベントを通じて製本した詩集二集等々、これまで沢山の方々に手に取って頂き、ご感想を寄せて頂きました。素晴らしい読者に恵まれた事は、詩作への喜びと感謝を一層豊かなものにしていってくれたと思います。文学の薫りある鎌倉に移住し、図らずも良い影響を受けた事も感謝です。

　この賞を頂いた事を励みとして、これからも詩作を楽しんでいきたいと思います。

選　評

二〇二一年度の応募数は三八一八篇ありました。海外から十二名参加あり、ニューヨーク在住の阿部静雄さんから、今回も現代の坩堝を先鋭に描く多数の詩篇をお寄せいただきました。

また少年少女からも初々しい詩篇が届けられました。

例年よりはるかに多くの詩篇を掲載しましたのは、切実に心情を吐露された作品をどうしても抜くわけにもいかなかったからです。鬱の時代と思わせるほど内省的な詩群は、読者を時代相に向かわせるものです。

授賞しました飛鳥未紘さんと三原晶子さんの詩篇は、一度読みますと、ずっと心のどこかに引っ掛かって消えない魅力を湛えていました。それ故授賞者を一人に絞ることができませんでした。

最終的に残る作品は、大袈裟にいえば魂を揺り動かす力を持っています。技術的にいえば二人より遥かに上達した作品を数えることができます。けれど作品に存在する人間の神秘性は技術によってむしろ疎外されてしまう場合があります。平板にいえばピュアであり、理屈っぽくなく、下品でない作品が、素朴であっても読み手に歓びを喚起します。

飛鳥さんの応募作は一篇でしたが、「遠近」というタイトルの付け方も、重畳または重複した表現を削ぎ落とし、めくるめく万華鏡のような詩に完結した才も非凡でした。

いなくなりたい自分が液体となって地面に伸び、ビー玉と化し、青空を映す。景色を取り込み、旅をする。人々の顔に驚き、なおも「欠けてゆきたい」。地底に辿り着いたら「石にあいさつをして」眠りたい。

この寂寥感は現存在に付随していて、生を愛するが故の別れの願望がもたらすものであり、それを飛鳥さんは高校生の鋭敏な感受性で言語化できたのです。

三原晶子さんの作品は、年度当初より次々と寄せられました。散文的で、現代詩の潮流から外れているのです

が、全応募作品の中で突出して清明な響きを放っていました。数篇を選ぼうにも、切っても切れない生命の流れに繋がれていて、結局全篇を採用しました。

三原さんは鎌倉という文学的な街に触発されて詩が生まれてゆくのですが、人々との距離感に悩みが生じても、どこかで超越的な眼差しから眺める品位が保たれていて、それが日常の風景描写の中に澄明さとなって現れてきます。またそれは、心を病んだ者に与えられる恩恵ともいえ、優れた詩はそこから造形されてゆくのです。

その恩恵としての超越性は、三原さんがキリスト教会という特異な場で育まれ、おそらく現代社会との軋轢と孤独に闘った結果得られたものと詩篇から想像します。

キリスト教が愛の宗教のゆえに、自己に課せられたとき甚だしく相剋せざるを得ず、しかもイエスの愛に戻らざるを得ないという格闘です。それが三原さんの詩を天上の明るさへと導いています。

〃「きっちり足に合った靴さえあれば」（須賀敦子著『こころの旅』プロローグ）…私も歩ける時が来たのかしら〃と須賀敦子さんとの出会いを語っていますが、須賀さんの純朴な詩が、三原さんの詩のスタイルを生んだのでしょう。

それだけでなく、「皆に　疎まれる　ドクダミは　怪しい女の　白さの　嘘」という女性性も魅力であり、見逃せません。

それにしても三原さんの鎌倉の風物詩はとても美しく、ちょうど今年の大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」もあって、急ぎ足を運びたくなりました。

作品
金澤詩人賞

◆飛鳥未紘　茨城県

遠近

しにたいことなんてない
かんがえるだけで恐ろしい
しは遥か遠くでこちらを見る

いなくなりたい
たまに、そう思う
しにたいんじゃない
いなくなりたい

おぞましい色で塗りたくられた自分が
まずはじめにどろっと変形して
それから地面に伸びて液体になる

液体になったらぎゅっと
強い強い強い力で抱きしめられて
そこにはころんとビー玉がある

汚い色が嘘のように澄み渡り
青空をうつしだす不思議な球体

りん、と音が聞こえるぐらい軽やかに
そのまま外へ転がり落ちて
じゃりをゆき、道をゆく

透明な硝子に鮮やかな景色を取り込み
くるくると回りながら
そうやって旅をしたい

見慣れない風景に
目新しい人々の顔に
驚きながら欠けてゆきたい

失われてゆく欠片が
宙を舞い
日の暖かな光をうけて

きらきらきらきら

眩しいそれを眺めて
硝子はどんどん小さくなってゆく

最後に川の音
ちゃぷちゃぷと音を立てて
澄んだ水の底に沈んでゆきたい

冷たさを心地よく感じながら
地底に横たわる石に挨拶をして
ただ眠りたい

◆三原晶子　鎌倉市

私のお母さん

お母さんの一日は　十五m自由形…
掃除も終わっていないのに　突然朝刊　読み始める
なで肩の背中　少し丸めて　今日の社説を読んでいる

夏時のハトムギ茶　煮出してると思ったら
お父さんの　Yシャツのほころび　繕ってる
白地の洋服　手洗いしてる　と思ったら
自室の　模様替え　始めちゃった…

二人で　お昼の洗い物を　し終わったら
電卓と家計簿　と　にらめっこ…
食糧棚の　整理　始めてたのに
突然の　千華子さんからの　長電話…
楽しく　くすくす笑ってる
時計がカチカチなって　時間がゆっくり過ぎてくまに…

午後の　三時になっちゃった…！
お母さんちょっとお茶にでもしない？
こっちもあっちも　もぐらが掘り返したみたい…！！
あっちもこっちも、お母さんの物よ
かえって物が増えてる感じ…！

紅茶を一杯飲みながら　庭を見つめ胡桃（くるみ）　かじってる
お話いっぱい　し終わったら
お母さんが　急に　もぞもぞし始めて
どうやらヴァイオリンの練習始めたいみたい…

私は　お母さんの個室の外…
なるべく音を聞かないようにしてる…
音が無くなった　と思ったら…
着物の　着付け　始めたみたい…！

おばあちゃんの織った　着物と　帯に
どんな帯上げの色味　合うかしら…
洋子さんの　くださった　すくい織りの着物に

どんな帯締め　合うかしら

忘れん坊のお母さん
お母さんの人生は　一瞬一瞬が　楽しいみたい
陽の光に照らされた　心の中
一身に　お空に　向けてるみたいに
そのままの自分を捧げるのが　うれしいみたい

五月の道

アジサイ寺から　望む海は
小さな広がりの先の　小さな海
坂ノ下から　材木座まで
入り海*のような　弧を描く

紫陽花が　アントシアン*で　色づき始める頃
きっと小さな足が　階梯(かいてい)*　登っている
親に連れられ　家族に連れられ
色とりどりの　服　身に着けながら

空と海の境は　おぼろげで
雲がうすく広く　立ち込めていたとしても
登り詰めた　「眺望散策路」から
遠く　相模湾の広がり　感じられるだろうか

「境内管理室」の　人々が
今日も一万坪の庭で　働いている
挿し穂*の　一枚一枚の葉　水拭きしては
海風から　大切な花々　守っている

五月の初夏の　週初めの朝
私は熱心に花の写真　撮り収めていた
六月の鎌倉と　誕生日を思うと
なんだか胸が　わくわくしてくる

道すがら見上げた　杏の実が
「もういいよ」と　迎えに来たみたい
白のホンアジサイと　コヒルガオが
「もうすぐよ」と　迎えに来てくれたみたい

(*入り海…入り江)
(*アントシアン…植物に色をつける色素)
(*階梯…階段・学問や芸術を学ぶ段階)
(*挿し穂…挿し木の枝、ここでは紫陽花の挿し穂のこと)

今日を一日

「アマルフィカフェ」で食べる一六五〇円のランチは
充実した前菜の盛り合わせ　出してくれる
タコといんげんのマリネと　赤海老と
若鶏の　ガランティーヌが　いつものってる

ガランティーヌの説明　ウェイターから聞いて
私の心　なぜか　はっと　した…
名前のルーツは　「洗練された」の galant から…
中世では　「勇敢さ」や「気遣い」の意味があったみたい…

カウンターの　一人席から　厨房　眺めながら
正確な手さばきと　贅肉のない頬に　憧れた…
私も　あんな風に　良い　仕事できたら
フランスの　伯爵領の　料理人チームみたい…

インスタの投稿で見た　「白万重(しろまんえ)クレマチス」が　離れなくて
ページめくるため　図書館に　足運んだ…
鉄格子に絡まって　豊かに咲く　花姿が
わたしも　ああなりたい…！って　憧れさせた…

「古我邸」につながる　ゆるやかな坂道に
名の知らない花々や　やぐらの岩肌…
お屋敷の裏の　庭園カフェ　に　座って
スウェーデン王室愛飲の　ブレンドティーを飲んだ…

小町通り脇の　古い　傘屋で
母に頼まれた　橙色の傘　引き取った
乱暴なくらい　重たく感じる　黒い柄(え)を　持って

人の残る　八幡宮の　参道に出た

深緑色の　陰影見せる　桜の葉が
段葛(だんかずら)の　まだ若い幹に茂っている
忘れ去られたような　紅色の　小さな　さくらんぼが
「僕はさくらんぼだ！」と言いたい口　つぐんで　色づいてるみたい

今は　もう　土ひとつない　舗装された　道が
真新しい　灯籠の連なり従えて　悠々と　続いてゆく
遠い　昔の　面影　空気のどこかに　偲ばせながら
鎌倉の明日は　更新されていく

昔は無かったという　段葛の上を　通るもよし
賑わいのある下の歩道　行くもよしと　言われてるみたい…
大学教授の先生や　鎌倉の作家夫人のこと　思い出してた
「かまくら駅前蔵書室」の　鈴木さんのことも

お洒落して　選んで履いた　コンバースの痛みは
靴擦れのする　痛みとは　違うけれど
左手で持った日傘の　手の中が　汗ばんで
杉本観音　までの　ガードレールが　長く　続いてく

車行き交う　本道から　宅地に入って
ほっとして　鎌倉の霊園の方　見上げた
観音堂ののっぺりとした　夕方の鐘が鳴って
夏告げる　大きな入道雲　広がっていた

（＊ガランティーヌ…肉と魚の円筒形の詰め物を、低温で茹でて冷たくし、スライスしたフランス料理）

帰り路

三時には終わる　扇ガ谷の　職場を後にして
初夏の　昼下がりの中　坂道を　下ってく

英勝寺を　横目で見ながら　落飾＊した「お勝」に　想い

を馳せる
徳川家康の　側室で　鎌倉の　尼寺　建立した人

寿福寺の　門くぐり　参道に踏み込む
涼やかな　石畳が　中門*まで　続いてく

覚えたての九九　得意げに　答える　幼子のように
鶯が　いさぎよく　不規則に　さえずってる…

源氏山の　湧き水が　小さな　水路に流れて
襷(たすき)柄*のように　水底の　石肌で　交差してる

境内の前の　柵まで来て　落果した*　梅の実　ひとつ
見つけた
真上の空　見上げて　立派な葉の　木漏れ日に　はっとした…

丸みのある形の　葉っぱは　梅じゃなくて　杏だったけど

それ以外の　杏の実は　どこにも　見当たらなかった…

（*落飾…出家）
（*中門…仏教寺院で正門の次にある門）
（*襷柄…織物の柄の一つで斜めの線が交差した幾何学文様）
（*落果した…熟す前に落ちてしまった果実）

隣の静枝さん

化粧なんか　ひとつもしないで
洗いぱなしの　ボブヘアの
白髪混じりの　前髪だけ
お行儀よく　短くして
いつもこざっぱり　爽やかな笑顔

静枝さんの　周りには
なぜか　いつも　人がいて
静枝さんが　あっちを向いても
静枝さんのまゆげが　こっちを向いてても

皆　静枝さんのことが　好きみたい

静枝さんが　何かを発見したみたいに
「あら…?!」　と小さく叫んでも
道端の　小鳥は　何事もないみたいに　豆を突ついてる
…
ヒメシャラの実は　毎年の如（ごと）　茶色く実ってる
静枝さんにとっては　毎日が元日
何事も　新しい事のようだけど…
静枝さんの　心が
海の　岩場みたいに　頑丈で
何が起きても　平和なこと
皆　知っているから

私が　歩いておはがきを　届けると
知らないふりして　お返事　くれる
静枝さんの字は　整っていて
盆踊りの　指先みたいに　おっとりしてる

静枝さんが「はぁ」と言っても
静枝さんが「ふぅ…」と言っても
静枝さん家の　甲斐犬の太郎はいつも　嬉しそう
静枝さんが　ちょっと　昼寝をすれば
また元の　元気印って　知っているから…

静枝さんが「あいうえお…!」と言っても
静枝さんが「さようなら」　と言っても
庭先の木の　毛虫は　ゆっくり枝を　這っている
とんびは　変わらず　回ってる
静枝さんが　本当は　春の日に　まどろんでいて
一人で　居ても　皆と　話していても
本当は　どちらでも　幸せって　知っているから

辰子さんと諒平さん

辰子さんと諒平さんは
私の　お友達の　老夫婦
教会の週報の　代祷*　見て
私の誕生日を　祝ってくれた

誰にも知られて　いないけど
二人は　読書好きの　勉強好き
新刊の　文庫本　重ねて
私に本　そっと貸してくれた

諒平さんは　電力会社の
お偉いさん　で
とっても　不器用で　意地っぱり…

お二人で　登り明かした　百名山
決まって　諒平さんは　先頭　ゆく
重たい荷物は　丈夫な
辰子さんが　背負ってた…

奥さまに　なんで　おやさしく　できないの？
「ありがとう！」の　一言　が
ご入用　なのよ…
皆で　切なく　つぶやいたり

半分　あきれ顔で　笑い合った

諒平さんが　庭園部を
「もう　引退　です」
と　伝えてきた
でも　なぜか　誰も　信じなくて
次の土曜日　には　諒平さんはいた

危険な　高台の　花壇で
買い占めると　言い張った
パンジーの苗　植え始めている

細身の体を　よたつかせた　諒平さんの笑顔は
海の夕陽の　輝きみたい
「良子ちゃん、元気？…」と　私に
可愛い　瞳の奥で　笑いかけてくれる

……

辰子さんは　お母さんの
大切な　教会のお友達
ノラボウの葉っぱと　ふきの煮物
春には毎年　届けてくれる

朗らかで　いつも　姉御肌な
辰子さんだったけれど
悔しい思いも　いっぱいしたみたい
辰子さんは　いつか…
「私は　大変だったの」と
歯を食いしばった時期の事　語っていた

頼りない　こんな私に
そんな事　話してた…
海女さんのような　負けん気と
赤子のような　無邪気さを　持ってた

誰にも何も　告げないで
私に何も　言わないで

辰子さんは　突然　逝ってしまった

辰子さんが見せた　負けん気が
私の心を　掻きむしって
礼拝堂の　後列席で
人目も憚らず　涙した

……

辰子さんが　亡くなってから
母と　諒平さん家に　お邪魔した
「今度　鰻屋さんに　行こうね」と言って
苦い苦い　珈琲を　出してくれた

辰子さんが　いなくなって
諒平さんは　とっても　寂しそう
整頓され尽くした　部屋と　部屋　横切って
スパティフィラムを　見せてくれた

辰子さんの　命日に
お悔みの　葉書を　送った
諒平さんの　喜びが
少しでも　湧きいでますようにと
願いながら…

諒平さんは　その年の　墓参で
私の　葉書を　読んでくれた
皆　偉い人達　なのに
春のタンポポの　花弁(はなびら)が
皆　仲良く　寄り合っているように
おやさしい　ご家族に　見守られながら
諒平さんは　私の葉書　読んでくれた

（*代祷：キリスト教の礼拝の中で、信徒の誕生日や安否、命日などを祈るため、一人一人の名前を記した週報の箇所）

カンノーリア・シチリア風

お料理教室　から　帰った　母が
食後に　うれしそうに　出してくれた
イタリアの　手の込んだ　スウィーツは
地元では　昔からの　駄菓子　だという…

油で　揚げた　筒状の　生地の中に
チーズの　クリームが入った　デザート
爽やかな　リコッタチーズと　マラスキーノ酒　が
刻みチョコレートの　味　美味しく　してる
お料理教室　の　キリ子先生
いつも　レシピは　イタリア　発信
紀伊国屋　の　高級食材　で
色取り取り　の　技　繰り出してくる…

母が　お料理教室　行ってる　時は

わたしは　いつも　手持ち無沙汰…

キリ子先生の　旦那さんは
あの有名の　小説家　で…

もう亡くなってしまった　けれど
偉大な　言葉　残した　人…

ランニングしながら　見た　御成隧道*　が
何だか　遠くに　感じられる

短い　髪の　キリ子さんを　思いながら
カンノーリ・シチリア風　を　口にすると
地中海の　空と　シチリアの石灰岩の　白　が
ふっと　わたしに　笑いかける　みたい…

（*御成隧道…鎌倉のトンネルの一つ）

イタリアを巡る話

イタリアは　私の　憧れてた　異国
苦しいばかりの　中学時代に
机から動かずにいた　お昼休みに
ブーツ姿の国境　なぞってた

晴れた空の少ない　高校時代に
途中下車　できない　授業の合間に
青空を手に入れたい　と　耐えぬいてた
いつか楽しいって　信じてた

高校卒業の　その春に
I・桃子さん*が私を　誘ってくれた
中学時代の友人で　ご両親が教師のI・桃子さん
卒業旅行しよう　と　誘ってくれた

お小遣いの　すべてを　果たして
イタリア旅行の　旅程を　練った…
とっても　意見が　合わなくて
止めにしよう…　と　すれ違った

それでもやっぱり　行きたくて…
私が　Ｉ・桃子さんを　引き込んだ…
弾丸旅行がしたい　桃子ちゃん
ゆったり旅程が　希望だった　私

イタリア各地を　巡りながら…
言葉少なに　心どこかに…
ヴェネチアで着いた　宿の中で
荷物と体を　投げ出してた

ローマの街中で　別行動…
爪先程の　青銅の　小さな小さな　亀を買った
フィレンツェの　ユースホステルで
取り残されて　泣いていた

Ｉ・桃子ちゃん　と　遂に　けんかした！…
ヴェローナの夜　の　コンパートメント*で
「お母さん、もう家に帰りたい…！」

と　心の中で　言ったけど
お母さんの姿は　遠ざかっていた

Ｉ・桃子ちゃんが　うつ伏せてる間(ま)に
私は　神様の存在　悟っていた
私の　エゴを　受け止められるのは
神様しか　いないって
分かったから

乗り合わせた　初老の男性と　若いご婦人が
静かに言葉　交わしてた
イタリア中の　町明かりに
神様の　慈しみが　注いでた

……

イタリア語が　学びたくて
大学生活　を　夢見てたけど
講義要項を　幾ら　めくっても

「イタリア語副専攻」　の文字　見当たらない
英文科を　受験しちゃったから…
私の希望の　イタリア語　消えちゃった…

電子辞書が　出回った頃
先生に隠れて　電子辞書を　使った
書籍の辞書を　使わなければ　何の訓練にもならない
と　激励する　先生の元で

少しお金を　奮発して
イタリア語辞書付きの　電子辞書　買った
何度も挑戦したけれど　ちっともイタリア語　身につか
なかった…

…ロンドンの　長距離バスに　電子辞書　置き忘れたけ
ど
それでも　諦めずに　同じもの　買ってた…

……

鎌倉の地に　引っ越してきてから
「須賀敦子*さん」と　出会った

遠い　昔の　サン・パウロ(書店)で
美しい装丁に　憧れてた…
きっと　素敵な　人　なんだろうって
心の　鈴音が　小さく小さく　響いてた

私が　須賀敦子さん　を　読める日が　来るなんて
借りてきた書物　読み明かした
須賀敦子さんの　たったひとつの詩集から
私も　書けるかもって　頑張ってみた

鎌倉に来てから　四年目…
鎌倉の　著名な　絵本作家から
書籍の好きなカフェオーナーまで
いろいろな　人と　出会ってた

「きっちり足に合った靴さえあれば、」
（須賀敦子著『こころの旅』プロローグ）
…私も歩ける　時が　来たのかしら
鎌倉の山々を　仰ぎ見ながら
道端の　花　撮り収めながら
ゆっくり自分の歩を進めよう
見守ってくれる人々を　大切にして

（*I・桃子さん…実在の児童文学者兼翻訳家と同姓同名）
（*コンパートメント…列車の四人～六人掛けの個室）

五月の唄

老人ホームだった　広い　平屋の借家は
英勝寺の先の　私の　職場
幾つもの個室や　広間や　台所や
二つずつの　トイレと　お風呂場　がある

東慶寺の　イワタバコの葉が　雨露に　湿ってる時
浄智寺の　石畳が　雨露に　濡れてる時

だだこねるみたいに　ささやく　鳥の声は
どんな　姿の　走り梅雨*の　鳥かしら

雨樋（あまどい）の割れ目から　止めどなく　流れ出る　雨水の音…
台所の窓の先の　トタン屋根の　隙間から
潜望鏡*のような　排気口　が　覗いている
……

長谷寺の本堂で　見た　いつかの十一面観音の　立像…
曇り空の下　展望台に　進み出て　見た…
扇形に広がる　小さな町並みと　相模湾の　景色
本降りの中　今も　広がってるだろう

……

パソコンを　カチカチと　鳴らしながら
雨脚の先の　源氏山の森　眺めてみた…

源氏山の　湧き水が　民家の間　流れて
滑川(なめりがわ)に　注いでく

勢い増した　細流の　営み
海蔵寺や　寿福寺　の寝息　聞こえて　くるみたい

（*走り梅雨…梅雨に先立って降る五月の雨）
（*潜望鏡…潜水艦の上から伸びている光学装置兼望遠鏡）

ドクダミの讃歌

初めて　ドクダミに　出会ったのは
多分　山道の林の中

誰も見ない　暗がりに
不気味なほど　白く　自生してた

草取りする　時
顔　近づけると

独特の匂い　放ってる
更に　それを　むしり取ると

しつこい　根が　抜けなくて
ちぎり取れた　茎から　強い匂いが　拡散する…

皆に　疎まれる　ドクダミは
怪しい女の　白さの　嘘…

ドクダミを　道端で
見かけると

自分の　胸に

突き刺さって

自分のこと
言われてる　みたいと

心　抗いようなく
傷つく…

……

四十路(よそじ)を
前にして　鎌倉*…

優しい　人々に
助けられた

家族だけでは　補えない
愛を

未知の世界が
備えてくれた

扉を　開いた
足元には

詩作と　絵との
喜びがあった

母の乳房　探し続けるように
求め

母の微笑み　見上げるように
背伸びする

春が過ぎ　初夏が過ぎ
楽しさは　続いてく

……

図書館へ　向かう道は
たのしい

人に　会いに行く　道のりは
愉しい

職場で会う　スタッフは
嬉しい

同僚の　友は
楽しい

……

錆びついた　鉄格子の内側の
ドクダミの繁みに　出会った…

人の　立ち入れない　古家(ふるいえ)で

涼やかに　咲き誇る
白が　まぶしい

歴史文化交流館へ　向かう　途中…
ドクダミの群生に　出会った

目線の　高さの　石垣の土で
一方向に　咲いてる

下から　見た　めしべとおしべは
希望に　向かってるって　わかった…

ドクダミの臭みも
名前の暗さも

もう前のようには
気にならない

町のそこここで

見つける　姿

元気に　咲く　姿は
私の　大切な　友達…

（*鎌倉に越してきたということ）

見えないこと、届かないこと

八幡宮の　赤い鳥居の向こうの
本宮*に　ピント　合わせたら

厳粛さ　宿すように
白い　もやが　かかった…

日曜日の　礼拝と
中庭の草取りの　帰り

歩を　ゆるめ
附属校の　向こうの　山を仰ぐ

視界の先　山の緑　だけが
もやが　かかってて

晩春の朝の　霧や
淡い　煙でも　雲でも　ないみたい

あれは　南国の　砂漠の
蜃気楼が　映す
幻覚　かしら…

厚い　空気の　層が
大気中の　微粒子　束ねて
かすんでるのでしょう…

……

はっきりと「見えない」ということが
「広がり」　感じさせる…

「届かない」ということが
物事への畏怖や深さ　伝えてる…

今日…　あの人に　「会いに行かない」
という　選択は　勇気？

「会いに行けない」　という
私の弱さの　裏側？

「会いに行かない」こと　選んだ
私を　祝おう

会いに行かず　一人行く
今日を　祝おう

人と　会い…
まだ　「見えない」が
いっぱい

人に　変えられ　また出会い…
「届かない」が
いっぱい…

……

これから　会うべき　人々が
私には　まだ　ある…

会わなくていい　無数の人々の
尊厳が　ある

快い　隔たりを
保つべき　道が　あり

今　出会っている　ことの
無数の　尊さと喜び　がある

今日の　日を
祝おう

隔たり　を
祝おう

我と君との　命の隔たりを

（※本宮…神社の中心の建物、寺院でいうところの
本堂）

無題

歴史文化交流館を　訪ねると
前のように　制服の女性が
二人　座ってて

館内の回り方
手短に　教え
すぐに目線　そらし

口つぐむ

誰もいない　展示室の
入口　振り返ると
復元された　赤い　甲冑（かっちゅう）が
出迎えた…

物言わぬ　見事な　装飾の
大鎧（おおよろい）
鎌倉武士の　覇気と怒号…
伝わってくるみたい

源氏・平家の台頭の　歴史から
頼朝の父の　敗戦…
北条氏の　滅亡までを
たどった…

薄学の　頭使って
熱心に　書き留めてく…

粗いモザイク画だった　鎌倉の歴史
浮き上がってくる

頼朝の　流刑の地
伊豆国(いずのくに)*の　ことや
監視役だった　北条政子の
父一族の　ことも…

頼朝が　あの地に
幽閉されなければ
政子との　出会いも
北条氏の　興亡も
なかったのかしら…

頼朝の息子　実朝が
甥の公暁(くぎょう)に
暗殺されなければ
鎌倉幕府の　行く末
変わったの　かしら

北条一門が
自決し　華々しく　幕下した
余韻が
義時や　政子の
凄み　伝えてくる…

展示室3号の　角を
曲がると
杉原千畝(すぎはらちうね)ら*　「命のビザ」の
鎌倉人が
称えられてた

とっても　大事なことに
触れられたみたい
晩年の地に　鎌倉選んだ　杉原らの
叡知に
触れられたみたい…

歴史館の　裏山の階段
登っていくと
鎌倉の町の　広がりと
紫陽花のプロムナード*
見渡せる

ガラス張りの館内の
窓際に　立つ
紳士が
眼前の　砂岩の　巨大な岩肌
眺めている…
あれは　長身の
杉原千畝かしら…
あんな風に
歴史の　壁
見つめたのだろう…

歴史館を　後にして
佐助隧道(ずいどう)*を　目指してく

ぼんやりと
紫陽花や楓の　こずえ
見上げながら…

気づいたら　本物の
トンネルに　差し掛かって…
急に　空が　暗くなるように
視界　閉ざされてく…

鎌倉公方(くぼう)の　混乱や
北条の御家人たちの　苦悶が
トンネルの冷気の　上を
渦巻いて…

出口まで　点在する
ライトの　白　だけが
私の眼の　奥で　不思議に点滅する

時空の　割れ目に

足　踏み入れ
意識　朦朧としてくように
鎌倉時代への　扉に
迷い込んでいくみたい

（伊豆国…．現在の静岡県伊豆市）
（*杉原千畝ら…ナチスの迫害を逃れてきたユダヤ人を始めとする避難民に、外務省の訓令を無視してビザを発行し多くの人命を救ったリトアニア外交官の杉原千畝、それを支えるため日本で奔走した小辻節三、いずれも鎌倉に住んだ）
（*プロムナード…遊歩道）
（*隧道…トンネル）

お母さん

お母さんは…
炊きたてのご飯に　手作りのふき味噌のせ
しらすの天日干し添えて
食べるのが　大好き

鯵（あじ）の干物が　主菜の時は
頭から　尻尾の焦げた所まで
大事に全部　食べるのが　大好き

固くて　美味しいバゲットに
粒入りのマスタード塗って　ハムとレタスで
お昼にするのが　大好き

上品な帽子　被っているみたいに　俯向（うつむ）いて
白や薄紅色に　色づく　レンテンローズが
大好き

私の知らないお母さんは
エンレイ草のことを思うと
ほろほろ泣いてしまいそうになる

春になると　目を細めて
北海道のエンレイ草を見に行きたい　と

つぶやく

修道女のように　上勇知(かみゆうち)*の　原野に住んで
エンレイ草の　群生に　囲まれている
トシ子さんを　思い出すから

庭先には　チョウジ草と　大好きなミツバシモツケを
植えていて
忘れな草が咲く頃には　ヒメシャラもヤマボウシも
テラス先の塀際で　天高く繁ってく

お母さんの　小さな母性と　祈りは
六月のアナベルのように　誰よりも白い

（*上勇知…北海道稚内の地名）

教会のくり子さん

くり子さんは
栗の形に結った
栗色の豊かな髪を持っている…

くり子さんは
教会の　日の当たる信徒棚から　顔を上げ
タイトスカートの裾を　ひらひらさせながら
スキップしてるみたいに
かけ出した

くり子さんは
わたしの顔と　くり子さんの顔を
まっすぐ　合わせて　見つめるのが　大嫌い！…

顔をじっと　見ようとすると…
「あっ　私　ふきん　洗っていない！」
「クロッカスに　水やっていなかった　大変…！」　と
言って
何でもないように　鼻歌　歌って　去っていっちゃう

ある時　教会に着いたら

くり子さんは　いた
わたしは　くり子さんの好きな
スイートアリッサムの花を　とびっきり得意になって
持っていた…

「くり子さん！…」
くり子さんは　くるんっと方角を変えて
やっぱり　鼻歌まじりに
栗色のやわらかな髪を　揺らしながら
どこかへ
行っちゃった

そこで　わたしは
くり子さんに…
作りたてのこぎんブローチを持っていった
くり子さんの胸に　付けてもらいたかったから…

「くり子さん　仕事の帰りなのよ！…　ごきげんよう！」

くり子さんは　わたしたちのいる教会から見える
稲田村の海岸の　空の方を見やって
鳥が遠くへ飛んでいっちゃうのを　追いかけるみたいに
どこかへ　消えちゃった

……

くり子さんは
あたたかな息を　吸ったり吐いたり
させながら

いつも
カヌレの　焦げ具合や…
渋栗のペーストの　味の　深み具合
イチジクやあんずのコンポートの　煮詰まり具合…
梅酒のホワイト・リカーの　酔い具合を
気にしている

くり子さんの心は　楽しいことで　いっぱい…

くり子さんの頭は　大忙し！…

くり子さんは
たくさん　物や　お菓子を　くれるけど
いつも　渡すのは　わたしじゃなく
お母さんに…
もしかしたら…　くり子さんは…
もしかしたら…　わたしが　嫌い？…
いつも　忙しくって
わたしなんかと　遊んでいる
暇がないの…

でも
わたしは…
くり子さんの心の中の　たっぷりの愛情を
知っている

くり子さんが
お母さんにくれる　お菓子や　プレゼントは
いつも　わたしとお母さんの　二人分

わたしはくり子さんと一度も　言葉を　交わしたことは
ないけれど…

くり子さんの　栗のモンブランが
とびきりに　美味しいって　知っている！
くり子さんのくれる　甘夏や八朔が
いつも　とびきりに　美味しいって　知っている…

どんなに高い　レストランの　パティシエさんも
ヨーロッパ中の　スウィーツ店の　看板メニューも
くり子さんの味には　叶わない…

くり子さんと　一度も語り合ったことがなくたって…
礼拝堂の　椅子に　座って
前を向いていると
いつでも　くり子さんの　愛情の　中に　いる…

くり子さんが
そっと
わたしの背中を　見ていることがあるって
知っているから

サスペンスの女

お昼過ぎの　仕事終わりに　家に帰ると
大きいテレビの前に　丸い頭と小さな背中

いつもとは違う　おとなしい母が
サスペンス・ドラマ　見入っている

看護師の仕事　していた時には
見られない光景　だったけれど

テレビの前の母　いつの日から…
頻繁に　見かけるようになったのだろう

子育ても　フルタイムの病院勤務も　なくなってから
大きな教会の　牧師夫人と　派遣勤務の　両輪に　なってた

家事や遊びもしながら　父の仕事　手伝うために
忙しい　毎日を　こなしてた

交友関係も　教会の人々との交わりも
桁違いに　多い　母にとって

昼に放送される　“サスペンスもの”　見るのが
何より　気分転換に　なったみたい

デリケートで　昼寝も　早寝も　できない母の…
唯一の　休息の　取り方

台所で　立ち仕事　しながら
乾いた洗濯物　何気なく　畳みながら…
テレビの前で　横に　なりながら
手作りの　鍋つかみ　縫い合わせながら…

「相棒」に　はまってた　時期が　あって
「科捜研の女」の　沢口靖子　が
今は　何より　お気に入りのドラマ…

人も自分も好きな　母は
人と触れ合っているの　大好きだけれど

時には　一人になれる　時間を
無心の　状態で　過ごしている

あらすじは　覚えてること　少なくて
ただただ　ぼーっとしていたいのだって

午後二時から　〃一時間もの〃　見終わるとすぐに…
次の〃一時間もの〃のサスペンス　楽しんでいる…

テレビつけてる空間が　嫌いな私は
母を残しそっと　二階の　自室に引っ込む

ある時　母のリフレッシュの時間に
一階から　「あー！」という　声が上がった

びっくりして　下に　降りていくと
「私と同じ名前の人が出てる…！」　という

笑いながら　半信半疑で　ストーリー追っていくと
犯行現場の　大家さん　として　出てきたみたい…

行方不明の　おばあさんの　写真見ながら
警察が　母の名前　連呼している

「おめでとう」　お母さん…
沢口靖子と　共演　できたわね…

日本の　どこかで　見た人　いたかしら
母を知る　知人や友人の　誰か…

どこからも　電話なんて　かかって来ないけれど
お母さんは　これで　「サスペンスの女」
可笑しいけれど　なぜか　誇らしくなる

昼下がりの　テレビの前　誰かが
小さく　「あっ！…」と　言ったかしら

げんちゃんと孔明

私の広い平屋の職場は
アメリカの　大きなガレージ　模した一軒家の
目の前にある

三十年以上　北米巡って　買い付けた　オーナーの
数万点の　アンティークや　ヴィンテージ…雑貨がある

店先には　ナンバープレートや標識　映写機や　バイク
…
サンタクロースやタイプライター　いつも一、二台のア
メ車が　並んでる

パソコンに向かい　ガレージ　背後の　山の
竹林　仰ぐと

初夏を過ぎても　黄緑色のままの　葉が
不穏な風に　そよそよと　揺れてる

梅雨らしい日　幾日あっただろう
気づいたら六月が　通り過ぎていて

これからしばらくは　雨　続くだろうけれど…
汗の出る　夏特有の　蒸し暑さと共に

底抜けに　明るい　太陽　連想させる　七月が
嬉しそうに　「やぁやぁ…！」と　迎えにきた
……

アメリカンガレージの　飼い犬の　げんちゃんは…
私の甥っ子の弦翔（げんと）と同じ　〝げんちゃん〟

ある時　奥さまに　名前の漢字　聞くと
源頼朝の　源氏の　「源」ちゃんだった

毛の生え替わりの時期迎えた　げんちゃんは
白い抜け毛　舞い上がる前庭を　俯きながら　歩いてく

両目をこっちに向けることができなくって
もう耳もほとんど聞こえないのだって

薄茶色の毛の端々　ますます白くして
体のバランスとりながら　少しずつ足　運んでる

ガレージの前庭　見ることできない　私の席からは
人の賑わっている　声だけが　聞こえてくるけど

老犬のげんちゃんが　とっても　可愛がられていること
やさしい人達の声から　感じ取れる

……

職場の平屋　挟んで　赤レンガの家には
真っ白な　柴犬の　孔明がいる

中国　三国時代の軍師で政治家だった
諸葛孔明と　同じ名前…

頭脳派で戦略家だった逸材　孔明と違って
私達の　お隣さんは　困りん坊の　孔明

放し飼いの　塀の中の　外階段　上り下りして
行き交う人　誰かれ構わず　吠えたてる

仕事に向かう途中…　仕事終わってほっとした時…
不意に　吠えられるのは
びっくり！…通り越して　心臓が痛い…

孔明の　目は　柴犬　特有の
さっぱりとした　小さな瞳…

普段は　警戒心強く　気の抜けない孔明だけれど
飼い主に　連れられ　外に出る時は
嘘のように　静かで　体　白く輝かせ　見つめてくる
……

竹林の先の　曇り空　見上げて
私たちの居る平屋の…　すぐ手前の木造のひさしに　目を移した

厚いひさしの　裏の　白い木目は古く
今にも壊れそうな　可笑しみあるけど

花壇の　支柱に這わせた　短い　ゴーヤの蔦みたいに
不思議と　安心感　生む　効用が　ある

湿気含んだ　夏の　重たい風が
私達の　いる　谷戸*の　間を　通り抜けて

ホトトギスやウグイスではない　幾種類もの　鳥達が
間を置いては　遠くの方で　さえずってる

げんちゃんに　会ったことは　何回かしか　なくて
孔明を　見かけること　少なくなったけれど

二匹の　犬たちの　息づく界隈の　谷戸の職場で
心　和ませ　今日も　仕事に　精を出す

（*谷戸…丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形のこと、鎌倉では職場のある「扇ヶ谷」に代表される）

海外篇

◆村主ミオ　California

いろんなものがやってくる

昨日、家を片付けたら、
「やる気」をどこかにしまいこんで
今日、「やる気」が見つからない
どこに行ったのかな
「やる気」を探す気すら見つからない
いつかやる気が向こうから
出てくるのを待つしかないか
でも、「やる気」、どこに隠れてるんだろう

真夜中になって急に「今日は、ごめん。」
って言って、「やる気」が出て来た
どこに行ってたんだろう
でも、戻ってきてくれてありがとう
元気で楽しそうなやる気と
一晩中、付き合っていたら、
今度は「朝」がやって来た

Come and Go

Yesterday I tidied up my house
Then I put away “Motivation” somewhere
Today it’s gone and I can’t find it
Where did it go?
I don’t even have motivation to find “Motivation”
It will show up when I don’t look, so I will just let it be
But, what on earth is it hiding?

Midnight “Motivation” came back to me
saying “I’m sorry about today.”
I wonder where it was.
But, thank you for coming back
I was accompanying happy and energetic “Motivation”
all night long and noticed
this time “DAWN” arrived at my house

アルパカがセーターになった日

アルパカがセーターになった日
僕は、アルパカになって
アンデスの山々を駆け回った
コンドルにも会った
真っ赤に染まったアンデスの空
陽が落ち、寒くなった
セーターを着たら
自分の部屋に戻ってた

The Day Alpaca Turned into a Sweater

The day Alpaca turned into a sweater
I transformed into an alpaca and
ran around the Andes Mountains
I met condors
The sky turned orange
The sun went down and it became cold
So I put on a sweater
Then I found myself back in my room

表情筋

長いこと笑わないと
笑いの表情筋は
長期未使用の銀行口座のように
フリーズされて、使えなくなってしまう
またそれを使えるようにするためには
本人確認や手数料、いろんな手間がかかる
だから、少しでもいいから
常に笑いの表情筋を使って
笑いの出し入れをしておいたほうがいい

Facial Muscles

If you don, t smile for a long period of time
your facial muscles become dormant
like a bank account that has had no activities for
some time
Reactivating it requires many processes like an ID
check and fees
So, even small amounts
It is recommended you use your facial muscles
and
take smiles out regularly

特別な日

1

音が聞こえなくなった日
そうしたら、違う音が聞こえてきた
心の中から、ドクドクって聞こえてきた
人の心、優しさ、自然の声が聞こえてきた
今まで、私は何を聞いてたんだろう

2

見えなくなった日
そうしたら、今まで見えなかったものが
不思議なものが、透き通ったものが見えてきた
人の心。思いやり、いたわりの心が見えてきた
今まで、私は何を見てきたんだろう

3

考えなくなった日

そうしたら、今まで感じられないものが
芽を吹き出してきた、頭の中が軽くなった
人の思い、悲しみも苦しみも感じられようになった
今まで、私は何を考えてきたんだろう

Special Day

1

On The day I lost my hearing
I gained a new set of ears
Inside of my heart I hear beats
Your heart beat, your gentleness
Voice of nature started
to vibrate my ear drums
Until now, what was I hearing

2.

On The day I lost my sight
I gained a new pair of eyes
Mysterious things,
Many things became transparent
Your thoughts, your kindness
Your caring I started to see
Until now, what was I seeing

3

On The day I stopped thinking
I gained a new set of senses
Like seeds sprouting
My mind became clear
Your heart, even sadness and bitterness
I began to feel
Until now, what was I thinking

猿の手相

動物園に新しい猿が来た
アマゾンの奥に住む珍種だそうだ
空気調節された快適な部屋
ガラス越しにその猿は寝ていた
私に気づくと、ゆっくり起き上がり、
私の前に来て、ガラスに手をかざした

なんとビックリ！
猿の手相と私の手相が同じだ
私の手を猿の手に合わせてみる
ガラスを通してだが、
過去の営みが伝わってきた
人間になって苦しむ私
猿のままで優雅に暮らすもう一人の私
どこで道を間違えたんだろう

Monkey、s Palm

A new monkey is brought to the zoo
They say he is a rare species inhabiting deep in the Amazon
He is given a private air-conditioned room at the zoo
When I got there, I saw him sleeping behind the glass wall
He noticed me and got up slowly
He stopped in front of me and reached his arm to the glass
What a surprise!
The lines on his palm and my palm are exactly the same
I placed my palm over his
It is through the glass, but
I could feel the evolution of humankind
Here I am who evolved into human suffering through life
There he is who remained as a monkey having a luxurious life
Where on earth did I choose a wrong path?

進化の途中

世の中には途中で進化を
やめてしまったような人が時々いる
そのような人には
人間の常識は通じない

そんな時の対処は
「ああ、この人は進化の途中で満足して
人間まで行かなかったんだな」って思えば
理解できる

野原いっぱいの「お～い！」

野原の真ん中に
小さなジリスの穴を見つけた
「お～い、いる？」って
穴に向かって叫んだ
そしたら、野原のいろんな所から
「お～い、いる？」
「お～い、いる？」
「お～い、いる？」って
自分の声が聞こえてきた
すごい！いろんな穴に繋がっているんだ
ジリスの地下の家はどんなだろうって考えてたら、
突然
「何か、よう？」
「何か、よう？」
「何か、よう？」って声で
野原中がいっぱいになった

Meadow filled with “Hello”

In the middle of a meadow
I found a tiny hole of ground squares
I shouted into the hole
“Hello! Are you there?”
Then everywhere in the meadow
I heard my own voice
Saying
“Hello! Are you there?”
“Hello! Are you there?”
“Hello! Are you there?”
Wow! This hole is connected to all the holes
Amazing!
Then all of sudden

The meadow was filled with a voice
Saying
“ What do you want?”
“ What do you want?”
“ What do you want?”

パンドラ退治

パンドラの箱を開けてしまった
中からすごいものが出てきて
えらいことになった
一つ一つ退治していく
負けそうになるけど
くじけそうになるけど
壊れそうになるけど
一つ一つずつ向かっていく
一つ退治すると、
一センチ背が伸びる
そうすると、一センチ
高い世界が見えてくる

Battel with Pandora

I opened the Pandora’s Box
Oh! Terrible things came out from the box
They turned my life upside down
As I tackle them
I feel defeated
I feel lost
I feel broken
But I keep facing them
fighting them one by one
When I win one battle
I become one inch higher
Then I start to see the world
from the 1-inch higher ground

◆絹江　Dubai, United Arab Emirates

作品1

元から存在していたかのように
ゼロから始まる変化

一緒に走り出したと思ったら
分かれ道はすぐそこに
振り返るとなぜここに来たのか
分からなくなるから
迫り来るものたちのことだけを考えて
時には考えなくてもいいから

すぐにくる「やっと」は儚いから
心に刻むことすら出来ないかも

何に向かっていくのか分からないまま
何が終わっていくのか目を閉じたまま

君は君の旅を描いていけ

作品二

あと一歩から始まって
この一歩で終わるこの道

河は海の深さを知る
海は河の速さを知る

僕たちの映るこの窓に
もう一度思い出の残像を

花が千切れて舞って行く
季節と共に幻は消えて行く

僕たちが選ぶ航路
導くものはないけれど
やがてたどり着く
遠い遠い果てに向かって
大きく手を振る

◆笹森美帆　Barcelona, Spain

母へ

お母さん、
こんな世の中になってしまったので
次に、いつ会えるか分かりません。

三十三年前
（思えばあれは平和な時代だった）
異国に嫁ぐことを決めたとき
いつか戦争が起こって
祖国に帰ることもままならない、
そんなことが
よもや、あるかもしれない。
その覚悟はあるか、と、
自分に問うたのを覚えています。

爆弾の音は聞こえない
街を焼き尽くす炎も見えない
でも、もうすでに、
見えない戦争が始まっています。

まさかと思っていたことが
本当になることがある。
けれども、
私は覚悟のうえで、自分の意志で
親やきょうだいのもとを離れ
遠くに行くと決めたのですから
たとえどのようなことがあろうとも
泣きごとは口にするまいと思います。

そんなふうに一方的に、
娘に決められてしまうなんて
母として、悔しいこと
親として、悲しいことに違いない。

しかし、誰もが
人生という一度きりの舞台で
自分という役を演じるしかない。
（残念ながら、一人二役…
というわけにはいかないのだから）

いま、ここにいる、ということは
いま、そこにはいられないということ。
両手に石を抱えなければならない状態で
両腕で木にかじりつくことはできない。

思い通りにならないことがあっても
たら、れば、と繰り返したところで
なんの意味もありはしない。
あるがままの現実を受け取る。
それが苦しくないはずはない
それが悲しくないはずはない
しかしそれが、それだけが
避けようもなく生きなければならない、
今、なのだから。

自分の意志で選べるのは僅かなことなのに
選んだからには
それに付随するすべてを
引き受けなければならない。

あんなに苦労したのに
つまらないものだな。
貧乏くじを引かされちゃった！
損だとか、得だとか
誰も分かってくれやしないとか
不満を抱えて黒ずんだ心が
玄関と、台所を行ったり来たり。
眠れない夜、心は、
汚れた頭陀袋のように疲れて
ベッドの下にうずくまる。

最後に会ったとき、
お母さんは股関節の骨折で
病院のベッドの中にいた。

お母さんが街なかで転んで
救急車で病院に運ばれた

あれは二年前の十月九日。
遅い時間の、急な入院で
晩御飯も食べそびれて
気が付いたら
お母さんも私も腹ぺコで
「何か買ってくるね」
と言って、病室を出てきたけれど
閉店間際の売店にあったのは
冷たい弁当とカップ麺
見ただけで侘しさが募り
あてもなく外に出た。
不安と、秋の夜風に
心がふるふると震えた
残されているのはあと二週間ばかり
私がこの街を去ったあと
お母さんはどうなるのだろう…。

やりきれない気持ちで夜の街を
駆けては止まり、止まっては駆け
「何か、温かいもの」
と、つぶやきながら
駆けては止まり、止まっては駆け。

病室に戻ったのは、もう八時を過ぎ、
ふたりで、ぼそぼそと牛丼を食べ
ぬるくなった味噌汁を飲んだ。
　ごめんね、熱々のものを
　食べさせてあげたかったのになぁ。
哀しさと心細さが手をつなぎ
静かな病室の空間を行ったり来たり
だけど、それを無視して、
やけっぱちで、食べた。黙々と。

この次、会うとき
お母さんはどこにいるのだろう。
笑顔でいるだろうか、
私を見て、喜ぶだろうか。
あまりにも遠くにいて

期待を持つことにもくたびれて
がっかりしないように
心の準備をしているだろうか。

長い年月が
私たちの間にあったのに
いつも気持ちは翻り
風にもつれて
あっちの枝にひっかかり
こっちの枝でひきつれをつくり
たとえそばにいるときでさえも
風はいつも強すぎたり
はたまた、そよとも動かず
灰色の雲に覆われた午後、
私たちは
季節外れの鯉のぼりみたいに
うなだれていた。

お父さんが亡くなる前

毎年八月、短い休暇を共に過ごし
別れの前夜になると、決まって
実につまらぬことで
お父さんとお母さんが喧嘩をした。
いつも気まずいことになる
「あの居酒屋は鬼門だ」
などといっていたけれど
そうじゃなかったのだと
今、気づく。

あっけなく通り過ぎてゆく夏のように
私があまりにそっけなかったからだ。
こんなはずではなかった、
こんなはずではなかった、
短すぎる夏が無情に去っていくことが
たまらなかったに違いない。

六十を過ぎてようやく知る痛み、
何億光年かかって届く星の光のように

いま、ようやくここに届いた。

◆綾乃圭人　Australia

『スパイス』

ボクね、辛いものが好きなんだ。
だから今日も辛い物を食べたんだ。
そうしたら顔がすんごく熱くなって舌もビリビリしてとても痛かったよ。

でもね、幸せだなって感じたんだ。
変って言われても、ボクはすごく辛いものが好きなんだよ。
可笑しいって言われても、ボクはその刺激が好きなんだよ。

痛みが引いていく中で、ボクはふと思ったんだ。
—『辛い』は幸せだなって。

『辛い』に一を足すと『幸せ』。

ありきたりなこと……だったかな。
でも、とても大切なこと。
当たり前で普通のこと……だって思ったかもしれないね。
でも、とても大切なこと。

ありきたりなことでも、普通のことでも、些細なことでもボクは考えてみたいんだ。
ボクはただ呟きたいだけなんだ。

—それにさ、これはボクの独り言なんだから好きにしていいんだ。

辛いことが無ければいいのに、って思いもするよね。
でもさ、『辛い』が無かったらただの『一』だ。
もっと言うならただの横棒だ。
ボクは横棒には意味を見出せないよ。

つまりね、『辛い』が無ければ『幸せ』って漢字はきっ

と存在しなかった。

感情も同じだよ。
辛い経験があるから、幸せだって感じるんだ。
辛さが無かったら何が幸せなのか、どうしたら幸せなのか、分からないとボクは思うんだ。

—だからね、『辛い』は『幸せ』の基盤なんだと思うんだ。

辛いって、どんな感情のときに思うのかな？

苦しいとき。
悲しいとき。
切ないとき。
報われなかったとき。
失敗したとき。
独りぼっちのとき。
大切なものを失ったとき。
喪失感を味わったとき。

どれもとっても辛い感情だね……。

その先に幸せはあるんだって、誰かが言ったんだ。
辛いけど一歩踏み出せば幸せはすぐそこにあるって、他の誰かが言ったんだ。
『一』を足すだけで幸せになれるんだって、沢山の人が言うんだ。

……だけどね、何を足すのかなってボクは思ったんだよ。

『一』を足すって、どういうことなのかな？

もう一息だって自分を奮い立たせること？
もう泣くな、涙を流すなって自分に言うこと？
もう少しの努力だって自分に言い聞かせること？
もう少しの我慢だって自分に無理させること？

もう諦めていいんだよって自分に告げること？
幸せはすぐそこにあるって言って、また頑張ることが『一』なのかな？
……ボクはさ、本当に辛いって思っているボクにどの台詞も言えないや。

だからね、ボクは思ったんだよ。

自分の辛さを理解してあげられる、
もう一人の自分がいることが大切なんじゃないかなって。
自分の辛さを受け止めてあげられる、
もう一人の自分がいることが大切なんじゃないかなって。
辛い思いをした自分に「ありがとう」って言ってあげられる、
もう一人の自分がいることが大切なんじゃないかなって。

周りの人からの支えがあるからこそ、ボク等は成長していくのかもしれない。
でもね、最後に決めるのは自分なんだ。
自分を心の底から愛して、自分に感謝して、最終的に行動を起こせるのは自分だけなんだ。

だからボクは思うんだ。

もう一人の自分の感謝があるからこそ、
あと一歩大きく踏み出して幸せになろうとするんだ。
もう一人の自分が手を取って引いてくれるからこそ、
その一歩を踏み出して幸せになろうとするんだ。
もう一人の自分を受け入れるからこそ、
幸せに向かってまた歩を進めることができるんだ。
……ちょっぴりでいいんだ。

きっと最後に足す『一』は、ちょっぴり勇気のある自

分。
きっと最後に足す『一』は、ちょっぴり優しい自分。
きっと最後に足す『一』は、ちょっぴり素直な自分。
最後に足す『一』は、心の中にいるもう一人の自分だったんだ。
『辛(から)い』は幸せ―。
最後に足す『一』は、隠し味のスパイスみたいだね！
―辛さと向き合い自分の本心と融合することでボク等は幸せになれるんだ。

◆Catori Sarmiento　State of North Dakota,USA

夢むなし：夢 儚い

夢むなし
心を開く
夢 儚い
激しいと美しいしました.

生活の色

黒の海
出てきた
生活の色

◆弥子　South Carolina,USA

ディスタンス

「この子を頼んだで」と手を握られて
夫は号泣した
ひんやり冷たく　なめらかな
ちいさな　ちいさな　おばあちゃんの手

「もうきっとこれが最期やからな」と手を握られて
私は号泣した
少しかさついて　少し骨ばった
年の割に大きな　おじいちゃんの手

「これが最期」という心の準備に

私の心は震えた

彼らにとって
二十四時間あれば到着するこの距離の
何と遠いことか

私には実感もない
「最期」との距離の
何と近いことか

「来年の夏には帰るよ」と手紙を書いた
相変わらず達筆過ぎて読めない字で
「再会できたらこんなに嬉しいことはありません」と返
事が届いた

九十八歳でおじいちゃんは iPhone を買った
私は毎日写真を送る

空

子どもたち

犬

私

昨日作った親子丼

彼らとこの国の距離を埋めるように
「最期」までの距離を延ばすように

今日も私は写真を送る

来年の夏よ
何もかもを飛び越えて　今すぐここにきて

目を閉じる

めぐすりが眼球に染みわたるように

水色のフィルターをかけて
目を開けたら違うものが見えますように

走らせる刃を赤い真珠が追いかけて
まだ大丈夫と息が漏れた

飲み込んでしまってよと
今夜の白い月を見上げて
動かない月に舌打ちする

水色のフィルターは痛みを洗い流すため
真珠が赤いのは感じさせるため
月が白いのは足元を照らすため

こんな色んな色が溢れるこの世界が悪いわけない
なのに
どうしてこんなに酸素が薄いの
頭がくらくらって
どうして時折足元がふらつくの

照りつける太陽が頭を燃やして
いっそ脳みそがドロドロになればいいと思う

だけど忘れられない貴方の愛と優しさが
いつまでも僕をここに引き留める

目を閉じる

今日もそこには黒があるだけ

神様

神様を信じる母
神様を信じない父

神様の教えに沿って正しく生きることを教えた母と
家族を守るのは神様じゃなくて俺だと言った父

私はこの二つの大きな愛に守られて生きてきた

神様を信じない夫も
家族を守るのは神様じゃなくて僕だと言った

「マミー」と私の腰にしがみ付く細い四本の腕

神様がいてもいなくても
私はどっちでも構わない

私を信じるこの子たちを守れるなら
私は神様だって自分だって信じられる

◆冨永桃子　Toronto, Ontario, Canada

走馬灯

たんぽぽの咲いた草むらに小さい靴を脱ぎ捨てて
丸めた靴下はお気に入りのうさぎ柄
さらさらと流れる小川に
先にはしゃいでいた妹と弟を追いかけて
えいやっと足をつける

その冷たさ
きらきらと反射する太陽の穏やかなこと
白い手のひらで掬い上げた水は
ぱしゃぱしゃと笑い
子どもっぽいな　お姉ちゃんなのに
でも
無邪気に振る舞うことが
正しいような気もして
恥じらいつつ遊んでいた
おしゃまなわたしが愛おしい

できたら妹や弟のように
躊躇いなく
天真爛漫にいたかったなぁ

わたしたちにいつも
母の持たせてくれたお弁当は
ご飯の上に甘辛い醤油だれと海苔が敷いてあって
かわいいくまのピックが刺さった肉団子とウインナー

甘じょっぱい卵焼き　まんまるおにぎり
四角いタッパーに入った青のりの甘いおせんべい
お家ではそんなに好きじゃなかったけれど
澄んで少しだけ香ばしい土や木の匂いと混じると
なんだかとても楽しみな味

食べながらどんな話をしたのだったか
妹はどこへ行くにも
後ろをついて来ていたなぁ
弟はまだ幼稚園だったかしら

夏休みには
病気がちの弟がよく体調を崩して
テーマパークに行けなかったのを妹と泣いたなぁ
代わりに妹弟と三人で
お化け屋敷ごっこをしたのがかえって楽しかった
そんなときには
家の中で食べるお弁当も
なんだか特別な味がした

世の中に怖いことなど何もなく
図書館と
緑地公園と
ローラースケートが好きだった

ピアノの弾ける友達や
メガネをかけた友達に憧れたっけ

誰かに嫌われたり
いじわるされたり
自分は駄目だと感じたり
そんなこと
想像さえもしなかった

空の色はなぜ青なのか
海はどうして塩味なのか
秋の空気が甘くなるのはなんでだろう
もしも魔法が使えたら

そんなことばかり

流星群が来るよと
お父さんから聞いたのは冬のはじめ
きらきら光る夜空の星が
もし流れたら
絶対に願いを叶えるつもりで
妹と弟と競って
早口でずっと唱えていた

クリスマスには
お菓子の詰まったお弁当
たくさんの駄菓子でいっぱいの赤いブーツ

お父さんにもらった手紙を洗濯して粉々になって大泣きした

お母さんのエプロンから何でも出てくるのがいつも不思議だった

くだらない楽しいガラクタを宝箱に詰めて
こっそりといつまでも眺めた

未来は　宝箱と星空の間にあって
遠足や
旅行や
クリスマスに誕生日
お母さんが気まぐれに作ってくれるドーナツ
わたしをワクワクさせるものたち
終わってもまた来年
ときめきばかり詰まった
わたしの未来

私は還る
地球が回るのとご一緒に
くるくる　くるり

まっさらなわたし

汚れたら洗いましょう
転んでついた傷にはお花の絆創膏を
お腹が空いたらカレーはもっとおいしいよ
夜になったら
望遠鏡で
月のうさぎを探しましょう

「――ちゃん」

私を呼ぶ声がして
世界は洗われたかのように
きらきらと輝いている

◆クギベラ　New Zealand

黒い心

解き放ちたい
黒い心を

解き放ちたい

もう疲れてきたな、そろそろ楽になりたい
毎日毎日、気を張って、黒い心を隠して生きること
気を付けて気を付けて、黒い液体が心からこぼれ落ちないように
誰にも見つからないように
だって良い人じゃないと、生きていけないじゃない？

誰が決めたの？
そう、それは多分、自分自身
私が決めたバウンダリー
じゃないと受け入れられないような気がして
受け入れられたくて

生まれながらに心が綺麗に澄んでいたら、こんな苦労はしなかったのかな
誰かの幸せを、自分のことのように喜べる、そんな人間に生まれて来たかった

誰かの不幸せを、自分のことのように悲しめる、そんな
人間に生まれて来たかった

誰かが自分より恵まれていても、素直にそれを羨ましい
と言える、
誰かより自分が劣っていても、素直にそれを受け入れら
れる、
そんな人間に生まれて来たかった

誰かとくらべたりしなくても生きていける、
そんな自分になりたかった
自分という枠の中に満ちている黒い水、獣の血抜きをす
るように、
すべて抜きとりたい
澄んだ透き通った水にいれかえたら、もう苦しくなくな
るのかな

◆Seulram Lee　Republic of Korea

名前

きみがやっと
ぼくの名前を
呼んでくれた時

誰も探さなく
気にならなかった
ぼくのことを
分かってくれた時

ぼくの名前を
もっと呼んで
その綺麗な唇で
ぼくのことを
わかってくれ

くらくらしても
きみに行く道
ちゃんと歩くよ

強い雨
目を開けるのが
難しくても
きみの瞳
ちゃんと見るよ

ぼくの名前
もっと呼んで
その麗しい声で
ぼくの名前を
もっと呼んでくれ

忘れましたか？
あの頃の私達を

引き出しの中に
深く入れた
あの時のことを

思い出

私はまだ忘られません

すべてが
下手だったけれど
だから
ドキドキしてた
痛い記憶より
嬉しかったことがよく思い出します

もう戻れないから
眩しかったあの頃
もし私が間違ったとしても
何も言わないでください
美しさに涙が出ても
真の闇より良いから

時間を
戻すことができたら
もう一度

あの頃の私達になりたいです
時間を
戻すことができたら
もう一回

最後のダンス

月明かりの下で
最後のダンスを

忘られない
私達の踊り

◆塚本美咲　Budapest, Hungary

月下美人

半月のうろんなよるに
きみはひっそりと舞をふむ
裏庭の橘さえも
袖にされるのをおそれて
手を延ばしあぐねている

土を踏んで蹴り抜けて
風を切る音が聴こえた
垣間見るわたしをみとめて
ぴたりときみは止まった

そのすがめた目の麗しさ
刺座は鋭いなたのよう

誰の愛も受け付けない
整っているが美麗でない
実直ではあるがやさしくはない

をとめが爪をみがくころ
きみは白牙を研いでいる

ああ願わくば
きみはだれも好きにならないでいて。

街

街に昼どきの鐘が響いている
この音のありかをわたしは知らない
木炭を頭から浴びたように黒い鳩がレンガの上をさすらっている！
逆に　鴉が茶色の襟巻をつけているわずかな緑の上に陣取っている……
踵をつけた一寸先　糞が地面に転がっている
上を向いて歩けば糞を踏んづける
そんなヨージェフヴァーロシュの午後に
浮浪者が地面に額を擦りつけて金をせがむ
それが唯一の方法とでも言わんばかりに
生きるために
生きている？
ジプシーの住処と住民が眉を顰める界隈
何一つとして解決の見えない中
堪え性のないマーケットの住人が客に怒鳴っている
若い母親は乳児の前で盛大に煙を吐き出している
灰色の空の支配する冷え切った街の中で
饐えた空気を吸い込みながら私は　自由を想った

電子の海

電子の海を脳に浮かべて
私はその対岸を行ったり来たり繰り返している
地球の裏側のかの子は奔放
この私のすべての問題とすべての解決
感情を持たない私のエクステンデッド・ブレイン
太陽よりもよっぽど近く
常に脳裏を駆け巡る敵／味方
そうやってそうやって
そろそろ私もその巨大な海の一部になりまつる

◆北村千絵　Singapore

夜が明けてゆく

夜が明けてゆく
漆黒の闇からコーヒー色へ
そしてほのかに光が差し
小鳥たちのさえずりが聞こえだす

夜が明けてゆく
霧に包まれた真綿のような時間がくる
ほんの一瞬のうちに明るさは増し
漆黒の闇は跡形もなく消え去る
元気な太陽が東の空から顔を出す
また今日をしっかり生きてね、と
励ましているかのように

夜が明けた
じわりじわりと温度が上がる
椰子の木やブーゲンビリアの花が
暑い空気に包まれた僅かな風の中に揺れている

夜が明けた
明けない夜はない

真夜中の月

そこから見上げる真夜中の月は不思議な光をはなって
私たちを照らしている
雲がとぎれとぎれに流れてきて、それでも月を隠さない
夜の風は少し冷たくて私たちのほてった体をひんやりと
さましてくれる

あなたの腕に抱かれて見るこの月を
私は一生忘れないと思う
あなたの蒼い瞳と真っ白に輝く月を
蒼い夜の中で見ることができることをうれしく思う
これからどうなるのかわからない
でもあなたが好き
この気持ちは本物
何も考えないで純粋にあなたに恋してる

ここにいるのに、そばにいるのにとてもつらい
また明日会えるのにもう恋しい

月はどんどん位置を変え
やがて白み始めた空に消えた

あなたといたい
あなたの蒼い瞳でいつも私を見つめていてほしい
それだけが私の欲しいこと
望むこと

◆阿部静雄　New York

旅の手帳

旅の手帳に何を書きつけたのか
父のそれは？
母のそれは？
いったい何が手帳に？
父は僕が四歳の時逝ってしまったので
何もかも燃えて消えたに違いない
でも　想像するには
　生きるために死す
母のそれは沢山のメモがあったけど
僕は母が書きつけなかったそれを
想像する
　死するために生きる

僕の手帳？
まだ空白だ
だけど　父と母の想像手帳がいつまでも衰えない
二つの宝石　そう思っているのだよ

妄想の夜明け

打ち鳴らす教会の鐘は誰も
神の響きとは思わない
死んでしまった鐘の音が
悲しくも僕の心の壁に跳ね返り
妄想の夜明けとなって漂泊の旅の
人生が空に影となって揺らいでいる
揺らいでいる
一羽のカモメが影に吠えている
吠えている

バラの異香

僕は七十五だ　今もなお
僕から去っていった美しい裸のバラが愛おしい

二十年前のバラの異香　去るのを
去るのを止めようと夢中で握りしめたのは
バラの棘　血を流し　胸の内に涙をためた
離れ去っていったのだ
真紅の花びらを散らしながら……
今ではそのバラが小さな野ばらを咲かせ
大地に根付いて仕合せに生きていることを
出会いの春の風のたよりに告げられた
離れないで　僕から去らないで
今になっても僕の心の響きが聞こえてくる

春の雲の喪服の装い

眠りたし　眠りたし
安らかに眠らせておくれ
雲の上の墓のなかで

いじめ通したピーターもマリアも
今では雲の上
僕の枕もとに寄ってきては
僕の首に巻き付くように添い寝した
何かを夢見るように

決していじめはしなかった君だって
僕の裸の胸で添い寝した
何かを夢見ながら　その君はもう
雲の上の墓のなか

今日の春雲は喪服を装って雨雲の気配
ああ　安らかに眠りたし

春の虚構

春は霊を目覚めさす
一年中の冬が殺した霊の全てを・・・
僕はこのまことの春の虚構の中の真実を哀れむ
愛し愛せねばならない程に
霊の全てのなかにコロナウイルスで侘しく逝った
好意を感じ合った僕の友人も知人もいた
死者たちよ　死者たちよ

声なき蘇った霊たちよ
今こそ大いに憎め　因果の因を！

＊

春は霊を目覚めさす
過去の霊の全てを……
僕はこのまことの春の虚構の真実をこよなく愛する
愛し愛せねばならない程に
この霊の全てのなかに父と母　そして親族が
長旅をして僕のもとにやって来る
雨雲よ　雨雲よ
今日一日だけでも虚構の外に漂流してくれまいか
みんなが僕のところに押し寄せてくるのだから

魅惑

春の温もりの窓辺　黄水仙の芽が
明るい童のように
小さな喜び　生きることの
微笑みと美しさをかくして
僕を魅惑する

春の温もりの窓辺　黄水仙の満開が
小さく大きな力　身内に満ち溢れ
瞳の輝き　花びらに生気をあたえ
色っぽい艶はなくても
僕を魅惑する

死はすでにそこにある
しぼむ黄色い花びらに
細かく皺が押し寄せ
死の退屈な日々を数えている

死はすでにそこにある
眠りから覚めた僕はしぼんだ黄水仙に
僕を重ねた

大学病院の待合室

大学病院の待合室に馴染むなんてできないことだ
そう言い聞かせつつ老いの深みにはまってしまうと

病が馴染ませてくれと僕にせがむ
こうして僕は昼過ぎの病院の待合室の硬い椅子に世話になる
見渡せば僕の悲しみが僕と一緒にいることを知る
居眠りしながらの年寄りたちが
車椅子に退屈したご婦人が
立ったり座ったりと落ち着かない女(ひと)が
白人も黒人も有色人種もみなそれぞれ壁際の
窓際の椅子に座ってひっそりと悲しみと
侘しさをマスクに隠して医者を待っている
どういう分けか手ぶらだ
時々けんめいに医者を求めた顔が僕を眺めている
白い長い杖を持った盲の老人だ
隣に座った妻が優しく語りかけ人生の辛さを
しみ込ませた姿が僕の眼を涙で曇らす

静かな病院の待合室
誰も嘆いたりわめいたり泣くものはいない
もう約束時間より一時間も過ぎたのに不満もなく
僕は退屈しのぎに待合室の人々の人生を観察し
空想し待合室の空間にドラマを構成しようと
時間の内に入って時間が無となる

静かな病院の待合室
健康に寒々と見放された人間模様が色あせた
絨毯に織り込められたその上を呼ばれた古老が
ゆっくりとドアのなかに消えていく
やっと僕も呼ばれ希望と不安のドアに
静かに消えていくのだ
静かな病院の昼下がり時に・・・

死に誘われたりするものか

死に誘われたりするものか
死に神よ
僕はファイザーのワクチンをこの腕に杭を打つように
二度も流し込んだのだから
そりゃ長い間を待ったよ　長蛇の列だからね
それに生の関節が外れそうな老人ばかりだから

亀のごとくスローなのだ

その老人たちがね
みな半島の先端にやって来て誰もが黒い海を
見つめている様子だったよ
金持ちだろうが貧乏人だろうが
ここまで来ればみな同じさ
内陸で苦労知らずに関節の痛みもなく
あるいは苦労の連続で腰がひん曲がってリューマチに
かかったものだって　半島の先端では黒い深い海を
見渡し何かを探している
僕だって生の外れ関節
でも黒い海の上に一羽の希望の白いカモメを
探しているのだよ

春の躁鬱

春の樹木たちがリウマチの激痛で
叫び声を蒼空に満たしている
一気に梢の無数のまぶたが
青々した緑を開眼した

＊

春が膝の痛みに耐えながら
よじれた緑の松に寄り添って
香りを吸いこんでは
春を忘れようとしている
手術を終えた男がバスに乗り込んだ

＊

冬に耐えた春が手術に苦しんだ
男に横たわる
ベッドに磔にされたチェロの
嗚咽と戦きのなんとも
物悲しい歌が響きわたっていた

祖母の声

日が暮れるまで
祖母のいる田舎を流れる
相模川に遊び
魚を取り逃がしては

何度も何度も
ジーっと見つめては
捕まえようとまたもや取り逃がす
そして思い余って大きな石を取っては
魚にぶっつける
それでも小さな魚は素早く逃げていく
何度繰り返しても退屈はしない僕の幼年時代
傾く西日に迎えられながら
手ぶらで実家に帰ると
曲がった腰をさらに曲げた祖母が
汚れた僕のパンツをとり
風呂場に急がせる
祖母の担当の竈での炊き立てのかぐわしい
ご飯の香りが風にのって風呂場を満たす

逃げていった魚を明日こそと意を強くすると
「ご飯だよ」祖母の声が僕のこころに
入ってくる
今でも忘れえぬ思いに僕のこころが濡れる

身内の丸顔

前立腺よ　前立腺よ
今日もおまえは僕を悩ませた
何度も何度も夜中に起こしては僕を疲れさせる
この辛い宿命の影は燃える太陽であっても
決して消すことはできない
どこまでも　どこまでも影が伸びて
生の終わるところで消える
僕は居場所を離れるのが不安だ
車の運転であろうと電車の中であろうと
おまえは容赦しない
なんという戦えない敗者であることか
決して薬も我慢の意志も勝利者になれないのだ
僕だけじゃない
世界中の男たちが僕と同じ悩みの影に
生と死が纏いつき日々地球を回転させている
ああおまえという敵が憎い
身内の暗い丸顔の貌形が！

おまえがある限り僕は重圧に耐えねば
ならない　一生だ！
身内の敵よ　身内の敵よ
おまえは僕をその丸顔で皮肉りながら
笑ってはいないだろうね

崩壊する自由の都

自由に憧れた若者たちがニューヨークにやってきた
確かに棲んでみれば自由の都だった
なにもかも押し付けがましいことが無く
自己責任であるがままの自分でいられる
僕もそのひとりだ
だけど分かったよ
そう思っていただけに過ぎないってことが　頭で
過去も現在もニューヨークは社会不安と
影となった差別意識がマンホールを開けてみれば
飛び出してくるのだよ
今は政治の風向きが変わったからね
マンホールの蓋さえ略奪され
常識が非常識にかわってしまっているのだよ
理由なく暴力や銃で人間を殺す
犯罪人が刑務所から解放され自由を謳歌している
地下鉄のプラットフォームから勤め人を突き落とす
老婆を舗道で殴り倒す
アジア人の顔面が血だらけになるまで殴りつける
信じられないことが日常茶飯事
ニューヨークに住んでいる人間が怯えながら
棲むなんて信じられるかい？
自由を脅かされて生きるなんて
僕もそのひとりなのだ

みんな臆病だ
誰も助けはしないのさ
逆に血だらけになるか殺されるかも知れないからね
ただスマホで動画をとって素早く逃げることだけさ
みんな傍観者　強い人間なんていないのさ
警察だって予算を減らされて犯罪者を自由に
野放しにしているのだから

これがニューヨークの自由なのさ
誰もマンホールに鍵をかけて開けさせない
悪に立ち向かう強い人間がいないのだよ
政治家なんてみな臆病でね　頼りにならない
それなのに教会やシナゴークでの集会は禁止
結婚式の集会も家族集会にも規制をかける
個人の自由を奪っておいて規制でがんじがらめに
するのだよ
なんでもコロナ禍に責任を負わせて
それでいて犯罪人の自由を擁護するのだから
もう気ちがい沙汰だ
都心は閑古鳥がなき　レストランは軒並みに
廃業さ　これではまるで全体主義が自由を殺して
いるのも同様さ
こんなマンホールの開けっ放しのニューヨークが
つくづく嫌になったよ
無理もないだろう
ここを脱出して　いや逃亡しようと考えているよ
祖国にね　これも僕の逃亡の人生なのさ

個性

おまえの思考も哲学もいんちきだ
略奪行為の賜物だ
垢だらけの思考や哲学にすぎまい
おまえの個性だっていんちきだ
あの世におぞましい汚れた垢を持って
いくつもりか
なんと悲しいことであることか！

樹齢千年

樹齢千年の孤樹に
両手をあててごらん
天と地と四方を見つめ
生存してきた孤樹
その内部に流れる奥深い物語
おまえに何かを語っているのだよ
それはおまえが一生
いかに生きるべきかを

求めるべき生きる物語なのだ

自殺

桜は散り　緑は消え
落葉が首を落とし　秋を埋める
そして裸木が冬に濡れて
樹液を凍らせる
息絶えようとする一本の樹木
それでも刺す陽が
生を吹き返させる
自殺を知らぬおまえよ
なんと幸運なことか！

四月十九日

恋はりんりん響きルビーの唇の甘い感触に濡れる
あなたのいない残り日がなんと淋しかったことよ
響き合ったふたりの歌
日本とアメリカの大空に舞い上がり
パリ　ウイーン　プラハ　マドリッドで
愛を重ねた真珠の輝きに濡れ浸る
ああなんとあなたの離陸を見守るたびに
孤独と侘しさが押し寄せてきたことか
だがもう見守ることもない
ふたりは一緒になって里に帰るのだから・・・
お誕生日おめでとう

静雄

実存

やって来たニューヨークで大陸横断バスを下りた時
都会の眼は灰色でその奥に幻相の眼を感じた
この街で僕を実存させねば記号のひとつになって
都会に流されるだけだと　心が揺らいだ
その一歩がバスの終着駅で始まった

老いて今なお僕の一歩には変わりない
流されまいとする実存の孤独のあゆみ
永劫に変わらぬ虚構の都会の眼のなかに入ったら
それは僕の死でもある

揺らぐ心に釘を打ちながら・・・

晩春

赤い大きなチューリップの花びらが
一枚一枚落ちていく
じーと僕は待つ　次の落ちる瞬間を

ピンクの遅咲きの桜の花吹雪が
舞い上がっては貯水池の水面に
落ちていく
じーと僕は花筏になるのを
水辺で日を過ごす

晩春のさみしさが僕の旅の果てを悟らせる
折角の花筏　鴨が散らばせてしまった
僕の思いも散っていった

旅路の果てに

僕の幼い舟に帆をはって舵をとってくれるのは
父と母　その帆だって父と母
僕が僕自身のエンジンを育むまで・・・
だが父は僕が幼いころ戦病死で苦しみつつ
さびしく逝ってしまい
母だって妹に僕を托してどこかに
出稼ぎに消えてしまった
となれば疾風迅雷の海原で帆もなく
舵もない舟は行き当たりばったりの人生を
迷いつつ座礁を繰り返すことが後遺症と
なって精神の破綻の旅が待ち構えていた
旅にでると体験がエンジンを設計し
僕は故障を繰り返すエンジンを修理しつつ
僕自身のエンジンを育んだのだ
精神の旅は病の壁にぶちあたる
肉体の旅より気難しいが快い
だが一つのことが僕の情念を締め上げる
老いの身になってはじめて
父と母を愛することが
それが存在を与えられた僕がなすべき

ことではなかろうかと涙ぐんでいる
僕が僕の人生の旅で何をなすべきことで
あったのか
何をなすべきことで
あるのか
僕の精神の旅は未だ終わりはない

若葉

若葉　青春の実存の宝石よ
かつては一度初夏を深く愛し
葉脈の中に僕が流れ
緑の情熱に染まった心
今でもその緑の歌が心にこだまし
僕の哀れな老いの苛立ちと苦悶を癒す

若葉　許せ　父よ
あなたの若葉の葉脈とは何であったのか
叔父の話では満州の地であなたの知性は
僕の知らない仕事を完成させることにあったと
それが失敗続きとは！
財布を空にして帰国　やがて
僕の母になる人を花嫁姿で三等車に乗せて
富士のみえる土地に引っ張ってきたと

若葉　青春の挫折と戦地での青春の代償
呪われたごとく　母と幼い僕を残して
逝ってしまわれた
許せ　父よ
戦争の嵐が吹き荒れる時代
悲しい情熱の青春にどう生きるべきなのか
若葉が落葉になって逝ってしまったのだ
許せ　父よ
若葉を悲しませるのはその時代の
青春なのだから・・・
戦後の夢物語など七十五年が過ぎた今
知る術もない
未だ大国に身を売って護ってもらうほか
脳がない為政者を

戦うことは護ること
護ることは死をかけて戦うことなのだ

若葉　青春の実存の宝石よ
ぼろぼろになる宝石なんて誰も知るまい
若葉がやがて　いや一瞬にして
落葉となって大地に溶けるのを・・・

狂った情欲

太陽が女の裸身にメッキをかけた
黄金色！
僕は狂った情欲で裸身に噛みつき
日々大いに胃袋を満たした
なんという享楽と思いしや
メッキは剥げるもの
ああ太陽が僕の人生を揶揄し
笑いものにしている

内省

若者がひとりやって来た異邦の大都会で
住処を捜し
食を捜し
友人を捜し
職を捜し
懸命に求めるものを求めた
それが手に入ると落ち着き次は
コンサート　美術館　図書館を求め
新しいイベントの度に夢中になって
慈悲深い芸術を五感に安らぎを与えた
だが五感は足ることを知らず次には
パリ　マドリッド　プラハ　ベルリンに
五感のままに旅しては五感を落ち着かせた
老年に入ると六感が這いだしてきて
人生の黄昏を知らしめる
深みにはまっていく老いはなぜか
虚しい
さみしい
悲しい

情感があるがままに湧き出して
大都会のさびしさに相まってひとり
公園のベンチに留まり
五月の雨に虚しく濡れるのだ
ああ死のような空が黄昏時に拡がっている

夏の昼下がりのウインドウ

ウインドウに飾られた一輪の美しい女の肖像画
僕は光輝く宝石を見るごとく心臓が止まり動けず
ひとり立ち尽くした　長い間
ふと気がつけばその美しい宝石が僕のベッドで
輝いている
ふと気がつけば僕はその生身の裸の宝石を
抱きしめていた
その時　事件が起きた
愛する謎の男の亡霊が錯乱し僕を
殺しにかかったのだ
気がついたときにはもう手遅れであった
僕は亡霊を自分の両手で首を絞め殺した
美しい宝石は消えていた

ウインドウの中を女が一輪の男の肖像画を
じっと見つめていた
その男も胸に光輝いた宝石を見つめていた
遠くで鳴っているサイレンが次第に近づいてきた
僕は夢から覚めることはなかった

今朝の夏に

夏の都会の森の樹木の群れが
緑の帆をいっぱいに広げ　夏の壮年を
高々に鳴り響かせている

僕がこの異邦に青春の憧れに寄り添うようにして
足を踏み入れたのは春先の恋心に踊ったとき
新しい恋人を求めるように・・・

今では繰り返された恋人不在のさびしい季節
時は流れ　それも遠い思い出に沈む夏

今朝僕は二度と緑のない自分の帆を
風になびかせることもできない悲しい想いを
いましめた

ああ押し寄せ波打つわが恋人の不在の想い
去った青春に　壮年に
当時の暑い恋人を抱きしめながら
夏の秋心にわが身をひたらすに濡らしていた

人間の獣性

時は現代　未だ真新しい出来事　ここはアメリカ　ニュースは残酷　僕の心象は不安だが心臓を止めるほどではない　毎日のように全州のどこかで獣が暴れまわっている　人間の内部から突然　獣が飛び出しては猛烈な狂態の悲劇の日常化
獣　車の中から子供を狙い撃つ
獣　家族パーティに発砲し平気で殺人を強行する
獣　スポーツのイベントで集まってきた群衆に向かって三人組が機関銃で発砲する
獣は獣が死体になるのを知りながら現場を血染めに塗り替える　理由があって理由のない理由の殺害が全米の空を赤く染める　為政者は銃社会を暗黒の地獄の因と決めつける　解決も示せずに　やつらは何も知ってはいない問題はそれを超えた人間を荒廃させている因にあると僕は考えるのだ　だがよく考えても　考えても不可解でいっぱいになり　鈍感な頭が僕の首にのっているのを意識するだけだ

時はアメリカの現代　日は今日　またもや悪夢のニュースが僕の大切な一日を汚染する　汚されてなるものか！
ああ見たくないものを見てしまった後悔　気になったら何もかも手が付けられなくなる損な気質　影響を受けまいと　急いでマンホールの蓋を閉めようにも重くて閉められないとは！

今の僕から叔母へ

ああ愛しい叔母よ
僕がやってきた都会は新聞や空き缶のごみに溢れ

憂鬱なジャズが高層ビルの谷間から谷間に漂う
夜空には星が自由の文字を書き込んで
昼下がりであっても消えることはない
夢見ることも苦渋を焼き付けることも
僕の想い一つで石になる　そして
僕は都会の闘技場で僕という自己が何であるか
探っては闘う　闘ってきた

ああ愛しい叔母よ
子羊の僕をじっと見守って　優しく慰めてくれた
あなたは　御母の心をもって　子羊に
緑に染めた都会を与えくれたのだ
帰ってらっしゃい　帰ってらっしゃい
会うたびにその言葉が僕の心臓を穿つ
でもあなたはもう土の中
僕がお墓の前で合掌しつつ
今でも感謝しつつ愛していると
僕の秘めた心の息づかいに
微笑んでいただけたであろうか

生きるすべ

夏は喜び　夏は悲しむ
太陽は変わらずの黄金の魂であっても

ひとは喜び　ひとは悲しむ
変わらずの太陽が心臓停止し
厚い黒雲のベールをかぶったとしても

夏は苦しみ　夏は嘔吐する
太陽は変わらずの慈悲の魂であっても
生きる人間は苦しみ　生きる人間は嘔吐する

そして僕は太陽のミイラになる誇りに
生きるすべを見出す

抗体のできない男

追い払えない不気味なストレス
道の前方に漲っている

肺の垢のついた煙が・・・
たとえマスクを被っても
煙草　葉巻　大麻の腐敗の匂いが
鼻の穴をむしばむ

遠くに　近くに猛烈な咳をたてる
人間に気づけば咄嗟に抜け道を探して
夏の緑に分け入ってストレスを紛らわす

ともすれば　すれ違った処女を解放した
女たちがひたすら狂ったように大声で
喋っているのに出くわすと

息を止め　安香水を散らす気流を
避けるようにと　あとで振り返っては
臀部の動きに魅せられて息をのむ

早朝の都会の森の散策
なんという快楽と皮肉がストレスを
驚かすことか

抗体顔した人間たちがマスクなしで
狭い道を支配し　抗体なしの男は
露に濡れた雑草の中をひたすら歩く

散策とはいえ　抗体を作れなかった男
僕の外界は患った夏が容赦なく
僕を締め付ける悪夢の世界

早いピッチで上昇している樹液も
いずれ　やがては彷徨い始め
葉脈たちが墓穴に入る

その季節になっても僕といえば
太陽の火に死の恐怖を燃やし続ける
日々を止めることはできない

今夏の気流

ＮＹダウンタウンのツインタワーが落ちた
二十年前のこと　国際テロ組織アルカイダの
悪党の手によって

アフガニスタンの首都が落ちた
今夏の出来事　反政府テロ集団タリバンの
悪党の手によって

遂に二十年間という長い戦争が落ちたのだ
あとかたもなく泡のごとく消えた
支配を驕った米国の莫大な国民の血税が

あとかたもなく泡のごとく消えた
米国に追従した北大西洋条約機構諸国の
国民の血税が

あとかたもなく泡のごとく消えた
誰が知ろう　我が日本　またもや

米国に追従した莫大な借金国家の血税が

無意味な二十年間の戦争の結末　今や
四十年間の長き経験を誇った政治家　自分以外に
責任を擦り付ける無能・無策な権力者が落ちた

混乱の極み　アフガンの首都では殺し合い
情勢不安の最中　米国現政権を擁護した
目覚めぬ普通の人間も皆落ちていく

誰だ　この長き戦争で平気で莫大な金を儲け
政治家を金で操り　更に儲けたのは
あの野郎どもだ　戦争屋という悪党だ

ああ　老いた詩人よ
ことば　ことばが痛む心に落ちていく

いつものこと

ハリケーンが去った

丸顔の太陽が陽気に騒いでいる
晩夏だというのに
朝　僕らは食品の買出しに行った
僕はカートを押し
妻は食品をジーっと見つめては
カートに入れる
朝食のメニューを考えながら
そして夕食のメニューを
僕に考えさせる
冷凍魚を二袋　手に取る
妻は口もきかず
魚と肉が一緒になった売り場を
嫌がるように後にする
僕はカートを押して
早足で追いかける
再び野菜と果物売り場だ
僕は立ち往生する
マスク無しの人が接近すると
僕は息を止める

マスク無しの人が咳をすれば
僕はその場から素早く離れる
咳をかけられた果物がいやに気になる
エスカレータで一階に戻る
キャッシャーの前は長蛇の列だ
もううんざり
マスク顔という顔に出会う
眩しい外に出る
二袋　重いなー
妻も二袋　重すぎると苦情をいう
陽気な太陽が笑っている
台所で野菜を切る音がする
野菜が煮詰まる音がする
オートミールをかき混ぜる音がする
それは僕の立てる音
朝食をとる
僕は皿を洗う
妻はコーヒーを入れる
ＴＶをつける

うんざりするニュースが流れる
明日の明日の明日の事が頭を横切る
同じ買い出しが続いていくのだ
もううんざり　だがこれも
自然の体の車がそうさせること
そして更に僕の頭を横切る
最果ての明日を
もういい　うんざりしなかった生を
必死に生きてきたのだから
自然にあるがままに横たえれば・・・
そう自省の念に駆られる
人懐こい丸顔の太陽がにっこりする
晩夏の大空で・・・

無の裏返し

母の命が白骨にそして無になった
だがよく考えてみると
この無の存在の内に
なんという母の豊かな麗しい
人生が渦巻いていたことであろうと
苦渋の自分を美しくしようとする
その気概に僕は母の白骨に
認めた

海図なき愛

愛なき体がほてる
出会いの道で
無鉄砲な青の衝動の乱舞
果てしなき
激しい求めあい
君が逝ってしまったとき
はじめて俺は海図なき
愛を知った
遠い昨日を思い出しては
しわがれた顔がゆるみ
なみだが胸にたまる

青春のふうせん

淡い電燈がもの静かに
ゆっくりゆっくりと愛人の肢体を
細胞一つ一つに　刻一刻　灯していった

その度に細胞はゆっくりと快さを味わい
官能的こきざみの声を溢れさせ
二つの丘に小さな地震を起こさせた

その揺れが細胞を薔薇色に輝かせ
やがて波となって
ゆっくりと全身をその色に染めさせた

渇きがその後にやってきた
求めた水を飲み干しても
烈しい渇き

そのうち　突き上げる大波が
海から突き出た岩を攻撃し白波が天をつく
怒涛のあとの電燈　闇となってもがく

切れたようだ
また電燈を買いに行かねばと
その思いが青春を膨らませていた

杖が歩く

都会の秋の森のなかを
一本の杖が歩いている
ゆっくり　ゆっくりと
腰を直角に曲げた老女を
いたわるように

杖がコロナ禍の
杖がインフレの
杖が気候変動の
時代の運命を生きのびながら
黄葉した落葉を踏んでいく

いつも僕が目にする光景ながら
雲間から一瞬こぼれた陽光が

囁いている
失うものを大事に　大事に
大事に　とね

ショパン・コンクール

片足しかない白鳥

片足しかない美しい白鳥が
ショパンのピアノ曲ワルツに
合わせ踊った　踊った
あの速い駆け足の音階の音色
片足でぐるぐる回って　回って
気絶してしまった

僕の両足といえば
こんな速くては踊れないよと
ショパンに苦情を吐きだし攻めた
なんとショパンが囁いた

白鳥と同じように片足になり切りなさい
それこそ私の苦と痛みと悦びが
わかるはずだと・・・

さまよう愛

秋の光は愛の行為で力尽きた
シーツにくるまった紅葉の命の乾き
種だけになった赤リンゴの嘆きが
早朝を満たす
もはや何一つ動くものはなく
光線も立ち上がれず
やがて裸身の冬がドアを開け
記憶を失った愛が
空間の眼になって微光を探す
さまよう愛は限りなく孤独だ

少年少女篇

◆芝谷映音　五歳（応募時）　山口県

無題

いつも　おうちで　いてくれて　ありがとう
いつも　みんな　やさしくて　ありがとう
いつも　みんな　おでかけして　ありがとう
いつも　おでかけが　たのしいね
いつも　わらって　たのしいな

◆篠崎愛佳　八歳　東京都

本って好き

本って好き。
考えるのが好き。
想ぞう力が無げん大だから好き。
読み終わったらこう思う。
「本の世界にすいこまれているみたい。」と。
何回読んでもあきない本。
一度読んだらあきてしまう本。
勉強になるからって何回も読める本。
色々な本があるから本って好き。

◆一乗陽音　九歳　東京都

きらい！

ぼくはみんなのことがきらいだ。
だって、ママなんか話しを聞きやしない。
友達だってアッカンベーをしてきた。
みんなはぼくのことをきらいなんだ
だから、ぼくもみんながきらいだ。。

ある日、「命と心」の授業があった。
人間が産まれるのはキセキだと言っていたが、ぼくはそうは思わなかった。
だって、ママだってパパだってお兄ちゃんだって産まれてるんだ。
そして、ぼくだって産まれてるんだ。
みんなだって産まれてるんだ。
だから、キセキだとは思わなかった。

ある日、ぼくの妹か弟が産まれそうって聞いた。
ぼくのママのお腹がぷっくり出ていた。
「ここに赤ちゃんがいるの？」
ぼくは聞いた。
「分からない。産まれるか分からないのよ。キセキだから。」
「キセキ？」

「う、う、う・・・」
ママが痛そうなのにほほえんだ。
ぼくはそれ以来、赤ちゃんが産まれるのがキセキだと思った。
だって、その時、羊水がやぶれたんだ。
看護師さんも大変そうだった。しかも赤ちゃんが出てきそうな時、途中でとまった。
ぼくは心配だった。
でも、なんとか産まれたんだ

◆ゆうー　九歳　神奈川県

ヨーヨーつり

祭りにいくたび　やっている
毎年のように　やっている
今年も　やるか、ヨーヨーつり
ヨーヨーの屋台のおじさんに
ひもみたいな紙に　つりばりがついてるのを　もらう
それを　うまく　ゴムの輪に
ひっかけ　そして　つりあげる
おととしとったの　しろとあか
きょねん　とったの　ピンク色
今年は　どれに　しようかな
むらさき、くろにみずいろと
数えきれないほどの色
そうだ、今年は　これがいい
ゆっくりと　ゴムの　輪を　ねらう
つりばりが　輪の先に　ふれる
やった　とれたよ　オレンジが
黄色い水玉　オレンジが
私の　すきな　オレンジが
はい　おまけ！　とおじさんが
くれた　ヨーヨー　あいいろに
水色の　せんが　はいってる
まるで　今日の　夜空のよう
どおん、といって　空にさく
オレンジ色の　おっきい花火
まるで　つった　ヨーヨーみたい
はじまったな、とお父さん
今年もきれい、とお母さん
夜空にかざした　ふたつのヨーヨー
とってもきれいに　目にうつる
ふたつは　こつん！　とぶつかりながら
ぷるん、ぽよんと　おどってた

詩の作り方―わたし流

初めてかくひとは
五、七、五なんか気にしないで
思ったことやあった事を
ぽん、ぽん、ぽんと書けばいい
もし言葉が出てこないのなら

テレビをつけたり本を読み
たくさん言葉に触れるといい
詩を書くってのは　楽しいよ
無理に　書け、と言いたいんじゃない
楽しい事だと教えたいだけ
やるきがでてきたのなら
紙と　えんぴつ　用意して
出てきた言葉を書けばいい
えんぴつ　たったと走らせて
くり、くり、くりんとおどらせる
時には　ぴたっ!と　とめてもいい
私も　この詩を　そうして書いた
あなたも　この詩を　読んだなら
詩を　書いてみては　どうですか？

かぜ

木がふるえている
葉をカシュカシュと鳴らしてる
お母さんのワンピースがふくらむ
空気をたくさんつめこんで
私の髪も風にのり
ばさ、ばさ、ばさと宙を舞う

雲が流れていく
静かにすうっといなくなる
お父さんのコートがおどる
おお、さむいと言い着直した
私のポーチは風を受け
ぽん、ぽん、ぽんとはずんでる

うちの子犬の毛が立った
ぶるりぶるりとふるえたよ
友達のねぐせがおどる
こまったなあ、といじってた
私はそれをみてわらい
元気になって走ったよ

かぜ、かぜ、ふくなというけれど

風は　物をおどらせて
すてきな音もだしてくる
風は　みんなをわらわせる
風が吹けばげんきになる
私は　かぜが　だいすきだ

◆山崎美優　十二歳　長野県

雑草

人に踏まれて　人に抜かれて
　それでも雑草生きている。
人に嫌われ　人にうざがられ
　それでも雑草生えてくる。
私も雑草のような強い心を持てる
　人間になりたい。

パラリンピック

一人一人個性があって
自分にしかできない事もあれば
自分じゃできない事もある。
自分にしかできない事は
　すっごい事。
自分じゃできない事は
　協力すれば良い。
　それが個性。それが共生

◆月　きらり　十二歳　東京都

私のあこがれ

私のあこがれ 地球さん
いつも一緒に
まわってる

いつも一緒に 地球さん
見つめ合ってる
いっつもね

見つめ合ってる 地球さん
心地よくて
やさしいね

心地よくて 地球さん
あなたはみんなの
あこがれです

あなたはみんなの 地球さん
みんな大好き
地球さん

◆藤原明穂　十三歳　兵庫県

光は影を

避けることのできない光と影
何かをなそうとする時に襲いかかってくる影

でも

影が襲ってくるのは
自分が光を当てているからなのではないか
物に光を当てると影ができるように

光は、当てることで
影があることを気づかせる
光を当てなかったら？
それをすると善と悪の無い
平凡な世界
それはつまらない

だから

今日も私は影に立ち向かう

影の壁を乗り越えて
光の道を目標として

◆夏野凪　十三歳　兵庫県

レモンクリームソーダに
　綿菓子を浮かべて
　金色のシロップを垂らしたら
　朝焼けになりました

海に
白い白い船をうかべて
白い鯨と白いクラゲをうかべて
最後に太陽という名前の
大きな魚を浮かべたら
夏空になりました

黄色のエプロンを着けた
お母さんの腕が
「夕日」という名前の子供を抱いたら
夕焼けになりました

そして最後に
紺色のシルクの生地に
たくさんのダイヤを散らして
女王様のドレスに仕立てて
銀で出来た帯を締めたら
夜になりました

雨の空と雪の空は
　何にも喩えません
なぜなら
雨も
　雪も
綺麗すぎるから

◆原　学志　十四歳　福島県

概念になりたい

私は形がないものに
なりたい
概念になりたい
そうしたら
何も
苦しくないし
悲しくもない
喧嘩も起きない
嫉妬もされない

いじめもされない
差別も起きない
気を遣わせることもない
とっても嬉しい
仮に
苦しいことはね
「存在しない」っていうことに
なるのかなあ

◆なひな　十四歳　茨城県

夏の信仰

君が歩道橋から落ちたとき羽が生えたように見えました
見様見真似で夢見た刹那、彼らからの悪意をきれいに食べることもできず
食卓に持ち込んだ絶望さえも残してしまいました
君を信じているけれど君を好きではありません
君が許せないと祈るなら僕だって神様に祈ります
祈りが届かぬなら僕が神様になります
人を殺めることが、確信のない永遠に夏を縛り付けることが果たして誰の救いになるのでしょうか
然して傷つきたい訳でもありませんが燃えた夢を思い出しては頬をししど濡らしてしまうのです
どうかどうか人間様、もう僕をいじめないで
僕を走馬灯に紛れさせて
許してさえいわないでほしい
倫理じゃなくてもいいから
祭壇じゃなくてもいいから
あの星たちに妬まれたその信仰を見てみたい

一般篇

◆千葉ミチ　愛媛県

結婚

一度決めたことは
なかなか決める前の時に戻せない

諦めろと誰もが言う
自分が決めたのだろう
誰のせいでもない自分のせいだろうと

一度決めてしまえば
新しい道を進むことは
許されない
周りへの影響の恐ろしさに
足が竦む

悩んでも悩んでも答えなどでない
新しい道に進むための答えなどない
あるのは自分を諦めると言う正解だけ

諦めることが責任をとるということならば
もうそこには自由も自分もない
自分ではない日々をただただ送りながら
もう違う未来を想像してはいけない

出口のないトンネルを歩き続ける
そして立ち止まることは許されない
光などない
でも歩く方向は決められている

ただただ歩けばいいじゃないか
諦めろ
受け入れろ
そうすれば楽になる

何も考えずに
ただ生活すればいいじゃないか
人のために世のために
そうやって大人になる

何かを少しでも諦められない人間は
多分選んではいけない道
何もかもただ受け入れられる人だけが
幸せになれる道

◆牛田丑之助　大阪市

この雨止むんかいな

今時流れの悪い排水溝の
緑泥の臭いが蟠(わだかま)っている
生まれた胎児がみな蛙の姿であるように
この街は粘着質の湿気に覆われている
それは頻繁な雨のせいだろう
現に僕の頭蓋の中は　今もしとどに雨が降っている
肺には雨滴が溜まって　歩くと水面が揺れて音をたてる

この雨止むんかいな
この雨止むんかいな

だから雨が降る窓外を見ては
人びとは祈るように諦めるように呟く

この雨止むんかいな
この雨止むんかいな

しかし雨は決して止まずに嘲笑を続ける
住民の内部を黴まみれにし
少しづつ内臓を蝕み
平均年齢は再び人間に転生するのに
数十年も足りない
だから人びとは雨が止まずにおっさんが病んだと
軽口を叩いてやり過ごす

今日も僕の脳味噌はぐっしょりと濡れそぼって
想い出すのは皇女が断頭台に上る童話ばかりだ
そして穴の開いた傘をさして細長い路地を抜けると
空腹の野良犬のような呟きが
そこここから聞こえる

この雨止むんかいな
この雨本当に止むんかいな

なァ　ちえちゃん　どう思う

セロハンテープの夏

君の全裸を
七色に輝くセロファン紙でくるみ
四丁目の交差点に飾ろう
少し歩けばすぐに骨の海岸だから
隙間はセロハンテープで留めておくだけでいい
君は君で
お得意の胸の谷間を強調するポーズで
世界の秩序を揺るがせばいい
今年の夏は暑いから
多くの行路病者がペンギンになって彷徨い
君の姿態に天の悪意を見るだろう
太陽が蝶の鱗粉を撒き散らすように輝き

セロファン紙も人々の瞼の裏に幻影を残す
麦わら帽子とビーチサンダルの裸の大将一行が
メロンソーダの空を見上げて君と較べても
大丈夫　君が敗残する気遣いはない
何故なら彼らは　暑いなの言葉以外を持たないから
交尾する赤犬を見て　暑いな
落下傘に吊られて墜ちる銀球を見て　暑いな
交差点で立ち尽くす迷い幼女を見て　暑いな
だから時々ポーズをもっと頽廃的に変えて
セロファン紙を一層輝かすがいい
太腿の青痣を隠そうとしなくてもいい
セロハンテープは君のモラルの裂け目を
神無き世の混沌を
上手く留めてくれるだろう
裸の大将一行はそれを見ても
暑いな
というだけだ

花の死

花は急には死なない
徐々に死ぬ

そう教えてくれたあなたも
徐々に死ぬ

花弁が乾いた踵の皮へと分解するように
法則があるとすれば
辞書を引きながら
北風を読むしかなく
あなたの青黒くくぼんだ頬は
流れゆく暦に耐えられそうもない

いつの日か小さく萎んだ性器から
希望の粘液が出ても
いずれは死んでゆく

花ならば輝きの一瞬を持つが
あなたはその痛みさえ知らない

それは駱駝にもわからない

ただ私は徐々に死ぬ花の前で
羊水の中で学んだ讃美歌を
ラットする裏声で歌い続ける

◆由利日向子　東京都

1　空の孤児

建て増し　朱色の温泉街
これはどこから生まれた夢か
座席のにおいだけ覚えている
あの日々は懐かしくもなく

ふるさとはない
親もない
足に生えた根　頭上の宇宙は
あのとき自分で繕えた

見知らぬ老婆曰く
わたしの両手の内
唸るような嵐の向こうに
ゆるぎない柱がある

ふるさとはない
祈らない
上滑りした言葉の奥は
もう覚えていない

2　見る

この家はプリズム色に輝き
ただ家のみとしてここにある
この絶対的な孤独を覆すものは
どこにもない

混ざりあった青と白は
最後には新たな色へ
それでも青は白を
いつまでも覚えている

無機質なプリズム色の立方体はくるくる回り
変わらないものさえ吸い込まれて
着地を失った宇宙へ放り出される
そうしてはじめて　根を生やす

3　女の平熱

収まらないものだ
刺さった棘の数だけ
落とし穴を仕掛けても

その瞳にあらわれる
まっすぐな願いは
傍観者をも正直にする

思わず揺らいだ目線で
全てを逃してはいないか
聞き慣れた言葉によりかかって
他人のふりをしてはいないか

弱く小さいものの声は
地に耳を付け　何度も澄まし
ようやく聞こえてくる

いま喉元で構えた言葉を
改めてほぐしてみる
知らぬ間に銃口になってはいないか

これは優しさや苦しみではなく
ただ、平熱で生きたいという祈り
戦いから降りるには
戦いから降りるには

4　白と生活

時間とは
一方向へ向かう直線ではなく
刻まれ続ける秒針ではなく
ただ変わり続け　巻き戻せないということ

このからだのゆらぎを愛すること

身体とは
同一性にしがみついた塊ではなく
本質と魂の入れ物ではなく
エネルギーの滞りない循環
大きく開かれた世界の軽やかさそのものということ

5　宇宙よ

わたしの宇宙よ
星のさだめがすべてならば
なぜ生きることは息苦しくなるほどに自由なのか

わたしの神よ
心にのさばる泥は
あなたの言葉で洗い流される罪ではないのか

わたしの母よ
温もりが傷を癒すならば
なぜ子守唄の記憶をも忘れてしまうのか

目をつむり　祈る先が
どこへ向かおうとも
じきにわたしは旅へ出る
大地が固まるその日まで

6　育つというには

とんとんとん、と
あの子がつま先を打つ音がする
靴を履いたら
あの子はゆみちゃんをひっかいて　さあっと走ってゆき
先生さえも　あの子を探していなかった

それからじゅうねん　月日が経ち
ずいぶん小さくなった母が言うには
あの子はずっと前に　老いた父親を何度もなぐって
もうそれからは　なにも分からない

＊＊＊＊＊＊

父が死に　母が住み
私の母親らしさがなじんできたころ
息子が連れてきた子から
とんとんとん、と同じ音がした
息子は　鼻をこすって
こいつに　算数をおしえてやるんだと笑った

◆コウ　　和歌山県

幼鳥　―葛藤―

身体は大人になっていくのに
心はまだ成長することを拒んでいる
胸は膨らんでくるしお尻は丸くなっていく
「こんなの私じゃない」と
鏡を叩き割りたいくらい
子供のままでいたいはずなのに
心のどこかでは
早く大人になって自由になりたい

大人になれば背中に翼が生えて
何処へでも飛んでいけると

そんな憧れがあるのに
まだ準備ができていないの

愛なんて要らない
独りで生きていこう
生きることが一番重要
何度も必死にもがいて
今にも千切れそうな藁を掴むだけで精一杯のこの人生
安らぎはどこにあるの？
ぐっすり眠れるベッドはどこ？
毎朝目覚める度にこの身体は大人になっていく
誰かに甘えたいという気持ちを自分で抱きしめる

朝目覚めると
シーツの上に小さな羽を見つけた

何もかも嫌になって背中の羽を毟り取った
飛べなくたっていい
きっとまた生えてくる
今は泣きたい
大声で叫びたい
まだ受け入れられない
膨らみ続ける胸に身体から流れ出る血
全部無くなるまで羽を毟り取った
もうどこにも行けない
行けなくたっていい
私はまるで籠の中の鳥
ここから出る勇気もない

テレビでは誰かが生まれ誰かが死んだと知らせる
命は巡り巡る
時は止まらない
私の鼓動も止まらない
生きる理由なんてネットには載っていない
誰かの人生を読んだって自分には全く関係ない

なぜ走るの？
なぜ歌うの？
なぜ誰かを好きになるの？
知りたい事が一杯あるのにそれほど情報は集まらない

背中の痛みが消えないまま
散らばった羽を拾い集める
こんなにも背中に生えていたのに

もしも籠の扉が開いても
しばらくは飛べないから歩いて行くよ
長い道のりだけど
生きる理由を知るために

◆小俣まお　　埼玉県

フラッシュバック

フラッシュバックする
走り出す豚 萌え袖 白いパーカー
泣きじゃくってた

白くて軽いプラスチックの鉢植えが脛にあたった
対して痛くないでしょ、それ。
困惑する顔も覚えてない
わざわざ人を傷つけても
名前を混ぜてときめいていた人
繋いだ手 組んで歩いた腕
かゆくてねれない背中
あの子本当に気持ち悪いなって思ってた
投げた鉛筆の放物線が切なかった

チョコレートが口で熱くなって、

溶かして、転がして、噛み砕いて、
喉から内臓の管を滑って、
消化されていって、細胞レベルで小さくなって
それが体の一部になる。
初めっから端の方まで想像したら、悲しかったし吐きそうだった。
あの子、変わってたらいいなって思うけど
死ぬほど嫌いだからいつまでもそのままでいてねとも思う。

私だけずっと同じ体勢でだんだん暗くなってくし、カーテンは閉めてた
湿った布団から右目だけ斜め上を眺めて、
今日は虚無感がすごかった
職場の周りに花が咲いてたからスマホで写真を撮った
もう見返さなかったし、別に消さなかった

週末は一人で原宿に行った。
正解がわかんなくて、五時前になってやっと家から出れた
街はほんとにちょっとしか、見れなかった慌てて似合わない高い服を買った
やっぱりあんまり好きじゃないし、今年着なかったらもう着れないなって思った

新富町で空っぽの言葉と大きいテレビを運んだ。

家で食べるマックは本当に最高だった
別に私犬でもないし花でもないし期間限定のアイスでもないけど
お互い外側だけ触ってみて、
それでひとりで 九階から東京って綺麗なんだなぁってボーッと思ってた
自分がなんかもう可愛かった
後ろの方までいいなって思った
自分にとっては、希望でも、他人からしたら絶望ってこともある。
そこで出会ったおじいちゃんはラインで毎月沢山絵を送ってくる。
既読だけつけるしスタンプだけ返す。私って最低だよね。
些細なことで許せなかった。
それでもやっぱりお年寄りには優しくするべきだよね

仲良ししてるのにいつも悪口を言っちゃうよね。
ちゃんと楽しそうに見えてるし、楽しいんだよね？
皆に本当はどう思われてるか分かってるけど、
夢も魂も趣味も何にもないからそんな自分を許してる。
結婚して子供を産んで育てて、
やりたくない仕事をして後輩に押し付けて井戸端会議
旦那の悪口は言うけどプレゼントおねだり

でもそれって、強い生き方だね。

フラッシュバックする
鈍感だし興味がないから、大丈夫。
って自分に言い聞かせてきた
本当は早くここから出て行きたかった
一番綺麗な服を着て、北海道にいく。カニを食べてお酒を飲む。それから一番冷たくて静かなところへ。
日の光に当たったつららが溶けながらキラキラしてるのを
雪の上に寝転んで見つめてた。そこで目を瞑った。
そうやって何度も何度も、ただのファンタジーを繰り返していく。
毎日が苦しく感じた。

何をしたって 結婚しよう
自分のした罪はお互い認めない 認められない
下品な話をやめられない
ふたりで一％を下回る
一番繊細な人と真っ暗な場所で出会った。
もう私が一番、悪かった
くりくりの目をした仔犬が足元で飛び跳ねて、また泣き
そうだった

隣で歪んで落ち込む文字
紙切れだった高得点
断続的に虚無感を繰り返して自分で自分に赤点をつけ続
けて何年も留年させて、
悲しくてつまらない つまらないを重ねて難しくなる
小さくても誰だって、きっとそういう瞬間あると思うけ
ど

結局行動しなかったら、そこまでの好きだと思うって結
果出してる人が言った。
その人のことなんて何も理解してあげられなかったし、
信用もしてなかったけど、
その言葉は胸にズシンと落ちてヘコんだ。
苦笑いで、うん、としか言えなかった。

またずっとずっとフラッシュバックする。
朝から泣けてきたりする。テレビをつけたら
占いがやってて、てんびん座が一位だった。
絵画柄の古着のスカート
一目惚れの水色のバッグ
もうそろそろ限界のローファー雨が降ったから
ピーターパンが頭の上で飛んでた
ちょうちょのフリした仕切弁
正解なのかよくわからない量水器
忙しい感じでやり過ごしたけど、
お酒を飲んで無理矢理寝た一日だった。

それでも仕事帰りに世界堂に行こうと思って、

靴の音が速い。
途中で真っ赤な花でびっしり埋まった大きな壁を見つけてときめいた。
ヘッドフォンから漏れる楽器の音の一粒、一粒を手で掴める。
流れる音楽が、見てる景色が、触れた価値観が、
文字になる、言葉になる、絵になる、気持ちになる、自分になる
そういうふうに思えてきてハイになる。

世界堂についた。
迷って迷って、我慢できなくて、
自分の体の半分くらいある大きなキャンバスを買って、
すごくドキドキした。
絵の具は沢山持ってて足りるのに、大きいチューブの絵の具を初めて買った。
一番可愛い色のピンクと一番赤い赤を買った。
新しい高い筆も一緒に買った。送料も高かったし結構した。

絵を描くってお金がかかるよね。見てもらうのにも結局お金。
なんかちょっと切ないやって思うけど、それだけは一生理解できるし、少しずつ積み上げていこうと思う。
ワンルームに窮屈なキャンバスを置いて、
一番可愛いピンク色で塗ったら世界が凄くキラキラして見えた。

それが、ホントの幸せだと思う。

◆凪　　愛知県

このまま

もう本当に死んでしまおうか
永遠に安らぎは僕を迎えに来てはくれなくて
僕を苛む憂鬱を吐けなくて
早くここから出して
助けて

窓から身を乗り出して
空を見たら
空は僕を励ましてくれるのかな
それとも自業自得と笑うのかな

なんで僕は生まれて
なんで今ここにいるのかな
温かいはずの言葉は残酷で誰かを傷つけることしかできないみたいだ

冷たい風が僕の寂しさを肥大させて
優しさを凍らせて
さらに僕を独りにして

あぁいつだ
いつ僕は間違えてしまった
今の笑顔も
今の怒りも

すべて虚構にすぎないの？

優しさをください
誰にとっても優しさであるような優しさを
それで僕を包んで
微笑んで泣いてみせてください
僕はきっとそれだけで幸せです
誰か…
このまま僕とねむってください

飽和

寂しい夜に
寂しい音色
僕の小部屋
僕の心

ブルースに包まれたって
僕は満たされない
街の騒音聞こえないぐらいにさ

抱きしめてほしい
寂しい心
何もかも包むように
全て受け入れて
流れた時の分だけ
愛してほしい

朽ちてくものとしか出会えず
それが人間ってものだ
だからこそ愛せるものもあるんだ

儚いものほど
魅力的
でも僕は
そう思わない

ブルースに包まれたって
僕は満たされない

街の騒音聞こえないぐらいにさ
誰でもいいから

抱きしめてほしい
寂しい心
何もかも包むように
全て受け入れて
流れた時の分だけ
愛してほしい

抱きしめてほしい
儚い僕を
何もかも包むように
全て受け入れて
流れた時の分だけ
愛してほしい
これから生きる分まで
愛してほしい

夜の騒がしさ飽和するため
今ここで僕生きてた

残香に魔法

不思議な感覚に陥ってしまった
金木犀の風に吹かれて
これが十月の魔法だろうか

不思議な感覚に陥ってしまった
暗い朝に空を見つめてた
これが十月の魔法だろうか

公園のベンチには
空きがひとつもないんだ
みんなそうなんだ

飛ばしてくれよ
明日なんてどうだっていいさ
このまま宇宙へ

明日の続きも弾き飛ばして
夏の残香に後押しされよ

不思議な感覚に陥ってしまった
銀木犀はいつも輝けなくて
これが十月の呪いだろうか

不思議な感覚に陥ってしまった
道端で眠ることさえ、もう
他人事には思えなくってさ

公園のベンチには
空きがひとつもないんだ
みんなそうなんだ

飛ばしてくれよ
明日なんてどうだっていいさ
このまま宇宙へ
明日の続きも弾き飛ばして

夏の残香に後押しされよ

飛ばしてくれよ
明日なんてどうだっていいさ
このまま宇宙へ
明日の続きも見たくなかった
夏の残香に後押しされよ
あの夏が好きだったと君は笑う
うさぎさん出迎えてくれた

僕が地球でみるものたち

月が僕を照らした
さっきまで雲に
顔を埋め笑っていたのに
その意味を僕はまだわからない

僕を包む景色にそっと見惚れていたら
いつの間にか信号も赤く染まっていて
地球に本当の僕を見出されたよう

夜の雲の流れは
想像もできないほど刹那で
みんな僕を置きざりに走り去る

夜闇の中
街灯(かれら)は頑張ってる
人(ぼく)はどうしてこんなに弱いんだろう

滲んだ瞳で観る景色は
全てが不確かで
世の中に潜む残酷なものも
隠して笑ってくれているよう

溢(こぼ)れたしずくは
やっと旅に出れると
泣いて喚く赤子のようだ

なんだか今日の街は怖くて

全てが僕を恨んでいるみたい
そろそろ闇夜も更けてきた頃
さぁ今日もそっと家路を辿ろう

最後にもう一度僕を照らした月
彼はいったい僕らに何を問いかけているのだろう

街

車に轢かれた水たまり
そんな気持ちで歩く午後
ショーウィンドウに弾かれた雨
そんな気持ちで歌ってた
緩やかな川みたいなさ
そんな心を持ちたいと願い
たくさん浮かぶ哀しみの跡
地震雲照らし合わせ怯えてた
焦燥と泪と暮らし
星の弱さ憎んでさ
平和に咲いた僕たちに水やるのは

いつだってありもしない空想話
平和に咲いた菜の花を潰すのは
いつだって儚く脆い人間たちだ
そうだこのまま喧騒に育まれて
人波に裂かれていくんだ
コンビニから漏れる灯
照らされ安堵した午前
ボンネットに付けた痣に
不甲斐なさ浮かび上がった
ユラユラ揺らめく陽炎に
夢乗せる夏、炎天下飛ばされ
きらきら積もる淡雪に
さらに悲しみ積もらせた冬
罪人の戯言なんて
星の弱さ憎んでさ
孤独に咲いた僕たちに水やるのは
いつだってありもしない空想話
孤独に咲いた菜の花を潰すのは
いつだって儚く脆い人間たちだ

そうだこのまま喧騒に育まれて
人波に裂かれていくんだ
焦燥にひかれた罪人
それだけのまちで
平和に咲いた僕たちに水やるのは
いつだってありもしない空想話
平和に咲いた菜の花を潰すのは
いつだって儚く脆い人間たちだ
そうだこのまま喧騒に育まれて
人波に裂かれていくんだ

Sleeping madness

怖い
この世で一番怖いのは僕だ
一瞬で誰かを不幸にさせる
怖い
世界で一番怖いのはそうだ
僕の中に眠るたった数ミリの狂気だ

もうなにも目に触れてはいけない
知らない間にその子は死んでいるかもしれないだろ

気づいてしまったんだ
滑稽な心臓を持つ僕に
気づいてしまったんだ
この世界で誰よりもおかしな事実を身につける僕に
今までの虚栄はただの偽装工作だった

怖い
この世で一番怖いのは僕だ
一瞬で誰かを不幸にさせる
怖い
世界で一番怖いのはそうだ
僕の中に眠るたった数ミリの狂気だ

もう誰も話しかけない方がいい
もう誰も近寄らないでくれもう誰も僕を見るな

気づいてしまったんだ
滑稽な心臓を持つ僕に
気づいてしまったんだ
この世界で誰よりもおかしな事実を身につける僕に
今までの虚栄はただの偽装工作だった
今までの愛さえももう虚栄まみれだ
もうじき狂気が暴れだすから
さよなら

◆鵜殿　昭　　群馬県

エトランゼ

忍の一文字染めた麻暖簾の向うに夕暮れの残照に漂白された裏町の四辻がひっそりとした佇(たたず)まいである。今しがた、二つ、三つ、近くの酒場の看板にぼんやりと電光が灯った。
戸外の空気が少しばかり紅に染まって輝いていると見えるのは夕焼けが増さってきたのだな、と思う。
裏弁天筋への途中、両側の庇(ひさし)に挟まれた路地上の空はまばゆい黄金色を溶かしてまだ明るい黄昏の中を蝙蝠(こうもり)が乱れ飛んでいた。町筋はいま、夜の装いの支度(したく)のために打ち水をしたようなひと時の静けさの中に打ち捨てられている。まるで、幕間の舞台を夢の中に見ているかの様子だ。

はらりと、白妙の袂(たもと)をひるがえすように暖簾を揺らし、開け放った戸口から時おり生ぬるい風が足元を洗って通り過ぎる。その、ひるがえった暖簾越し、辻向こうの家の門口の辺りに、この素っ気ない舞台の書割(かきわり)にそこだけはポッと明るい浅黄色(あさぎいろ)をした紫陽花の一叢(ひとむら)が暮れ残る薄明の底に揺らいでる。
その前を退屈そうにゆっくりと猫が横切って行く。買い物帰りの主婦の下駄音がひたひたと地を這うような残響を引きずりながら次第に遠ざかる。表通りの方から舞い上がって流れ来る自動車の騒音も、辺りの濃い静寂に払われて遠くに海鳴りを聞くほどに微(かす)かで、茫洋とした感傷に心を誘うばかりだ。

すうっと潮が引いた後に一人残されたよ

うな寂寥感の中で、周囲の景色は白々と非現実の面(おもて)を見せ、透明になった私の体の中をりんりんと清らかな川音が流れている。関東平野の果てる所、側から屹立(きつりつ)する山々に囲繞されるこの街の中を幾筋に分岐した大きな疎水が流れ、この町へはじめて漂着した時も、寂しい夜の枕辺をりんりんと川音が流れていた。今もまた誰一人知るべとて無いこの寂しい街の角をりんりんと川音が流れ、街の上にも寂しい白鳥のように、りんりんと川音が流れて行く。それはエトランゼの激しい憧れの呻(うめ)きだ。帰り着く岸も知れず流れる哀しい追憶の調べだ。

それに呼応したように何処か遠くの方にゴォーと山の鳴く音が聞こえたように思った。闇間(やみま)に未だ錦紗模様を斑に残した空を背にして太古の眠りに浸かる巨大な獣のような山峰が黒々と横たわっているのが想像された。この超越的な存在の懐(ふところ)深く帰って行くという心持は私に大きな慰みを与えてくれるように思えた。

路地向かいの片隅で、チロチロと明滅する火花を囲んで子供らが数人線香花火に興じている。いつまでも暮れ残るかと見えた戸外の薄明かりもいつの間にか街灯の明りにすり替わっている。その街灯柱の中ほどにはけばけばしい色の造花が差し飾られて、枝先がからからと宵の小風に吹かれている。先ほどまで眼に止まることもなかったそれらの安っぽい人工の花達は色濃い水銀灯の光を浴びて生々と艶めく風情に見られる。見つめていると何か懐かしいものが心を掠(かす)めて飛び立ったように感じた。なぜだかそれは遠い昔に再会を約束した女とある日に見た映像の一こまだったような気がした。

夜の都会。水中花。水底。そんな連想が脳裏を去来する。虚実混淆の歓楽の夜の巷(ちまた)には何処かに嘘にも誠の涙を注ぐ優しい哀しい女が住んでいて、昨日と明日の間に常に引き裂かれて生きていくのが生の現実なのだと疑いもしなかった私に限りない安息の時間を開示してくれる事だろう。

生きめやも……、在るがまま……、現在をこそ……、憧れを遠くに求めんとて胸塞ぐは愚か……、憧れの源泉(いずみ)はそこにエラー！に尽きじ……、とその女は

謎のようなリフレインを絶えず無言の中に歌い続けている。

ああ、と私は思わず嘆息を漏らすばかりその源泉湧く桃源を求めてひと時の陶酔に溺れてみたいと、かの歌の諌める愚かを早くも踏み出そうとしていることも気づかず、憧れに憔悴する心を逸らせた。たとえそれが熟練の水夫の航海を惑わすセイレインの誘いで、かのラインの水底に暮らす娘らにも似た娼婦館が桃源だったとしても、優しい哀しい歌姫の居ます場所を夜の歓楽街の中に探し当てようと行方を定めかねながら腰を浮かせて目を遣った先、ぼんやりと白い紫陽花の一叢が薄闇の奥からゆらゆらと近づいて来るかと一瞬見えたのは酔いのせいか、白っぽい夏紬に薄紅の細紐をたすき掛けにしたママがふくよかな体躯を大儀そうにしながらもニコニコと笑みを浮かべてこちらに帰って来る。

「お待ァちどうさま、やれやれ、熱いわねェ」と、豆腐を入れたビニール袋を手に下げ満面にうっすらと汗を滲ませている。豆腐一丁近所に買いに出たにしては随分長く待たされたような気もしたが、こちらの注文のためだと思えば少し気の毒に思えた。

先ほどから空いていたグラスに私はさらに一杯の冷や酒を頼むと、「あいよ」とママは今度は愛想もなく取り澄まして一升瓶を取り上げ、慣れた手つきで酒を注いでいる。襷に掻き上げられた袖口から、ふくよかな体躯と不釣り合いの華奢な皮膚の薄い、白い柔和な腕が肘の上辺りまで露われて、私はいじらしく見惚れた。不思議なことに先ほどまでの逸る渇望は既に鎮まり、何か悪い夢から醒めた後のような空虚な心持ちである。お勝手の方でコトコトとママが酒肴の采を刻む音がする。

暖簾越しに私は再び往来の方を眺めながら、ぼんやりと、しかし先ほどとは違って何か心温まるものを感じながらグラスを傾けていた。と、するうち、お勝手で包丁が刻む音に交って、あの歌のリフレインがだんだん調子を整えながら、生きめやも……、在るがまま……、現在をこそ……、憧れを遠くに求めんとて胸塞ぐは愚か……、と胸の奥に今度ははっきり聞こえてきた。

◆坂本　　愛知県

矛と盾

死にたい。
死にたいのである。
言葉に言い表せないほどに
自分は辛いのである。
死にたい。
死にたいのである。
身近な人にほど
相談はしづらいのである。
死にたい。
死にたいのである。
自分よりも辛い人はいる
そう思うと、やるせない気持ちになるのである。
死にたい。
死にたいのである。
自分が辛い時ほど
周りの人に気を遣ってしまうのである。
死にたい。
死にたいのである。
こんな自分が
誰よりも嫌いなのである。
死にたい。
死にたいのである。
本当は生きたい
でもそれは
ただのわがままなのである。
死にたい。
死にたいのである。
これだけ思っていても
やっぱり死ぬのは怖いのである

◆片口理恵　　富山県

とかげの夢

泥をほじくり返してばかりいて
手のひらも傷んで爪もはがれ
へたりこんで空を眺めていると

今年ももみじの季節が来て
はらりはらりと葉が散り始めたので私はほっとする
よかった
しばらくは穴ぐらに横になり静かに落ち葉の下にいよう

ところが気がつくとまた泥をほじくり返している
そして今年も雪の季節がやって来て
美しいひとひらが舞い始めたので私はほっとする
よかった
しばらくは白い雪におおわれて穏やかに横たわっていよう

やがて風花が舞い桜が咲き
私はまた泥をほじくり返して疲れ果て
できた穴に花びらが散り敷くのを見て
私も西行のように
花の下で天が許す望月の日に旅立てたならなどと
とかげが甲斐なく夢を見るように思っていたはずが
やっぱり気が違ったように泥をほじくり返している

蛙の声が天空に満ち
よかった
ありがとう今年も来てくれたんだねと胸がいっぱいになり
青田に風が渡り
かなかなが山じゅうに響き
虫の音が星が鳴るようにあふれ
よかった
私を忘れないでいてくれたんだねと安堵し
ところが私は我知らず泥をほじくり返して消耗し
こうして四季は巡るのでした

三月

十九歳
父が亡くなって初めて迎える三月
黒部の祖母を訪ねた
祖母のまわりには
テレビや電話やポットが手の届くところにあり

隣の仏間へとふすまが開け放たれていた
春は浅く
雪見障子の窓ガラスの向こうに
はかない雪が舞うのが見えた
古い家は寒く
「ふすま、閉めましょうか」と尋ねると
「あきちゃん寂しがるからテレビ見せてやっとる」と祖母は答えた
仏壇の隣の床の間に穏やかな表情の父の写真があり
テレビの方を見ていた
テレビは父が見そうにない昼の番組をしていた

その半年前
畳の部屋の父の亡骸のまわりに私たちはいた
伯母たちに手を引かれて入ってきた祖母を見ると
母は跳ねるように立ち上がってかけ寄り
姑の足に取りすがって
「かんにんしてください、かんにんしてください」と泣いた

誰が祖母にあきちゃんの死を告げたのだろう

その前日
父の呼吸は十時間かけてだんだん間遠になり
夜が明けてとうとう二度と呼吸しなかった
医者はベッドに乗ってむなしい心臓マッサージを始めた
痩せた胸のあばら骨が折れそうだった
やめてくださいと私が言うと
泣く妹たち伯母たちと病室から出された
しばらくして「やめてください」と私が叫び
父の死亡時刻を告げられた

父が生まれ育ち
姉たち兄たち妹とにぎやかだった家
「中学がうちのすぐ裏にあって」
と祖母は語り出した
「あきちゃん、朝飯かき込んどって、始業のベルなってから、あわてて走っていって、毎朝」
初めて聞く意外な話だった

「あと十分早う起きりゃあいいがに」
祖母はきのうも今朝もそうだったように
ため息まじりに言った

膨らんだり　しぼんだり

月に一度　赤い袴でやってきた
巫女の訪れも間遠になり
神の訪れのないままに
ひそやかに　参道は消え　やがて
閉じられた社に　日月の影がさすばかり

湯に深々と躰をしずめ
私はそっと　頭を垂れる
毎月　神を待つ準備を粛々と続けた律儀な宮に
ねぎらいの言葉をさがしながら

シャワーの湯気　洗面器の音
さまざまな女たちの　裸　はだか　ハダカ

◆七まどか　　千葉県

ともだちのはなし

自らの醜い内面を苦しみながら抉り出す
詩は自傷行為にも似ている
自らの鎮めることのできない熱情を吐き出す
詩は性行為にも似ている
だから私は
自傷行為がやめられない
セックス依存症の彼女とすぐに友達になった
彼女と出会ったのはただの偶然だった
煙草の煙がもうもうと立ち込める喫茶店で
彼女が私を知人と勘違いして
声を掛けてきたのが始まりだった

「私、タエっていうの
なんだかオバアサンみたいな名前でしょ」
はじめまして、の挨拶もなく
ごめんなさい、の謝罪もなく

彼女は唐突に自分の名前について語り始めた
タエという字がひらがななのかカタカナなのか漢字なのか
それが本名なのかさえ、私は知らない
頭に「お」を付けたら確かに江戸時代の人みたいだなあと
一人ぼんやりと考えていた
彼女にもそのことを話したが
なんのことだかさっぱり理解していないようだったけれど、そんな些細な問題など
「うける」の一言で笑い飛ばしてしまう
その呆れるほどのおおらかさ

私は文学を愛していたが
彼女との話題に上がることはなかった
彼女は本というものを知らない
文豪と崇め奉られる人物が書いた小説ですら
選ばれし学者の知識を結集した学術書ですら
品の無いスキャンダルばかりの週刊誌ですら
彼女と同じ春を売る女性が微笑む雑誌ですら
彼女にとってはただの紙の塊なのだ
（そもそも彼女は性行為に対する報酬をもらっていないのだから、雑誌に掲載される裸の女性たちと同じ扱いをするのも違う気がした。しかし、私にはうまく区別をつけることができなかった。）

きっと彼女は
図書館なんて空想上の建物だと思っているに違いない
知っているのは煌びやかなネオン街の外れの
テラテラとしたカーテンが靡く駐車場
薄汚れたダブルベッドがある
窓が開かない狭い部屋
そのような場所を転々としている彼女は
住所を持たない
彼女に届く手紙はない
彼女は手紙を書いたことがない

彼女と会うのは、いつも同じ喫茶店だった

初対面のときに座っていたテーブルが
いつしか私と彼女の指定席になっていた
彼女は毎回コップ一杯の水をもらい
高い煙草を何本も吸った
煙草を口元に運ぶとき
思わず捲れた袖口から覗く手首には
幾重にも傷痕が刻まれていた
彼女は夏場でも袖の長いブラウスを好んだ
落ち着きなく脚を組むとき
ミニスカートから伸びる白い肌には
斑に青痣が滲んでいた
彼女は冬場でも短い丈のスカートを好んだ

彼女と出会って一年と少し経った頃
私は結婚することが決まり
喫茶店から遠く離れた街へ引っ越した
当たり前のことだが
彼女とも、それきり会うことはなかった

そんな彼女を「ともだち」と呼ぶのは
あまりに自惚れているだろうか
またあの喫茶店で会おうよ、なんて
未練がましいことは言わない

だから
ともだちのはなしはこれでおしまい

◆ジェシー・ウー　東京都

姉さんと骨

台湾人の姉さん
私たちは台湾姉さんと呼んでいた
姉さんはワンルームに
ワンちゃんと暮らしていた
部屋の小さなテーブルには
白い円柱形のお茶の缶が置いてあった

姉さんを残し
日本人のダンナさんが死んだ

缶の中にはダンナさんの骨が入っている
お骨をそんな缶に入れるなんてと
一度、私が常識めいたことを言うと
姉さんは缶を抱きしめて
おどけるように言った

時々、こうして抱いて寝るんよ
そうすれば、寂しくないでね

寂しいのは姉さんか
ダンナさんか

缶を抱いたまま寝返りを打つと
缶の中で骨が微かに鳴るという
かさかさ
かさかさ

姉さんの白い腕と胸に
抱かれて眠るダンナさんが

少し羨ましくなった
ダンナさんの故郷は雪のよく降る
海辺の町だという
私は行ったことないけどね
姉さんは笑って言った

冬のある日
何も言わずに、姉さんはいなくなった
骨もワンちゃんも
どこへ行ったのかわからない
私はふと思った
姉さんは今頃
雪のよく降る
海辺の町にいるのではないか

漆黒の空から
無数の雪片が
音のない音をたて降りてくる
かさかさ

かさかさ

家に
港に
田畑に
海に
姉さんと
ダンナさんの上にも

骨は鳴っているか

◆山田奈由子　兵庫県

美味しいもの

昔から美味しいものは共有したかった
好きな絵本はななつの美味しいあめだまをみんなに分ける物語
平和主義者なわけではない
いい人でもない
ただ美味しいものは食べると笑顔になるだろう
あふれる笑顔でいれば世界は綺麗になる
そんな気がしている
コンタクトレンズをはめれば
もすこし綺麗だと思ってた世界
期待は逸れて
汚いものが鮮明に見えた
でも違う
違ったんだね
見慣れた夕焼け
夕焼けの朱があたしの目を染めた
あたしは泣いた
涙がとまらなかった
きっとわからないだろう
けれどきみもいつかはなにげない夕焼けで
涙があふれてとまらなくて
この世界のなによりも美しいものが自分の周りにあって
それは写真なんかでは表現できなくて
目だけではみえない
こころに刻まれるんだってことが

わかるかもしれない
あたしは人がいない時にだけ泣き虫だった
そんなあたしがあたしはとても愛おしくて
自分で自分を抱きしめて
ひたすら唇を噛みしめて
泣き声を
うめき声を
けっしてもらしたりはしない
あたしはあたしのなかで終わる涙を流して
つぎの瞬きからは笑顔で
あたしはあたしがいるときだけ泣き虫だ
あたしはあたしでいれるときだけの泣き虫だ
あたしはあたしがあたしでいれないことにきずつき
あたしのしんぞうをなんどもなんども鈍く刺して
そのたびにあたしじゃないあたしは立ち止まって
布団をかぶって涙を溢す
昔から美味しいものは共有したかった
平和主義者じゃないしいい人でもないけど
こんなあたしが

美味しいものを食べているときだけは
あふれる笑顔でいれたから
たべもののあたたかさにつつまれて
こころのきずさえも癒えたような
幻覚さえおぼえるから
きみの眼を夕焼けが抱きしめることはなくても
美味しいものがきみに微笑みを向けている
キレイなものがより綺麗に見える世界で
ひとよりずっと汚い私は
あたしをころして生きていくけど
たまにはあたしにかえって
あたしとしてはだしでかけまわってもいいかもしれない
そんな夢さえ抱かせてくれる
美味しいものの素晴らしさよ！！！

◆スシ・ワラワ　静岡県

十代最後の戯言

一方的でも構わないと思えるのが愛なのか。
好きな人の前で人は可愛くなるらしい。

だから鏡の前の私は可愛いのか。
恋人ができてから
どこか上の空で
途端に増えた彼女の愛想笑いが嫌だった。

表立った不安は消えたものの
やり過ぎた水が土へと徐々に浸透するように
不安はグツグツと煮え切らない。

昼夜バク宙。
まぶたのバネを伸ばすように目を開ける。
パサパサと乾いた目が痛くて現実に目を伏せた。

お世辞ではない、本心で褒め言葉を発すると
なんか恥ずかしくて照れ臭くて
よく歯痒いと表現されるあれ。
別に人を褒めることが恥ずかしいこととは思わないけど
本心を晒すのはやっぱり恥ずかしい。
不快か不快じゃないかといえば不快。

自分が相手を喜ばせる聖人に近づいた気になるけど
実際はそうじゃないからそのギャップが不快。
自分を聖人だと信じてれば不快じゃないのかも。
自分の謙虚さに拍手。

怒りがもたらすものはせいぜい束の間の気晴らしと後悔
だけだ。
そうわかっていながら繰り返してしまうのは
怒り以上に弱さが私を占めているからだ。

ぼんやりと
「大きくなったら」の
使用期限を考える。

天才も集まれば凡人に。
天才に絶対はない。
突き抜けた高さが同じでも
みんな同じか、一人抜きんでてるかで
呼称が変わってしまうのなら

みんな天才でいいだろう。
これがきっと平和ってことなのだ。

優しさっていうのは多分二種類あって
何かしてあげるか何もしないか。
一昔前に流行った名言みたいな。
二種類の違いは積極的か消極的か。
落ち込む人に
ありったけの慰めを浴びせるか
何も言わず寄り添うか。
捻くれた私は消極的優しさを贔屓する。
積極的優しさを全否定する訳ではないけど
積極的優しさは時に恩着せがましく、
自己に対する陶酔を感じる。
そんなものを察知すると
途端に感謝は軽蔑に転ずる。
人が見ている時だけ善良に振舞って
それがあたかも自分の全てであるかのように見せる図々しさよ。

良い子ちゃんなお前が嫌いだ。

飽きっぽい私たちは
日々黒歴史制作に勤しむ。
後から思い返せば変なことばっかが流行って
現役の時はなかなか気づけない。
辛い。
後から思い返せばって言っても
価値観が変わってるわけだから
気付く、気付かないっていう問題じゃないのだ。

忘れたくない幼気な心は忘れてしまうのに
過去の誤ちだけは
思い出すたび日々しっかりと刻まれて
いずれ真っ黒の存在になる気がする。

目に見えない網に
絶対的信頼を寄せる
脆い世の中になってしまった。

今まで自分を繋いでたものが
突然ぷちっと切れて
マリオネットが崩れ落ちていく。
その場で空中をひたすら走って
地上に下りたみたいな虚無感。

たまたま浴槽から月が見えて
よく見ようと夢中になってたら
目に水が入って現実に戻された。
乾ききらなかった髪が
ヘッドホンをした時にちょっと冷たくて
テンサゲ。

いつでもできることは
一生やらないと悟った夏休み。
時間があってもなくても文句を言う。
ただ不満が言いたくて仕方ないのだ。
予定を入れることで
自由時間に制限がついて

その制限あるものを充実させようとする。
自分が死ぬタイミングでも宣言すれば
皆充実した人生を送れるんじゃないの。
生きていながら生きていることを忘れている。

脈絡のなさ、支離滅裂さ、いい加減さ
一方的さが一生許されますように。

傾けたコップの中から色がなくなって
透明になっていく氷をずっと見ていたかった。
その時間が永遠に続けばいいと思った。

◆森部英生　　名古屋市

公　園

この頃わけもなく気が滅入る
きのうは終日物寂しかった
きょうも朝から気が塞ぐ
塞ぐ気分をたずさえて　公園を散歩する

桜の花びらが散り敷いている池の中ほどの噴水から
水柱が一本　高く勢いよく噴き上がっている
その周りから押し出されている水しぶきは半円を描き
水鳥が遠巻きにゆっくり泳ぎ回る

噴水が虹をつくり
虹の向こうの道沿いに
欅の枝々の若葉が萌え
岸辺で何人かが釣り糸を垂れている

かすかに流れてくる親子連れの歓声
雲と戯れている楠の梢
しきりに飛び交い囀る小鳥たち
緑陰を渡ってくる風

噴水も空も　風も梢も小鳥たちも
春の香りと調べを運んできて
何事かをささやきかけるが
私はきょうも深い孤独を覚える

机

小学生の頃はここでべそをかきかき宿題を済ませ
中学生の頃はやがて妻となった人に恐る恐る手紙をした
ため
高校生の頃はひたすら受験勉強に打ち込み
大学生の頃は卒業論文の作成に悪戦苦闘し
職に就いてからは仕事の段取りを思案し
子どもが生まれるとそのたびに命名の字画をひねり
今はもっぱら頬づえをついて庭を眺める

その昔　棟梁の父が幼い息子のためにと
鋸を引き　木を組み　ヤスリをかけ　砥の粉をまぶし
ニスを塗り
念入りに仕上げた机は
歪みもなく　光沢も保たれ　姿勢を正して
老いた息子を見つめる

手製の机に腕をふるった亡き父よ

あなたが可愛がってやまなかった幼い孫たちは
それぞれ伴侶を得てつましく暮らしています
母はあなたよりずいぶん長生きして逝きました
妻も私もあなたの年齢を超え
あれこれ悩みを抱えながらもどうにか日を送っています

梅雨の晴れ間の午後のひとときに
すっかり広くなってしまっている机の上に
小さな香立てを据えてひとり白檀を聞く

光　景

警戒警報の不気味な音が鳴り響くと
自宅前の防空壕に
隣の家族と肩寄せ合って潜み
父が家から急いで布団を壕に運び込むのを見た
焼夷弾を避けようと近くの雑司ヶ谷墓地に駆け込み
親子で身を隠した墓石の色ともども
三歳に満たない私の目に
最初に焼き付けられた東京大空襲の光景である

生き延びて小学生の目に映ったのは
渋谷ハチ公界隈に並んでいた
自分と同じ年頃の靴磨きの子どもたちの列
やがて矢継ぎ早に立ち現れたのは
東京タワー
全学連の安保闘争
東海道新幹線
東京オリンピック
喧騒を伴いながらの必死の復興と成長と誇示の光景

空襲警報と焼夷弾の記憶が時々胸をよぎりながら
長じて目にしたのは
全共闘の火炎ビン
石油ショック　トイレットペーパーの争奪
子どもの急減と老人の急増
津波に呑まれた肉親を捜す家族たちのテレビ映像
東京スカイツリー
長期に及んだコロナ禍

再度の東京オリンピック
下降を辿ってやまない国勢の折れ線グラフ

きょう　今ここで目にしている光景は
澄んだ青空と金色の夕陽に照らされた
夏の終りの自宅の庭の
もみじの濃緑と百日紅の深紅
草間を駆け抜ける虹色トカゲ
枝々にしがみつく蝉の脱け殻
そうして
食卓の上の毎食後の薬と
窓際の安楽椅子に深々と沈む私自身

◆黒田菜月　　茨城県

春の鼓動

かすみ草のように　小さく少しずつ花を咲かせて
見渡す限りの青空と草原と新緑と
そこに小さな小さな種をひとつずつひとつずつ
清らかな空気を目一杯吸い込んで
温かい太陽の光に促されて
その幸福を、ここに居て生命の息吹を感じられることを
神様に感謝しながら
ゆっくりとゆっくりと
一歩ずつひとつずつ種を落としていく

あんまり幸せなので、嬉しくて嬉しくて、
ついはしゃいで走り回りたい衝動を抑えながら
「あまりはしゃぐと転ぶからね」
そう心配そうに温かく見守る母の視線を背中に感じながら
ゆっくりと一歩ずつひとつずつ
小さな小さな種を
自分の歩いた跡を残すように落としていく

そんな春が終わって寂しいけれど
燃えるような夏と憂いの秋と厳しい冬に見守られて
その小さな小さな種は目一杯幸せを蓄える
種を蒔いてくれたのが嬉しくて、

またあの幸せな春が待ち遠しくて、
胸がうずくようにトクントクンと高鳴って、
まだその時ではないのにじっとしていることができない

あの幸せで懐かしい母のような春にまた出会いたくて
そわそわとじっとしていられない

どうか神様、無事に芽吹くことができるように
見守っていてください

高鳴る鼓動を優しく包み込むように
しとしとと柔らかな雨が地面にゆっくりと降り注いで
「まだ眠っていなさい」と
大きくて優しい父の手の温もりを感じながら
ほっとして安心してゆっくりと静かに眠りにつく
まだ休んでいていいのだと安心してゆっくりと眠りにつく
また出会える春に期待しながら
少しの不安とたくさんの希望を胸に抱いて
今はただゆっくりと眠りにつく
夢さえも見ない深い深い眠りにゆっくりとつく

◆もっちり　もちか　　神奈川県

オートアサシノフィリアの、恋

殺して　殺して　殺して欲しい
でも　もしかしたら　貴方を殺したいかもね
私が私でいることを許さないで
狂いたいの　狂いたいの　狂いきって
もう自分でいる必要はない
私は私すら捨てる準備ができている
自分よりも貴方が欲しい
私に自由を与えないで
貴方が欲しくてワガママになるから
息を止めて　呼吸を支配して
貴方の体に入っていく酸素にすら嫉妬してしまうから
私を完全に支配して
自由を認めないで力づくで全てを奪って
足にしがみ付いて　殺人依頼

心はバラバラで
人間の形すらなくて
四肢も散り散り
それでも細胞の一つ一つが貴方を求めている

殺した後は
私を圧力鍋で煮込んで食べてね
お願い
私の肉が貴方の体の一部になりますように
細胞の一つ一つに入り込んで
侵したい
犯したい
グチャグチャに混ざり合って
私は貴方と永遠の刻を彷徨いたいの

殺して　殺して……

遺書　～希死念慮の全て～

愛する貴方が選んでくれない私を好きになることは有り得ないから
貴方が好きにならない人を好きになることはないから
私は私を愛すことはないだろ
貴方がいれば　私なんていらない
自分なんて無くなるほど想い
何も残らなくていい
私には　愛される価値がないから
生きる意味も
死ぬ意味も
貴方以外はないから
私は私を許すことはないだろう
生きる意味を剥奪して
貴方のいない人生は考えられないから
人生を終わらせよう

地球が落ちていく

君を知ってから
時が止まったようで
息ができない

成長できない
理想としては
君を想い
良い人間になり
お互いを高め合うとか
優しい気持ちになれるとか
明るい未来が良かった
君とこの世界を見たらどんな景色だろう
君が居ないと地球は回らないと思っていた
全てが乾いた大地となり
砂のように全てが手からこぼれ落ちていく
何も残らない
君の側で心臓が止まればいいのに
心配されながら息を引き取れたら
どんなに幸せだろう

最期の瞬間
美は君の前にひれ伏し
絶対的な輝きが君を覆う

脳内麻薬が出て
死の苦しみなんて感じないだろう
君にいつまでも落ちていく
取り憑かれたように君に堕ちていく

◆清水康夫　愛知県

還暦を、精神科病棟で

リストラ、リストラ。
朝からお酒を飲むようになった。
あげくに、アルコール依存症。

こころが、コロコロ。
飲んでいるか、寝ているか、ふたつの毎日。
どうにもならない、アルコール依存症。

飲んでは、ダメよ、ダメダメ。

◆岩崎淳志　鳥取県

声

（マスクをつけることに違和感が無くなるまで
けっこう早かったように思う）

季節は
循環して
冬
あの時から二度目の
寒い時期がやってきて
未来世紀は
ため息が出るほどに大変で

「ドビュッシーの『夢』を再生しますか」
「はい」

散歩道はかじかんでいる
海を見たい
思い立った三十分前は
朝日が射していました
朝食のコンビニのパンを
呑み込んでしまうと
歯痛が少しうずきました
最近は治療も痛くないと聞きましたが
いやです

痛みが
私の過去と現在を結びつけているとするならば
あなたの
声なんかも歯痛くらいの痛みで
つながるでしょうか
つながれるでしょうか

ＳＮＳの友人は
数か月前に消えたきり戻ってきません
海は遠く
まだまだ私は歩かなければならない

（自転車は壊れ
（私は

（黄土色の夢を毎晩見るにいたりました

歩かなければならないので
夢はまだ鳴り止まない
空が
どこまでも青いものとして
私たちに迫っていた

こわい
物語は再編されて
私たちはその背後に佇み続ける
恐ろしいことに
涙が出ない

（スーパーで二十円引きになっているパンを買うより
（コンビニのクソあまいドーナツを買う方が好きです
（そんな贅沢で生きています
（息をしています

「海岸まではあと三十分です」

私は声につられてここまで来た人類の成れの果てだ
もうマスクをつけることに違和感が無くなり
人々は目もとだけで喜怒哀楽を判明できるほどに進化した
いつか

この世紀も大きな時間に呑まれて
一つの地層で名付けられる時が来る
名を呼ばれることは生きることだと
呟いてみる
海はもう遠くに見えている

「ドビュッシーの『夢』の再生を停止しますか」
「いいえ」
「すみません。うまく聞き取れませんでした」
「もう一度はっきりと声に出してください」

風景

はるかに見える海原
私は高台であなたをみつめる
あなたはそれに応え
はる
人生は絶頂をむかえようとしていた

行きつく果てのない魂の旅を
ひととき
迎えてくれたこの街のことが好きです
終わるとも知れない苛酷な時代に
ともに散弾を浴びてくれたこの海が好きです

私は千年の旅客　くたびれた帆船
いつかどこかに引っ掛かり
そのまま朽ちていくというような結末を
迎えられるでしょうか　海よ
人生とは花咲く街路にことならないと言ってください
私たちの人生はそれぞれかならず報われると
その穏やかな陽光でしめしてください　街よ。

ふたり

ふしぎな夢を見ておきた
朝は
永遠を少しだけ残していた
生きていることが
どうして輝くのだろう
君の
声が
きこえない。

いつか
嘘は全部あばかれてしまう
太陽は
その時のぼらなくなってしまう
君が
浜辺に立ちつくしている。

このまま遠くに飛び出して
朝が弛緩するまで放っておいて
僕と君は
ひとでなしになる

かならず
帰ってくるからねの声は
海の向こうを遠くすべっていった。

日々

いつか
壊れてしまう物語を
数えていても無駄でしょうか
日々は
いずれ空をうつさなくなるでしょうか
私は静かにわらうでしょうか
あなたは…

しあわせの形を
食卓の彩に乗せよう
日常の美しさは
寒さの中にうもれているでしょう
（いつか
　壊れてしまう物語を
　数えていても無駄でしょうか）
―あなたの交わった舌の温度が
　どこまでも尊く、命のように見えた
「あなたのことが、だいすきです」

空はどこまでも水晶のようにすみわたり
季節は白銀の冬に向かおうとしています
悲しさは人生の横糸
喜びは人生の縦糸
私たちは生きていきます
物語には罅が入り始め
永遠の先にある滅亡に向かって静かにすべりだします。

声

朝が
壊れる気配を感じて
私は
いつかの接吻を
思い出す
私の
声を消さないで先生
私の
振動を忘れないでヒーロー
いつか
全てのものは意味をなさなくなる
バイバイ
かなしみと
かいこんと
晴れがましいものについての
講釈を
垂れておいてよ

御話

いっそ救われようか
かなしみは
いつの間にか誤りを産んだ
いつだって
壊れた歯車の輝きが
時代に反射して綺麗じゃないか
これは
終わった僕らの過ちの話です
これは
とうに終わった私たちの過ちの話です

空に美しい物語が見えています
それを一つ二つ拾っている間に
人類は衰退しました。
私は余りにも無理なことを
あなたに要求してしまったのではないかと
訝しむ

いっそ救われませんか

ここに生まれた過ちは
かなしみが生んだうつくしい忌み子です
歯車の輝きを
今日も僕ら数えていました
（これはとうに終わった私たちの過ちの話です）

わかっちゃいるが、やめられない。
泣きながら飲む、アルコール依存症。

愛する人に暴言を吐き
年老いた母に暴言を吐く。
人間失格、アルコール依存症。

還暦を精神科病棟で迎える。
独り迎える。
ワタシは、アルコール依存症。

かなしき、さびしき、わびしき、底なし沼。

もがき、あがく、もだえる、のたうちまわる。
明日はあるのか。明日は来るのか。

出口なし。
ワタシは、アルコール依存症。

◆能美政通　秋田県

いまは

ぜつぼうのあ目
かみくだきあるく
ふえ手いるのか
へっ手いるのか
ならしながら
かみくだき
あるく
かぞえ手いたきのう
あじわっ手いたきのう
わらいながら
かみ

くだき
あるく

母をおもいだすと
いつもふゆだ
母ははだしで
ゆきのなかを
とびだしたのだ
せおわれたわたしは
母をせおうひがくると
わからずに
父のかわりにはなれないと
いなくなることができることと
もえるいえをとびだしたのが血と
手のひらをひらいたりとじたりした
なみう血ぎわにきえた
できるだけひとのいない
わたしはつぎのあかりまで
でんしんばしら

かぞえながら
かぞえられながら
母にまもられながら
まもろうとしたに血がいないと
おもいたかったわたしは
父のえらんだみ血を
えらばないことで
えらんだ
えらんだいま
まっ手いる

これまでのこれからを
かみくだきながら
あるく
ぜつぼう
あ目はやまない
ふりほどきながら
うまれお血たあした
なんど目かのあした

しずかに
できるだけ
ゆっくりと
かみ
くだき
あるく

◆コバタ　沖縄県

苦しくて喉が重い
誰も彼も見たくない
いなくなっちゃえって思う
自分もいなくなっちゃえって思っちゃう
誰も悪くない
自分の思い込み
自分が悪い
行動できなくて
未だに人見知り
ブスで
どうしようもなくて

誰とも行動できなくて
人と話せなくて
話せても自分のことばかり
何もする気力がない
脳みそが溶けているんだ
ずぅっと苦しいんだ
怖いんだ
ずっと未来のことを考えてる
ずっと今のことを考えてる
なんにもなくて怖い
苦しい
誰も私のことなんて見てないはずなのに
誰かの視線が気になる
変な目で見られているようで
気持ち悪く見られているようで
どうしたらいいのか
考えもしないくせに
ポジティブにしなきゃ
どうやったらいい？

誰にも会いたくないよ
誰か一緒にいて
誰か愛して
誰か
自分を愛せないよ
誰か
誰か
誰か

このままだったら
私壊れちゃうのかな
こんな私だれも選んでくれるわけない
何も考えたくない
考えると脳が焼ける
考えると苦しくなるから
私の中にいる誰かが
私を笑うから
私を笑っているのは私だから
だから誰か

空はとても空白であっけらかんとしている
でも空っぽではないのだ
それはみんなのおかげ
光は南寄りの空から降り注ぐ
遮るものがないので
無防備な私の首筋にジリジリと突き刺さる
それでも私が羽織を着ているのは
冬の残り風が吹き抜けるから。
体は暑いのか寒いのか 特に気持ち良くもなく
混乱しているばかりである
それでもなんとなく心地が良いのは
きっと空白の空のせいだ

空が空白のせいで風邪は吹き抜け
光は降り注ぐというのに
空は何にも知らんぷり

目的地までもう少し

緩やかでもなく急でもない坂を登る
焼けないように陰を歩く
いつもは何も感じないいつもの通り道
こんな空色のせいで
憎らしほど良く魅える

◆御供文範　茨城県

霊安室からの眺め

案内された宿直室は元霊安室という
床の間まであるが壁一枚隔てボイラー室
特老施設にならって年中無休
徘徊ゴキブリの足音も消すように
モーターのうなり声が一晩中聞こえる

大ホールに四人掛けのテーブル十八卓
間隔が広く間延びしたように感じたのは
椅子が五脚だけしかないからだった
入所者のほとんどは車椅子生活

車椅子を両手で回す筋力もなく
必死で足で床を蹴りあげ前に進む
人生百年時代という名の電車にのせられ
広さは畳二枚ほどの部屋で
ベッドひとつで締めくくりの余生を送る

なぜ生きているのかという問いに
カチカチカチ時計の秒針は休みなく進み
ただ生きるというだけしか返ってこない

滝の園長者番付表に
十人の名前は貼り出されている
最年少は八十七歳の女性
最高齢は百四歳で男性
この数字は何を物語るのかー

わたしも七十三歳になる
入所者との年齢差の垣根がどんどん低くなり
夕夜朝の巡回は菩提寺の塀を歩いているようだ

どちらに転んでも生の終着駅は近づいている

七夕飾りの短冊には「早く家に帰りたいよー」
そんなに自宅に戻りたかったら
すんなりと死んでしまえば
間違いなく住み慣れたわが家に帰れる

施設でぽっくり旅立ったとしても
元霊安室はお断りだ
まだ生身のニンゲンらしきものが
寝泊まりしているのだからー。

◆小田涼子　　兵庫県

静かな夜

火鉢のやかんが湯気をたて
ほどかれて湯のしされた毛糸の束を
向かいに座る幼い娘の両の手に渡し
母は巻き取る
母の動きに合わせ
娘は腕を動かす
巻き取った毛糸玉は次第に膨らむ

編み棒をリズミカルに動かす　ひび割れた手
慣れぬ日雇い仕事に出かける母
一日親と離れていた娘は
母の膝にもたれ　飽きもせず
その手の動きを眺めていた
シュンシュンとお湯の沸く音
二人に流れる静かな時間

戦後十年過ぎても
六畳一間の引き揚げ者の生活は変わらない
旧兵舎跡に押し込まれた　たくさんの引き揚げ者
共同のトイレに炊事場
壁一枚隔てただけの暮らし
敗戦により激変した生活に
その日をやっと生き延びてきた
母は一目一目を編むように

一日一日を紡いできた

◆大山星　　東京都

２４・７度

彼女が上あごをゆっくりと開いて
流れこんできたのは黒い煙
あまりにも濃いからつやが出ていた

はじめて血ではないものを吐いた
こんなに濁ったものが体内にあったのかと
うれしくてほほ笑んでみたら
目からもにじみ出るように黒い煙

指をくぐらせるとインクみたいに垂れたけど
誰かに見せたら血だって言われた
がっかりした

だから皮膚の下で花瓶を割っておいた
白い欠片が粉々になっているのがちょうどいい
手にまとわりついてた絵の具も
やっぱり血の匂いはしないから
百合を一輪もって飾っておいた

Fall

すももをしぼって蜜を
夕空にかけていちめん
瞬く魔だけ焦がしたみたいに
生き生きとした色
だけど確実に冷めてきた焔

君のきれいな指先が、落陽色の実をにぎったとき
世界にすずしいさみしい蜜を垂らした
見えぬ底に広がって
誰かの鼻をかすめる夜長に
お願い、一度でいいから抱きしめて

駅のホーム

雨を着たい

といわれてわたしは
きらめいて下がる音程
すべる手、シルクのドレスが波打っておちた
ハイヒール、足首　どうしたかったの？
糸で縫って白い憂
まだ止まらない雨が
道路のくぼみ流れて

そこだけ骨が喰われたあとみたいに
黒くて泡が浮いていた
ピンと張った弦がしなるわずかな幅に
ゆっくりと血を垂らして注いでいくと
世界のおわり　夜のとばり　さえずりも
きこえなくなって遠いしゅうえん　有

君の首からおちた手がなんの煙も
まとってないなら　暗闇で
大きな目に飲みこまれてください
ささったとげがきっところしてくれるわ

灰色

白いぶどうをクシャっとつぶして
それが乾いてたんだって
ずっと川の音が鳴り止まない夜に

夕日が沈んだのは五百年も昔のこと
それ以来わたしの心臓の裏、背中の裏には焦げた跡があります
どろどろ、じゅくじゅく小さな爆発をしながら
やっと沸騰が収まってきた頃です

時計からささやかれるようにして
曇りを晴れだと信じ
夜だって昼だと思ってきました

だからまだ明るいんだね
カーテンのすきまから薄い光がさしてて
どうしてわたしの部屋より薄いのか

どうしてそうと気になったのか
知らんぷりして、おやすみ

満月

君の頬をなでると
そこからぽろぽろと真珠
どうしたの
もう聴こえない声
冷たくなった顔のそばに
もろい珠の山

閉じたまぶたとふせたまつげが
ものいいたげに
月の色を問われて
あわてる私を鎮める

あらがえない事実を
私の心に照らしつけたあなたを
白い光に溶かしていく

長い、しがん

◆池　恵保　　埼玉県

愛し子

青空に並ぶシャツの間で
ハンガーの肩幅をもて余す小さなカバーオール
あなたの服
振り返るとあなたが
窓にくっついてこちらを見ている
この小さなバルコニーの窓枠が
世界一愛おしい景色の額縁のようだ
去年は、シャツを一枚干すたびに
眠る新生児の胸が上下するのを確認していた
私がシャツを干し、取り込むうちに
あなたはいつの間にか大きくなった
＊
祖母のくれた赤いスニーカーで
踊るように歩く小さな足が
そばを通る蟻を踏まないように

なぜこんなに気を揉むのだろう
空を横切る鳩もカラスも
あなたはみんな指差して
「はとぅん、はとぅん」と呼びかける
カラスは悪賢いやつよ
鳩は体が汚いの
もし私がそう教えたら
小さなその手はもう二度と
空を指さなくなるかしら
悪者にしたのは誰か
名前だって、勝手につけた
この子の大事な「はとぅん」たち
どうか明日も飛び回れ
＊
産後の私を休ませようと
母がこの子を抱いて揺れていた
静かに上下する膝、背中を音もなく打つ手
懐かしい、と言いたかった
でも

公園のブランコで
あなたの髪を鼻先に感じながら
色づいた木々と空が
上下に行き来するのを眺める
懐かしい、と言いたかった
でも

私がそうであるように
あなたは忘れてしまう
初めて触れた白詰草も
一緒に見た鰯雲も
小さな指を伸ばして「もう一度」とおねだりした歌も
あなたは、忘れてしまう
今日のあなたを覚えているのは
世界で私ただひとり
あなたをどれだけ愛したかを覚えているのも
世界で私ただひとり
父母に聞きたい

私にもあったか、と
私が忘れた美しい景色があったか、と
＊
帰宅した君が抱き上げる
もう疲れたよ、と言いながら
その言葉と噛み合わない笑顔で
何度も上へ伸び上がる
あの日、初めて抱く子の小ささに
畏まって動けなかった君は
いま確かに父になり
子を持って変わりゆく私を
妻から母になる私を
精一杯受け止めている
＊
青春の校舎を友と駆ける私の耳に
かすかに届く泣き声が
私を現に呼び戻す
明け方の布団の中
夢と現のはざまで

少女と母の狭間で
私は動けなかった
あなたの声で耳が母になり
あなたを見て目が母になり
あなたを抱き手が母になる
頼りない母が朝陽の中
やっと立ち上がる
＊
さあ、歩いて　ほんの数センチ
あなたが一人で歩けたら
私は喜んであなたを抱きしめ
あなたの胸にもきっと自信があふれ
世界が大きく拓けるのに
あなたは私の手を離さない
知っているの
寂しがりの私を
本当は私の方が
私の心の方が
あなたの手をきつく握って

まだとても離せずにいる

◆種　熊本県

私は三十八年間愛を知らない。故に異性から愛を受容するこもなく涙も疎い。私にとって孤独と愛は表裏一体である。愛が表、孤独が裏。愛が充満のため孤独が虚無。孤独を痛感のため愛が枯渇。孤独故異性を希求し欲情する。従って私は理解し合える異性が一人いればそれで心中は充足である。その一人の女性、そう君が私の隣に存在してくれれば事足りるのだ。しかしそれは私の孤独と言う夢想、その現実つまり想像するしか無い孤独の内在と影響に自分の面影を感じるしかないのだ。孤独故君を想像する。愛に無知だから想像するしかないのだ。無知故に悲壮を自己に内在し、内在する事で、それが孤独の輪郭が明確に自己の自愛に影響するのだ。悲壮とは愛を知らない、知り得ない、知ろうとしない、知る事ができない、笑顔と涙の皆無に帰結する。その私の悲壮に、君を知らない、知り得ない、知ろうとする、知る愛情が浸透する。そして、その時初めて私は三十八年間の孤独から解放されるのだ。孤独が孤独ならざる私の孤独になり、一人の君の存在のため孤独の中の穏和を感じるのである。孤独を認知、孤独を希求、孤独を解放、孤独を諦観、これら私の観念が孤独を孤独として規定たらしめ、孤独が愛へと変革する様相であるのだ。変革の起動は、孤独を知り、そして自我の孤独な涙が頬を伝うその間隙に存在する愛に他ならない。愛が変革の起動力なのだ。そしてその起動力の原因こそが枯渇した孤独、所謂他から隔絶した思考と感性なのである。孤独

の総体から愛情の総体へ変遷する私の涙の色彩、愛を知り得た時のその色彩が涙を流す私の心中に宿るのだ。色彩とは複合、複合とは多様、多様とは内包、内包とは一致、一致とは涙である。私の孤独、それは君への愛を知らない、君からの愛を知らない、そう私が愛を知らない私の心象を言うのだ。心象とは涙の過渡期、涙の前期と後期。前期は孤独な自己愛、後期は愛と言う情愛。そして孤独とは、前記愛の刻印、心中を刺激し涙を彷彿とさせる心情の真理であり、真理とは心情の一変、悲哀に内在する現実を言うのだ。それが幾星霜君への等身大の恋慕なのだ

◆柳生たまみ　神奈川県

電車窓からの景色

進行方向に向かって右手にはビルやマンションが立ち並ぶ都会的な風景

外の喧噪にこころが高揚する。
一方左手には空、何もない田園風景を背景に一面に広がる群青の空
その色に無心に引き込まれる。
何て対照的な風景なのだろう。
通路正面向きに仁王立ちをしてみる。
自分の体が縦真二つに分かれる感覚を覚える。
風圧か？景色に対する温度差か？何を感じている？
私の体の右側と左側は別の生き物となっていく。

月光の夢

青白い光に薄く照らされた空間
ささ波と砂浜が交錯して静かに吐息を立てる。
ここは楽園だろう…
次第に私の体中から自我が蒸発して消えていく。
残るものは 無垢な心 。次第に青一色に染まってゆく。

こころの真ん中に

レモン汁をギュッと絞って

湿り窄まった部分を雑巾のように固く捻ろう。
深く苦い成分が滴り落ちる
握りこぶしを強く胸に押し当てる
両方の口角が頬に押し込まれる
こころが握り潰されそうだ。

静寂の部屋に何をみる？

砂時計の音さえもはっきりと見えてしまう
薄明かりの窓辺。
カーテン越しにふるいにかけられた
夜の忙しない循環の光。
高層階、人々の生活の上にあるこの空間
耳の奥まで無音が繋がっている。

少女は夢を綴る

いくつもの色を織りなす微細な輝きがプリズムのように
私の心にそっと光をもたらす。
ふっと息を吹きかけるとそれらは消え去ってしまう。
なんて儚い夢なのだろう。
シャボン玉のように表面が虹色の光で満ちた瞬間に
パチンと潰れてしまう。
だからこそ美しく感じるのだろう。

◆三宮千抄　　東京都

夕餉の頃

急に寒くなったから
にんじんやらこんにゃくやらごぼうやら
そんなものを食べたくなるね
ぶりの照り焼き　かれいの煮付け
豚汁も煮物や鍋もいい
そういえば大根と里芋もあった
大丈夫かな
悪くならないうちに食べないと
魚と野菜はあんまり好きじゃない
焼肉　豚カツ　唐揚げ　ラーメン
そんなものばっかり食べてたら
体によくないでしょう
季節もわからないでしょう

若いからって馬鹿にしないで
早く帰ってきてご飯食べなさい
ありきたりな台詞
あなたに何回言っただろう
料理なんて大して好きではないのに

十月終わり　十八時
ふと気がつくと暗闇に
私は独りで座っている
虫の細い声と北風の低いうねりが
私を夜へと落とし込む
足元に急速に穴があくように
みぞおちが静かに冷えていく
いつかの夢で見たような
息の止まるような落下の記憶

そうね　あなたはいないんだ

そろそろ毛布を出さないと
乾燥するから加湿器も
お風呂にゆっくり入りなさい
洗い物出しておいて
そういえば夜中の長電話
あなたの声は通るから
意外と聞こえているからね

ありきたり過ぎる台詞
たとえ私に見えない何処かにでも
緩やかに引き継げるのならば
その日常の終わりは
むしろ明るいのかもしれない

そうね　あなたはいないんだ
あなたはもういないんだけれど
私にどうして明日が来るのか
それがわからないまま
年を越す気配がする
それがこんなにも恐ろしいのに

なぜ今私は味噌汁の具なんかを
ぼんやり考えているのだろう
ぼんやり考えることだけで
私はこの居間で一人浮力を保っている

◆椎葉美羽　福岡県

抱擁

私は誰か
私には決められない

私は必要か
私にはわからない

私は私なのに、私は私を決められない

冷たい目や鋭い口が私を決める
無感情な数字が私を測る

等身大の私はただの作り物

だから苦しいのです
私は私が分からない

だから人を好きになるのです
誰かに見つけて欲しくて

私はここにいていいのか
私は必要か

見つけて欲しくて
知って欲しくて
教えて欲しくて

私は人を憎み人を愛す

◆相馬　実　大分県

『メイソン・ジャー』

Ⅰ　コーン・ウイスキー

アメリカの大地から刈り取られた
朝の粒
彼らは夜を逃れた月の欠片だった
星のない夜に、月は辛うじて闇を照らし
子孫を大地にばらまいた
けれども
そこでまた刈り取られ、魂を枯らされて、
自由を求めて、とうもろこしになった
樽に眠り、木の板のざらざらとした闇に求めるのは
慰みと慈悲、それから彼らだけの太古の言葉
樽から注がれるコーン・ウィスキー
夜の酒場で酔わす無法者
トランペットに煙草の煙
それらは詩人たちだけのものではない
何百年もかけて横切った、ナイル川のように
　彼らの音楽が酒場を流れ、
　コーン・ウィスキーに溶け、
　魂の領域に潜む楽園に
疲労を抱えた体躯を抱かせる
その楽園は彼らの血を知っている
でも決して彼らを葬りはしない。

II　ジャーサラダ

大きくて、透明なジャーに
色とりどりの野菜を刻んで入れる
庭で採れたきゅうりにミニトマト、それから
アメリカの大地から届いたとうもろこし、麦
の粒
市場で買ったルッコラにスイスチャード
そして仕上げはレモン汁を入れて作ったドレッ
シング
オリーブ油と塩、胡椒だけ
あとは野菜が何をすればいいか分かっているは
ず
魔法瓶じゃなくて、文字通りの魔法の瓶
そこには私の日常が詰まっている
野菜がいろいろ入っている

人生がいろいろあるのと同じように
味の密林をかき分け、私は旅をする夢を見る
食卓の窓から見える、向かいのアパート
近くにあるのに、ずっと遠くに見える
私の今ある生活も、このジャーサラダも
いつか忘れられない思い出になる
もしかするといつまでも消えない、
憧れにだってなれるのかもしれない、
たとえそれが、
私のものでなくなったとしても。

Ⅲ　アイス・コーヒー

朝は思考の時間。
冷蔵庫で冷やしておいたアイス・コーヒーを
氷の入ったジャーに注ぎ、
黒く揺らめく夜明けの凝縮
アーモンドミルクは雲のように、煙のように
溶けて夜明けを朝にする。
アラジンの魔法のランプを思い出す。

そして私は魔女になり、
黒い水面に映る世界を、
今日も飛び回る準備をする。
結局それは、私の瞳で、
西洋人のように青空色になることはないの。
だけどそれでいい。
私は何だか、試されている。それがいいのよ。
ああ、私はそこに感じる、人生を
ストローでかき混ぜて、飲んでみると
体に朝のコーヒーが染みわたって、
また新しい夢を見せてくれる。
自分は幻じゃないと言い張る、実は儚い夢。
アーモンドミルクはコーヒーに溶ける、溶ける。
だけど魔法は解けない、解けない。
朝のコーヒーを作るときに見える、天国の反転
世界
そこにいるのは、
天使でも、神様でもなくて、
このコーヒーを作った私

『希死念慮』

目から剥がれ落ちる、白い太陽の廃墟、
これが都会というもの、彼女は思う。
それは重く圧し掛かり、
彼女が鳥になることを許さない。
この巨大な、人の骨が彷徨う廃墟は
言い訳をしたがる。
彼女を抱くための言い訳を。
都会に道徳なんてない。あるのは鉄筋コンクリート、
それから鋼の魂。

彼女は路地裏に座り込み、
青い空に向かってストライキ。
ここは私の生きる場所じゃない、と。
だから死なせておくれ、と。
死を許可するのは、おそらく神だけ。
空の番人とはいえ、いつも不在にしている。
心を裏返しに着て、悲しく着飾ったふり。

「見えるのは綺麗な私だけ。」

三日月が尖り、願いの詰まった頭蓋を貫く。
真実が欲しい、それは多くを持つ、
この世への独占欲のようなもの。
最初から形のない夢を見る、
哲人になったような、気取った気分で。
これは無力感から来るもの。
夢を授けてくれる世界を嘲笑し、
手足はクラゲのように夜の海を漂い、
そしてやっと彼女は自分を嘲る。
彼女は孤独な狩人。
冬の狼と違うのは、
彼女は死ぬことを夢見ているということ。
そしてその夢は
いつも自分の力では
叶えられない、ということ。

『マーシー・ストリート　――アン・セクストンに

捧ぐ――』

マンハッタンの幻影を歩く
標識で溢れる通りなのに
私はどこにも導かれない
生得権の綴られた
透明な紙切れを包むのは
この確かなはずの肉体
マーシー・ストリートにも
標識があったはずなのに
いつの間にかなくなっている

嘘を息のように吐きながら
真実を探して飛び回る魔女
彼女にとって机は祭壇であり
詩は懺悔だった
そして言葉は
どこかを旅するマリア様
引き出しは無意識の奥に仕舞い込まれ
鍵は煙草を支える骨ばった指

マーシー・ストリートに口あらば
彼女に話しかけていただろう
車に乗り込み、
永遠の闇夜が揺らめく海へと
旅立つ彼女の背中に
――私はお前を押し出す岸
でもお前が犯した罪を
許さない少女が現れるだろう
それは彼女が
お前を愛するが故

マーシー・ストリート
そこにあったはずなのに

『破滅へのハイウェイ』

時速一八〇キロ
サングラスの陰り
山と海は窓の上を滑る

待ちきれないんだよ
お前に会うのが
レンズにひびが入ろうと

時速三六〇キロ
高架下の街は一夜限りの幻
それなのにこうしてお前を信じて
走っている
迎えは要らない
誰にも俺の速度などわかりやしない

時速五四〇キロ
舌に巻かれる気流を
龍は咀嚼し、雄たけびになり
喧騒に消えていく
虚空に消えたあるひとつの事象は
夜な夜な彷徨うお前を探す

時速七二〇キロ
酔いは頭の中を駆け巡る
もうすぐ天国が見えてくる
でもそこにあるのは
視界を奪うだけの巨大な光
薔薇の鎖をまとった軌道は
どこにもお前を連れていけない

そして
激しい衝突に呑み込まれる

◆細島裕次　栃木県

熱風

火葬場へ続く
ひとすじの道は
ひどく渇ききって
白く　喘ぐように曲がって
鬼怒川の架橋へ吸い込まれる
午前九時を過ぎた
突然草刈機がウンウン唸り声を上げて

歩道沿いの夏草を刈り始めた
戦後七十余年の没落日本の
兵どもが夢の跡を伐り進む
激しく回転する刃刃刃刃刃……
国破れてオリンピックあり
大車輪の体操選手
蔓延するコロナウィルス
サイレン鳴らしながら救急車が疾走
繁殖欲まみれの雑草を薙ぎ払う
東京タワーが倒れる幻
金まみれのスカッと爽やかコカ・コーラ
のペットボトルが唸る刃に弾かれて
北朝鮮のミサイルのように飛んでくる
きりきり舞いの現場
偉いひとは涼しい所で清々しい笑い
荒ぶる鬼怒川のあおぐろい水
たばしる霰のように水の中の岩を走る
鮎の閃き思いつつススキの類いを伐る
芒種の芒には亡びの種が隠れている

日本人が滅んでも雑草は蔓延る王国
熱風が去って白く廃墟が残るだろう
今は昔若き日に旅した
ポンペイの遺跡に
まばゆく白い岩塊に
紅く夾竹桃が咲いていた
その花は火山の火焔を想わせる
その都市の壁画には
天国行きと地獄行きを決する
天秤秤が有って昔も今も
冥い夜空に掛かっている
人も車も陽炎に揺れている
草いきれのむんむんする叢に
パンの食べ残しや葡萄酒の瓶や
ハーレム通り云々のエロＤＶＤ
その他もろもろ
何処かにアリスの兎穴がありそうなのに
異界は意外な場所にあるのかも知れない
白昼に既に神々の黄昏は忍び寄っている

遠く木の股にダリの時計が溶けている
白道に熱風が吹く
驀進してくる大型トレーラーが
津波で陸に打ち上げられた船舶
に見えてくる
「膨大な時間を抱えて、生きて、死ぬ」
この世の外ならどこへでも
と書いたボードレール
カタストロフのガードレール
に執拗く絡まる
恋しくば尋ね来て見よ
和泉なる信太の森のうらみ葛の葉
のクズは東奔西走し
旅の疲れにポッと赤紫の花の灯をともす
この世に生きる淋しさを川で洗っていると白く儚くささ
なみになる
あの平将門も勢力を拡大すべく
鬼怒川を上り下りしたと云う
お上に逆らう者は
悪者にされ殺される
日の光が蛇のようにのたうちまわり
しきりに血を滴らせている
メリケンカルカヤを刈る
落武者の蓬髪のような蓬を刈る
セイタカアワダチソウも
カトリーヌ・ドヌーブの愛欲の昼顔も
ついでに青空も真っ二つ

註
引用は、柳美里『ＪＲ上野駅公園口』（河出書房新社）より。

◆北澤佑之輔　　京都府

Glance

群れるような日々の
逃げるような優しさに
一度だけ後ろから抱かれたい
僕はすごく弱いね

そればかり考えてしまう。

花びらの中の花と
影伸びる夕暮れの導き
僕は何一つ間違ってなくて
君はすごく強くて
そればかり思うんだ。

揺れる山の稜線に
移ろう蜉蝣
賢しらに集う土の湿りは
僕を見ていた
そればかり夢に見る。

呼吸の合間に落ちた夢
脈打つ山裾と
木漏れ日の一瞥と湿りも
君に輝く
そればかり思い出す。

知らぬも見ぬも花は咲く
許す足取りも朧気に
葉脈の影にも触れた
無明の露にも降りて
朧月もそばにいた。

導く道のりは僕に帰り
拒食な頭と過食な心の僕は
永遠に君みたいになれず
それでも傷つく事に
慣れてはいけない。

僕は満月の晩の夕陽に君といた

共感なく求めた同情と共情の旅路は
疑いの加上の彼方 子供達は走り回り
笑い声は高く馴染む
口を閉じれば 唇は温かくて

蝶は空に舞い　蝶は葉に休む。

繋がる事を知らずに君の旅路に
違いがある事は　同じである事よりも
優しいと思った
それでも僕は、蝶々を子供達と思う
そうして僕は、子供達は蝶々と思う。

共感なく求めた同情と共情の彼方に
繋がる事を知らずに君の旅路の中
色んな事が変わるね
それでも、僕はここに立っている
そうして、僕はここに立っている。

そうして
影は消え去り
愛は優しさに眠る

そうして

君は君になり
僕は僕になる

それでも、僕は君になりたいと思う

それでも、そうしてもと朝を迎える。

◆五木國重　　京都府

許されたい者たち

ボンベイドライジンがなくても季の美があった
ウォッカがなくてもイェーガーマイスターがあった
ヘンドリックスがあってビーフィーターがない
コーヴァルがあってタンカレーNo.10がない
でもロイヤルサルート21年があって新政No.6があった
ヱビスを買う余裕はないがバドワイザーは買えた
月桂冠と黄桜と宝ならどれがつまらないんだろう
旭酒造と黒龍酒造だったらどちらが楽しいのだろう
どれもこれもメリージェーンよりも安価で
どれもこれもコークより楽勝だった

何もかもが許されていた　何よりも許されていた
ワンシート欲しがる子供はいないけれど酒を飲みたがる
子どもはいるかもしれない
フェニルエチルアミンとモノアミンオキシターゼを体内
で合成させるよりぶっ飛べる
かもしれない可能性に満ち満ちたもの
かもしれない
フルニトラゼパムが恋しい季節は過ぎ去らない
ブロン系とカンナビノイドの区別はつきづらく
ウェスクラー成人知能検査は悉く正常であった
どれもこれも夜に映える夜の生き物　夜にしか生きられ
ない
ものたち
それでも朝を見たいものたち

◆くるみ　　奈良県

桜蕊

暮なずむ夕日に手を触れて
際限のない空気を抱きしめる

傷つけて傷つけられた心を癒す方法は何か
自然のごとくひとりきりになるのは何故か
機械型の頭で考える
橋を渡り
ふと立ち止まり
桜蕊に感じて

眠れずに過ごした夜をあけ
昧爽（まいそう）どきに家（はこ）から
身を投げ出したら
誰の匂いも染み込んでいない
白色の空気満ちていて
受け入れられたら
運んでくれたの桜蕊振り渡るところに

目の前にあるものを一滴ずつ
体に染み込んで　浸るまで
ゆっくりと
絢爛でなくても　美しく

桜蕊のように

◆高木俊之介　静岡県

詩と私

世界中が詩であふれて
私に書くことなんてあるのだろうか
うまい言い回しもできず
長く書くこともできず
人を唸らせることもできず
読んでいる方が恥ずかしくなるだけ
ああ今すぐ筆を折りたい
でもここで折ったら本当に何もできなくなるから
苦しみの中ペンを取りなおす

親への愛

潔白な愛などこの世にあるのだろうか
愛はいつでも泥に汗まみれ
私の身体を精神を案じ
夜な夜な私の病気の勉強をしている母の姿を疲れた笑顔
に読み取り
私は思わず隠れて涙する
「ありがとう」
その一言では足りず
「ごめんなさいお母さん」
この一言すら口に出せず
私はただ見て見ぬふりをして毎日をこなす他ない
愛ゆえに

くるくるくるくるくるりんぱ

くるくるくるくるくるりんぱ
かちょうもくるくるくるりんぱ
くるくるくるくるくるりんぱ
どんぐりいっしょにくるりんぱ
くるくるくるくるくるりんぱ
とうげいくるくるくるりんぱ
くるくるくるくるくるりんぱ
ぽてともくるくるくるりんぱ
くるくるくるくるくるりんぱ

ぽろぽろくるくるくるりんぱ
くるくるくるくるくるくるりんぱ
くるくるくるくるくるくるりんぱ

◆サクラが咲いた　愛知県

最後の挨拶

彼はよく「俺はお前のものだよ」って言っていた。
だけど彼は私のものなんかじゃない。
彼は二人の女の子のお父さんで元奥さんのたった一人のパートナーだ。いったい彼のどの部分に私に所有する余裕があるのだろうか。もしそれが一ミリでもあれば私は誰かにとって悪者扱いされるに当たる存在になるだろう。可愛い女の子が私のせいで悲しい思いになるのだとしたら私はきっと離れるべきなんだろう。
また彼はよく「お前は俺のもの」と言う。
私は一人の人間であり彼のものではない。私は私として生き、自分が思うままに自由に生きる。私が彼のことを好きだからと言って私が揺らぐ原因になってはいけない。私も彼もどちらも所有されていないことが心地よく好きでいられる余裕があるんだ。
彼はよく「一生一緒にいようね」と言う。彼は一度失敗を経験しまた新たな形を私と築こうとしている。私はまだ一度も経験していないものを彼は最も簡単に想像することができる。私はその言葉が怖くてたまらない。何を確信しその言葉を言うのだろう。何が欲しくて私と約束するのだろう。経験値の少ない私にいったい何を求めているのだろう。彼の求めているものはきっと私には共有することができないものなんだろう。だからこの小さな幸せを手放すことにした。
必ず幸せになってほしい。私のいない世界で。

◆辰己尚平　大阪府

南の島

昼の明かりを
全部消した部屋に
自然の光が差し込む
何だか懐かしい気持ちになるのは

おばあちゃんの家が
いつもそんなだったから
遠い南の島で
育ったおばあちゃんは
昔ながらの生活を大事にしてて
明かりもテレビもほとんどつけず
静かな昔のままの
昼の明るさの中で
忙しく、時にゆっくり
幼い僕の世話をしてた
薄荷のにおい、黒砂糖の味
大きな機織り機
都会の真ん中の
小さな南の島の田舎暮らしが
幼な心に妙に心地よかった
おばあちゃんも団地もいなくなったけど
ぬくもりはまだ
僕の中に残ってる

朝焼け

不思議と迷いはなかった
深夜の胎道
闇に生まれる一筋の光
くぐり抜けてきた分
長く消えない光
デジャブのような
テールランプが過ぎていく
痛みと怯えは
前世紀の遺物と化して
あの日の高速を
風を切って走りゆく
不思議と迷いはなかった
このまま朝を迎える確信が
スムーズにアクセルを踏ませる
深夜の胎道
デジャブのような
テールランプが過ぎていく
父さんのような幾人の男の人が

運転する後部座席で
浴び続けたオレンジの向こう
くぐり抜けた分
消えない光を携えて
もうすぐ出ていくよ
父さん…、そこで僕を
待っていてくれるかい？
よく頑張ったな、って
僕を抱きしめてくれるかい？
あなたの愛を感じたかった…僕を
そこはたぶん
終わりと始まりが交差して
白い朝焼けがすべてを包んでいる

ほどよい絶望

ほどよい絶望に飼い慣らされた
スーツの列に雨が降る
窓の外は別世界
ほどよい希望は母の胎内の
延長だと知らずに
窓の結露に指で夢を描いてた
窓は限界のメタファー
境界の存在を透明なまま
長く提示し続けている
割る勇気もなく
そのままを見ていたいというのは
逃避なのか　処世術なのか
悩む部屋には雨は降らない
ほどよい絶望に飼い慣らされた
スーツの列の一番後ろが
見えている部屋にて
いきたいのか
それがずっと問われている

涙のバトン

涙を流すんだ
流れ落ちたその涙は
オイルのように

錆びれた心を動かすだろう
忘れていたにおいも
夕焼け空も
戻ってくるかもしれない
枯れた後の感傷のような
虚しい夜がいくつも過ぎて
流れるほどの涙の源泉は
見当たらない
失われてしまったのか
そもそも初めからなかったのか
機械仕掛けの心の間を
最後の涙が落ちていく
新しい環境だけが
いくつも移り変わっていくけど
心は止まったまま
正体不明の影が
私のフリして街を歩いてる
涙さえ流せば
影は地面に吸収されて

私をここへ連れ戻すはずなのに
なかったものの中に
人の入るすき間はなかった
母さんだって、知ってたけど
ほとんどの人と同じ
源泉の枯れた人だった
家って何？
育つところって何？
涙のバトンは
どこかで途切れたまま
憧れだけが思い出をセットする
そこにいたのかどうかと関係なく
無数のメディアが協力してさ
セトモノのような
機械仕掛けの人形たちが
いつ止まるかわからないまま
街の中を走ってる
グルグル、グルグル、デタラメに
そこまで遠くにする

必要もない人と
遠くにしなきゃ
生きていけない人と
伸ばした手が
届くか届かないかの
ギリギリの範囲で
世界はまだかろうじて回っている

ブランコ

あなたの辿った足跡に
意味もなく知らずに惹かれて
あとで理由を知って驚く
深いところで繋がる
同じ血が流れてるからか
もしかしたら、と思う心が
つかの間の「在」を呼び寄せ
本当に求めていたものとの
一致を示している
家族三人で暮らしてみたかった

やさしいお父さんが子どもを
電車の先頭に座らせ話をしてる
もう何も感じないけど
僕が幼い頃から
ずっとやってみたかった光景だ
「不在」が日常で
僕の人生を形作ってきた
仕方ないさ、と言い切れない
でも、受け入れるしかない
ブランコは未だ虚空に揺れている

肖像画

記憶のない部屋の肖像画が
遠い闇の向こうから私を見ている
縁取られた道だけが繋ぐ
互いの視線以外
私たちの間には何もないかのよう
生きたのかどうかも分からない
気がつけばここに放り出されていた

布団にくるまったまま転がり続けて
朝のような光の中とりあえず息をする
すべてが整列するまで
あとどれくらいかかるのだろう
私の記憶はなくても
見ていた世界の記録はある
いかようにも覚えさせる時代で
私がいなくても世界は回ると
諦めのように知らされる
落ちていきそうな私を
それでも最後に支えるものは何？
ただ…、記憶のない部屋の肖像画が
遠い闇の向こうから私を見ている
隔てられた分だけ
私を支える…、みたいな
そんな感覚がある…、としか今は言えない
今よりも遠くへ行けばもう
そんなことさえ言えなくなるだろうから
今のうちに語り尽くしておかないと

本当に記憶が失われそうで怖い
一歩進むごとに
空白に向かってすべてが降ってくる
今はそれでいい

◆じんこ　神奈川県

最後の客

地面がもっと近くて
空がもっと遠かった頃
風はどこで吹いていたんだろう
公園を取り囲む樹樹の
あそこの枝だけが
ずっと揺れていた

雲ひとつない
透き通るほどの一日が
夕暮れ時を迎えると
また少し歳を取ったようで
子どもたちを急かす声が

ちょっとさみしい

離れた場所で家族は遊び
日が暮れればみな家に帰る
公園の最後の客になるのは
慣れている
遠くの景色が見えなくなると
私は腰をあげる

私を呼ぶ声がして
ゆっくりと歩き出す
公園はもう遊び場ではなくて
空の色や鳥の声や風の音を
確かめる場所
命を確かめる場所だから

◆小佐治雪　　愛知県

星を紡ぐ指先

私には、余白が多い。

窓を伝う雨が、六月の色と交わり、
ページをめくる紙の音、秒針の行方、滲む視界を、柔らかく包んだ。

紡ぐための二百四十六万字は、
奥に留まったまま出番を見出せず、
静かに沈んで、微かに震えていた。

その声は、私の余白をそっと撫でた。
その指先は、私の心を優しくなぞった。

しなやかに、慈しむように、
毎日、何時間も触れ続ける。

いつしか、もっと強く押し当ててほしいと願うようになった。
深く、激しく、感じたいと思うようになっていった。

その声は、その指先は、私の想いを焦らし、いつも同じ
加減で、
ただ温かく、穏やかに、
余白を撫で、心をなぞる。

何のための余白なのか。
導いてもらおうと前のめりになった夜。

その晩は月影が清かだった。

雫の粒が葉先に揺れ、空気は生ぬるく、どことなく澱み
ながら、
それでいて透明だった。

私の余白を撫でる声をふさごうと、唇を重ねた。
伏した目が閉ざされ、その舌は私の中で動いた。
ぎこちなく、ゆっくり、確かめるように。

私の心をなぞる指先は、強引な私の腕を振りほどくこと
なく、
力強く上下した。

声と、指先が、粘膜を這う。
丁寧に、次第に乱暴に。

身を委ね、薄く目を開ける。
肩越しに潤む夜が遠くで浮かぶ。

喘ぐ息遣いだけが、暗闇と粗削りの光の中、
生まれては消える。

余白が染まる。
心が乱れる。

窓を伝う雨が、六月の色と交わったあの日、
空を泳ぐことを夢見ていた私は、
滴る糸を引き、星を紡ぐ指先に夜の虹を見た。

◆Yubune　沖縄県

健忘症

読ませる気など無い詩を
たまには綴ろう
書いては消して
義務に押しつぶされては諦めるのです
パソコンがすごく熱い
いい加減重い腰を上げたらどうです？
窓を開けて風を感じる
そうでした
風景が浮かぶように謳うには
まず私を忘れてからじゃないといけないのです

意図が溢れてしまえばもう虚実
真実の隠し場所。散らばる。擬態。
窓空いてたんで、吹き込みました。冷えますか？
綺麗な空とキャンパスの屋上
「洗車し終わったから手を洗いましょうね」
ワイパー下げ忘れてますよ！まだ走れますか？

口座で眠りこくった三万
全てに私
君、面白いほど間抜けな顔だね？
どなたですか？ああ、昨日車に忘れた傘。
ご名答。
まあたやってしまいました。得意なんですもう。
外側だけで上手くやれることは上手いんです。

就活ばっか考えてるから自分がどっか行きました。
内側って見過ぎると外になる
永遠に深淵
拾得物置き場にはきっと似たような人間たち
肯定感が欲しいです　もっと愛されてると感じたいです
後出し過ぎません？そのプレテスト
「受験票に不備があるので生まれ直してきます」
地獄の広さはそれぞれでみんな素敵な物を抱えています
前を向いて生きても後ろは付いてくるじゃないですか
だから後ろ向きつつ僕は前へ歩いてみます
うーわ、そっかー。自分が一番可愛いんだね。

人に期待をしないから出来上がった平和な村
多分実はどこかしこも焼け野原
本当は爛れまくった顔のゾンビです。
何をしたって誰かは誰かから離れていくんだもん
化粧と服だけ一丁前　臓物は血祭り
偏光ラメで綺麗なとこだけ一生観てろよ
そういうこったあ　ああ　おかえり

僕も　私も　お前も　貴方も
全て分子の気まぐれ　まやかし？
そもそも目の前にいるのは本当に「君」か？

ああ

この知ったかぶり！明日にはぜんぶ灰だらけの世界　初めから無であることを知れ

◆Mちゃん　長崎県

「行きたくない！　行きたくない！　行きたくない！」
「行きなさい！　行きなさい！　行きなさい！」
朝が来る度、決まって母とやり合った。
例外は土、日、祝日、長休み。
幼稚園がある限り、朝は常に戦争だった。
怒号と号泣の大嵐。
結局、最後は泣きながらバスに揺られて終わる。
友達なんか誰もいない。欲しいとも思わない。
どいつもこいつも目障りなだけ。
独りが好きなのに、それが許されない。
一体、独りの何がそんなにいけないのだろう？
先生は、いつも怒ってばかりいた。
「Mちゃん！　Mちゃん！　Mちゃん！」
「だから、どっちのMちゃん？」
行きたくない、行きなさいで母とやり合っていたのと同じ。
幼稚園でも毎日、同じことで先生とやり合った。
同じクラスに同じ名前の子がいた。
どっちを呼んでいるのか、わからなかった。

フルネームで呼んでくれればわかるのに、どうして？
「なんで娘ばかりが辛い想いをしないといけないんですか？」
「お母さん泣かないでください」
きっかけはクラス替えだった。
仲の良かった数少ない友達と引き離された。
それから、いじめが始まった。
なんにもしていないのに、どうして？
ただ普通に話しているだけで、どうして怒るの？
私の何がいけないの？
本が好きだから？
引っ越し先でも、何一つ変わらなかった。
本を読むのをやめたって同じこと。
むしろ状況は悪くなった。
「そんなことじゃ将来、不登校になりますよ！」
先生からは、そう切り捨てられた。
夜毎、失禁を繰り返した。
頭に大量のフケがわき、髪がボロボロに抜け落ちた。
それでも学校に行った。
将来が不安で不安で仕方なかった。
生きる支えはただ空想だけ。
アニメ、漫画、ゲームだけが私の世界。
そうだ、作家になろう！
絶望のどん底で夢が芽生えた。
もう先生もクラスメイトもどうでもいい。
夢さえあれば幸せだった。
「恋愛模様がないと売れません」
担当者の一言で私の夢は潰えた。
せっかく作家になれたと思ったのに。
これで安楽に暮らせると思ったのに。
もうペンが握れない。
真っ白な紙と何時間も向き合って一文字もない。
恋愛が嫌いだから何を書いても無駄だ。
何をする気も起らない。完全に気力が尽きた。
黙って座っているだけで涙がこぼれた。
口が恐ろしく重い。喉が動かない。喋ることさえ億劫

になった。
絶望のどん底で否応なく気付かされた。
私は作家になりたかったんじゃない。
楽して金が欲しかっただけ。
働きたくなかった。人や社会と関わりたくなかった。
もう私を守ってくれるものはない。
日頃から私を嫌う店長の小言。
なんともなかったはずなのに、いちいち癪でたまらない。
カッとなれば握り飯を五個も六個も一気に腹にぶちこんだ。
そのくせ食パン一枚が喉を通らなくなった。
誰もいなくなれば大声で叫び、暴れるようになった。
鼻水が止まらなくなった。
どんなに薬を飲んでも止まらない。
そのうち咳まで止まらなくなった。
夜通し呼吸困難に陥りながら激しく咳込んだ。
仕事をやめて病院に行った。
診断名は自閉症。

私は障碍者だった。

「ああ、そうだよ！　どうせ、おかしいんだよ！」
出産は殺人より悪い。
そう吐き捨てた私を妹が咎めた。
私は大声で泣き叫んでやり返した。
癇癪を起した子供と一緒。みっともなくギャーギャー泣き喚いた。
暴言、暴力は日常になった。
外に出ればレジや窓口を怒鳴りつける。
家の中では完全にモンスター、
手当たり次第に床や壁、物を破壊しまくった。
壁や天井は穴だらけになった。
手や足は痣と傷にまみれた。
足から血が滴ろうが、そこら辺を蹴飛ばして回った。
幼稚園や学校でのいじめ、店長の小言。
消えない、消えない、痛みが消えない。
いつだって真面目に頑張ってきた。
みんなやらないトイレ掃除を一人でやった。

先生からは他の子のお手本とまで称された。
ひやかされても、からかわれても黙ってた。
いつかきっと報われる日が来ると信じてたから。
なのに、どうだ？　何一つ変わらないじゃないか。
私の居場所は何処にもない。
私を馬鹿にした奴らは、でかい面してのさばってるのに。
トイレ掃除一つしない。持久走でずるをする。
店のコーヒーをちょろまかす。ボランティアで掃除した後、ごみを捨てる。
私はあいつら以下なのか！
悔しい、悔しい、悔しくてたまらない。
みんな、みんな、呪い殺してやる。

◆大坪覚　　横浜市

暗誦

試写室のスクリーンの中で
英国の兵隊が詩を暗誦する
日本兵に拷問されながら
試写室の中にいるのも日本人だ
英国人には
詩は何か特別なものなのか
ただ
劇的な、ものであるということ
映画とは興行である
目的はカネだ

不幸なことなのか
戦後（終戦後、敗戦後）
日本は共通の詩を持たない
誰もが口ずさんでしまう詩はない
記憶されない詩を
記憶できない詩を
疲れながら制作する
心に残らない可能性をなぜ無視するのだろう
恥知らず

言葉にずっと溺れてきた

でも
事実は変わらない
わたしも数十年
みなと同じように
本当の事を言わない
わたしが詩を書くと、背景はいつも否定だ

言葉と同じ、それよりもやや多いくらい陰鬱に
戦争のことを考えている
戦争を待望するカネ持ちは
戦争があればもっとカネ持ちになれる

白紙は大海だった
言葉よ
わたしは減量できるだろうか

◆細川なつ　　京都府

クジャク

私　胸の中で鳥を飼っているの

それはそれは、美しい鳥なのよ
最初は臆病だったけれど
少しずつ私に　懐いてきたの

色は、薄紫とターコイズブルー
切れ長の目と美しい冠羽を持つわ

目が合うのは、
決まって羽繕いしている時
だけど、知らないフリをして
自分のいきたいところへ行くの

私、彼の事とても気に入っているの
鳥なのにあんまり飛ばないからよ

それから、若い鳥だから
まだまだ子供なところも好き

眠る時は木の上や
カーペットで眠るけど
どこに住んでいるかは、
ずっと前に、尋ねたまんま

アキニレ

この木はアキニレ
私の好きな木
名前は何だって良いんだけど
たぶん私の部屋を守ってくれている木と
おんなじなの

河原のベンチに寝転がって
じっと静かに見つめ合う
時を忘れて、私達だけのじかん

風が通ると枝葉が揺れる
いったい、どのくらいここにいるのか

たくさんの鳥たちはじゃれ合って
この木の枝に留まってく
涼しい木陰で休んでく

あぁ、今度
私が鳥になったら
この木の枝に留まりたい
それから一番高い所に留まって
この木と同じ景色をみたいナ

◆梶原真冬　東京都

消化不良

あなたが去ることを知って
わたしの消化作業が始まった。
共有した時間につまった思い出と
何より私があなたを想う気持ちは
これから私を苦しめるだけだから。

でも会いに行きそうな衝動を飲み込んだら

胸につっかえて痛かった。
強がりを言うたびに
本心が悲鳴をあげているようだった。
そんなことよりほんとは
すり抜けていくあなたの腕を
ぐっとつかむことができたならいいのに。
二度と振り返ることのない
後ろ姿を見せるあなたの前に
立ちはだかることができたならいいのに。

自業自得

たぐり寄せた糸のさきには
他人の不幸がたくさんついていた。
堅い結び目には
わたしの奥深くに
食い込んで解せない偽善のこころがあった。

わたしの周りに暗闇が押し寄せたとき
その中心には歪んだ私自身が
盲目になり立ち続けているのかもしれない。

夜の向日葵

まぶしいくらい明るい満月の下で
きっと昼間から笑ったままの向日葵が
雨上がりのうだる道を歩く私に向いている。

なんだか知らない世界を見せられたようで
今夜心細いのは私だけじゃないはずなのに
一人この宇宙に放り出された気がした。

雨上がり

西武線を待ちながら
だるくて傾いた体
目の焦点が定まらず
ぼやけた電車が過ぎる
開けた空はまだらに明るい
中途半端な気持ちだ

今はあやふやな将来と
何となく過ぎる日々
ただ若くて頼りなくて
まとまりのない自分
この穏やかで刺激のない
雨上がりのように

笑顔

さぁお母さんのために
早く寝てちょうだい
今日はへとへとなの
移動の多い日で

さぁお母さんのために
仲良くしてちょうだい
怒る気力もないの
久しぶりの熱で

さぁお母さんのために
全部食べてちょうだい
特別手間かけたの
高いお肉買って

さぁお母さんのために
少し待ってちょうだい
まだ手が離せないの
電話のおしゃべりで

さぁお母さんのために
笑ってちょうだい
それだけでいいの
それだけでいいの

酔っぱらって

あぁ気持ちいい
すべてが優しい
何もかも愛しい
夏の夜の風

なまぬるくても
まんまるお月様
浮かばぬ空も
それでいいんだよ
今日はそれでいい
どんなことだって
許せる気がする

あぁ気持ちいい
世界が明るい
宇宙まで明るい
見えないものも
ここにいない君も
同じ星の上にいる
心強くなるよ
このままでいいんだ
変わらなくていいんだ
どんなことだって
許せる気がする

生きる

生きることはほんとに難しい
生き続けることはこのごろ
とっても勇気がいるらしい
時代のせいなのか
世界のせいなのか
はたまた隣のあいつのせいなのか

生きることはほんとに難しい
生き続けることほどきっと
我慢することはないだろな
お金のせいなのか
孤独のせいなのか
はたまた隣のあいつのせいなのか

誰かのせいだったら
何かのせいだったら
どんなに楽になれるだろう

でもそんなことじゃないって
ほんとはわかってるんだ

もうええわ

もうええわ、どうでもええわ
あんたが生きようが死のうが
私の知らんことや
人の思いやりや優しさが
見えへんかったらおしまいや
自分の勝手な振る舞いに
気づかへんならおしまいや

もうええわ、どうでもええわ
あんたが困っても泣いても
私の知らんことや
しょうもないあんたをずっと
守ってくれる人がおるんやで
迷惑かけてばかりのあんたを
許してくれる人がおるんやで

もうええわ、どうでもええわ
私が何を怒っても言っても
あんた変わらへんわ
もともとのわからずやとちがう
そうあんたを信じてたんや
ほんまはあったかい人やと
私だけは信じてたんやで

なにでもない

何がつらいのかといえば
つらいことなど何もない
何が救いかというと
何もかもが救いである
それじゃなぜ涙が出るのだろう
心が晴れ晴れとしないんだろう

何が不満かといえば

どれも不満に値しない
何が望みかというと
叶わぬものしか浮かばない
いったいどこが満たされないんだろう
心は何を求めてるんだろう

◆結咲こはる　千葉県

脳裏に消えない蝶の羽の脈を開いて生を探すけれどどこにもなくて、その命の拍動を串刺しにして標本にする。光沢のある薄い青と紫と桃色の艶が光る蝶に名前を付けたくてお気に入りの作家の本を手に取った。五十一ページ目。目当てのページを開いて指でたどった。

繰り返し目で見て、口にして寄り添いたくなるその名を手のひらで囲うようにした。ひらひら飛んで逃げてしまわないように。乗せた手のひらの上で揺蕩うその名を、精水の中に落とし込んだ。

不純物を落とすための煮沸。どこまでもどこまでも透き通った液体にするために火力を上げる。炎の色は青天の霹靂に染まって室内に影を落とす。立ち上る蒸気は当てもなく宙を彷徨って化学反応を起こした。

重い空気。ちかちかと点滅する豆電球。むき出しのコンクリート。ホルマリン漬けの蛙に蜥蜴、解剖された人間の臓器は老若男女問わずある。生々しい現実と空ろな虚実の狭間でずっと静かに息を潜めた。

生きるとはなんなのか。
その言葉の意味を知る為に多くの書籍に読み耽ったけれど、リアルさを語る文献なんてものはなくて、それは知りたいことの足元にも届かない。
生きることをやめた途端に見えるのはなんなのか。それこそが死なのか。
そうして今度は死というものについて調べることになるのだが、やはりそれは宙を掴むようなことばかりが重なって全然前に進めない。

そうやって走り続けた十年という月日の中で、確実に大人になった僕のからだは生きるも死ぬも感じることがないままで、それでも諦め切れないから必死になって研究に勤しんだ。

「きれいね」

そうこうしているうちに気がついたら隣にいた君が言う。標本に収められた蝶のことか、はたまたその蝶の名の溶けた液体のことを言っているものだと思った。だから僕は「そうだね」と答えたのに、君はおかしそうに笑って僕の手にその節の目立つ細い指先を絡めた。すがる先を探す蔦のようだった。

「あなたのことよ」

無我夢中で駆けた僕の十年を、君はとても美しいと笑った。苦しくて悲しくて虚無すら感じた日々の繰り返しを、愛おしい日々だと目を細めて言った。

そして君は胸元にある心臓を取り出して、僕の手のひらに乗せて言う。

「生きること、死ぬことの答えが見つかるといいわね」

あたたかくて、規則正しい拍動を繰り返すその心臓は小さかった。左胸にぽっかり穴の空いた君は、遠い森の中で静かに倒れる一本の木みたいにその場に倒れた。

過去と未来が繋がって、着実に現在(いま)を刻んでいるこの瞬間の繋がりが、
君に見守られながら続けた研究ばかりの日々が、
研究の意味を失って路頭に迷った、あの棒に振ったような日々が、
今手のひらの中で少しずつ小さくなる拍動が、空っぽの君のからだが、

こんなに近くに答えはあったのだと教えてくれた。

僕の瞳から零れた小さな一滴が、蝶の名の溶けた液体へと混じっていく。それは哀しいほど美しい透き通った生の色だった。

蝶の標本のとなりに並ぶ、生に浮かぶきみの心臓。
その部屋の中で、僕は今、自分の心臓を取り出して、五日の自分のような子に託そうとしている。

◆月野海月　神奈川県

空気清浄機が稼働している
エアコンの風の音がする
窓を開けた外からは雨粒が木の葉に当たる音
そして鳥の囀り
これ以上、なにが必要だろうか

下手に音楽など流してはならない
この完成された音の空間を塗りつぶすようなことはしてはならない

だから僕はひっそりと躰を丸めてシーツも敷いていないベッドに蹲る

アパートの駐車場から車が入ってきた音がする
誰かが帰宅した音だ
誰かの息遣いを聞きながら僕は音をたてないようただ小さく暮らしている

夜中、空気清浄機とエアコンを止め窓を閉めるとそこは無音になる
しぃんという音が脳から聞こえる
これは僕を苦しめる
無の中には無限大の重圧がある
尾ひれのついた杞憂が脳でせめぎ合う
枕が濡れるのを感じる

じっと動けなくなり助けを呼びたくなるが呼ぶ名前もない
足元から毛布を手繰り寄せ包まってみる

毛布の擦れる音だけがこの部屋を支配した
耳に当たるとまるで拳で塞がれたかのようだ

思わず手で両耳を塞ぐ
ゴーと音がする
それはすこしだけ僕を癒やしたが、束の間であった
外は雨が降っているはずだ
隣にも下にも人が住んでいるはずだ
それが聞こえない
慌てて両手を離すとまた無が僕を襲う
「逃げられないよ」
誰かがそう言った気がした

ふと黒いものが目に入った
小さな蜘蛛だった
僕はこの無の世界の中壁を何食わぬ顔で歩く蜘蛛を恨めしく思った
蜘蛛はこの無を感じ取れるのだろうか
僕のこの耐え難い苦痛を

僕はひやぁと声を上げてベッドから飛び出し
勢いよく窓を開けた
しとしとと雨の降る音がする
上がる息をゆっくり整えながら雨音に耳を傾ける
カーテンを固く握りしめ息のおさまるのを待つ
部屋は暗いままだ
外も暗い
雨音と僕だけがいる世界

ゾッとした

このまま飲み込まれてしまう！

倒れ込み、床を這って空気清浄機をつけた
それは何事もなかったかのようにいつも通り稼働する
「抜け出したぞ！」
誰かに向かって僕は叫んだ

無は去り、白い音が僕を包んで癒やした
それはまるで胎内のように温かく、これから待ち望む幸
運を祈られている気分だ
蜘蛛はまだ壁を歩いている
僕は白い世界の中、今日もひっそり眠る

◆神谷りん　静岡県

人は愛する人程人に愛して欲しいんよ

二人の空間でイライラしている私から
少し離れた場所へ寡黙に移る貴方
その仕草は時を過ぎると
なぜか切なく愛しさに変わり始めた

愛し方を知らない私が今まで気付かれず
ここまで誤魔化せた筈なのに
貴方の生き方で私の
誰にも負けない自信が砕かれた
愛を学ばずして生きてきた私は
戸惑いを隠せずに何かの殻が剥がれ始めた

愛をください
愛し方を教えてください

貴方のせい?私のせい?
それとも貴方のおかげ?
消しゴムで消された文字が微かに
浮かび始めた

父親を避ける私には
どんなに蹠いても数知れず程苦しんでもそこに愛は生ま
れない

ゴチャゴチャになっている夢に
溺れてかけていた私を見て
貴方が手を繋ぎながら
ただただ微笑んでいた

貴方の遠く離れた場所から光が差し込み
何かに導かれ始めた瞬間(とき)
私の想いを届けたくて届けられなくて
切なさが重過ぎた

愛をください
愛し方を教えてください

宝箱に隠された愛に鍵を掛けようか
外そうか迷いだし自らの想いに問いかけた

信じる?信じない?これが愛のカケラ?
片っぽの愛しか知らない私が何かを探し始めた

鼓動の激しさに驚きを隠せず
恥ずかしさが幾度も訪れる

この想いを誰かに伝えたくて
その想いは誰にも気付かれたくなくて

貴方からそっと視線を逸らした

胸の内の宝箱に手を触れ鍵を探し始めた
これが私の愛し方?
それが貴方の愛し方?

愛をください
愛し方を教えてください

◆夏宝洛　　大阪府

運河のある街

防波堤に立った
対岸の赤茶けた街が
夏色の風に吹き込まれていた

渡し舟が僕を
対岸に連れて行ってくれた
その焼玉エンジンは
老人の不連続な咳込みのようだった

吐き出される白煙には
大好きな重油の匂いが混ざっていた

周囲の絵柄が海抜ゼロのせいで
海風が正面切って迫ってきた
おそらく
カモメには人気があるのだろう

街に足を踏み入れるといつだって
思うことがあった
まるで空想科学世界の
廃墟のようだってことだ

だが
街は爆発的に生きていた

鉄壁にからみつくキルンがいななき
巨大溶鉱炉の噴煙が
赤い火柱を従えて

物凄く威張っていた
ポパーンと音がして振り向くと
アスファルトに
札付きの痕跡を残して走るトレーラーが
恐竜のように近づいてきた

Bマークの外れかけた野球帽を
かぶる少年が
風呂桶を持ちタオルを首に巻いて
雪駄ザラザラ銭湯代の小銭を
ポケットの中でじゃらじゃらしていた

それは記憶の中に生きている僕だった

大人になってからは
もがいてばかりだった
そんなときはこの街へきて
鬱陶しさを
運河へ捨てるようになった

夕方
トランペット少年が
夕日のファンタジーを吹かしに
やってきた

うまくはなかったが
その情熱は
オレンジが染まった街に
見事にテレシネした

美しさの瞬間
夕日は夏のパートナー
奥ゆかしく目をつむった

少年のトランペットが
吹き出しの最大圧力になっていた
その感動は

この先僕を生かしていくには
十分なほどのエネルギーに似ていた

◆田中花林　静岡県
わたしを余すことなく
使っていく
この生涯

鉛筆みたいに削ってく
わたしをなくしてから
死にたい

わたしを使いきって
天に召されたい

だから
どんどん使うの
少しの
遠慮も情けもなく

そうしたら
生きていた実感がわく
きっと
魂だけになったら、、

世も末
終末論なんて
何度話題になったことか

だから
わたしは
いつ死んでもいいように
生きる
死に物狂いで生きる

そうしたら
きっと死を
前向きに

とらえられる
きっと

痛みを愚痴を
垂れ流すのは
性に合わないから
私は
それを
詩として
昇華させる

それこそが
詩の
根源だと思うから

集まって
グチグチ言うのは

側に

どうかと思うから

まっさらな
ノートに
ペンを走らせる

いい言葉が
その中に
一つでも
あったなら

それに羽をつけて
あなたのもとへ
飛んで行って欲しい

なにかを
感じてもらえたら
もらえなくても
それでいい

その言葉が
あなたの
側に居れるなら

側に居れるならば

◆椎名　宮城県

水槽の中の愛

愛が目の前にある時、それが幸せだと感じている時、人は盲目になる。

かつての哲学者ソクラテスは「無知の知」と言った。私は、知らないことを知っているということである。

盲目というのは、知らないことすら知らないのだ。見えないのだ。

立入禁止の沼に足を踏み入れる。それが危険だと知らな

いから。知らないことは、罪である。

後に、私の心臓がこれほどにも絞めつけられ、壊れることなど知らずに。

苦くて、切なくて、気付いた頃には抜け抱けない程の愛。

落ちた穴が深すぎて、溺れる。

生きているのに、窒息しそうな。まるで、狭い水槽で飼われている金魚の気分。

愛とは一体何なのでしょうか。

私は、狭い水槽の中で盲目のまま泳ぐ金魚。

餌を与えられたら喜ぶような未熟な金魚だった。

愛は突如泡のように溶けて消える。まるで今までのすべてが嘘だったかのように。

水槽の中の金魚は、すでに衰弱していた。

狭い、狭い水槽の中から見えているものが、すべてでは無かったことを知った。

いっそ泡になって消えてしまいたい、そう思った。

私は、深い眠りについていた。水槽を壊し割ろうとするのに、それを嫌がるのだ。狭く濁った水槽から解放されるというのに。

恋は盲目。愛は残酷。

水槽の水が少しずつ抜かれていくのを感じる。水槽の水を抜いていたのは、愛したあの人。ゆったりとした時間の中でじわじわと体も心も枯渇していく。苦しい。哀しい。助けて。

もう、私は一人では泳ぐことは出来ないだろう。

水槽の水を抜かれながら、金魚は考える。楽しかった思い出、幸せだった思い出、出会ったときの事。一緒に住み始めた時のこと。

あれ……？

じゃあ、暴力を振られていたこと、避妊が失敗して一人で産婦人科に行かされたこと、同棲中、毎日飲み遊び歩いて連絡もつかず朝帰りだったこと。都合よくされていたこと、他に女の影があったこと、もっともっと、このようなことがあった。

いやあああああああああああああああああああああああ。

貴方は、水槽の水を全て抜き切った後、水槽の中の金魚を見捨てて逃げた。

私が目を覚ました場所は、病院。オーバードーズで自殺を図ろうとしていたそうだ。

「貴方の婚約者は、死にそうな貴方を置いて逃げたよ」と看護師が怒りの表情で言った。

私は水槽をたたき割り、大声で朝まで笑った。

もう二度と会うことは無いでしょう。もう二度とその声を聴くことはないでしょう。

もう二度と抱きしめることは無いでしょう。

もう二度と口づけを交わすことも無いでしょう。

黄色のカーネーション

見方次第で物語は覆る

当たり前に見えていたものが

真逆の世界にすることが出来る

―正規ルート―

「愛しているよ」
彼とは五年の付き合いの末
婚約した

指輪を受け取り
幸せな気持ちでいっぱいだった

私は彼にカーネーションを贈った
カーネーションの花言葉は
「無垢で深い愛」

私たちは幸せな日々を送っていた
彼もとても幸せそうだった

彼の仕事は多忙で休日出勤が増えて
いったが私は、それを応援した

―非正規ルート―

「愛しているよ」
彼とは五年の付き合いの末
婚約した

指輪を受け取り
私は微笑んだ

私は彼にカーネーションを贈った
カーネーションの色は黄色
花言葉は
「軽蔑」

私は疑心暗鬼の日々を送っていた
彼はとても幸せそうだった

彼の仕事はそれほど多忙ではなく、休日に仕事と言い、

他の女とホテルに行っていた
それも家庭を持っている女性だ
私はそれを泳がせた

―逆さまになった世界―

今まで正規ルートだと思っていたものが嘘で
今まで非正規ルートだと思っていたのが真実

彼は私たちの世界が逆さまになっていたことに気付いていないのだろう

―答え合わせ―

私は彼の前で幸せそうに指輪を見る
彼は嬉しそうに、私を抱き寄せる

私は彼の前で嘲笑い指輪を見る
彼は嬉しそうに、私を抱き寄せる

私は彼の胸に顔をうずめる
彼は私の髪をそっと撫でる

私は彼のシャツから香る香水に気付く
彼は私の髪をそっと撫でる

私は「愛してるよ」と言い
彼の瞳孔が開いた

私は「さようなら、ゲスが」と言い
彼の瞳孔が開いた

当たり前など無いのです
普通など普通では無いのです

罪の意識が誰にでもある訳では無い
悪を正義だと思う人間もいる

ただ生きていく中で世界線がいくつも存在する
見方次第で物語は覆る

愛に捕食されて

綺麗なものには棘がある
でも、あまりにも魅力的なものだから
ついこの手に取ってみたくなる
棘はその魅力に反し、指を突き刺し
血を垂らす
綺麗なものには毒がある
でも、あまりにも魅力的なものだから
ついこの口で味わってみたくなる
毒はその魅力に反し、体を巡り苦しめながら死を齎す
棘にも毒にも気付いていた
でも、どうしても自分のものにしたかった

―誘惑―

傷付くと分かって受け入れる
彼の持ち合わせている棘と毒が
初めは私の本能を刺激した
私たちは深く愛し合った

―疑惑―

最初は魅了されていた棘と毒
年月を共にする程に、棘は鋭く
毒は濃厚さを増していった
私は、それに気付いていた
でも知らないふりをした

私たち深く愛し合った

―自覚―

私は、彼の棘に刺され
毒を盛られていたことを自覚した
心身に異常が見られるようになった

彼はそれを知らん顔
私たちは深く愛し合った

―衰弱―

私の心と体は日に日に衰弱していく
呼吸が上手く出来ない

彼は迷惑そうにどこかへ出かける

私たちは深く愛し合った

―枯渇―

彼の毒は猛毒となり、私の体の全身を駆け巡る
彼の棘は刃物となり、私の心臓を貫いた

彼は私をつまらなさそうに見つめる
私たちは深く愛し合った

―執着―

彼の毒と棘は、そう簡単に私を死なせてはくれなかった
血まみれで痛い、泡を吹いて苦しいともがく私を彼は蹴り飛ばして、そして言った

「愛しているよ」
私たちは深く愛し…

―偽善―

その後、彼は瀕死の私に解毒剤を渡した
そして、心臓に突き刺さった棘を抜き
手当をし出した
その行為に、私は彼が更に愛おしくなった
「本当は優しい人なのよ」
そう思うようにした
…私たちは深く愛し合った

―再び―

しばらくして、彼は私に彼の猛毒を飲ませた
そして、馬乗りになり自身の棘を私の心臓に何度も何度も突き刺した

彼は、何も感じていなかった
私たちは深く…

―退廃―

私はわずかに出る声で助けを求める
血だらけの体を引きずって

助けてと彼に縋った
彼は微笑み、無言で私の前から消えた
他の女性と腕を組みながら

私は深く堕ちた

―終焉―

気付いたら、私は真っ白い雪の上に寝そべっていた
彼に捨てられ、そのまま逃亡といったところだろうか

出血がまだ止まっていない、毒も既に回り続けてもう末期状態だ

静かに目を瞑り考える
「綺麗なものには棘がある」
「綺麗なものには毒がある」
誘惑し、おびき寄せて、捕まえて、餌として捕食する

「小学生の頃の理科の授業で習ったな」

「毒蜘蛛に囚われた蝶の気持ちが少し分かるかも…」

「惨めだなあ、相手の思い通りに死ぬなんて」
と言うと私は、最後の余力で落ちている硝子の破片で喉を深く掻っ切った

「さよなら私の愛した最高に魅力的で最高に悪い人」

憐れむウサギ

失うということは、非常に悲しく
残酷で虚無と喪失感に襲われる

失うということは、心を貪られ
埋めようのない痛みを伴う

人は大切なものを失うまいと
生きる

それが人間らしさであり
感情だ

人は理論だけでは生きられない
感情が伴うからだ

何かを大切に想い、
それを自分以上に愛するからだ

脳だけで思考するのではなく
心臓で感じるというのは
よく聞く話だ

正解か不正解かをさておき
心が震えたように動けるのが
人間らしさというものだ

では、それを自覚していなければ
失ったことにすら気付かないのだ

昔、オリオンという男がいた
彼は気性が荒く、周囲の人間に
嫌われていた

それを見かねた人々は、彼に
一匹のウサギを贈る

人々は、ウサギを贈ることで
彼に「心」を養おうとした

ウサギは彼に懐き、寄り添うように生活した

しかし彼は、あろうことかウサギを
気付かずに踏みつぶして殺してしまった

周囲の人間は
「悲しくはないのか」
と尋ねるも
「俺の生活に支障が出るものは邪魔だ」
と答えた

彼に悲しいという感情は無く、
その後も何も無かったかのように
淡々と冷酷に生き続けた

彼は自分が可愛すぎるあまり、
自分以外のものを大切には出来ないのだ

彼、オリオンは自分以外に
大切なものも無ければ
失うものすらないから

失ったことにすら気付かないのだ

現在、冬の空を見上げた時
オリオン座は堂々と輝いている
そのオリオンの下に
ひっそりと輝くウサギ座は
今も尚、彼を憐れんでいる

◆松山尚紀　埼玉県

Embrace

姉さんはほんとうに死んだのだろうか。

私はそのことが疑問でならなかった。姉さんは今日、死んだはずだった。死因なんかどうだっていい。いずれにしたって姉さんは死んだのだから。それでも、私はそのことを信じることができなかった。あれほど好きだった姉さん。欲しいものならなんでも与えてくれた姉さん。爪で引っ掻いて遊んでくれた姉さん。諌める目。遠い眼差し。去っていく背中。遠い水平線。消えゆく影。

そもそも私には姉さんなんていたのだろうか。それ自体不確かだった。実際にはいなかったかもしれない。なぜなら、私は姉さんの無意識のなかの住人なのかもしれなかったからだ。無意識？　そんなものあるのだろうか。私は魂の実在を信じている。無意識なんて東欧のブルジョアの持ち物だ。それでもそんな気がしていた。瞳のなかの住人。私のファンタスマを司る黒い瞳。瞳孔が開いて私を捉えていく。

お前を握り潰しに行く。

確かに今日、葬式をやった。黒い縁に囲まれた遺影だって見たし、棺に入った姉さんの白い顔だって見たし、お骨も箸で運んだし、煙だって見た。

それなのになぜなのだろう。

姉さんがいたということに確信が持てないにも関わらず、姉さんは死んでいないという思いがぬぐいきれない。姉さんは死んでないんじゃないか。私はそう思いながら、夜の街を歩いた。影が大きくなって私を捉える。ニヤケ顔。白い手が伸びる。

姉さんはいたし、姉さんは死んだんだよ。そう言う美人の女性の声が聞こえた気がした。でも、無視した。い

まのところ無視したと言ったほうがいいかもしれない。私はその女性が綺麗だと思っていたし、結婚したいとも思っていたからだ。でも、姉さんとも結婚したかった。綺麗だったからだ。やさしかったからだ。うるさかったからだ。他人のことしか考えられないくせに、わがままだったからだ。爪が伸びていたからだ。私の方が爪は綺麗だけど、長さでは敵わない。玉ネギが腐っていることを気にしていた姉さん。誘惑する肢体。情熱の筆致で描かれた。

自分のこともわからないから、他人のことなんてわかりっこなかった。それでも、ありったけの言葉で姉さんを理解しようとした。姉さん。情熱を隠し持っている姉さん。雷に撃たれる覚悟で雨のなかを歩いている姉さん。

お前を握り潰しに行く。

姉さんは私に対して、「あたしはお前の敵だから、いつかお前を握り潰すだろう」ということを言っていた。「影を犯そうとしたお前を握り潰すだろう」ということも言っていた。それでもいい。姉さん。握り潰しにきてくれ。これは私にとっての唯一の贖罪の行為なんだ。抱擁するから。ありったけのやさしさで、私の持てる全力の甘さで抱擁するから。会いに来てくれ。

姉さんは打ち明け話が苦手で、いつも父親のことばかり気にしていたし、世間のどうでもいいことばかり気にしていたくせに、影ばかり追い求めていた。そうか。姉さんは影を追い求めすぎて死んだんだ。影に溶けて、夜と一体になったんだ。夜の色に混色して真っ暗になったんだ。

一瞬俯いた。

お前を握り潰しに行く。

声でハッとして再び顔を見上げると、姉さんは夜の街に佇む電柱に寄りかかって立っていた。黒いシースルーのドレスを着ていた。眼差しが地面に落ちている。そして、姉さんは私を一瞥すると、背中を向けて去っていった。

姉さん。行かないでくれ。私は夜が好きだったんだ。大雨でも、曇りでも、夜が好きだったんだ。それは姉さんが好きだってことと同じことなんだ。姉さん。私と一緒に死んでくれ。土砂降りの夜のなか。一緒にネズミを

殺そう。一緒に男を殺そう。天啓のように。
お前を握り潰しに行く。
暗いニヤケ顔。
姉さん。いつか言っていたよね。「声が大きい。声を小さくして祈れ」。「いま、血糖値が下がってるから、お前とは話したくない」。「お兄さんやお父さんを大切にできないから、お前が嫌いなんだ」。「お前はお父さんに似てる。だから嫌なんだ。近すぎて嫌なんだ」。
姉さんの手が大きく目の前に映った。
いずれはお前を握り潰しに行く。
ささやくようにいう姉さんの声が耳元に響いた。
お前を握り潰しに行く。
お前を握り潰しに行く。
私は消えかかる声で叫んだ。姉さん。行かないでくれ。ゴルゴダの丘に登って磔刑にされたイエス・キリスト。恩寵の日々は必ず訪れる。忙しくしていると、神は病気という方法をとって静かな時をお与えになる。明日のことで思いわずらうな。今日に想いを馳せるだけで十分だ。汝、右の頬を叩かれたら、左の頬も差し出しなさい。
全部嘘だ！
フロイト先生はこう言ってた。良心の呵責は内に向かった攻撃欲動だって。フロイト先生はこう言ってた。ナルシシズムは精神的な後退だって。フロイト先生はこう言ってた。エディプスコンプレックスが全てなんだって。全部、コンプレックスのせいなんだって。全部、お母さんのせいなんだって。
握り潰しに来い！
いま！
十字を切って迎えるから。お前のその狂いきった無意識信仰。臆見でしかものを見られない視点。リピドー還元主義。無意識の泉のなかを覗き込んでばかりいて。お前にはなにが見える。井戸の底の情熱。魂が井戸の底で叫んでいるぞ。十字を切って迎えるから。いま。握り潰しに来い！
狂ってる。狂ってる。狂ってる。
お母さんのせいだ。お母さんのせいだ。お母さんのせいだ。
お母さんは同胞じゃない。結局、あの女に女性の気持

ちなんてわかりっこない。みんな理解なんかしてくれないんだ。あたしの孤独。あたしの汚さ。あたしの口。あたしの目。あたしの手。あたしの足。全部嫌いだった。

透明な耳を持つ者。

いま、お前を握り潰しに行くよ。

姉さんの姿が私の視界全面に映る。

ニヤケ顔の姉さん。

握り潰しに来い！

姉さんの大きな手は私を捕まえて握り潰そうとした。

私は抱擁を企図したかった。姉さん。天使と悪魔の二つの姿を強要された姉さん。いつも私に都合のいい女性であってくれたね。夜の窓辺に愛が揺らめくときに、一緒に歌ったジャズスタンダードナンバー「Night and Day」。長い夜。ずっとそばにいてほしい。Night and Day。いつも想っているから。Night and Day。

握り潰す！

姉さんはもう姉さんじゃないんだね。影にまみれた、女性の敵である男性を殺す悪鬼になってしまったんだね。姉さん。ずっと出会ったときのままでいて欲しかった。昔のままでいて欲しかった。姉さん。姉さん。十字を切って。会いにいくよ。

姉さんは私を握り潰した。

そのとき、私は姉さんが死んだのだということを確信した。

姉さんは死んだんだ。

彼女は死んだんだ。

影と一体となって死んだんだ。

姉さんは死んだんだ。

◆熊野コエ　神奈川県

魔女に会いに行く

三年と半年前の冬、金沢市内で魔女に出会った。白（本当は、とうめい）が降りしきる景色の中、次第に溶け霞んでゆく視界と寒さから退避するために偶々見つけ駆け込んだ純喫茶にその魔女はいた。

詩人の名前を冠した（と、わたしは勝手に思っている）その店は、入り口から不審なモニュメントが出迎えている。大量の乾燥植物、独特な絵が飾ってある、ほの明る

い奇抜なレイアウトの店内はすっかりと冷え切っており、コートが無くては過ごすことも儘ならない。室内にも関わらず吐く息は白く、ガタガタと震え出しそうな身体を抑え慎重にメニューを選ぶ。魔女は、観光客であろう他の客とペラペラと一方的に喋っていた。珈琲を注文すると、勝手に大量のお菓子が運ばれてくる。近所のお店で魔女が日替わりでチョイスしているらしい。何気なく選んで座った座席が偶々、かの五木寛之氏がよく座っていたという場所で、魔女曰く、氏はここのお店の電話で直木賞の報を受けたという。そんな有難い席で、極寒の中珈琲を頂く。珈琲は直ぐに冷めたが、心の奥底に燻る火は次第に熱を帯び始めている気がした。隣の席には店内の雰囲気に似つかわしくない若者が座っており、聞けば地元学生だという。

「前々から気にはなっていたのですが、勇気を出して今日初めて来ました。最高ですね」

そんな彼に、地元お勧めの飲み屋を聞く。そこには絶対的な一期一会が鎮座していた。だのに、部屋の温度とは反比例するかの様に、不思議な温かさがじんわり、じんわりと波及するように広がって行く。結局、教えてもらったお店には行かなかった。

魔女は、誰に対しても終始口からマシンガンを撃ち続けた。魔女は何十年もずっと、この街から一歩も外に出ていないらしい。美大で絵画を学び、店内に飾ってある絵は全て魔女が描いたものだそうだ。

もうだいぶ高齢に見える魔女は飄々と事実史を述べている様でいて、御伽話を語っている様でもあった。ひとしきりの騒めきの後、暫くゆっくりしていたかったがやがて寒さに限界が来たため会計をする。その時、魔女から掛けられた言葉が今でも忘れられない。

「人生は心の旅だ。お互い良い旅をしよう」

何十年も街を出たことが無い魔女が吐いた言葉はとても、それはとても説得力があり、魅惑的で甘美的で、わたしは未だにその魔女の魔法に掛けられた儘でいる。あれか

ら心の旅をし続け、良いも悪いも、酸いも甘いもかみ分けて、たくさんのことが目紛しく去来して行ったけど、その魔法は、わたしのどこかで原風景となって生き続けている。わたしに掛けられた魔法の残滓を可視化するのであれば、こうして文字を操っている事がその証明なのだろう。

あれから数年もしないうちに歴史的な環境の変化があり、わたしも長年勤めていた会社を辞めた。隣にいた学生はとうに社会人となっているだろう。それでも、唯一変わらないものがあるとするならば、魔女も、隣の彼も、わたしも、皆が互いに心の旅を続けているという事だろう。

じきに長い夜が明け、わたしは近いうちに金沢の魔女の家に遊びに行こうと思う。魔女は元気に旅を続けているだろうか。わたしのことなどこれっぽっちも覚えていないだろうけど、「良い旅を続けているよ」と、不意に彼女に報告をしたくなったんだ。

◆佐藤かしこ　岩手県

縄文のすこし前

愛が実る時期
ぼくらは愛ばかり食べる
それしかないから
とりもけものも
代を継ぐのをやめるか
あたたかいところへ移ってしまって
もうここにはぼくらしかいない

愛のたくわえがなくなると
ぼくらは凍らせておいた愛を取り出しに
風けつだらけの山に出かけ
とけた頃を見計らって口に含む
へんに水っぽく 歯応えのない弾力に
やはりか やはりねと
心の中で呟き
それぞれ黙りこくったまま
喪われた風味の中に

微かな香りの痕跡をまさぐり
たわわに実っていた季節の
空の色を思い浮かべる

一度きりのこともあれば
はっきりしない小さなピークが
何度かくることもある
みじかい愛のさかり
石刃いる？
奥歯で割れたからいらない、
肉刺つかう？
爪でほじれそうだから大丈夫、と
ぼくらは今日も愛を割って中身を舌でたしかめ
海に薄もやがはる明け方の段丘に
愛の皮と種とを捨てて来る
斜面に散らばる無数の白変した愛の
ふつう食べられない部分がはなつ
簡牘に似た硬い臭いに
息をとめ駆け戻る

とうとう愛にも事欠く季節がきて
この場所から皆　仕方なく愛の残渣を漁る
それぞれに人目を気にして
捨てにきた時と同じざるに
いったん棄てた砂混じりの愛を持ち帰ると
蒸し直して
食べられるところだけを食べる

◆小川　流　　神奈川県

吹雪

なぜ　老婆　という言葉があるのだろう
婆　というだけで　老いた女だ

老いた女が老いきわめ　老婆になるのか
老いた猫が老いきわめ　猫又になるごとく

電話に出ない兄が心配で
母は　家まで行った　としゃべる

タクシーを呼んで　ひと走り

息子の顔が見たい　見たい

ぐるぐる　ぐるぐる
曲がるのはどこだっけ
あれ　ここはどこかしら

住宅街は吹雪で　視界が白くて
何もかも　老婆の目には覚えがない

お母さん　もうわからなくなっちゃって
運転手さんがね　親切な人で何度も回ってくれたんだけど

雪のせいね　景色がね　よく見えないの
たどり着けなくて　うちに帰ってきちゃったの

お母さん　ひゃくとうばんしたでしょう

さっきね、警察から連絡あったよ
お兄ちゃん　生きてるから
電話に出ないだけだから

回ってくれた運転手さんは
生者か　亡者か　幻か

受話器から　雪の匂いを嗅ぎながら
長女は　夕闇に息を吐く

生涯　妊らなかった娘に
母の物狂いは　得も知れず

婆を　老婆にするのは　哀しみか

北の住宅街に雪が舞う
この横浜に　春一番が吹く夕に

札幌のジャッカル

ペ

深夜　ホテルの部屋を出て
コンビニでミルクティーを買う
今朝　初雪が降った街の空気は　頭痛がするほど冷たくて

ビジネスホテルの午前二時
ペットボトルに口をつければ
ぬるい甘さに解けていく　介護の徒労感
ぬくまってきた脳ミソが　ぼやぼやほわほわ
徒労てふコトバと戯れだす

今夜の漁は丸坊主で　海から凍てた道を戻り
古い上着を脱いで腰を下せば
連れ合いがティーポットから熱々の紅茶を注いで持ってくる
こんな夜は　明日の運をつかむための日だよ
無言で　そうなだめてくれる

そんな北の島を空想して横になる

羽田から新千歳へ月イチの援助通い
アンタの世話になんかならない
啖呵をきって移住したのは三十年前だったか
深夜のぬるいミルクティー
頼るあてなく呼びたてる老母の無残を
なんとか消して　眠るために

遠くで　ジャッカルが鳴いた
風を嗅ぎ　裸足だった草原の人類
狩りなんて　獲れたり　獲れなかったり

頑張っても　いいね！も　なくて大丈夫
工場生産の甘味飲料で　弦を緩めて眠る
緩めて　ゆるめて

おやすみ　エストロゲン

赤ちゃん　できなかった？
残念だったね

開口一番　そう言われて
わたしはきっと　不審な顔をしたんだろう
お医者さんは　そうでもない、か　と言葉を閉じた

予感はあったのだ
婦人科を併記してない　産婦人科の看板に
居づらさを感じるかもしれないと
紹介状を書いてくれた内科の女医さんは
いい先生　ベテランよ　と太鼓判を押してくれたのだけれど

いつにない腹痛で
婦人科系の病気が気懸りで
診察室に座ったら
どうしました？　より先に言われた何気ない言葉
妊娠・出産の有無を問う問診票は
病気考察の資料だと思っていたのに

夫の健康保険加入
妊娠経験０回
産婦人科医には　存在意義のない初老の女
それが　わたし
母にとって　母である　という自信が
揺るぎなく偉大だったのとは真逆に

子どもを生まないオンナは　人間失格
ふたりは生むのが　国民の義務
般若の顔で怒鳴る母に
布団の中で震えながら　たったひと言
そんなん言うなら　離婚する
そう呟くしかできなかった二十五年前
認知症になって　不安がる母に
どれだけ笑ってもらえるか　どれだけ安心してもらえるか
悩みながら過ごす毎日に　腹痛が走る

赤ちゃんを　子どもを　欲しいと思ったことはなかった
夫さえ　欲しくなかった

実家を出て　働いて　ただ　平和に過ごしたかった
家族という名の支配は　こりごりで
結婚したのは　たまたま　穏やかに食卓を囲める人と同居したから

見つかった子宮筋腫は小さくて　問題ないと告げられた
閉経してるから　気にしなくていい

父の血も　母の血も　この世に繋ぎたくなかった
ねえ　先生　そんな風に育って初老になったんです

国家の子でなく　自然の児
生んだ母よりも　授けてくれた産土を頼りに
赤ちゃんから女の子になり　娘から年増女になり
友や仲間や恋人を愛しながら　生きてきたんです
そんなことは　問診票に問われないけれど
母にならなくても　護ってくれた女性ホルモンにサンクス！

未妊（みもごらず）

平日　平和なスポーツクラブ
風呂場で行きかう　女たちの裸体
さまざまな　かたち
娘の　年増の　老婆の　はだか

なみなみとはられた湯に
この世に半世紀在りつづけた躰をはなてば
うちにひとつ
臓ではなく　宮と名宣る器官を包む円かな腹が
膨らんだり　しぼんだり

月に一度　赤い袴でやってきた
巫女の訪れも間遠になり
神の訪れのないままに
ひそやかに　参道は消え　やがて
閉じられた社に　日月の影がさすばかり

湯に深々と躰をしずめ

私はそっと　頭を垂れる
毎月　神を待つ準備を粛々と続けた律儀な宮に
ねぎらいの言葉をさがしながら

シャワーの湯気　洗面器の音
さまざまな女たちの　裸　はだか　ハダカ

★田村全子　　静岡県

ろくがつ

薫風の日々が立ち去ると
青空をふさぐ雲がやってくる
六月の朝は
少し湿り気のある風が主役だ
落ち着きはらった大気に
時間が身を委ねる

もうすぐ来る梅雨と
その後を待ち構えている猛暑が
嘘のような季節の窪みで
わたしは
わたしが授かった固有名詞を考える
わたしは
わたしである不思議の壁に立ち止まる
わたしは
肉体をなくしたら記憶も消えて
六月の空を　浮遊するだろうか
無重力の無色の無限の
何か　になって

はいいろの空の下で
世界がひと休みをしている
梢の緑がさわさわすると
遠い思い出が起き上がって
六月の朝のために
一年があるような気がしてくるのだ

それは追憶ではない

悲しみは累々と脈打っていた
と　わかったのは
雨が止んだ明け方に
見ていた夢のせいだ
すっかり十七歳に戻っていた

家出を繰り返す母親に
五歳の弟は神経質になっていた
ある朝　二人とも消えていた
小学校の入学式が近づいても
行方は知れなかった
当てのない人探しに歩き回った日々
焦燥と徒労の日々
どこかにいる　という望みは
どこにもいない　という絶望だった

歳月は空洞を埋められない
心を引き裂いた母が逝き
弟が初老になっても

傷はまだ乾いていないのだ
小走りで立ち去るふたりの
凸凹の後ろ姿が見える
見たわけではないが　見える

昔のことでも水に流せない
今も生傷のような痛みは
喪失への慟哭なのだ
許せなくてもいいのだ
と　思うことがある
そのために忘れないのも
愛かもしれない

◆山村幽星

幻住の記

河原にて

三密を避けるには、巷へ出かけさえしなければ回避できそうだ。広闊な場所へ出るなら、河原へ出るにかぎる。考えることは同じようで、町中をすぎ川の土手へ来ると、

ジョギングする人の姿が目立つ。サイクリングで行き交う者も少なくない。それでも三密からはほど遠い。

橋を渡りに土手に出て河川敷に降りる。草原のなかに小径ができ、護岸された岸辺に出る。草原では、あちこちに青い花房をつけたクサフジが咲いている。目の下、向うの流れから磧で隔てられ水の入りこんだところを見下ろす。川底がそこそこ透けて見える。

そばで護岸の端に座って話をする若者二人がいる。異常事態での仕事のことについて話しているらしい。彼等にすれば、不安な状況に置かれていることだろう。普段からぶらぶらしている者からすれば、大変な世の中であることをそっと思いやるしかない。

上流のほうの磧を見ると、日盛りのなか親子ずれがぽつりぽつりと出ている。河川敷の小径へ戻り、上流へ向かうと、思った通り草地のなかに分け入る細々とした径がある。護岸にたどり着きそこを降り、水溜りを飛び越え磧に下り立つ。ゴロゴロした河原石の上を歩いていく。

岸を離れ磧のただなかに立つと、平坦に白々と磧が広がり、頭上には青空が開いて、茫漠とした場に出たことを実感する。遠くに高いビルがいくつか見えるのと、対岸の土手を超えて高い集合住宅がのぞくくらいで、近くの民家他は土手に遮られ、周りに街が広がっていることを忘れさせる。磧のさきに流れがある。

磧に大きな流木が横たわっている。去年の洪水の名残りのようだ。近づいてみると、立派な茶褐色の流木である。表皮は剥がされ、一部、表層が風化しているものの、径六、七〇㎝はありそうな五、六ｍほどの幹がしっかり原形を留めて横たわっている。腰かけるのにちょうどいい。

水辺に入って歩く子どもが見える。この天気だから、心地よいことだろう。本来なら学校へいっているところだろう。上流の方へ目を向けると、日差しを受けて川面が煌めいている。コロナの感染が起きているのは分っている。しかし、こうしているかぎり、コロナ禍とは無縁のようなものだ。空と川、そこに挟まれたちっぽけな存在となって、人の営みなど忘れてしまう。

振返って見渡すと、川岸にも土手の斜面にも流木が見られる。しかし、そちらのほうは枝が残り緑の葉をつけ

ているようだ。そっちの流木を確かめてみたくなって向かって行く。傍でみると、柳の大木が根こそぎになり、ねっこの塊りが土を抱え込んだまま、横倒しに流れついている。縦横にはびこった毛根に土が保持されていて、これなら倒れてもなお生命を維持して、枝に葉をつけるわけだ。太い枝がタコ足のように伸びている。見ようによっては異様な怪物の残骸が流れついたかのようである。異様な生命力に驚かされる。

異常な世の中となって、普段からそこにあった異世界に逃げこんできたかのようだ。

真夏の夜の踊り

コロナ禍の梅雨は、晴れ間もなくしっかり降りつづけ、雨のあがったのを待ってのように、なんの前触れもなく花火が上がった。音に気付いてすぐにベランダへ飛び出した。密を避けるため、予告せずに、悪疫退散を願い花火を上げるとの知らせのあったのを思いだした。多少、雲がかかって花火の全貌が見えなかったものの、生きのいい爆音とともにゆるゆる空に上がったところで、菊花のように火花を散らし、あるいは大きな傘を広げるように火の粉を枝垂れさせるように降り注ぐ。短時間に終わったとはいえ、コロナなど吹き飛ばしてくれろという感じだった。

感染者数が減少していき異常事態宣言は解除になったが、しばらくすると夜の街で感染者が続出する事態になり、コロナ禍のリスクから容易には逃れられない状況が認識されるようになった。イベントは軒並みに中止となった。

日が暮れて丘陵から流れでてきた川にそって歩いてきたとき、丘寄りの駅から出てくる通りと合流するところへきた。駅のほうへつづく通りを見通すと、こんなときだからなのか人通りも絶え、わずかに車が通るだけで、変哲もない道が伸びているのが目についた。

去年はここで各連によって、思い思いの**阿波踊り**が繰出したのだった。三味線に笛、太鼓、鉦のお囃子にのって、浴衣にピンクの裾よけ、編み笠に下駄をはいて、あ

でやかな身振りで女踊りがくりだす。そのあとに高張提灯を掲げ、法被に手拭い鉢巻き、提灯を手にした男踊りがやってきた。

それが、今は賑やかな囃子もなければ、色鮮やかな衣装でリズミカルに踊る一団もなし。そんなことのあったのが、嘘のように道はひっそりとしている。駅への通りが、すっかりさびれてしまったかのようだ。

バラ苑の影

西の空に水平に延びた雲が、上下に別れてかかった間に空が覗き、今しも日は上の雲にかかっている。夕方が近づきつつあり、日は下がってくるから、いずれ雲に挟まれた隙間に顔を覗かせることだろう。そのとき、ここバラ苑の花々は日差しを浴びて、生き返るのではないか。今は色彩が一様に沈みがちで、日差しを受けると、パッと鮮やかさを取り戻すだろう。

そのときを待って花壇をぐるぐるめぐっていた。そのうち明るさに変化が出てきて、とうとう日が差してきた。**ユーロピアーナ**の赤い花が、火がついたように一斉に、鮮やかになった。**ジュビレ・デュ・プリンス・ドゥ・モナコ**の赤から中の白い花の色付が際立つ。ダイダイ系の柔らかな色合いが、明るさを増して目を引く**プリンセス・ミチコ**。確かに、状況は変わったようだ。花壇が日差しとともにいきづく世界が、そこにある。

足元に目を移すと、佇立した影が、異物のようにひっそり伸びて花壇にかかっていた。

バニラスカイ（同題の映画より）

バニラスカイってどんな空、
混濁して薄汚れた空か。
かくして空が閉ざされ、日を望めなくなった日、
何かが変わってしまった世界。

互いに齟齬を生じた愛人同士、車に乗っていて、運転する女が車ごと宙にダイブ。
男は目覚めてオートバイに跨ると、通りに出るが、
人はまだ起き出さないのか、街はひっそり静まりかえっている。

車も来ないし、人影もなく、無人の街へ来たかのようだ。
タイムズスクウェアに来ても、ガランとして人気がない。そんなバカな、
オートバイを急旋回させて止める。これは現実なのか。
ほんとうに現実になった。コロナ禍が垂れこめ、タイムズスクウェアからも、
シャンゼリゼ通りからも人影は消えてしまった。
納骨堂に代わって、納霊所がいつのまにかできたらしい。
そこに納められた霊はなにを夢見るのか。
生きているのか、死んでいるのか。夢か現実か。
「世界は変容しています。ご心配はいりません。永劫が約束されています」
混乱、混線し何かがおかしい。これは現実なのか。
仮想現実というやつか、オレはどこにいるんだ。
「逃げることはありません」冷たく事務的な声。
ヤツらの手に落ちるもんか。元の生活に戻るんだ。
逃げろ、追ってがやってくる、上にいくんだ、上へ上へ
やれ、屋上に出てしまった、まだ追ってくる。
これが現実かどうか確かめる方法がある。
ここからダイブすれば、全てが明らかになる。
男は落下していく、風をきって落ちていく、落ちていく、
……現実には届かない、……

オー・シャンゼリゼ

オー・シャンゼリゼ、オー・シャンゼリゼ
晴れても、雨でも、昼でも、夜でも、
オレたちは行くのさ、シャンゼリゼ
オー～、シャン～ゼ～リゼ～、オー～～シャ～～ン～～ゼ～～
「外出禁止令がでています。不要不急の外出はズ、ズ、ズ……」

な～～にい～～てるん～～だ～、な～～んだ～～て～、

こりゃ～～、おか～～し～～

オ～レ～た～ち～の～、シャ～ン～ゼリ～ゼ～

コロナ、コロナ

コロナは収まることをしらず、感染の波が来ては収まり、またの繰り返しで、

年が明け、漸くワクチン接種が始まっても、

さらに大きな波がやってきた。

世間では不安が煽られる。

ワクチンの効果は出ないはずがない、

それを待つんだ。

気晴らしを見つけ、大人しくして、やりすごす……。

丘の上の寺

コロナ禍で結局、都心へ出るどころか、電車、バスにも乗らずに過ごす。最近は遠出をするのも億劫になり、花見も近場、それも一人花見、日々、蝸牛がのこす軌跡のように近所へ散歩を重ねる。

木々の中に小径の通る公園に入る。春を迎え、木々が緑を広げていく。日差しがあれば、見上げる緑が明らむほどになる。常緑に柔らかな緑。緑の天蓋の下、径に佇みきた方を振り返ると、木々の枝を差し交す上に青空が見える。

丘陵に上がり尾根伝いの突端にあるお寺へでかける。尾根に沿って残る緑地では鶯が鳴く。緑地のそばをすぎて、丘にはい上がってきた家々の間から、向こうを見ると、見渡すかぎり住宅が犇めいている。一旦、尾根から下り、林のなかを切り開いた道を過ぎ、石段を上り、丘のてっぺんのお寺に出る。

ここは遮るものなく、日当たり良好、冬でも日差しでぽかぽかして温かい。住職の話によると、消防の関係で池が造られたということだが、くびれた池の一方には鯉が、もう一方は蓮池になっている。いかにも池らしい。季節とともに蓮が育っていつの間にか葉を群がらせ、そ

のなかで夏に花が咲く。
白亜の仏舎利塔がある。そこに上がって周囲を廻ると、やがて景色が開け、今しもすぐそばまで造成が行われている向こうに街が広がり、目路の果てに遠山の青い連なりが見られる。
ここはひょっとして、天空の、……

ファイブセンスィスガーデン（五感の庭）

住んでるのは、都会のベッドタウンとして住宅化の進んだところ。周りの丘陵地には緑地が取り残されたようにあって、新緑の頃には緑のグラデーションが美しい。
少し離れた丘陵地も宅地化されたところはご同様、丘を上ったマンション群のなかにこじゃれた公園がある。ファイブセンスィスガーデン（五感の庭）と称して、住人が花壇を整備している。
ハーブを寄せ植えしたところに日時計がある。影の指す時間を読取るが、明らかにずれている。盤上にある月日に応じた補正グラフで補正しても合わない。見れば時計の指針がぐらついている。これを垂直に立てて読取りなおすと、ほぼ正確な時刻になった。別に時刻を読取る必要もないが、庭は太陽に照らしだされ、日時計の盤を影が移っていく。
モッコウバラをはわせてドームになった東屋がある。
ピンクの匂いのいいバラを絡ませた枠を中に、ベンチで囲っている。
井泉を象り、六角の石縁から滑らかに水が溢れ出て伝い流れ、溝をつたい、径を潜って、ライトブラウンの石でかこった半円の池に注ぐ。水音が単調になり続ける。
花壇を縫うように、灌木に沿って小径が別れつづいていく。
向こうの土手の上に、クリーム色の配水塔が見える。マンションの棟に挟まれ、青空が開ける。
春先には白い葉牡丹が透き通るような葉を開かせていた。
キンギョソウが、赤、ダイダイ、黄のベルベットのような花を咲かせる。
モッコウバラが咲く。
ザイフリボクが、ジューシーな赤い実を熟れさせる。

薄紫のふんわりした花を咲かせる西洋フジバカマ。
……
ここでは何事もないかのように季節がめぐっていく、
本来の時間が流れる。
さあ、また花壇をめぐってこよう……

海へ

海へ来た。
砂丘の林をすぎるとき、松の香りがした。
林をぬけ、灼熱の砂浜をサンダルで進んでゆく。裸足では暑くて歩けないだろう。
飴色の砂浜に浪が砕けて打寄せ、
舐めるように広がり引いていき、濡れた跡を残す。
潮騒に合わせた単調な繰返し、
海とただ向かい合っていよう。
海水は澄んで砂底が見える。
向うに波消しブロックが積み上げ横たえられている。
長く伸びた突堤の先に小さな塔がポツネンと置かれている。
その向こうを船が通る。
水平線が伸びる。
砂丘の向うに、純白のもくもくした入道雲が上がっている。
ここには夏がそろっている。
強い日差しといえ、夏には欠かせない。

水平線の眺め

早朝に丘へ上がった。
丘の斜面が一面、芝生になっていて、
滑かな傾斜具合が、地形の姿を見せる。
丘の下からは、町の建物が犇めくように広がっている。
その向こうに、地球の丸いことを実感させるように、
冷たそうな海が盛上り、
一線、水平線が空との間を画する。
そこから青空が立ちあがり、頭上を超えて広がる。
目を漂わせ、爽やかな朝を満喫する。
すでに町では車がせわしなく行きかっていることだろ

うが、
ここからは目につかない、静止画の眺めなのだ。

ウィズ・コロナ

気がついたら、コロナ禍でも、
交通機関は使わずとも、八方に足を延し、
なんのことはない、年相応に暮らしていたようなものだった。
ポストコロナ、
このままで、騒ぎの自然消滅を待つのだろう、
いつの間にか、変わっていくのだろう。

◆夢沢那智　鹿児島県

戦争はお腹が空く

私の母は戦争を知っている
当時はまだ幼かったけれど
戦争の色も音も臭いも憶えている
空襲が下町を焼き尽くす炎の色
人々の悲鳴や鳴り響くサイレンの音
たくさんの人が焼けるときの臭い
そんな母は「戦争はお腹が空く」と言う
だから今も好物から先にせかせか食べる

食事の途中に空襲で逃げたら
防空壕の中で後悔するからね
そのうち子どもたちだけで
田舎に疎開させられたけど
そこでもぐずぐずしていると
上級生に食べ物を取られちゃうのよ
だから大好きなものから
早く食べなきゃって思うのよ

私が子どもの頃から
何度も聞かされた言葉
戦時中は食べられなかった
大好きな甘い卵焼きを
幸せそうに頬張りながら
何度も見せた心の傷痕

それが母から私への教訓

お母さん、戦争は終わりました
もう空襲はありません
横取りする子もいません
それでもあなたの食べ方は
変わることがないのですね

「おばあちゃんは食いしん坊だなあ」

何も知らない孫の無邪気な言葉に
母はにっこりと笑いながら
今日も甘い卵焼きを最初に食べる
危うい平和の中でせかせか食べる

◆疾風向　　長崎県

ラズベリーアイス

ささやかなしあわせ

あまりにもたくさんのことに追われすぎていつしか笑えなくなっていた。下を見て歩いていると、強く根を張って野に咲く一輪の花が目に入った。枯れきっていた目から涙が、不覚にもこぼれた。

タイムスリップ

息を吸うのが苦しくなって思わずに外に出た。歩くとオールドファッションな、雑踏の中そこだけ過去からずっと時が止まっているかのような、静かな店があった。私は思わず立ちどまり、次の瞬間には過去にいた。

公園

たまたまあの日は誰もいなかった。ひとり空を眺め、大きくため息をついた。

傷

つらかった思い出を忘れない。理不尽だらけだったことも絶対に忘れない。多くの人はいつか笑えるだろうと言う。私はごまかさない、その痛みを忘れない。後になっても、笑わない。

餞
何かを得たくても、失いたくないものは手放さずに前に進め。

ミニチュア
目に見える世界が小さく見えるようになった。景色が止まっているように、息をしていないように、たしかにそう見えた。

ともだち
失うべくして失った。心を開ききれず、伝えることをおろそかにした、そして勝手に拒絶した。

愛
愛はすべての根源だって気付いた時にはもう遅すぎて。

生
生きるためには人が人を滅ぼす要素をなくす必要がある。幸せなことばかりに目を向けていてはいつまでたっても根本が変わりえない。どんな言葉を選んでも、必ず誰かを傷つけ、最悪の場合には憎悪さえ生じさせてしまうだろう。それでも、真っ直ぐ生きなければならないある種の非情さがこの世には存在する。

本気の涙
嘘の涙は、自分も人も欺く。本気の涙は、自分を強くする。本気の涙であれば、何度流しても構わない。生き急ぐな。道は必ず創り出せる。

雨
余裕のある時の雨なら風情を感じることも可能だ。しかし、余裕のない時の雨は私の心をよりみじめなものにする。雨に罪はない、ただなぜかそんな気持ちに駆られてしまう。

未来
今より先はいつだって不透明だ。それに対する不安を拭

うのは過去でもなく、未来でもない。人にはどうしたって何かを頑張らなければならない時が来る。それは誰にもどうにもできない。自身の力で成し遂げなければならないのだ。非情ではあるが、だからこそ現実であり、それが未来になる。

幸福を呼ぶ猫

三層のパイ生地に乗ったイチゴとラズベリーの上に乗った猫。これが幸福を呼ばずして何が幸福を呼ぶ。

トレードオフ

言葉が完全ではないこともある。言い方の問題だ、そんなのはよくあること。

ありがとう

傷つく準備をしていたけれど、優しくしてくれた。きっと私に希望をくれた。心は少し傷んだ。

失われた彩

目が見えるということ。それはいつまで続くだろう。辺り一面何もない、彩もない、誰もいない、足もつかない、実態もない、生の心地もしない。どこかに脳だけ残ったのだろう、きっとそれが私。

記憶

記憶は薄れる。どれだけ忘れないと誓っても、忘れないことはできても、時間が経つと薄れてしまうことは否めない。それでも、忘れない。忘れてはいけない。

憎しみ

憎しみは憎しみしか生まない。でも憎しみをネガティブな復讐に変えてはいけない。歪んだら、負けだ。絶対にそこだけは負けるな。

抗い

生きる意味がないと人は言う。そんなことはない。死への抵抗が最後の生きるすべだ。汚い大人や社会に負けてはいけない。まだ、生きなければならない。どうしても

私は。

大丈夫

ただ言ってほしかった。それでいい、そのままでいい、十分すぎるくらいだ、と。大丈夫だ、と。うまくいく、と。そして、隣にいてほしかった。

竹になりたい

竹はいつでも真っ直ぐだ、嫌気がさすほどに。

共存

人が共存するには干渉しないことが大切なんて虚しすぎるともいえない。

笑えない

笑えないし、笑わない。これが信念なのかもしれない。

甘えと依存

自分で決める。難しくても自分で決める。

雨のち雨

雨には雨の理由がある。晴れにも晴れの理由がある。望むだけでは晴れない。

摂理

抗えないことには抗わない。それが心を休める方法だ。抗うことには抗う。これはあなたの力だ。

強さ

花は力強く咲いている。でもそれはだれかの手によってなのかもしれない。人もそうなのだと思う。何度でもやり直せる。温かさと無機質さは表裏一体だ。

春

春の風を待てるほど強くない。春がすべての正義ではない。

一寸先は闇

しあわせにさよならをした。もうあの頃の自分はいない。

空

空は無限の広がりを見せてくれるがその奥は見えない。
果てしなく、遠い。

始まりと終わり

いっそすべて失う。

月見

君も月を見ている。サガリバナを訪ねて三千里。

時間

過ぎたこと今あること未来になるもの。

理由

晴れがあるから雨が好き。

真心

真心は人の心を動かす。

耐える

どこまで行っても終わりがない。それでも耐え抜く。

凍てついた心

愛される人はいいなあ、自分を愛せる人はいいなあ、他人を愛せる人は言いなあ。

希望

生きる理由は未来に残されているであろう希望を信じること。信じる力を失った時、私の命は尽きる。

境界線

幸せと不幸の境界線って何だと思う？

存在

今何時だろう、今何月だろう、私はどこにいるんだろう。
私は、誰だろう。

パラレルワールド
ひとり違う世界線で彷徨ったまま。ここは、どこだ？

消えるもの
記憶はいつか消える？記憶を失うのが怖い。過去は美化したくない。都合よく塗り替えるな。いろいろあったことの何が残ったのかを教えて。

自酔
自分に酔えたら勝ち。

ぶらり旅
ゆらゆらゆられ。

モノクロ
本当と嘘が逆転した世界。

音色
時計のない心。

皮肉
物事の本質は表には表れない。絶望の渦の中に入らなければ気付けない痛みがある。

光
いつぞやの闇。無に帰したあの日。ナチュラルを失っていたもう取り戻せない希望。

きっと明日もいい天気
これは私の願い。でも私だから大丈夫。私を応援してくれる人がいるうちは、きっと私は大丈夫。

人生
統一感なんていらない。生きるうえで文脈も伏線もいらない。ハードワークな人生。一縷の望みを掴んでいく人生。まだ、生きる意味を知らない。

◆加納〆　三重県

いきることがつらいのだ

いきをするのが、めんどうなのだ
まばたきをするたびに
かなしみはふえ
こえをのみこみ
えがおをかぶる

ぼくはぼくをうしなっていて
ぼくはだれともあいたくないが
ひとことたりとも
そんなことはいわないのだ

ぼくはぼくをきらっているが
それをしんちょうにふわけする
それをしんちょうにつつみこみ
こころのおくそこへしまいこんで

なんのかちもないにんげんのまま
なんのかちもないわらいを
なんのかちもないかいわで

なにもないのだ
いきるりゆうも
いきるきぼうも
こたえもきたいもそんげんも

ぼうっきれがいっぽんこころをささえていて
いつかいったことばをおもいだしている
あなたをあいするために
ぼくはつよくなるのだと

それはまどがらすをつたうあまつぶ
それはゆきやまのかぜ
それはだだっぴろいうみのそこ

ひとりだった、どうしようもなくひとりだった
あなたはむかしにしかいなかった

いまをいきるひとと
ぼくのたいおんはいつだっていつだって
うまく噛まずにいきができない

いつだってもとめてきた
ぬくいおもい
やさしいことば
あふれるさけび
だれかとわかちあえるもの
わたしとともにいきるいのち

ただあいすることができるなら
いつかわたしをあいせるきがして
ただぼくをあいせないなら
きっとだれもあいせないのに

あおいくさむら
あおくつきぬけたそら
あおいかんじょう

あおいかんけい
つかみそこねたてのひら

ぼくができたあらゆること
ぼくがいけたあらゆるところ
ぼくがすべきだったこと
あらゆるかんじょう
あらゆるこうかい
あらゆるかなしみ
あらゆる
あらゆる

ぼくのしたいすこしのこと
ぼくののぞむわずかなこと
ただ息をすること
ただ生きること
鮮やかに生き抜くこと
吹き抜ける風のように

蝉のなく黒い影と
じりじりと照らす太陽
流れ続ける川の水
打ちつける波、躍り狂う大海
まだ聞かぬ滝の轟音
おそいかかる水飛沫
雪の立てる囁き
命を拒絶する地球の叫び
大木の呼吸、マグマの灼熱
焼けつくような砂嵐

ぼくのおもいつかぬ宇宙のすべて
ぼくの生きられぬ時間のすべて
ただそこにいるということ
ただそこにいられるということ
歓びをいだくということ

ぼくがくるおしくもとめるなにか
ぼくをいかしてくれるなにか
ぼくがいきるためのゆうき
あなたとのことば
あなたとかわすことば

◆藤岡善信　東京都

東京破片

インスタグラムに載せたいものがなにもない
Twitterに呟きたい事がなにもない
どうせくだらないことばかりが
溢れているだろうって蓋をしたら
なんだか世間から爪弾きみたいにかんじたよ

youtubeにでて何を話せばいいの
伝えたい事が何もないけど、
みんな稼ぎたいから頑張ってるけど
どうせくだら無いことばかりで
溢れているだろうってみなければ
なんだか一人ボッちに浮いてしまったんだ

だれとも話しが合わなくて
本の中に隠れてみたよ
だれとも心かよわなくて
世間の外に隠れたくて

生活保護もらえたら
戦わなくてよくなるの？
だれにもばれなければ
ドロップアウトも悪く無い

だけど誰かを愛したら
うしろめたさはなくしたい
弱くて情けない自分でも
正直に生きていきたい

東京破片はどんなにか美しいのか
いくつもの光が当たって輝いている

◆安田義明　　京都府

老婆

「まっとう　ごめんなさい」
江戸小紋を着た老婆はそう言って前を通りすぎた
築地本願寺の交差点で

会社員は交差点に立ち尽くして
通りすぎた老婆の言葉に魂との出会いをしたと
こころがふるえるのを覚えた

「まっとう　ごめんなさい」
なんどもこの言葉をつぶやく
老婆の言葉は言霊のように去っていった
なんども　なんどもつぶやく
「まっとう　ごめんなさい」
築地本願寺の交差点で
会社員は
雑踏の中に消えた老婆の背を追った
なんてロックなんだろうと

深夜会議

会社員は深夜会議を終えてビルの階段を下りる
雨の降る道に出ると
タクシーを探してビルに沿って歩く
イルミネーションの消えた「三越」の前でタクシーを止める
会社員を乗せたタクシーは走る
やがて本郷台地にのぼると
暗闇の路に街の灯りが落ちてにじんでいる
車が雨を踏みしだき走る音が聞こえた
ワイパーが雨をぬぐうと街の灯りもながれ落ちた
ふくらんだ紙袋のように会社員の心はからっぽだった
前を走る赤いテールランプがにじんで見えていた
菊坂を過ぎた
菊坂を下ったところに命がけで執筆する樋口一葉がいることを
会社員はふと思い浮かべる
ワイパーが雨をぬぐっていた

代官山

代官山の駅前で待ち合わせした二人は
駅前のカフェに入り話をした
桜の花と憂鬱について
男と女について
暮らしの事情はそれぞれの胸の内にして
人の悪口をいっぱいして
花びらを散らすようにして
店を出るとまだ陽ざしがあって
二人は代官山のバス停のある道で別れた
会社員は坂を渋谷へ下り
女は道を渡り恵比須へ下った

神田駅

赤坂で二九度を越しているとラジオが言っていた
朝、シャワーの水が浴室の壁をつたい落ちていく
神田駅に向かう電車の車内でアナウンスがあった
御徒町駅でケンカがあって電車が遅れていると

窓を見ていた若い女が体調を崩ししゃがみこむ
止まったままの車窓に
夏草と谷中霊園の十字架の墓石がみえていた

会社員は止まった電車の中で遠い記憶を巡りはじめる
窓に見る青い夏草の名を思い出そうとして

手紙

手紙が届いた
「朝からつめたい雨です。頭痛で気がふさいでいます」

夕暮、外出
東京駅の上り下りの電車をながめながらコーヒーを飲む
コーヒーショップのガラス窓に街の灯りが映っている
会社員はカフェを出て駅広場で音楽ライブに足をとめた
百合の花のような腰の細い女が歌っていた
壁にゲルニカの絵があった

帰宅して会社員は手紙の返事を書くのだった

いつか友達以上恋人未満と言った相手だった

湯島天神

会社員と女は共に大阪から赴任してきた仲だった
会社員は言った
「もう会えないね」
思い出にと訪れた湯島天神にはイチョウの実が落ちていた
「イチョウの実、臭いますね」
と女は言って笑みを浮かべた
門前の「鳥つね」で親子丼を食べた
「二年で大阪に帰る約束だったんです」
「人事部は聞いてないって言ってたよ」
女は退職を決めていると言った
「大阪で働きます」
女はそれっきり事情を話さなかった
会社員と女は湯島天神から坂を下った

それが一年前だった

思い出すと置いてけぼりにされたような気になった
湯島天神でイチョウの実を一つ二つ拾った会社員は
おいてけぼりの思いを抱いてゆっくり坂を下った

美容室

雨の中を走るタクシーの窓から
雨の聖橋をみる
会社員は去って行った人をぼんやり思った
冷たい雨の中に思った
「会いたい」
車のワイパーが窓の雨をぬぐっても
こころはぬぐえないでいた
雨に歪む街が流れゆく
「本郷通りをまっすぐでいいですか」
タクシー運転手が独り言のように言った
雨を踏みしだく車の音が耳にもどってきた
会いたい人は消えた
会社員は「次の信号を右へ」と言った

休日の朝
郵便配達のバイクが走り去っていく音がして
会社員は目覚めた
午前に街へ出かけた
隅田川を自転車でわたり　美容室で髪をカットした
帰りがけ、橋の上で富士の山をみた
巨大な銀紙をかぶせたようだった
商店街で籠に盛られたミカンを買うと
会社員はふたたび妄想の道に入るのだった
ゆるゆると冬の青空の下へ

◆藤原有紗　　京都府

「『雪』のとき　〜〃ゆふ〃のものがたり〜」

ちらりら。ちらりら。
あたり一面の白景色。
白銀の世界が顕われる。

ゆきんこ雪虫は、青白いひかりをもち、
ひらひら　ゆらゆら　舞いながら、

その訪れを初冬のころに予感させ。

〝ゆふ〟はいつも待っている。
寒く冷たいそのときは、生命のいのちをつなぐとき。
白銀のしたにあるそのいのち、そらのうえにあるそのいのち、澄んだ空気につつまれた、
人間いのちのそのはざま。あおく、しろい、その流れ、
〝ゆふ〟はそこに生きている。

いのちといのちの生きる場に、
〝ゆふ〟は大きく息をする。
〝ゆふ〟は深く息をする。

今年もおもての世界には、白の精が舞っている。
生命は静かに身をひそめ、
おのおの安住の地へむかう。

〝ゆふ〟はいつも遊ぶのです。
白の精と、ちらりら、ちらりら、ほほえみながら、
いのちのこだまを響かせあって、
たしかな鼓動を感じてみては、
〝ゆふ〟はきらきら輝きます。

そして〝ゆふ〟は息をして、
いのちのそこから息をして、
あおと、しろのその流れ、
エネルギーの清澄な、
リズムをいのちにふきこむの。

〝ゆふ〟のしごとは、その流れ、その流れをつなぐこと。
あちらとこちらをつなぐこと。
〝ゆふ〟は、いつでも待っている。
白銀の世界のそのときに、
いのちをつなぐそのときに、
いっぱいのエネルギーを輝きだして、
つぎのよろこびの季節へと、
いのちのたねをまくのです。

〝ゆふ〟ははざまの世界のひかり、
〝ゆふ〟はあわいの世界のかげ、
〝ゆふ〟はいつもほほえみかけて、
ちらりら、ちらりら舞いながら、
ゆっくり息をするのです。

〝ゆふ〟はじゆう（自由）、〝ゆふ〟はあい（愛）、
いつもいつもそこに生き、
くるもの導き、昇華させ、
ひかりのかがやきへと還すのです。

〝ゆふ〟はおくりだすもの、
〝ゆふ〟はかえすもの、
そのおしごとは〝ゆふ〟のたましいそのものです。

いつもたのしくわらってて、
ひらひら、ゆらゆらほほえんで。
いつもくるものむかえるの。

白いせかいのそのときは、
おもてのせかいの白銀は、
〝ゆふ〟のいのちをかがやかせ、
しろとあおのその空間、
そこに〝ゆふ〟をいざなうの。

〝ゆふ〟はことしもいざなわれ、
おもてのせかいによばれては、
たねをまきまき、
みずをたす。

〝ゆふ〟のなみだで、そだったたねは、
つぎの〝ゆふ〟をうみだして、
〝ゆふ〟をさがして、はざまにかえる。

いつもたましいかがやいて、
めをひらいてかけだすの。
〝ゆふ〟のめは、ひらいてる。
いつもなんでもみとおすの。

なんでも感じて、観てはなし、
たくさん導き、道をつけ、
〝ゆふ〟のたましいゆらゆらと
あおくしろく儚ぐの。

なみだをながして、そだてては、
ありがと、ありがと、よかったね。
ことしもいろんな〝ゆふ〟が出て、
たくさんいのちをみちびくの。

いきもの、みんないのってる。
〝ゆふ〟のちからをいのってる。
みんなたましいかがやいて。
〝ゆふ〟のいのりを感じるの。
〝ゆふ〟はいのりを感じるの。

こころとからだのそのいのち。
その深淵のそのたましい。
いのりはいつも通じあい、

共鳴しては、ひかりをとばし、
ことたま、つよくこだまして。
〝いのちのわ〟
をつないでく。

〝ゆふ〟はいのちそのもので、
〝ゆふ〟はそのわのなかに
いつも生きてはかえってく。
もとのあわく、やさしい、その母に
その母のぬくもりに、
つつまれ、ほわほわ、かいわして、
ひかりのいのちをそだてるの。

いのりあるところに〝ゆふ〟はいて、
きょうも白の精と遊んでる。
〝ゆふ〟はじゆうとあいの子で、
いつもみんなにつたえてる。

ふかくふかく息をして、

大きく大きくのびのびと、
ひとりひとりのいのちのなかに
そう呼びかけて、〝ゆふ〟はそっとさしだすの。

白の世界がもってくる、
白銀の世界のそのいのち、
そのいのちをつないでは、
おおきなものもちいさなものも、
みんなみんな一緒だよ、
みんなじゅうとあいの子で、
みんな〝ゆふ〟とつながってる。

やさしくつよく生きている、
よわさやくるしさ感じてね、
時にはかげのちからに惹かれ（引かれ）、
逝きたくなるけど、そんなとき、
〝ゆふ〟のささやき感じてね、

なみだのそのなか、おくふかく
こころのなかのかげたちを
〝ゆふ〟のなみだがとかしてる。
いつもいつもいのってる。
〝ゆふ〟はいつもいのってる。

みんながいのちのつながりを
わすれないでいきること、
そのいのちをつつむこと。

まわりのいのちを感じては、
いつもありがと、えがおでね、
くるしくっても、ありがとね。
かなしくっても、ありがとね、
そこにあなたがいることが〝ゆふ〟のいのちのめぐみでね、
あなたのいのちがかがやけば、
〝ゆふ〟はとんではねまわる。

いのちでこきゅうをしてみよう。

〝ゆふ〟はいつもそこにいる。
そこにいるけど待ってるの。
白銀のそのせかいのなかで、
あなたがいのちをとりもどし、
ふたたびせかいでかがやくことを。
そのときを。
〝ゆふ〟はそのため、かがやくの。
あなたのひかりであるために。
あなたのいのちにふれるため、
あなたのいのちをかがやかせ、
ゆっくりゆっくり息をする。

いち、にのさん！
〝ゆふ〟は、きょうもいきをする。
たくさんたくさんいきをして、
いのちのこきゅうかんじるの。
あおとしろのそのながれ、
そのひかりをみいだして、
ちらりら、ちらりら、みちびくの。

〝ゆふ〟は、ことしも白銀の、
しろのせかいのひかりの精と
まじわり、よばれて、遊んでは、
ちらりら、ちらりら還ってく、
あなたのいのちに還ってく、
あわいとはざま、そのいのちのみなもとに
〝ゆふ〟はきょうも還ってく。

そうしてちいさくかがやいて、
ゆきんこたちにしらせるの。
ことしも白の精がくる。
ことしも白のせかいになる。
白銀のペガサスやってきて、
羽をひらひらおくるのです。

そうしてふれた奇跡のかけら、
だいじにだいじにそだてるの。
いつもだいじにそだててね、

たくさんあつめたきせきとともに、
いまをだいじに生きるのです。

それが〝ゆふ〟、じゆうの子。
それは〝ゆふ〟、あいの子。
いつもきらきらかがやいて、
あちらとこちらをいききして、
いのちのながれをみつけては、
つないでつないでかがやかせ、
おおきなうちゅうをひろげるの。

〝ゆふ〟はきょうも息をする。
おおきくふかく、いきをする。
ゆっくりいきをすいこんで、
ゆっくりいきをはきだして、
銀のかけらをたねまきに、
きんのみずいろながすのです。
そうして、そだてたいのちのもとは、
ながれのなかにとけてゆき、

そらの星々とこだまして、
白い精が舞ってくる。

おおきくおおきくいきをして、
いのちのこきゅうをかんじてね、
いのちでこきゅうをしてみるの。
そうしておおきくなったらね、
こんどはせかいのうつくしさ、
感じて生きてかがやいて、
たくさんいのちをつないでく。

あなたも〝ゆふ〟のなかまいり。
あなたも〝ゆふ〟のいのちなの。
ゆっくりゆっくりあるいてね、
白銀のせかいをかんじるの。
澄んだ空気をからだにめぐらせ、
こころにめぐらせ、かんじるの。
ことしもいのちをかんじるの。

いのちでこきゅうをすることは
いのちのこきゅうを感じること。
〝ゆふ〟は今日もまっている。
いまの一瞬(とき)を生きている。
あなたのこころ感じては、
あなたの舞をみいだして。

〝ゆふ〟は、ちらりら、舞っている。
〝ゆふ〟は、ちらりら、待っている。
あなたのかがやき出(いず)るとき、
あなたのいのちのいのりには、
たましいのことたまやどってる。

みんなでいのって待ちましょう。
みんなでいのって舞いましょう。
こころの舞いをおどってね、
かるくゆるく参りましょう。
〝ゆふ〟はいつも生きている。
いのちの鼓動にいきている。

いのちの道をあるいてる。
〝ゆふ〟はそうして還ってく。
もといた場所に、来た場所に、
うまれた場所に還ってく。
それが〝ゆふ〟のものがたり。
〝ゆふ〟のたましいのものがたり。

ちらりら、ちらりら。
ちらりら、ちらりら。

◆淡水　大阪府

なんとかしろよ

乾燥する空気
諳んじる郊外
コンクリートの亀裂
砂埃

思えば
ずっと

個人です
裏打ちされた虚無ですね
所謂
一筆書きの未来です

損ない続けていた日々で
平気な顔して風まかせ
しかしながらこの砂埃でしょ
部屋に閉じ籠りながら見た
あの船旅

歩き易い靴を求めて歩き続けて
もう何年経ったのだろう

赦されたくて
なんとかならないこととか
靴下で踏む
吊られた一日とか

諦観で汚れた壁の
四・五畳にてぼくは夢見た
死ぬ事ではなく
生きる事ではなく
帰り道になりたいと思う事をやり過ごす事を

砂っぽい口の中
何度も唾を吐きながら
背中を丸めて
歩いています
今に繋がる全ての過去を
呪詛しつつまた
歩いています
歩き易い靴を求めて
歩いています
今にみてろと
嘯きながら
涙を流して
歩いています

緊急避難所にも指定されている
無機質な建物に迷わず入るよ
そこに僕がいたんだよな
七時間ぐらいだっけ
話をしたんだ
色んな話を

手にする前から失う心配をして
幼い頃のぼくらは
バス停のように寡黙だったね

正しい距離があって
君は正確に傷ついた
私何度も言いました
私何度も言いましたよね
私何度も言いましたよねって言いました
私何度も言いましたよねって言いましたよね
私何度も言いましたっけ

ぼくが建物から這い出た時
狂ったような夕日の赤でしょう
刹那的に
六、七年前などを思い出して
また泣きたくなった
振り切るように
炙背という言葉の意味を考えた
考えたらしいです
そして今
明日棄てるコンバースを洗っている
天気予報は恒久的に外れていて
世界の悲鳴に
空間系のエフェクトがかかる
素因は慰めものです
さようなら　かわいそうな人
さようなら　正しい誰か
また朝が来て空気清浄機が唸る
眼鏡越しの世界　うざいよ

◆小山不一　　岩手県

引かれ者の挽歌

十月一日午前八時。母から訃報の連絡を受け、急ぎ帰省する。茫然としながら車を走らせる。昨日の夜半から冷たい雨が降り続いている。ひと雨ごとに冬が近づいてくるのを感じる。

（心の中にある幸福の栓が抜かれて、どう足掻いても埋まらない喪失感に満ちてゆく。私からあなたを奪う何者かの手が見えたなら、私はきっと、恐れずにそれを振り払って、あなたを自転車の荷台に乗せて、どこまでも逃げただろう）

十月一日午前十時。隣町に住むいとこへ連絡する。布団はまだ温かかった。

（私が惨めで愚かであるが故に、その気恥ずかしさから伝えなかった、愛しているというただ一言が、この先、私の喉元をゆっくりと締め上げていくのが分かる）

十月一日。午後一時三十分。葬儀会社の職員がやってきて、今後の段取りの説明を受ける。地元の寺は忙しいらしく、葬儀は翌々日に決まった。明後日、祖母は灰となる。生活委員会と書かれたノートに、親戚の連絡先を書き留める。十年前の幼い私の字の横に。

（この荒野ともいえる十月の田園の中で、あなたの訃報をただひたすら待っている時、この世の全ての悲しい音楽が、あなたが失われることを嘆いているように聴こえてならない）

十月一日午後四時。大方の親戚へ電話し終わる。三十歳も上のいとこが目を真っ赤にしながらおにぎりを私の父と母に配っていた。注文の際、祖母の分を数え忘れていたため、仕出し弁当の個数の変更を葬儀会社へ連絡する。仏間には祭壇が組まれ、花屋が忙しそうに出入りしていた。

（あなたが私にくれたショートケーキのいちご。おかき。コーラ。から揚げ。ポテトチップス。アイス。ぶどう。あなたが私にくれた物をすべて返すから、どうかいなくならないでと願う。もちろん、奇跡なんて起きないこと

を私は確かに知っている）

十月二日午前三時。葬儀の参加者名簿をExcelで作りながら、コーヒーを飲み飲み、寝ずの番をする。祖父が好きだったインスタントコーヒーは祖父がいなくなってもこの家に必ず置いてあった。遠くの山で鹿が鳴く。かつての番犬は、今は老いて、空の牛舎へ追いやられている。

（昨日、父が可愛がっていたノラが死んだ。ぶどう畑へ埋めた）

十月二日午前十時。悔みに多くの人が訪れる。玄関先で手をついて、マニュアルがあるような受け答えをする。不思議と眠気はない。葬儀会社から葬式後に配る引き出物について確認したいことがあると電話がある。合間を見てGmailでやりとりをする。

（秋はうるさくて嫌いだ。冬が良い。雪は青く光るのだ）

十月二日午後六時。納棺。祖母が昔縫ったという着物はついに棺には入れなかった。

（神様、神様、どうかあの人を無くさないでください）

十月二日午後十一時。寝ずの番のついでに頂いたお悔みの金額を数える。名簿と照らし合わせながらパソコンに打ち込む。父と母は倒れるように寝てしまった。葬儀会社から着信があったことに気付く。明日の朝、折り返し電話するとスマホのリマインドにメモする。

（私が知らないあなたの人生について、あなたが失われたことで、その歴史が永遠にこの世から消えてしまったことが悲しい）

十月三日午前七時。大学の入学時に買ってもらったスーツを着る。葬儀会社の担当者と火葬前最後の打ち合わせをする。大叔母が留守を引き受けてくれた。車の中で母から、大叔母が癌を患っていることを聞く。

（幼子め。お前は「二度と」という言葉が持つその重みを知らず、どうしてそう軽やかに生きていけるのか）

十月三日午前九時。霊柩車の後ろを走る。近所の人たちが、わざわざ喪服を着て見送ってくれる。母が私の肩をさする。霊柩車の甲高いクラクションがやまびことなって帰ってくる。

（もう誰も待たないと嘯いてみる）

十月三日午前十一時。最近建て替えられたという火葬場からは煙が立たないらしい。

（家族があなたの話をするたびに、私があなたの苦しみを和らげることもせず、ただひたすらに己の喜びにばかり耽り、恩を忘れ、優しさを裏切り、それを贖う機会さえもついに失われたことを、世界中から責められているように思う）

十月三日正午。祖母はもうどこにもいなくなった。

十月三日午後一時。葬儀場に着く。葬式までの間、いとこと世間話をする。会社から商談前のミーティングについて連絡がある。スケジュール通り進めてもらうよう伝える。電話を終え、会館の中へ戻ると、母が一人でソファーに座っていたので、横へ腰かけ、明日一度会社へ戻ってもよいか相談する。母は申し訳なさそうに笑う。

（もう許してくださいなんて言わない。だから許してください）

十月三日午後三時。家に戻り、最後に祭壇を拝む。喪主の父に代わって挨拶をし、仕出し弁当と香典返しの引き出物を配る。ひとり、またひとり、それぞれの家へ帰ってゆく。私の部屋は、今は物置になっている。

（仕事の連絡に交じって、友人から何の変哲もないLINEが届いていた。四年前、薬を飲みすぎた偏頭痛の夜、せめて一緒に死ねたならと泣く私を慰めてくれたお前だった）

十月三日午後六時。私はこの荒野に立ち尽くす。

慈悲はない

◆あんのくるみ　埼玉県

雨

雨は私に教えてくれる
私の知らない私のことを

月曜日は空見上げ
「朝からいやね」とぼやいたの
それでも雨音のリズムに合わせて
水たまりをふたつジャンプした

私って、私って
こんなに陽気なところがあるのね
私って、私って
子どもみたいなところがあるのね

火曜日はバス停で
「靴が汚れた」と嘆いたわ
土砂降りなのにピンヒール
だってデートだったのよ

私って、私って
やせ我慢しちゃうところがあるのね
私って、私って
ほんとにあの人が好きなのね

水曜日に買った傘
黄色とピンクの水玉模様
木曜日に褒められて
あんなにあんなに嬉しかったのに
金曜日の電車の中に
置き忘れてしまったの

とっても素敵な傘だったのに
開く音が思い出せない
なんだかまるで最初から
私の傘じゃなかったみたい

土曜日にすれちがった

泥だらけのユニフォーム
この雨はあの子の涙を
隠すためなのかもしれない

私って、私って
ちょっとおばさんになったのかもね
私って、私って
けっこうやさしい人かもね

日曜日はどうかしら
特別なことは何もないけど
気まぐれな夕立みたいに
正直に生きられたらいいわ

雨は私に教えてくれる
私の知らない私のことを
梅雨が明ける頃もっと
私は私を好きになる

◆近藤泰地　千葉県

音楽（Dear my aunt）

あなたは
そこに
右手を
そっとおいた

五本の指
その　ひとつ　ひとつ
みなも　に
落ちてゆく
一滴の雨

追いかけるように
左手のそれも
また、
一滴の雨
と　なる

雨粒、
それ　は
あなたの
涙　に見えます、僕には

涙、
それ　は
それら　となり
無数のそれら　となり
いつか、Sora（空……）、となるのですか
溢れ出してゆく　そのさきで

水紋、
みなもに　落ちて
咲いた
その　円
それらの　円
無数の　それらの　円

その、
ひとつ　ひとつ　に
もうひとつ　もうひとつ　と、
もう百　もう千　もう億　と、
崩れあいながら
響きあいながら
円は、
やわらかな
さざ波を
産み

「……Umi ?」

そう
それは、海
広がっていくものは
あなたの両の手が産んだ、海

僕は　今、

あなたの海をゆく
一隻の帆船

目的地は
大陸ではないとおもうのです
これからもずっとずっと　辿り着かない
すいへいせん　の　はて

そのとき、
刻まれながら
消えてゆく
ひとすじの航跡を
僕らは、音楽と呼んでいるのかもしれない

◆古川　久　　大阪府

冬の雨

暖冬異変が報じられてから三十年以上経つ
冬の夜の雨音は濡れ雑巾が肌に触れるよう
僕の意識のように薄ら寒い

心身不調でパソコンの調子も悪い
いっそのこともう少し強く降ってもいい
仕事は全面休止と言いたいところだが
晴耕雨読もままならない
（ビニールハウス内や屋内での作業は多い
或る農家では農業には日曜日もないと言う
貧弱な僕の農業経験は宙を舞う）

失敗したことや恥しいことの走馬灯
走馬灯？そんなに高性能ではない僕の意識

激烈に働く日本
孤絶した島国日本が突っ走った
暴走した日本は大戦争を起こし
暴走した戦後日本は地球の破綻に加担する
虚空から降り続ける冬の雨

日本人は真っ当に目覚めそうで覚めず
国粋主義の亡霊に目覚めてしまう

ソフト国粋主義であっても同じこと
現代日本の危機は深まるばかりで
随所にご先祖の掘った落とし穴がある
欺瞞や貪欲や悪辣などの名の落とし穴
よかれと思った行為にも
落とし穴は待っている
全体的にそんな地平に向かってしまう

世界で抜け駆けしかけた日本は
世界に絡み絡まれる
地球に数条の希望の光が差すこともあるが
受け止める大気と大地が
もう取り返しのつかない状態に近い
子らや青年達よ頼む
グレタさんに続け！
疲弊した僕らの世代に力を与えてほしい
経済競争と軍拡や戦争の歴史に終止符を！
そして地球の病を癒すのだ

薔薇の静謐

五月上旬我が小家の塀は
ピンクの薔薇の品種アンジェラとして咲き誇る
静謐な精気を醸し出し非日常の光景を現出する
ささやかな薔薇フェンスや門のアーチを飾り
夢の瞬間（とき）を家族や地域共同体にもたらす
菜の花を飾る土地柄なのだが約二か月遅れで
アンジェラは自らの時間性を表出し
共同性に威力を発出する
ささやかで目立たない空間性は時間性に転化し
私たちの身体性としてその精気を振りまく
我が家の塀の前の道が地域の特別な空間性に化し
人々は憩い話すことができる
無関係な話はどこか際立った自然を形成し
平凡な時空を私たちに付与する
何もなかったかのように人々は日常性に戻っていくが
これが仏教で言う「自然法爾」だろうか

最初は頑丈なベージュ色のブロックが

積み上げられつつあった
妻が珍しく異を唱え工事は中断した
私も精神が変になったようなことを口走った
不意打ちだ、ゲリラだ、陰謀だなどと
ただ施主として言った意識はない
そのような威圧的な怒号の管理の色を
帯びるのを私は忌避していた
それが私の生き方だ
そんな私の自由は誰にも奪えない
カネにものを言わすこともない
そんな考え方に心の病が「生えた」のだろうか

ブロック塀の件に限らず
設計士にしろ沖縄の大工関連集団にしろ
私たちを含め悲しき内輪もめが多少あった
しかし頑丈なブロック塀は無事薔薇フェンスと
棘ある薔薇に転化した

春風の中薔薇の下方からアオスジアゲハ蝶が
ひらひらと元気に飛び立つ！
五月の連休明け頃に必ず咲くアンジェラは
その時明るい早朝の静謐に
強く精気を感じさせる
そして初夏の風にそよぐアンジェラは
もういい年の私の感性を甦らせる

◆みちながまいこ　栃木県

布団のなかで

真夜中にふと目がさめる
つかれているのかしら
「わたし」も　「あなた」も　大事にされる時代なのに
わたしが　わたしでいることは　なぜこんなにも難しいのか

わたしが　わたしでいたいとき
言葉が　わたしの邪魔をする

時には大きくなってみせ

時には小さくなって逃げてみる

これが　オトナのわたしなのか
わたしが　わたしのままでいることは難しい

わたしが　わたしであるときに
言葉はきっと必要ない

うちがわから　あふれ出る想いが
ことばにのって　ながれ出てゆくのを　そっとみつめる

きらめく　オリオン座の下　心地よく
わたしは　夜に　とけてゆく

◆清水優花　　神奈川県

胎内の生は澄み切って

ゆるやかな坂を降りていく
近づく夏に喘ぐ程　おなかの中のあなたの吐息
膨らみかけた大切な　少女の胸のような腹

あなたの淡いぬくもりに　私の生が澄んでいく

あなたと出会う前の私は寂しくて
叫びたくなる苦しさに　度々ベッドに身を投げた
暴れたい　暴れられない虚しさに
夏なのに　羽毛布団に身をくるむ
熱は重くて濃厚で　汗だくの身に粘りつく
体臭が徐々に濃くなって　私は甘さに眠くなる
真っ暗で何も見えない　吐息以外は聴こえない
小さく小さくうずくまり　たおたお眠るあの日々は
そこは私の場所だった　私の幼い宮殿だった

くり返し　くり返し　温い腹に手を重ね
私と一緒に今日生きて　私と一緒に夢を見て　私と一緒
に死ぬあなた
一本の緒が心地いい
これは愛？
私はね　あなたの他にもう一人　愛しているとささやい
た

それとこれとは　同じもの？
あの人はとても優しくて　沢山笑う素敵な人
恐ろしい夢に震えると　そっと背中をさすってくれた
優しく笑い穏やかに　怯える私を抱きながら
その時私はあの人に　愛しているとささやいた
口を結んだあの人は　大きく深く頷いた
その時私はあの人に　愛しているとささやいた
それならば　あなたに抱く思いはきっと　もっと　ずっと　深いもの
暗い静かな　海の底
私とあなたは同じ夢

鶯が鳴いている
少女が坂を駆け上がる
じっと待ってる母目掛け　ポニーテールを振りながら
少女は母を追い抜いて　母は少女を見守って
母は坂を降りていく
少女は母を追い抜いた　私の隣も駆け抜ける
纏った風が柔らかい
少女は風を切り裂いて　焦げるほど青い空へと飛び立った
ゆるやかな坂を降りていく　母の軌跡は匂いの名残
今の私は　石を辿るヘンゼルみたい
染みる匂いは　幸福じゃない　不幸でもない
精一杯を噛み砕く
そんな臭いが　あなたにも分かる？

幼い私の大好きな　あの滑り台はなくなった
向かいの小さなあのカフェは　幼い憧れ背負って消えた
残っているのはただ一つ
広場の隅の百日紅
私の大事な思い出が一つずつ　一つずつ……
木肌を撫でると　曲がりくねったあの枝に　腰かけた日を思い出す
次に来る時その時は　この木は残っているのかな？
肌のように親しくて　私を包む思い出が
一枚　一枚剥がされて　薄ら寒くなっていく
裸になったら　あなたも寒くなっちゃうね

その時は　澄んだ瞳で私の破片を輝かしてね

もしもあなたが人形だったら　冷たい体を丸くして　静かに眠ってくれてたら
あなたをずっと温めていよう
生まれ落ちることもなく　私の中で　同じ夢を見ていられたら
一緒に怖い夢に震えよう
体と心を一つに溶かし　一本の緒を優しく保っていれたら
この深い　深いつながりを永遠にしよう
あなたが生まれ落ちるとき　あなたがあなたの　あなただけのものになるとき　私はあなたを愛するだろう　一生変わらず　私が死ぬまで　誰よりあなたを愛するだろう
ただそのときを想像すると
胸がキュッとしてしまう
ゆるやかな坂を降りていく

先生は　順調だって
私と同じご飯を食べて　私と同じベッドで眠って
あなたはすくすく順調に　元気に育っているってさ
お腹もどんどん膨らんで　あなたの重さ　感じない日はありません
生まれ落ちたら　きっとあなたは驚くね
外は明るくて　冷たくて　薬がにおって
あの人なんか　あなたを見たら大声で泣いてしまうかもしれません
あなたもいっぱい　いっぱい泣いて　世界に染みていくのです
腹を撫でれば　あなたの肌が暖かい
澄んだ生が冷めていく

◆中振瑞風　京都市

母さん～二十歳の懺悔～

ごめんなさい
俺はあなたが望むような人にはなれませんでした

障害を持って生まれたぼくは精神年齢が実年齢の三分の二しかないそうだ。見た目には決してそう見えないのだろうけれど。ごめんなさい
俺はあなたに何度転校させてもらってどこの学校通わせてもらっても「普通」にはなれませんでした

僕は精神年齢のままに生きることを許されない。十五歳は十五歳らしく振舞わなければならない。

ごめんなさい
俺はあなたにどれだけお金を使わせても全て無駄にしてしまいました

十八歳。身を投げるように男に体を売った。精神年齢は十二歳。自傷行為のようなものを「快楽」だと自分自身に思い込ませて。

ごめんなさい
あなたの子はもうどこもかしこも汚れてしまいました

魂までは売り渡していないつもりだった。でもその境界線はひどく曖昧なもののようだ。

母さん
あなたが酷いだけの親なら俺はとっくに嫌って憎むことが出来ていたのに

自己肯定感

あんたが楽しそうに煙草をのんでいる時
おれは実にみじめだった
薄暗くって気だるい匂いがした

あんたが楽しそうに笑って話しかける時
おれは実に死にたかった
苦しくても反射的に笑ってしまう顔

あんたが楽しそうにおれの首を絞める時
おれは実に虚しかった

確かにその時だけは生きたかった

あんたが楽しそうにおれを蹂躙する時
おれは実に空っぽだった
もう奪われるものさえないみたいだった

おれの顔が歪むのが好きなのか
おれの顔を歪ませる自分が好きなのか
どっちでも良かった

いつも楽しそうなあんたは
おれに価値をくれるから
それでも良かった

おれに価値をくれる数少ない人
おれは価値のある人間だ

おれの自己肯定感は
それでも歪んでいるだろうか

◆たま　むすび　　千葉県

げーむ

ずっとぷよぷよだけして遊んでいたかったんだけど、君は違うようで、もうテトリスを始めてしまった。冷めたお弁当も卵焼きだけは美味しかったよ。美味しかった。盲目に目をつむる僕らはなんとも情け無いなあ。ああ君には情けが無い。僕にもない。
兵隊さんになる前にどうか君の死をください。君の生と死を分けたい。二つか三つに。
そして死を詩にしたい。それで犬小屋でもどこでも生きていけるから。死が欲しい。
僕ら始めから終わっていた。生きてるから。死生観て言うように。死が始まりなんだ。
せめて始まりを教えてください。
生をくれた君に死を与えた僕らは相殺して何も残らない。何にもならない。
燃え上がるビルは生か死が突っ込んだんだ。割れる大地は生か死がぶちまけられたんだ。

うねる大波は生か死が解き放たれたんだ。
生を人質に取るテロリスト。刹那の悦に触れるため。
死を人質に取る私。ずっとずっとずっと溺れるため。

いや、違う。違う、兵隊になったのは私だ。文明に溺れた私だ。
じゃあなんだ、これは全部私のせいか？私のせいか？私の生か？私の性だ。
見世物の六畳間は逆転し世界が8bit程度になる。二五六分の一の色彩が網膜を鈍らせる。
何羽も何羽も何羽も外でひばりが鳴いている。何羽も何羽も何羽も。うるさい、うるさい、うるさい、うるさい。
全部僕の生だ。
(僕+非正常文化)×自惚れ×孤独×後悔÷君＝マジョリティ。
何か一つが無駄なようだ。どっちにする？選ぶのは君だ。
くよくよしたってぷよぷよしたって帰れない場所ができてしまった。
世界で唯一帰れない場所。

もう時間だ。大規模な行軍はすぐ後ろまで来ている。残されたのは全選択か否か。それだけ。それだけなんだって。では選択しよう。きれいに、洗濯する、街並みを。
ごめん君はついで。ついでに殺してしまう。僕に次いで死んでしまう。
君の言葉は誰にでも聞こえる電波になった。
毒キノコの下で君の肋の数を数える夢は叶わず、辺りは眩しすぎて何も見えない、
みつからない。
ああもう歌おう。歌だけが唯一この世界で伝わる言葉、意志、意味、意義。
君もそうだろ？君もそうでよ。

◆ナガツキイワタ　神奈川県

小さな魂たちへ

上空を飛びかう魚たちが
惑星を描く午後
窓の開かない部屋で
泣いていた

思い出を燃やす
ガソリンみたいな感傷が
ヒリつく
子どもの時の
腕の
小さな擦り剥きに
蘇る宇宙船に乗って
夜をほしいままにした
あなたがいない
花の咲く
丘の上に降り立たつと
粉塵みたいな雪が降り始めて
酸素マスクを着けた
大地からは
瘴気の魂が
永遠に向かって
いくつもいくつも
際限なく上り続けて
わたしはそれに見惚れて

祈りの言葉を繰り返し
涙を流す
不摂生な梟の群れの
一匹になる
そうして
月の裏で語られる言葉たち
懺悔された
波紋
「千年後も
　繋いでみたかった
　それだけなのです」

◆矢城道子　　福岡県

教えてほしい

梅雨の走りだとでもいうのだろうか
五月に入ったばかりだというのに
雑木林は湿り気を帯び
黙りこくったまま
蒸し暑さが立ちこめる

予報は連日雨マーク
奇っ怪なニュース映像が頭をよぎる
竜巻で飛ばされた家屋
雹の降る光景

異常気象に慣れきっていない身体が
反発してみるも
原因を作ったのは人間たち
この私だ
都合のよいことばかり並べ立てても
答えてくれようはずもなく
汗ばみながら
押し入れの掃除をする
捨てられないモノたちが
ひしめき合って
それでもモノは増えていく
使い切れないモノを
後生大事に持ってて何になろう
かといって

捨ててしまえばゴミになる
大量のモノを作っては捨て
燃やしては作り
地球は疲れてしまったようで
五月の風は吹いてこない

もっとずっと大切なものがあると思っていた
それがそもそもの間違いで
そんなものなどどこにもなくて
なくしてから気づくことばかり

洗濯物をひるがえし
花の香りを運んでくれる
五月の風以上に
大切なものがあるというなら
教えてほしい

◆若杉光　兵庫県

何となくそれ

日本には主も居なければ神様も居ない
日本人が崇めてきたのは只何となく凄いもの
何となくした凄いものを大昔から崇拝してきた
借りた知性を身につけたくして結局何も身につきません
日本の知性は何となくした感覚にある
みんな何となく今その状態であるだけの環境があり理由がある
然うした真実を只々何となくそれでも確かに認識すること
日本の教育ではそれが何より大切に思う
変えようとしてはならない
日本の民の無関心や振舞いすべてが数万年の日本を語る
浅はかな者は維新や戦後の僅かな昔に日本人は変ったとか言う
日本人は少なくともう千年くらい変ってないし変るわけない
数万年もの何となくした感覚を継ぐ一億人が数十年で変りますか
変ったことにしておくことを繰り返してる

骨でも折って必死になって変えようとしても一億人に齎すものは
何処かの国が数万年かけ築いたものの劣化版です
日本人が心の底から政治に関心を持つことはない
知れといってもそこまでちゃんと知ろうとはしない
興味を持っても上辺に過ぎない
投票率の高低でもない
何となくして平和を親しみそれとなくする愉快犯
どうせなら傲慢で良い
自分が一番優れてると思ったら良い
然うじゃなければ自分や他者への偏見をすぐ捨てれば良い
驕れる心を削ぎ落してけば自ずとそれが知性になります
引き算によって磨き抜かれた自分自身を知性と呼びます
引き算の美学
差し引くことには我々だって長けてると思う
容姿に恵まれカラダに恵まれ優位に立てる例えば人々
驕れる者は主に身を伏した
主とは何か

この世のすべては自然環境で成り立って居る
主とは只それそのもののことなのでした
淡々とした只それだけのことを併し我が主と崇めてしまう
譬え無宗教者を名乗って已まない今の多くの人々にしても
優位な以上は心のどこかに主を妄信し真実をどこか嘲って居る
片や容姿に恵まれなければ力にも劣る例えば人々
劣勢に立ち軽蔑されてる者達こそが只真実を真実として
心の底から受け止められる
偏見を捨てよ
何かに対して誰かに対して過去や現在未来に対して
そして何より自分に対して
そして偏見は何も知らなくてもすぐ捨てられる
世界を狭く閉じ込めるのは自分自身の偏見だった
何となくすべてのものは自然環境の成行きで出来た
長いものも短いものも然うなるだけの環境にあった
美しいものは然うなるだけの環境にあって
醜いものは然うなるだけの環境にあった
あの国はたぶん何となく然うなるだけの環境にあって
あの建物はたぶん然ういうのが建つ環境にあって
あの人はたぶん然うなるだけの人生と共に環境があった
そして何も血眼になって無理にすべてを知ることもない
只々ほんの少しの意識
どんなものにも偏見を持たず大きな器で構える自分
そんな自分をほんの少し意識しながら生きていくこと
日本には主も神も居ない
誰も全く興味すらない
何て素敵なことなんでしょうか

◆海田あお　　広島県

さびしさ

それはいつも側にいる
しずかにじっと私を見つめている
それは影のようである
生きているかぎり私に寄り添っている
ときどき、それは私の首をぎりぎり締めあげ

ときどき、それは鼻の頭をつまんで涙を流させる
ときどき、それは胸の中の暗いほら穴で口笛ふきふき
歩きまわったりする
それを私は
憎み
恐れ
悲しみ
いとおしみ
甘やかす
それはいつか私を殺すかもしれない
幸せにするかもしれない
私はそれの瞳をみつめる
みつめ続ける

◆蜜　東京都

肥大化していく。
気持ち悪い。体がぶくぶくぶくぶく膨れていくのがわかる。いまさっき作って食べた野菜と豚肉の炒め物が着実に身になってきてるのがわかる。あるいは昨日おもむろにコンビニで買ったメロンパンか？日々、一日一日、私の脂肪という脂肪が歓声を浴びて自己肯定感を感じ、バキュームのように吸収していく脂肪よ。朝起きる度に体は重く、軽く起きられた日は一週間に何日間あっただろうか？体重計にどれだけの日数乗ってないだろう。わたしはダンスをしていたので、人よりも筋肉量がかなりあるほうだ。なにより、誰よりも筋トレをしていた自信はある。筋トレは私を裏切らない。腹筋をし続け足を上げ続け、ボディはしっかりと六つに割れてきたが、結局は骨格とバランスの問題なのだ。どれだけ鍛え上げても人は結局顔の造形を見る。比べたがるのは生きている者として必然なのかもしれない。たとえ豚や鳥でさえ、強い遺伝子を残すためにより良いオスメスを選んで嫌なものは排除するのだ。それが如実に出てくるのが芸能の世界だ。どれだけ努力をしても顔の良いものが出てきたらそこに飛びつく。もっといい遺伝子を、遺伝子を残したい。そこは男も女も同じだ。秀でる遺伝子を見ると自分の遺伝子を合わせてまぐわせ残そうと全力で追いかける。そ

んな世界に飽き飽きしている。そんな自分もきっとその競走の中にいるのだと思うと吐き気がする。
芸能の世界でなくても、綺麗な人、そうでない人で別れる世界は、また新たにその中で派閥が生まれる。自分より優れたものを妬み憎み、周りに悪い噂を広げ、孤立させメンタルブレイクさせていなくなったら、新たに集落に新しい遺伝子が入ってくると自分より優れたものを排除しようとする、小さな集落がいちばん厄介だ。一人でいいと山奥で暮らしたところで、また新たな集落や関わりが待っている。熊が食料を求め、山の中の小屋にいる自分を殺し、小熊の食料にするかもしれない。人はどこへ行っても誰かと共存しないと生きてはいけないのだ。
それを、身をもって感じる度になぜ自分は生きてるのかという疑問に達し、死にたい。という言葉から連想されるのは、本当は死にたくない。こんなに辛い自分を誰か助けてくれるんじゃないか、わかってくれるんじゃないかという依存の感情である。金がなく、借金取りに追われ、死にたくなるのも逃げたくなる事と同意だ。しかし、死んだ後のことはわからない。死ぬと、全てが終わるからだ。それを、人はしばしば望む。死にたい、という気持ちや思いは、周りにいる人間の集落により巻き起こる感情だ。全く関わりがなく、何も無くなって自分一人になった時も、死にたいと思うのかもしれない。それは、残像と等しく誰かを求めているからだ、その誰か、が思い浮かばなくとも。

◆中原賢治　　岐阜県

赤とんぼ

ホスピスの昼下がり
寝たきりの父を囲み
紙オムツを換える
若草の匂いがする黒髪の
若い看護師の　あなたの声は明るい
鋭い頬骨の底に　渇いた唇が震えた
「夕焼け小焼けの　赤とんぼ
　負われて見たのは　いつの日か」
禿げあがり　わずかな残る白い頭髪を
なでるように手櫛でといでもらう

父が手足の感覚に歓びを与えた
「十五でねえやは嫁に行き
　お里のたよりも絶えはてた」
掠れて弱々しい声に　あなたは
縮こまった父の耳に唇をあてた
「歌詞を飛ばしたでしょ」
まだまだこの世に残したものがあるから
サイパンの崖から飛び降りた
映像の女たちの中に父の姉がいたなど
あなたは平和しか知らない
「夕焼け小焼けの　赤とんぼ
　止まっているよ　竿の先」
無心のワラベに還って歌い続ける
父が妖怪より怖い世渡りをすませたことなど
モルヒネに癒される深い眠りのまえ
夕陽に染まるガラス窓をあけ
眼窩の奥から流れる泪も知らず
あなたは幾度もこの歌をハミングする

◆星詠橙子　　神奈川県

君の歯車を探して

伝わらない。ことばがちがうから
伝えられない。ひょうげんがちがうから

い
の　な　た い
な　る　に 言 い
ぜ ぉこ　？　が の？

わからない　わからないんだ
どうしてわからない？
どうして伝わらない？
こんなにもあなたをみているのに
こんなにも伝えているのに

手を叩き歩き回り唸っては泣くその姿
いつも「突然始まることだ」と慣れきったもので
何故怒るの？何が言いたいの？

訊ねたって答えなんてない
その疑問もいつしか日常に消えていく

怒りに近い行動をしている理由は不明
「不安定」で片付けられる毎日

言葉をなさない言葉はあるはずなのに
あぁ、わからない。わからないんだ
わかりたいがわからないもどかしさ
磨り減り「慣れ」で片付く日常

かちり
思考がはまる。伸ばした手の先にある「画面」に
かちり
推測がはまる。決してこない順番をまつその姿に

それはテレビだよ
まだお茶の時間じゃないよ

目を合わせ伝える
それでも座る君のいじらしさに
どうしようもなく軋む 痛む

だ　は
それレ　ま　じかん
はテ　て おちゃ　よ
よビ　も　　ない
だ

なにかを言われた
「じかん おちゃ ない」
聞こえることばがわからない
なんで？ なんでが伝わらない
飲みたいのに みんなもらっているのに

目と目が合いこちらに伸ばされた手
差し出すコップに満たしたお茶
おやつの時間に出すジュースではないけれど

コップを掴み勢いよく飲んだ先にある笑顔

あぁ ごめんね。やっとわかった
あぁ ごめんね。気づけなかった

かちり
歯車がはまる 回る
「安定した」生活に向けて
かちり
歯車がはまる 動き出す
「穏やかな」生活に向けて

難しさとやりがいに挟まれながら
今日も君が落とした歯車を探している

◆泰井良　静岡県

窓の外

窓の外は、真っ暗。
何も見えない。
視界は、全く遮られている。
でも、心の中には、光が灯されている。
一筋の光。
そう、私の心の中にだけ、何かが映る。
眼には見えなくても、何かが、そこにある。
誰もいない。でも誰かがいる。
気配を感じるのは、私だけ。
窓の外は、真っ暗。

人

朝、人とすれ違う。
駅、バス停、道。
多くの人が行き交う。
時々、分からなくなる。
この人たちは、本当にいるのだろうか？
駅を乗降する人数、町の人口、通行量、すべてに実体感がない。
そこには、人の温もり、手触り、実在感がない。
本当に、そこに人はいるのだろうか？

あるいは、眼には見えないが、霊的な存在があるのかもしれない。
本当に分からなくなる。それでも、今日もまた、人とすれ違う。

壁のしみ

壁のしみ、とても不思議。
あのしみは、どこから来て、どこへ行くのだろう。
ずっとずっと無限に、永遠に続いて広がっていくのだろうか。
まるで、生命の繁殖のようだ。
しみと陰が出会う。
その境界は、どこにあるのか、まるで分からない。
二つが折り重なる場所。出会う場所。
まるで恋人たちの出会いのよう。
壁のしみ。君はどこへ行くのか？

くつの音

階段を上る、くつの音。
コツ、コツ、コツ、コツ。
まるで、運命の扉をノックしているよう。
はじめは、自分の、くつの音だと分かるが、次第に、くつの音が、一人歩きする。
そして、いつしか、くつの音に追いかけられる。
くつの音が、襲ってくる。
他人の、くつの音にも思えてくる。
コツ、コツ、コツ、コツ。

緑のコンニャク

初めて見た。
サボテンに見える。
食べると、シコシコ、コリコリ。
まるで、生き物のようだ。
ひょっとしたら、突然、動き出すかもしれない。
不思議な生き物。
謎の物体、緑のコンニャク。

劇場

いつもの劇場。
ありふれた劇場。
そこには、人びとの温もりがあった。
コロナが奪った人びとの温もり。
笑ったり、泣いたり、怒ったり、時に震えたり。
いつも独りじゃなかった。みんながいた。
ささやか過ぎる日常。
もう、どこにもない。
無味乾燥、無機質な空間。寂寞とした感情。
人の温もりを還して。私たちの劇場を還して。

独りぼっち

独りぼっちは、心地よい。
誰もいない。他に何もない。
ただ静かな時間だけが、流れてゆく。
周りには、お気に入りの本、音楽、映像。
独りぼっちは、寂しくない？
独りぼっちは、退屈じゃない？
でも、とても心地よい。

こんな時間が、ずっと続けばよいのに。

死刑囚

死刑囚には、生命（いのち）のリミット（期限）がある。
リミットが来れば、死ぬ。
でも、それはみんな同じ。
みんないつかは死ぬというリミットがある。
我々は、みんな死刑囚。
みんな限りある生命を、精一杯生きている。
それが、生命。
みんな生まれ、いずれ死ぬ。
死刑囚と我々の違いは、どこにあるのか？

私は、死んでいる。

私は、すでに死んでいる。
生気のない目、血色の悪い顔、がさがさした手。
でも、私は生きている。
天命を忘れ、神を忘れ、生きる気力を無くした私は、生きていても、死んでいる。

生きながらにして、死ぬ。
これこそが、最も悲惨な出来事。

月曜日の朝

月曜日の朝は、憂鬱。
週末は、いつも気儘に暮らし、のんびり。
だから、月曜日の朝は、憂鬱。
一週間の始まりを告げる、月曜日の朝。
会いたくない人、見たくない光景。
考えると、ブルー。
早く過ぎ去って欲しい。
重たい気持ちになる。
月曜日の朝は、本当に憂鬱。

猫

今日も公園で、いつもの猫と出会う。
何故か、悲しそうな鳴き声。
憂いを秘めた鳴き声。
「今日は、どこへ行くの？」と話しかける。
また、悲しそうに鳴く。
彼は何を求め、どこへ行くのか？
また、明日も会えるといいね。

君に会いたい

今日も君に会いたい。
今日も君に会えない。
君は、いつも私の胸の中にいる。
君は、いつも私にそっと語りかける。
その時、君は、いつも笑顔で優しく微笑む。
心と心。二つの心。一つになれる。
今日も、君に会いたい。

◆笠健人　東京都

人間的なあまりに人間的な

兵士の長い夜

読み捨てた本がある
生ぬるい愛を描いてた
壁にもたれて煙草を吸うと

煙だけが自由にぼくの手の届かない明日へと溶けていった
堕ちてきたのはぼくのせいだけどそれは君のせいでもある
愛してたんだ
どこまで堕ちても構わないと思ってた
二人で乗り越えようとした壁は次第に高くなり、今は影を並べるばかりさ
手をつなごうよ、もう一度
憎しみと愛はいつも隣り合わせ
ぼくに吹き付ける冷たいビル風
谷間に見える遠い空に思いをはせる
壁に刻み込んだ落書きはいつかの夢物語
眠れない夜は、君の故郷の歌でも歌おう
きっと涙は夜空に光る

影

失われた十年間
あまりに空虚な十年間
何を覚え
何を忘れ
何を伝えることができるのか
わからないことが多すぎて
狂い、迷い、傷つき、傷つけた
あの日遠い空を夢見てた少年は都会のビル陰に押しつぶされてしまいそう
猫のように背中を丸め他人と視線を合わせないように街を歩き続けた
声をかけられるとしどろもどろになり、ぎこちない笑みを浮かべるだけ
日が沈むにつれて肥大していく理想の影が次第に重荷になっていく
「生きていく」て言葉がわからなくなる
都会の空っ風に吹かれながら肩をすぼめて歩き続ける
影がぼくを飲み込むまで

夜

ビルの谷間に振り落とされた人々

ネオン街の明かりに誘われ右往左往
バーボン三杯で変わる世界
変わらないのは群青色の朝の始まり
学校、労働、生きる速さに追い立てられ黄昏にも気づけない
さびしくても泣けない
つまらない大人になっていた
枯葉たちは風にまかれて宙に舞う
どこへ行くともわからずに
ただ、風に身を委ねて
ビルの谷間に沈んだイカロス
夢に敗れたイカロス
屍が路上に転がっている
夢を拾い集める午前二時
アルコールを飲んでバカ騒ぎ
一夜に少女は踊り狂い、白けた朝を迎える
街路樹たちがせせらせらと笑い始める
レールの上から転げ落ちて
空の青さに涙を流す
凍てつく風に吹かれながら

朝が来るまで

最終電車は過ぎていた
とりのこされた闇の中
風俗の客引き、たむろする少年少女、あくびする警察官
街のネオンの下欲望は原色でむき出しさ
もうひきかえせない故郷(ふるさと)
勝利、敗北どちらが待っていたとしてもぼくは走り続け
なければならない
ねぇ母さん、まだぼくは馬鹿にされているのかな
母さんはまだぼくのことを愛してくれている？
母さん、ぼくは間違っていないかな
何か形が欲しいんだ
なんだかとってもさびしくて
この街はどこかいつも冷たいから

格子の中から

なぜ君はぼくの手も握らずに消えてゆくの

瞬き一つの間に真実はすり替えられる
手を伸ばしても届かない窓
射し込む光がぼくを照らすことはない
床に散らばったいくつもの破片がぼくを傷つける
鉄格子の中でみじめに吠えるぼくがいる
死という観念に取り憑かれ
愛という幻想に踊らされ
過ぎていった青春よ！
塗りつぶされ、迫害され、恋をして、悲しみに暮れた青春よ！
一体どうすればここから抜け出せるのだろう
行く先もわからないが

流れにそって

背後に迫る死
遠くに見える生
走り続けることに意味はあるのだろうか
川の水は海へとつづく
石は角がとれて丸くなる
傷ついて、汚されて
誰も信じられなくなった
時がぼくを置いてゆく
そろそろ審判の時だ
さあ、ぼくを裁いておくれ
君の瞳で

とり残された少年

いつからか夢を口にするのが恥ずかしくなった
いつからか素直に笑えなくなった
いつからか友人に会いたくなくなった
きっとぼくは馬鹿と呼ばれているのだろう
十八歳の時、夢を追うと街を出た
孤独の意味も知らずに
現実と夢のはざまをさまよっている間に時だけが過ぎていた
金がすべてじゃないなんてもう言えない
ぼくはきっと恨まれているのだろう
社会の中で汗を流す人々はぼくを睨みつけるだろう

街がぼくを否定する
自分が自分を許せない
成功して金が欲しいのか
もっと純粋に夢を叶えたいのかわからない
もう何を書いているのかわからない
何を言っているのかわからない
ただ無性に今は他人の視線が気にかかる
ただ生きてゆかなければならない
もうひきかえせないんだから

真夜中の独り言

ぼくの命は何のためにあるの？
答えがわからなくて路頭に迷った
いつしか夕暮れがやってきて涙がこぼれた
ビルの谷間に日が沈むと言いようのない不安が夜とともにやってくる
ぼくの瞳に街灯が映る
安定剤、睡眠薬を飲み煙草に火を点けた
欲望に心が崩れてゆきそうになる
金に女に出世欲、今のぼくはどれも欲しくてどれも欲しくない
生きることはつらいんだ
まるで晒しものだ
負けてたまるか
馬鹿野郎
負けた方が楽なのかもしれない
今までがそうだったから
高層ビルを見るように頭を上げて友を見つめる
人生を悟るほど馬鹿じゃないんだよ
闇に手を伸ばし、明日の光に触れようとしている
明日は来る
うれしくても悲しくても
一体ぼくは何が欲しくてこんな文章を書いているのだろう
この文字はどこにつながっているのだろう
ただぼくは愛されたい
そして言ってほしい言葉がある
「君は間違ってないよ」

君にとって夢とは何？
げろが出るほど聞いた言葉だ
そんなものたやすく見つかるなら
今ぼくは手首を切ってない

チープなイデア

こんなこと書きたいわけじゃない
使い古された言葉では
表すことは出来はしないから
何が幸せなのか
「幸せ」
街に響くこの言葉
金がほしい、美しくなりたい
要はそんな意味を包括して「幸せ」と呼ぶのだろう
げろが出る
ぼくが求めているのはそんなインスタントなものじゃない
いはずだ
手垢のついた「幸せ」なんかじゃない
一体おまえは何を求めているのと言われても言葉にできない
だってぼくの求めている幸せは存在しないのだから
「悩んでいる」意地でも口にしたくないけどな
「会社を辞めたい」「夫婦仲が悪い」「恋人と別れた」
いつかは時に流されてしまう程度のことしか意味を持たない
ぼくはふと思った
けれどそんな自分が一番人間的なのかもしれない
悩みというアルコールに酔って
喜劇的なのかもしれない
不思議なことに死にたいとは思えない
今の気持ちを表す答えが見つかるまでは
つまりぼくは人として認められたいんだ

NG

アルコールのにおいが立ち込める最終電車の中で日付が
変わる
電柱に寄りかかると冷たい風に頬を打たれる
コンビニの明かりがぼくの暮らしを照らしだす

三十分の休憩時間
煙草を吸って窓を眺める
夢を追うためには時には汗も必要だよね
でも今は夢か金かわからなくなっていく
ＢＡＤな街でＧＯＯＤを求めて

◆森　由右子　　千葉県

持て余す　時間

一日の終わり
無造作に新聞紙をたたみしまう時
ふと
祖父を思い出す

昼過ぎから新聞紙をたたむ祖父の姿
一日分まとめてではなく、
一枚一枚剥がしてたたむ
角と角をきっちりとあわせて
一折　一折
折り目をしっかりとつけて

そして
一ミリのずれも許さぬように
丁寧に重ねしまう
祖父の日常

幼い私には不思議だった
廃品回収に出してしまう
読み終えた新聞紙を
なぜそんなにも時間をかけてたたむのか

新聞にざっと目を通し
回収用の袋に収まる程度に雑にたたむ
慌ただしい日々

ふと
祖父を想う
彼は新聞紙をたたむという作業に埋没しなければ
一日をやりすごすことができなかったのではないかと

仕事を辞め
家事をする意識も技術もなく
一緒に出掛ける友だちも場所もなく
趣味はテレビで相撲を見るくらいだ
孫の私を遊ぶことも話すことも無い、そんな性格だった

あの頃
祖父には持て余すほどの時間があったのだ

だから
きっと
仕事のように
義務のように
新聞紙を一枚一枚、
角と角をきっちりあわせて
一折　一折
しっかり折り目をつけて
たたんでいたのだ

遊んだ記憶やどこかに一緒に行った記憶もない
話すことも無く
思い出されるのは
丁寧に
丁寧に
新聞紙をたたんでいた祖父の姿ばかり

その底知れぬ孤独さに
いまさら
哀しみを覚えるのだ

◆ドビー　神奈川県
不思議国の人
それは実は日本人に見えるけど、実は不思議国からの旅人なのです。

僕は自由が好きです
だけど一人は怖いです
僕はみんなに好かれたい

そして恋がしたい
だけど今は重い現実と戦っています。
父親とか夫とか年齢とか人格とか倫理が嫌いです。
悪いとも考えたことないです
そんな僕はダメな人間ですか
仕事もしています
お金も普通に稼ぎます
でも家族は多分不思議奈目で見ます。
どうしてですか
不思議といわれるけど僕は普通です

私は自由になりたいです
ただ旅人になってできれば貧しい国で
私の粗野だけどおいしいご飯作ってあげたい
一人は怖いのかはわかりません
でもなんだか不思議国の王が進め進めと叫んでいます
幸せか後悔かそれは見えないけど
ここにいてはいけないと王が叫んでいます。
だから不思議国に行きます

いつなのか知りません
カバン一つで進め道はあるはず
不思議国　自分の世界はそれぞれ不思議国

僕は愛していたいです
たくさんの人を
なぜいけないんですか　愛は自由です
家族も好きだけどよくわかりません
だから恋をします
今日も恋人と会いそして口づけして抱きしめます。
遊びだけど恋でもあります。

私は苦手です　人がとても
嫌いではないけれど幸せはかんじません。
どんな時が癒しなのかもわからないです
皆さんは幸せですか
大声で話をするそこの婦人　　静かにできませんか
電車ですよ
この時間を乱さないでください

自分には大事な時間です

不思議に見えるのは不思議ですか
人を思うのは不思議ですか
人を信じるのは不思議ですか
今日を生きようと思うの不思議ですか

鳥はさえずり　水は流れ
木々は青々と茂り　空は高い

だけど自分はわからない
さえずりの軽やかさも水のつめたさも
木々の香りも　空の青さも

僕も私もただ生きるだけ
ただ不思議国からの旅人として

◆小沢浩太郎　　東京都

八甲田

青森駅から上野駅行き、零時二分発の電車だったろうか
八甲田の発車まで、まだ四時間ほど時間があった
青森駅の近くの居酒屋で酒を飲むことにした

今となっては四十年近く前のことなので
酒をどのくらいの量、飲んだかも覚えていない

八甲田に乗車すると
中長距離電車の客車によくある、対面式四人掛け座席に
私は寝転がり占領した

これから上野駅まで十一時間の旅が始まる

私は酒の勢いで深い眠りに落ちた

通路側に置いた私の脚を軽く叩く人がいた
上下、白のスーツ姿の紳士だった
そこに座ってもいいですか
その紳士は優しく私に話しかけた

私は眠い目をこすりながら起き上がり
どうぞと丁寧に答えた

その方は三島由紀夫の市ヶ谷自衛隊駐屯地占拠に
何か関係ある人らしい
仙台に講演に行く途中ということだ
しばらくその方の話を聞いた

私の泥酔した脳の器は酒でいっぱいになっており
その方の言葉は大部分、外に零れ落ちてしまったようだ

それでも

君には武運がある

私たちはこの日本を守らなければならない

したたか酔っていた私の心に
その方の言った、その言葉だけが今でも残っている

独白

雨が雪と変わり道路にうっすら積り始めた
弱々しい光ながら街のネオンが点き
光が雪に反射して温かな明るさを振りまいている
色鮮やかなパステルカラーの傘が往来して
雪道に華やかさを添えていた

身勝手な精神的孤立だったかもしれないが
私は一人であることを噛みしめた
思考の堂々巡りが始まり自分で自分の心を傷つけ
心を疲弊させる得体のしれない強迫観念につき動かされ
私は迷い児になって底なし沼に沈んでいった

通行人で上を向いて落下する雪に見入っている者もいた
帰巣本能をくすぐられて家路を急ぐ者もいた

私の心を沸々としたとらえどころのない
今の空模様のような虚無が支配した

私は自分の存在がこの雪によって
消し去られてしまえばいいと思った

雪の中におぼろに浮かぶ人影は足早に通り過ぎていく
自分の周りを通過していく通行人と自分との境遇の違い
を感じた
みんな家庭の居場所を目指して帰っているように見えた

この場所に私一人が取り残されている気分だ
鈍色の空から大きな雪の塊が私に向かって容赦なく落ち
てきた

私は舗装されていない道のくぼみの凸凹を
目を凝らすように見て避けた
道にできたくぼみは雪により明暗がはっきりしてきてい
た
雪はすべてを覆い隠すだけではなく
普段気付けなかったものを気付かせてくれる

どういう拍子だったのだろうか
傘を道端に放り投げ歩いた

私の心はウキウキしてきた
今までいた世界とは違う世界にいるようだ
クヨクヨ悩んでいたことが遠い昔のことのように思えた

私の目からとめどなく涙が溢れ出た

人間はしょせん人間でしかないと開き直った

電灯もない雪道をただひたすら涙を流しながら歩いた

私の人生が変わる瞬間だった

私の頭の中にはかくあるべきという固定観念が支配して
いた
それが崩壊して私の心は自由になった

心の中で渦巻いていた葛藤から結論を出した私自身の結論

天を仰ぐと無数の雪が
私を包み込むように優しく笑っていた

◆牛島敦子　富山県

風土記

雪山の蔭に見え隠れした
ふわふわと動く白い毛皮は
オコジョでもテンでも雷鳥でもなく
成人式の　フェイクファーストールだった
県庁所在地の大通りは
三日三晩の雪に埋められ　ホールにむかう駅も閑散と
（引っ込んでやがれ、）とばかりに
作業員たちは　容赦なく氷雪を撥ねのけていく
道脇に身をよけ
心づくしの紅い友禅に泥染みを付けまいと
娘は　振袖の裾を固く握る
若さ　美しさ　愛されて育ったよろこび
めでられるべき全ての極まるはずであった姿が
一顧だにされず　雪空の下に暮れてゆく
かじかんだ眼差しに見切られていく

屋根の上で　じいさんが踊っている
シャベルを掲げて
生きとらっしゃったか　九十は越しただろうか
下では　ばあさんが首を振っている
（落ちたって下は　雪か　浄土だよ）
振り返ると　長く姿を見なかった者たちが
埋まった家からわらわらと這い出て
画用紙をもらった子供のように
思うまま　道に筋を描いている
嬉しいのだ　久々に出番を得ることができたと思えば
人の目だのは雪の下　白く消去されてしまって
あるのは今と　この瞬間の身体ばかり

雪は

あらゆるものをひっくり返す

価値を無価値に
無価値を価値に

地震も台風もめったにこない
平穏の一言に覆い尽くされたような町
かつて　豪雪地帯と呼ばれはしても
いまなら麻痺は　ほんの十日ほど
しかもとければ跡形も無く
傷跡を長く残すこともないが

しかし

数日の狂気は
微量であっても
いつも大気のどこかに残って
抗体のように　潜伏菌のように

ここで生きる者たちの身内に刻まれる

過剰に慎み　均衡を求め
ことばの裏を酌みたがるのも
自らのうちに　またおなじく共に暮らすものたちのうちに
反転の予感と　その衝動が
しぶとく巣喰い　居座っていることを
どうしようもなく　知ってしまっているからなのかもしれない

あるいは　だからこそ　できることなら
そういうあからさまな　ひらきなおりを
剥き出さないまま　ゆきたいとおもう
こころの襞がたたまれてゆき
緑濃く　うつくしい　はるなつあきをも
影ふかくみつめて　過ごすからかもしれない

◆清水らくは　　熊本県

接ぎ木

優しいなどと言わないで。これは接ぎ木の快楽。私の心を満たすために、求めた枯れかけの木があなただ。心の隙間を見つけて、両手を広げて近付く。花が咲かなくてもいよ。葉が茂らなくてもいいよ。君は君でいいんだ、と言いながら、私好みに、変えてしまう。感謝は時を経て怒りに変わるだろう。変わってくれ。それで私は救われる。

優しいわけではなかった。私自身それを知らなかった。優しい私を愛していた。だから私は今、私を愛していない。私を愛せない私があなたはあなたを愛すべきだと説いている。あなたはあなたを愛すことができないので、あなたはあなたが愛せるあなたを探している。だから、接ぎ木をする。あなたになかったあなたに、咲くはずではなかった花が咲く。

優しくなりたくはない。誰かを求めて心を満たそうとするのが、今の私であると、私は知っている。私がいなければ沈んでどこまでも心を育てられなかった人たちよ、育てるべきではなかったかもしれないのだ。光が差さない世界のなかで朽ちていくときに見えるものを、私は見せなかった。枝を差し込んだ。差し込むのは気持ちがよかった。白状する。私に対して。

優しさを疑え。私が理想とするあなたは、私を受け入れないあなただ。あなたの根にはきっちりと他人を恨める強さがある。向き合えば、芽は、強く芽吹く。知っているが教えない。接ぎ木をしたいのだ。太陽に向いてしまうのだ。誰もが向いてしまうのだ。心は根を忘れて束の間の枝になるのだ。根を見ながらまた、木を、接ぐ。失われたものを思い、達する。

◆文香ヒロ　東京都

一四歳

午前零時
牛乳時限爆弾を非常階段の隅に仕掛けた
北風と太陽が

乳と瓶をゆする
漠たるスリルと成長痛が
一四歳を大人にしてくれる気がした
牛乳は逝った

過呼吸と深呼吸を繰り返す
一度眠れば目覚めない不安に
枕元のラジオの声だけが
やさしく共感する
誰も捕れるはずのない青春の放物線に
フライングレシーブする機動力をください
あいつは今日もマンションの5階から
グロックで赤のＲＸ-7を狙い撃つ

チャイムと共に校門へ獲物が流れていく
鰯は
先輩の検品作業に引っかかり
ナイフで丁寧に捌かれ
丁寧に財布を開いた

「日本は治安が良い」なんて
誰が言ったのだろう
鰯は二階から泣いて飛び降り
世界に右足首捻挫で抵抗する

紺のブレザーにコートを覚えた頃
あの子はマフラーを器用に巻いてくれた
そして
避妊具を得意げに財布から取り出し
大学生との乱交話を聞かせてくれる
スクールバッグにポスカで描いた友情は
精液で白く濁っていった

修学旅行に持って行った
写ルンです
「これは時を超えたロマンだあ」
民宿の親父が東北弁で聞かせてくれた
アンモナイトの化石と
琥珀の中のゴミ

名もなき漂流物が
二七枚
果てた写ルンです
わたしは時を超え
一四歳になる

アロマトリップ

ローズマリーカンファーが脳を突き刺す
大脳辺縁系にパルスが走る
ビニール袋に蓄えた香り
体育館裏で二人きり
血中に染み渡らせるように
吸っては吐き
吐いては吸う
次第にトリップが舞い降りる
セン公に見つかってもこれはメロンパン

父母がいない私たちは
二人で向き合い、天井を見つめる
前ならえで互いの頸動脈を押さえつけ
吸っては吐き
吐いては吸う
目を開いては閉じ
閉じては開く
親指に脈打つ生
次第に緩んでいく手と
遠くなる天井
酸欠の香りを鼻腔に置き去りにしながら
後頭部で地球を叩き割る

私たちはまた生き残ってしまった
メロンパンの香りはフランキンセンスに変えた
見えない十字架を吸っては吐き続けた

三ツ矢サイダー

白きインパール
息子は散りゆく
紫色の太陽が甲板を照らす

隊列を仕切るその眼差しには
淀みなく気概が溢れ
惜別の情をひねり潰す
「できれば三ツ矢サイダーを一本、買ってきてはくれないか」
突然の無邪気な願いは
私の一生の悔恨と化す

白きインパール
貴方は散りゆく
ただ一度よこした土色の手紙には
道頓堀で握った手の温もりが宿る
片道切符を握らせた何者かに
私の慟哭は届きはしないが
せめて貴方が振り向くように
最初で最後
虹色の蝋燭を恋慕と共に供える
私は生まれて初めて路傍に伏した

白きインパール
兄は散りゆく
「はしかい漢やった」
零戦をひたむきに創る兄貴を
学徒の私はいつも仰ぎ見る
弟を案ずる日記を見つけ
ページを繰る私の手は
シワとシミで溢れ
指先の脂はとうに失せていた
六十年越しの男孫は
私と同じ巳年で
兄貴と同じ顔つきをしている

白きインパール
大伯父は散りゆく
同胞は土に還り
生き証人は刻々と登仙の支度をする
ウィーアーデジタルネイティブ
今日もつぶやいては消し

その役割と重みに気づかない
親指一本で言葉を継ぎ
電脳世界に名もない歴史を紡ぐ
未来の生き証人はどこの誰であろうか
私はこの夏
三ツ矢サイダーの蓋をゆっくりと開く

マイノリティダンス

男でも女でもない
女でも男でもある
「っぽい」なんて安っぽい烙印で
私をコムパクトに縛らないで
場末のバーで黙した眼差しの先に
流星スピリタスが忘却にいざなう

朝、ベルガモットの香気が漂う
夜、ラベンダーの香気が漂う
それらの香りは男か?女か?
朝と夜を縫い付けて

一枚のパッチワークにしてやろう
チッチと舌を鳴らしながら猫と戯れて
私は手の甲から鮮血を垂らす

メジャーとインディーズを区分けたのは誰だ
A面もB面もない
レコードの針は落とすたびに
そこが赤道になる
西陽が責めてこないように
日付変更線なんて砂消しで削ろう
そしる大人を横目に
りんごジャムをたっぷりつけた
四枚切りのカセットテープを
今日も咀嚼し
脳内はエンドレスダンスホール
もつれる足でのステップ

ダンスの終わりは私が決める

鉛筆ニワトリと消しゴム

ホイッスルが校庭から聞こえる
自由選択の授業は顧問の権力によって
問答無用で体育になるはずだった
なのに何故だろう
僕は「吉本ばななを読む」という授業にいる
女子で溢れる教室で
ウインドブレーカーと短パンが
僕をさらに異物にしてくれた

「ねえ、ラグビー部なの？」
「そうだけど、君は？」
「わたし？帰宅部。部活とか無理」
「青春だよ、部活」
「何それ。バイトしたいし」

彼女の目は丸く、大きく、美しかった
たまに見せる寒色の笑顔は
十七歳には無い妖艶さを醸す

「ねえ、この授業で唯一の男子くん。しかもラグビー部。なんで？」
「こっちが聞きたいよ」
「ふーん」
彼女は僕の眉間から椅子の脚まで眺めた
「ていうかさ、ラグビー部のKっているじゃん。繋いでよ。何かの縁だし」

机をコの字に並べ替えた教室
無情になびく防炎カーテン
僕は「みかげ」と「雄一」の間を取り持つ

「ねえ、鉛筆ニワトリって知ってる？」
「何、それ？」
「ニワトリの羽が、全部鉛筆の削りカスで出来てるの。羽ばたくとね、真っ黒な粉塵が舞って近づけないんだって」
「まるでタコやイカみたいだね」

「そう。だから養殖用は餌に消しゴムを混ぜるの」
「消しゴム？」
「うん、それを食べて育った鉛筆ニワトリは、羽ばたいても黒い粉塵が出ないんだって」

校庭に語りかける彼女は
煤色の目をしていた

「わたしも、消しゴム食べたいな」

繋いで
別れて
卒業して
ネクタイを締め
ヒールを履く
ホイッスルは雑踏の跫音

「ねえ、今、渋谷に勤めてるんだけど」
「奇遇だね。一杯行こうよ」
「飛び切り燗がいいわ」

スクランブル交差点
君が消しゴムを食べていても
たぶん僕は見つけられる

返して、僕らのスーファミ

市民プールへ二〇インチで駆ける
河川敷の草花は青嵐と共にささくれ立ち
二人はギヤをあげた
次第に塩素が鼻腔を賑わす

「ウチの親、リコンしちゃうんだよね」
「・・・そうなんだ」
水着に母親の字で書かれた名前と二年三組
腕から伝って滴る同情と惑いは
プールサイドのひび割れたゴム製タイルにじんわり染み込み、飽和する
「どうしたらいいと思う？」

「どうしたらって……一緒にいたいの？」
「そりゃあ、ねえ」
「ちゃんと一緒にいたいって。言おうよ。伝わるよ、きっと」
「そういうものかね。なあ、帰ってうちでスーファミやろうぜ」
彼の名前と二年三組はすっかり乾いていた

ゴールテープへ二〇センチで駆ける
秋風が運動会を染めていく
見慣れたおばさんに、見知らぬおじさん
彼のお父さんは見知らぬおじさんになっていた
スモークのかかった眼鏡に浅黒い肌
二九センチで歩くお父さん
見慣れたおばさんは
なんだか化粧が濃くなっていた
アンカーの彼はわざと転んだ
下駄箱で二二センチに履き替える

油性ペンで消された古い私
片方だけひっくり返った上履きを蹴飛ばす
「結婚詐欺だってさ、あいつ」
「……サギ？」
「帰ったら俺のスーファミとかテレビとか、全部無くなっててさ」
「最悪だね、そいつ」
「何がお父さんだよな」

それから彼はずっとハナマルを獲り続けた
皆が塾に通い始めても
ずっと独りでハナマルを獲り続けた
一七〇センチを超えた時
担任が地域のトップ校を彼に薦めると
彼は下から二番目の学校へ行った
彼の妹はビッチになった

「なあ、帰ってうちでスーファミやろうぜ」

ゲーム屋さんでバイトをしている彼を
幹線道路越しに見たのが最後だった

◆小原友紀　高知県

打たれたマムシ

頂上めざして　お父うと二人　山を登る
前を行きゆうお父うが　急に足を止める
「ヘビがおる。大っきい。マムシや」
足が急ブレーキ　前につんのめる頭と体
「いやや、ヘビはいかん！　柯でおるが！」
一番怖(こう)おて嫌ながはヘビ　お母あと一緒
前を行かんで良かった　ぜったい先に歩かん

「動きなよ。そこに居りよ」
杖を持っちゅう手を　お父うは高う上げる
いきおいよう　ブンと腕を振り下ろす
ボグッ　へんな音が　大っきゅうひびく
お父うがへびを叩きゆう　何回も何回も
びっくりするばぁ　がいに叩きゆう

目ぇ開けちょれん　ギュっとつむる
くり返し　くり返す　杖を打ちゆう音
たぶん　ちょっとの間やったろうけんど
終わらんがやないかと思うばぁ　すごい長い

ぷっつり　音が止んだ
ちょびっと目ぇ開けて　薄目で　見つめる
茶色い長いがが　杖からたれ下がっちゅう
怖ないが？　自分やないみたいなかすれた声
「おまんを守らなぁ　いかんきね」
太い腕が杖を回して　ぶうんと放り投げる
ボフッ　とっとあっちの茂みで　草がたわむ

何ちゃあなかったみたいに　お父うは歩く
広い背中が　ちょっとずつ遠ざかってく
ぽっかり間があく　一人で歩きゆうみたいに
マムシと杖　太さがそんなに変わらんかった
あたしらで言うたら　ひっこ抜いた電信柱で
何回も何回も　強う叩かれゆうがやろうか

けんど　今よりずうっと大きゅうなって
小っちゃい、かわいらしい子を連れちょって
マムシに会うたら
あたしも　おんなじことをやるがやろうか

◆福田智子　　奈良県

二十年前
夕暮れのコンビニの本棚の前で
わたし　ぼんやり外を見てた
家路を急ぐ車のヘッドライトが　国道に点る
白い光が　輪を放ち　夕闇を裂く
あれは　幻惑か
そこに居るはずのない　あなたがいた
家に　いるはずだった
認知症という診断を下されて　ひとりでは
歩けないはずだった
わたしは束の間　その場から逃げてたのだ
病はゆっくり　近づいて母に　すみ着いた
そして　ある日　突然　引き金を引いたのだ

「そこにいる子　血を流して泣いてる　なにか　食べさせてやって」
見えないものに向かって　つぶやく
なにが　起こったの？
周りの驚きと怖れと狼狽のなかで
ゆっくり傾いて行った

あなたは　戦後すぐ　おとうちゃんと
ねえちゃんとで　満州から引き揚げたという
おじいちゃんの待つ寒村で
町育ちのあなたが　ひとり　担った　農業
水田は　体を冷やし　照りつける太陽は　若い
あなたを　痛めた
やがて　あなたは　三人の男の子を産んだという
が　ひとりとて　いのちをつなぐことは　なく
あなたの腕から　露となった
残った二人の女の子
そして　痛みが薄れた頃に　わたしが生まれたのだ

だれにも分からない　母の哀しみが　この頃わかる
亡くした赤子と　亡き夫である父の姿を求め
魂が彷徨い　　狂う母にしたのか
コンビニの幻惑は　狂気のはざまの　ひとときを
娘を見つけて　安堵を浮かべ
夕闇の中を　駆けてきた　魂は
荒ぶる海の国道を　駆けてきた魂は
はっきりと　あなただった
ああ
怒ろうとして　泣き笑いしている　わたしが
あなたの瞳に　映ってる
あなたを　狂わせるものが分からないまま
あの夕闇の中を　手をつないで帰った
木立の月が　どこまでもついてきた
どこまでも

ダリアの花が咲くころになると

部屋の闇に光る留守電ボタン
おかあちゃんの声が聞こえる
数分ごとの履歴が並ぶ
さっき　会ったばかりなのに
何度目か　「今度いつ　くる?」の声が　震えてる

おかあちゃん
火点もし頃には　勤め帰りの　ねえちゃんを
外で待ってるって　聞いたよ
車庫の低いブロック塀に　腰掛け
薄暮のなか　ヘッドライトに目を凝らす
みつけると　こどもみたいに駆け寄って　笑って
ダリアの花のような　笑顔

ああ　あなたが　医師から　告げられた残酷な病
見えないものが　見えて　自分が自分でなくなる
「そこに　ちいさな子どもがいるから　なにか　食べさせてやってな」
「おとうちゃんが　いないよ」
そう言っては　涙ぐんでた

最後まで残るプライドや感情に苦しめられた
かつて　おとうちゃんと暮らした部屋には
知らない顔の　ヘルパーさんがいて
混乱したあなたは　外でわたしたちを待つようになった

「待っててな　あさって　また　くるから」
帰り際　言いながら　振り向くと
鳶色の瞳がこどもみたいに一途で
その眼差しに　涙がこぼれた

ああ
おかあちゃん
車庫の角に　今は　もうあなたはいない
わかっているのに　まだ　夕暮れには　振り返って
探してる
わたしたちを愛してくれた
あなたのあの笑顔が　今も　浮かぶようで

父とオレンジ～問わず語り～

オレンジを見ると　思い出します
父と二人だけの病室でのこと
細くなった足を洗いながら
ただ　いのちがあるのが　有難くて
「なにか　食べる？」といつも聞いていました
「なにも食べたない」と言う父は　それでも
オレンジだけは　口にしてくれました

あれは　初夏
父が　大病だと聞いて　駆けつけた夜
夕食を囲むテーブルのまんなかで　父は困ったような
切ない表情を　わたしに向けました
「食べれんわい」と　立ち上がって　呟く
久々に会う身体は　痩せて　黒い瞳は小鹿のように
こどものようにも見えました

それから　病は　父のいのちを　音もなく　足早に蝕み
私たちの手から零れる砂のように　奪っていきました

夏が　終わりを告げる頃
父とふたり　居間で過ごしていました
縁側の軒先越しに見える空が　あまりに青く
風が　涼しい日でした
「おとうちゃん」
「わたしが　生まれたとき　どう思った？」
問われて　父は　真面目に答えました
「可愛い元気な赤ちゃんが　我が家にやってきたって
嬉しかったで」
なぜ　そんなことを聞いたのか　今もわかりません
歳の遅くに産まれた娘の　幼い日の　父との思い出は
あまりに　少なく　けれど　ひたすら　その背を追って
生きたわたしは　今しかないとでも　思ったのでしょう
か

「背筋は　伸びてるか？」と父は　いつも私たちに　尋
ねました
半生をかけ　「隅田川の仕手」を舞った父が　そこに居
る
かっこいい父でした
「焦点が　合わんわい」
旧知の絵描きからの大輪のひまわりの絵手紙を
手から落とし　半日後に旅立ちました

食卓に　残されたオレンジひとつ
その前の晩も　父は　それを食べて　笑っていました

かあちゃんとわたしのおぼろうた

「ええ　こやなあ。よう　寝たか？」
四歳のわたしは　母の声で目覚める
畑の朝仕事済ませ　太陽の匂いつれて　帰ってくる母は
覗き込んでは　笑いながら　頭を撫でる
寝ころんだまま　見た庭には　赤いダリヤが
風に吹かれて咲いていた
ごはん食べたら　ねこのミーや　羊と遊んだ
母のほつれ毛と細い肩と日焼け顔　今も　思い浮かぶ
当たり前そうにわたし見て　笑った
テレビもない

なにもない田舎の夜は　母は
三人の娘と　糸を繰って過ごした
とうちゃんは役場勤めの傍ら
能の世界にのめりこみ　半生をかけたから
家庭は　母ひとりで　切り盛りしていた
町育ちの母が　田舎に住み
野良仕事も　しない連れ合いの
遅い帰宅に　業を煮やした四十代の母
晩年　おとうちゃんは　なに　考えてるか
わからなかったと　呟いた
後年　アルツハイマーに冒されたとき　娘に　呟いた
そのときのことを　姉が　こっそりいう
「囲炉裏の火箸でたたいたこと　あったで」
父は　伊達に家出してみせた
それは　暗く　バスもない村で
五分と持たず　すごすごと　帰ってきたという
それは　雪深い夜だった
そんな翌朝　台所での　ふたりは　決まって
並んで　笑ってた

前夜の修羅とは　程遠いふたりの姿
あたたかな湯気とゆったりと　流れる時間の　あの空気
つららに降り注ぐひそかな光のあたたかさのようで
今も心に残ってる

ああ
かあちゃん
人生　長い長い旅だったね
辛いことも　かなしいことも　切ないことも
いっぱいあったろ
その終わりに　何もかも忘れる病にかかった
泣いて　泣いて　怒って　険しい眼もした
とうちゃん　探した
産まれた家　探した
そして
終いに　だんだん　元のかあちゃんに戻る
はにかんだこどもみたいな笑顔を私たちにくれる
いっぱい教えてもくれた
ひとは　あったかい手に触れるだけで　やさしい顔にな

るねんな
わたし　かあちゃんの笑い顔が　やっぱり好きだ

◆真野慎吾　茨城県

街角の心象風景

ガリガリに痩せた少女の細い、細い今にも折れそうな脚
身に纏い付いたエプロンが奇妙なエロティシズムを醸し出す
ケンタッキー・フライド・チキンのコーナー
街角で僕は一人座る
まるでこの場に不釣り合いな僕の存在を感じながら　僕はいる
新宿の雑踏の中に何かを求めてやってきた　僕を待っていたのは
都会の寒々とした人の群れだけだった
虚ろな心の中に　虚ろな蝋燭を燈して僕は歩き続ける
ガリガリの少女の脚　ケンタッキー・フライド・チキン

◆高遠　零　北海道

白骨

君は骨が砕ける音を知っているか
骨を踏み砕いたことがあるか

無数の骸が折り重なる地下深く
幾百年と時を重ねた白い原
それは目に見えるいのちの終わり

死者のうたが聞こえるか
誰もが同じ結末をたどるのだ

君も生を終えれば白い原の一端
それでも死に急ぐのか

追憶

幼い頃
あんなにも無邪気に
光に満ち溢れて
生きていたのに

なぜ今は
暗闇の中を手探りで歩くように
生きているのだろうか

光も見えず
もがくことにも疲れ果て
死にたい、と願ったが
何かが私を引き留める

そんな日々を繰り返し
絶望の淵をただ
生かされてきた

黎明

他人が決める幸せが君の幸せか
君自身の声は君に届かず
雑踏に掻き消されていることに
気づいているか

他人の言葉は聞こえても
自分の言葉は聞こえてこない

君が求めているものは
いつだって君のなかにある

ぼくは君のために在り
君はぼくとともに在る

ぼくの名は　こころ
君と生を旅する　君の唯一

遺響

―君の心の声を聴け

そう言い残して彼は消えた

何も語らずとも

私の全てを知っていた

彼は
死にたいと願う私が見た幻か

たとえ幻でも
彼のうたが聞こえたから
生きていたのだ

彼のうたは私の記憶
私が生きる唯一の証

ああ今日も
苦海に美しい夜明けが

◆七草すずめ　静岡県

展示室2

〈部屋〉

心臓のうらがたしかにざらついて
この部屋すべてを呑み込みたくなる
すぐうしろまで追いかけてきた夜が
海面にはもう張りついている

淡い詩がぬりたくられたキャンバスは
おとぎ話の調子で囁す
船だけがぼくらを渚に縫いつけて
現実色した暗示をかける

〈絵〉

流れ星、カレー、潮風、幻肢痛
絵画は絵画で絵画ではない
ひそやかに時計の針に触れるきみ
見ごろの花が薫りはじめる

青色と蜜柑色とが溶ける時刻
海と空すら融けた音がして
やわらかいシフォンの月が顔を出す
大きくなった終止符のように

〈海〉
あの日から夢見心地なぼくのこと
きみはくすぐったく笑うけど
真っ白のシーツに潜るこの時も
四角い海では命が謳う

――もう、夜も更けたね

――今ごろ、あの部屋のあの絵に、光はあたってるかな

水面

始まりはさざなみの静けさと
光がにじまない程度のゆらぎ
無数の水の小さなざわめきは
時折ひとつの音符に変わって
此処より鮮やかである色への
あこがれを鳴らしまた鎮まる

不意に大地がぐらついたのは
とても小さなエラーだった
ひと掬いの衝撃がすべて狂すことを
あいつは知っていたのだろうか
体温は夏の日差しを上まわり
ルピナスの花が意味ありげに笑う

地球の自転のたしかさと
月の引力のやわらかさで
大海原は軽々とかきまぜられる
たったひとつの帆でゆく船が
どんなに心細いか知らないだろう
だからそんなふうに笑うんだろう

獣みたいでやわらかそうな髪が
ほんとうにやわらかいのかたしかめたい
そうしなければいられない病気だ
そうでなければ俺は病気だ
大波でわたれなくなった橋のたもとで

アダムとイヴの呪いが泥になってまとわりつく
無数の目が監視しあう世界に俺は生きている

水面がもう揺れないようにと心を海で満たして
空気のない水槽で泳ぐこともできずただ溺れる
たった一滴でもそこに返せたらいいのになんて
夢見心地の俺をアクアマリンが冷たく見ている
ならいっそ深海の青のもとまで沈んでいきたい
その瞳が閉じ込める水底の色を見て終わりたい
なにも知らないそいつの海にはすこしも触れず
いつか歩きたかった渚の音色を最期の記憶にして

わたしの詩は未来をうたわない

悲しいときだけ結束するものたちに
未来をうたう資格はないだろう

空にぶちまけた秋刀魚の骨が
俺とお前の違いはなんだと問う
かき混ぜようと伸ばした手は届かない

地面と空はレイヤーが違うという世間話
煙草を吸う軽トラの爺さんが
ドーナツを選ぶ若い妊婦に変化する
誰もが肉と血の塊で細胞の塊だもんね
昨日あたりに起こりそうな痴話話

生首のように転がる収穫後の稲の根に
青青しい草がひょろりと生えているのを見た
寒々しい陽の光に助けを乞うみたいに
土の匂いが死の匂いに変わるまでの御伽噺

わたしの死は未来をうたえないから
わたしの詩は未来をうたわない

◆senri49　神奈川県

希望

暗闇の中で
うずくまっていた

行く当てもなく
進む理由もなく
ただ息をしていたんだ
あの日
小さい小さい光を見つけるまでは

私を呼んでいるよ
私の中の何かがそう言った

光の中はまるで速く
今は暗闇が小さく小さくなった

私は生きている
昨日でも明日でもない
今を生きている

◆柳沢　進　　東京都

巡礼

酔っ払った象の行列がホテル聚楽を通過した
ずしんずしんではなくぼよんぼよんとである
劇場から劇場へ監視をつくしている
象は一処に固まって静かにしている
だって非暴力ですから

どこか遠く彼方からの「おーい！」と親密さを
伴って声をかけられた一頭につづいて
金魚の糞みたいにみんなで後をついていったら
こういった大所帯になった訳です
人間とあまり変わらないでしょう？

気が付いたらテレビには　坂と吉本の構成員ばかり
よしんばそこにあなた方はなんか意味を付与したり
楽しみかたを教授したりするのでしょう？
仲間をドジンと罵ったり繊細なふりをして繊細な人を
苛(いじ)めたりという高度な社会を持ち合わせていないので
こうして何もふれまわらず中古ＣＤラックを潰すみたい
に
たまたま歩いているだけです

自発的謝罪を期待しているのでしょうが
自他ともに認める武闘派の私たちですから
せいぜい一瞥をくれていちいち謝りません
この居心地わるい場所を
ただ歩いているだけです

黙契

何も告発するなという約束はまもられなかった
ニコニコ薬局の田中さんから
指定の時間通り薬は届かない
折返しの電話はなかった

何も驚くなという約束はまもられなかった
ゆうしょくじんですか？　そう問われなかった
有職人種が有色人種を脅かすのは驚くに値しない

何も疑うなという約束はまもられなかった
みずからを証す必要性をまず感じなかった
身分を隠す為職業を偽る者はいくらでもいた
何故ゆうしょくに拘るのかとも聞かなかった

その基本的問いにたいして
これも仕事ですからとつぶやかなかった
選択と判断の世の中、せいぜいゆりかごから墓場まで
おでんか鴨鍋かの違いですよと言わなかった
うすぺらな倫理を振りかざし語る割に珍しく激昂しなかった
（発言を撤回しなさい、冒涜ですよ　おい　すぐ約束しろよ！）

何も約束するなという約束はまもられた
有職者も無職者もが持たざるは金と時間
何色にも染まらないけどそれを特権とは思わないし
無職は自営業に擬態しないし　何もできないし　何でもできる
　ほんとうは
顔色、声色、目の色をうかがい、うかがう必要もないの

が無職
むしょくが怖いですか？

◆入間しゅか　兵庫県

冬について

きみは断頭台のようにまばゆい陽光に魅せられて、うち震える。うね雲に導かれ、凍雲の街へ。

きみは水色の錆びついたベンチに腰掛けている。一陣の寄る辺ない風が吹く。落ち葉が物憂く転げまわる。しゃがれた遁世的な鳥の声が鈴なりのクロガネモチの木陰を曲がろうとする。

部屋のない壁には埃の被ったボロっちい硝子窓。開けようとすると、錆びついており、ギリギリと軋み始める。きみはすべてにえんがちょした。お別れに、温かいコーヒーをいれる。

そして、ホロホロと夜が降り注ぐ。きみは星の光があの世に届くまでの時間を計測する。死んでから星なんかにならないために。

きみは夢枕に立つ幻にふれてみたくて、輾転反側している。瞼のカーテンを下ろし、固唾を呑んで待ちくたびれる。さっきのえんがちょはなし。

硝子窓の煤をはらい、窓辺に寄りかかると、部屋のない壁はにわかにざわめき立ち、いつまでも完成することなく風化し続ける景色に馴染もうとする。

もうこれ以上言うことのなくなったきみの唇は渇き、きみは自らのしゃれこうべを想像する。窓を閉める。建具がはずれ崩れ落ちる。凍雲は流れる。モノクロのスナップ写真のような仄暗い街角に、まもなく朝が来る。

◆西山龍喜　千葉県

かたちについて

一人でいるというのは

まるで雲のように
何にも縛られず自由に見える

しかし形に縛られずどこまでも
広がり薄く溶けてしまいそうでもある

または蓄積し偉大化し
大変な気候を生み出すかもしれない

それなら私は
そこらの小石や枯れかけの雑草でも
形が欲しいのかもしれない

そしてその次は雲を求めるだろう

心の玉

わたしの心には玉がある
純粋で青白い光をしたほんの小さな玉だ

その光はわたしに虚しさを教えるが
その光はあまりに綺麗で捨てられない

その光を瞼で遮るが
その光は瞼を越えてひかる

わたしは今も虚しいままだ

どなたかにこの玉を拾って欲しい
そしてその玉を私の知らないどこかに捨てておいて欲しい

そうで無くばわたしはきっと光を再び求め
また目を瞑るだろう

◆神戸　唯　　兵庫県

波とその人

波は
砂浜の

少しでも高いところを目指して手を伸ばし
その吐息を泡に変えもと居た場所へ
後ずさる

繰り返し、繰り返し
近く、遠く
手を伸ばしては砂をつかみながら
滑り落ちる

行って、帰って
砂浜に立つその人に
届くまで

波が
遠慮無くさらっていく砂の上に何度も愛の言葉を書き
向かってくる水を手のひらにすくう
その人は

ズボンの裾をたくし上げ、寄せる波の温度を足首で確かめる
染みこんだ海水は、じわりじわりと膝に上る

やがて濡れた足をタオルで拭き
ズボンの砂を払い
時計を見て夕食の時間を確かめ
打寄せる波の音を後ろに聞きながら
振り返りもせず
家路につく

いつでもここに来れば
波に逢えると
信じて
いる
。

◆感王寺美智子　福岡県

さよなら

玄関から最後の一歩を踏み出すと
敷石がザリッと渇いた音で鳴いた

薄暗い座敷をもう一度振り返ろうとしたが
何者かに背中を押されるように動かない
歪んだ戸口を閉めようとしたが
抵抗するように動かない
「かして」
母がひょいっと軽く持ち上げると
聞き分けの良い子のようにスッと閉まった
薄れかけた父の表札を外し懐へしまう

さよなら
草木に埋もれた瓦屋根
名前も知らぬ山野草
父と同い年の高い高い杉の木
茂みの中の小さな野仏
底が見えない池のメダカ
さよなら
縁側に置いたままの父のサンダル
シュルシュルと蜥蜴が縁の下へ入って行く　さよなら
さよなら

母は降りる
二度と上らぬ坂を降りる
何もかも捨てて駆け上がって来た坂を
何もかも置いて下って行く
サンダル履きの若い女が駆け上がって来
母とすれ違い上がっていく

「大丈夫　思い出は消えないよ」
「それがね、消えていっちゃうのよ」

遠くに遠くに歩いていく
刻まれたはずの思い出が
母を追い越して歩いて行く
母を置いて歩いて歩いていく
母の背中が歩いていく
私は　それを後ろから見て歩いていく
あなたがふと振り返るときの為に

◆永田浩子　　千葉県

降り止まぬ雨

激しい雨音に　目を覚した
四日も五日も　九州に線状降水帯が停滞し
各地に被害が出ている

お母さん　お母さんの住んでいた地域も
大量の雨が降り続いていますよ
お母さんがホームに入所したすぐ後に
熊本地震が起き
お母さんは難を逃れました

自分の家が大きな被害を受けたと理解できず
自宅に帰るのを心から望んでいましたね
お母さんの願いを叶えてあげたかった
そんな悔いを胸いっぱいに　雨音を聞いています

お母さんが百歳と七日で　この世を去って一年半
その一か月後　二〇二〇年一月十五日
日本で最初の「新型コロナウィルス」感染者が確認され
僅か数か月で　病院や施設の面会が禁止されました

もし　お母さんが生きていたとしても
会うこともできない状況になっていたのですよ

地球温暖化で異常気象が発生し
世界のあちこちで山火事が起き
日本では　豪雨による大洪水や土砂崩れなど
かってない災害が起きています

世界中の一人一人が工夫をし
二酸化炭素の排出を抑えていかなくては……
お母さん　まだ強い雨音が続いています

◆蒼井びわ　　岐阜県

ハミング

切り倒された大木が唄のなかで生きている
おまえの唄でわたしを不死身にしてほしい

底無しにやさしいおまえの
どん底が日に日に深くなる

来世の話は二度としないで
ほら　木陰においで
命懸けで素肌を晒そう
永久に朽ちない幹のつめたさ

唄い方なんて忘れちゃったね
合唱祭で埋めた時限爆弾
取り出すのがこんな日なんてね

悲しいニュースをＢＧＭに口ずさむハミングの美しさよ
焼け野原に登る朝日のような
おまえの唄でわたしを

◆奥山綾子　　兵庫県

子を
産むことは
母親にとって
つかず
離れずの世界の
入口です
（離れた真実愛）

泣く原因
さぐるより今は
泣き場所
探しなさい
あなた自身の変化
の為に
（体まかせの成功）

◆沼蔵ハロ　　京都府

真冬の歌

ツンと凍る澄んだ空気に
雪の気配を感じる朝は

跳ねる感動に心が揺れて
窓の向こうに雪を望んだ
雪を蹴り飛ばし足跡を残す
白い通学路を思うたび
愉快な気持ちは心を浸して
期待が心を逸らせる
今日がいい日になるといい
定期テストの朝だけれども

◆風見みどり　東京都

嘘でもいいから

嘘でもいいから、安心させて
あなたは大丈夫
大丈夫だから、と
嘘でもいいから、抱きしめて
赤子に贈る祈りのように
あなたの未来は明るいと
温めなおされたスープや
何も言わなくても空けられた席
押し付けられた折り畳み傘に
いつのまにか付けられたあだ名
そういうものが、あるんだと

◆秋永　群馬県

おかえり

四角い窓わく斜めに見えた
今君が泣いた
世界が歪んだからわかった

まどろむツユクサ
弾け散る星空
どこでも行きたいのに
どこにだっていけない

姉は留守です
もう帰りません
勉強した詩 頭からすり抜ける

おちて乾いて消えてく
汚く跡になってきえてく

持っていられない熱情
いらないなんて嘘だよ
欲しいなんて嘘だよ
笑ったっておべんちゃらさ
黙ったって遅いよ
悔やむには遅いよ

死ぬほど走ったアスファルトの上
転がって喚いた幼い日のガキだね
大人にならない方が良いよ
そのまま消えちゃえ抱えて
苦しさ抱えて路地まで
半分ならいらない
どっちかなら捨てなよ
飛び損ねた蛍は電灯の下くっつく

天気にならないでね
そしたら帽子をかぶるね
君から見えないようにさ
笑えないからさ

カナリアシンドローム

ヒリヒリしていた傷のあと
あなたと別れた雨の夜
となりで笑った夏の日を
思い出しては泣いていた
無音がざわめく怒りだけ
取り出し詰めた瓶の底

いらないなんて嘘なのに
心はいつも空の箱

空よ
飛ぶ鳥を落とすの？

なにも
持っていられない
このままは、きっと生きてゆかれない

キツく締めた瓶のフタ
いつか開ける日が来るのだろうか
来ないといいな私のため
来ないといいな君のため

ピーチク泣けないカナリアの
声を吸いあげ泣く空よ
心音すらもかき消して
夜隅にだけは置いてください

◆谷口欧介　　東京都

不安

いつでも、ふいに、部屋に一人でいるとき、肌の上を蝿が、とりあえず何らかの小さな虫
が、這っているような感覚があった。

二の腕だったり、鼻先だったり、膝だったり、ふくらはぎだったり、とにかく肌という肌に、乱雑に、突然に、表れた。

その感覚が私を襲う度に、私は不安になり手指を被せたり、覗き込んだりして確認してみるのだが、ただの一度も虫が這っていることは無かった。

しかし、私が感じるということは、私にとっての事実に他ならないので、私の体に度々虫が這うことには間違いがなかった。

葛藤しているのだ！葛藤。

右と左だとか黒と白だとかそういう二つの間で彷徨い、迷い、戸惑うような歯切れの良いものではなく、こう蜘蛛の巣状に広がった、分散した、散りばめた思考がぐるぐるぐると蜘蛛自身を巻き付けていく。よせばいいものを、止まることを知らない思考は分散し、ぶんさんし、けっしてひとつに集結することは無いのだ。言葉にすれば楽になるとかそんなことも無くタダそこにあるのだ。私が居ないところに私がいるように（そんなことは無い）

ここに無いものがここにあるのだ不思議なことにこれはあるのだからカッコをつけたりしていやらしく弱気に弁明などする由もないのだ。何もしなかった日の夜のようなつっかえた胸中が血管をめぐり指先をつたい部屋を覆いドアを開ける。密室でないとどうにかしてしまいそうなわたしには部屋が無い。どこにいても聴こえる音が形にしなくてはいけない強迫的な観念がひたすらにひたすらに頭を打ち付けるのだ。弾けないピアノは鳴り止まず、変わらないギターの腕前もどうでもいいやと投げ捨てては夜の十一を回った頃に拾い上げてはホコリを払いまたつまびいたりしてしまうのはなんと愚かな事だ。始めなければよかったのださいしょから。無駄な劣等感も期待もそこには無かったのだ。火のないとこに煙は立たないのは真である。これをまた見返しては何とか正気を保つ。芸術家だとかあーだとかどーだとか言葉に縛られて何も出来ない私は何よりも馬鹿であほでのろまで凡以下未満だ。たまには、夜に月を見たくなるが。、まどを開けるのが億劫でそれすら叶わないのだ。、音楽もまた億劫で曲などはくだらないし勉強なんてのはひとしおだ。絵が描けるように産まれたかったとまた、わけもわからず思いねがうのだ。寝たら忘れるのだ。

ジコチュージコチュー

私はジコチュー
自分の事しか考えられないので有りマス！
私の双眸は内側に向けられており
私の鼓膜は鼓動に合わせて震えます
私の鼻は内側によく利き
私の舌は口内に佇み
私の肌は私にはりつきます

僕には窪があるのです

僕はなんとか頑張って
窪を満たそうとしてみます
いつか平になるように
窪を満たそうとしています
けれども窪がある場所は
なんと靴底だったのです

歩み進む度、生きる度
底はすり減るばかりです
窪は暗くなるばかりです

◆あさとよしや　沖縄県

闘争

窓の外の黒木が僕を見て嗤っていた
なので家に置いてある延長コードを
めいいっぱいつなげた電動ノコギリを
黒木のそばまで持ってきた
そのノコギリの刃を黒木にあてがって
電源をオンにした瞬間に
この黒木に刻まれた様々な過去の記憶が
僕の中に流れ込んできた
それは決壊したダムのように
木の記憶は土地の記憶であり
ひいては地球の記憶であり
つまりは僕を見て嗤っていたのは地球なのだ
地球は僕を見て嗤った　僕は地球に嗤われた
電動ノコギリの刃を伝って流れてくる
怒涛の記憶に僕は押し流されることなく
歯を食いしばって
足は地面に根を張ったように踏ん張って
高速回転する電動ノコギリの刃を
黒木にあてがい続けた
しかし黒木もなかなか大したもので
直径十二、三センチといったところの
そこまで太くないのにもかかわらず
めちゃくちゃに硬いのだ
僕は負けそうになった　くじけそうになった
これは太古の昔から続く
人間と自然との闘いだ
東洋人は自然と調和することで生きてきた
西洋人は逆に自然と対決し征服することで発展してきた
西欧文化に被れた僕は自然と闘うことを選び
そして立ち向かっている今　現在
負けるわけにはいかないのだ
次第に陽が傾いてきた　やがて日が暮れる

日没までに決着を着けなければ
どこまでも深く圧倒的な闇が襲ってくる
はやく黒木を倒さなきゃ
お前を倒して自然に打ち勝つ
お前を火に焼べて闇に打ち勝つのだ
僕はそうやって二百万年生きてきたのだから

◆横田篤樹　東京都

十六の孤独、海の妄想

鈍色の曇り、朝六時。
冷たい酸素、揺れる海。
嗚呼
僕は確かにここにいる。
連れて来られて伊豆にいる。
二年振りに砂を踏んだ。
けれど
じゃりっと音を立てる素足じゃなくて、
さくって音のするハイカットのスニーカーで。
僕は立ち止まり静かに座る。

「僕も幾許か大人になった」
泣かなくなったし、
恋も知った。
そして孤独も飲み干した。
やはり二年という数字は、
僕を塗り変えてしまう。
冬の冷たさのせいか
海の広さのせいなのか。
僕は悩む。
ただ悩む。
白く泡立つ青黒い境界線。
遭難した木の棒は、
ポキピキポキピキ
虚ろな目で恋人を探す。
入水したペットボトルは、
ブクブクブクブク
自分の出自について論文を書く。
遠泳している野球ボールは、
ポーンポーン

思い出に花を咲かせる。
そこにいる僕。
ザァーンザァーン
ただ悩む。
悩んではさらわれて、
さらわれては悩んで。
この海のように無限で、永遠に。
「この海はあふれる孤独で生きている」
そう僕は言葉を流す。
いつかの砂のお城。
いつかの水中鬼ごっこ。
楽しいという気持ちは、
生憎一人用だった。
僕は再び歩き出した。
やはりハイカットのスニーカーで。
孤独が跋扈するこの砂浜を、
もう僕は素足で歩けない。
この海に叫んだ
「早く大人になりたい」の九文字は、

きっと叶ったのだろう。
ひゅるり、ふわり
海風が伸ばしかけの髪を揺らす。
そうだまた来年ここに来よう。
一人で、
同じスニーカーを履いて。
そして船を出すんだ。
この青黒い海の向こうへ。
体も心も余さず詰め込んで。
きっとさみしいだろうけど、
でもその時僕は一年、
数字を刻んでいるから。
大人になっているから。

鈍色の空、朝七時。
冷たい酸素、揺れる海。

もう帰らなければ。
母に怒られてしまう。

僕は砂を蹴った。
じゃりっと音がした。

◆Nostalghia　東京都

重り

風邪で休んだというクラスメイトの家に
委員会のプリントを届けにいった夕刻
信徒の少女ははじめて長屋を見た
引き戸のむこうに霞むひとの影は
安っぽくくぐもった声で
「ありがとう」
といって消えた

プリントを手にしたまま玄関先に突っ立っていると
彼女のおばあさんらしい人が玄関からそっとでてきて
「内緒だよ」
と、手に持たせてくれたあんぱんは甘かった
嘘みたいな甘さだった

スーパーマーケットの輝きのなかで
信徒の少女は買い物をしていた
ひとりきりのお母さんのために
おいしい魚を焼いてあげようと思った
レジに並ぼうとパンのコーナーを通りかかったとき
棚と棚の隙間から
あのクラスメイトのおばあさんをみつけた
少女が見ているとも知らずに
おばあさんはパンを盗んだ
みっつもよっつも
エコバッグに突っ込んだ

信徒の少女は
クラスメイトの女の子のはじけるような明るさが
妬ましくて
いつも

どこかに
甲高い叫び

狂っていく鳥の群れが
地面と戯れる
絶叫

橙色の半目の瞳が
地面の上に寝転んで
じっくりと
人々の剪定を
狙っている

赤

信徒の少女は団地の舗道を駆けた
つまづきそうになり
涙が頬にふれないように
つまさきのほうへ歩く

少女は重りについて考える
嫌だと思ってきた重り

私は良い信徒になろう
おかあさんといっしょに
ちゃんとお祈りをしつづけよう
良い信徒になろう

◆樋口健司　　岐阜県

隠し田

遠い昔、小・中学校が木造校舎だった頃
奉仕活動で、学校林下草狩りに行った。
檜林の下草を刈った後、休憩時間になると
先生や先輩達が、声を顰めるようにして
隠し田や隠し畑について、話し始めた。
最初は、何の話かわからなかった。
が、太閤検地以後の日本にも
未登録の農地が存在した事が
朧気にわかってくると
驚愕と興味が強く沸き上がってきた。
里山と奥山の境界付近の杉林に

小さな池が存在し、噂によると
戦前、かの地に稲が植えられていた？
とのこと。
雑草の茂った窪地の周りには
人が積み上げた、畦らしき
遺構が残っていた。が、中に侵入
するのは禁足地を汚すみたいで
隠し田には踏み込めなかった。
先年、半世紀ぶりにボランティアとして
山麓のゴミ拾いに参加し、不法投棄の現場に
心を痛めつつ、登山道に分け入った。
山も厳密に言えば、登山道以外は
国、地方自治体の森林、もしくは私有地で
不必要に登山道から外れるのは
法を犯すに等しかった。
と、鬱蒼とした林を歩きながら
その先に、隕石が落下してできた様な
猫の額程の隠し田があるのを思い出した。
太陽が、燦々と差し込む
干上がった隠し田の残骸に、夫婦と
思われる鹿が、仲良く身を横たえ
こちらの様子を窺っていた。

私は一礼すると、深い溜息をつき、素早く
登山道まで引き返した。隠し田は原型を失い
私の脳裏から、一つの伝説が
消え失せていった。

誕生日

自宅付近のバス停から、午前五時始発の
路線バスに乗車し、某駅まで四十分程移動した。
某駅からは、五時五十分発の始発列車に乗り
四つ目の無人駅で下車し、そこから緩い坂を
登り、高台にある旧紡績工場を目指す。
六時半丁度に、工場の裏門から数メートル
離れた位置に佇む、寂れた潜り戸に到着。
辺りは薄暗く、手探りで戸の鍵を解錠。
と、目前に、広大な旧繊維工場敷地が現れた。

冬場にはこの位置から、荘厳な来光が拝める。

五年前、非常勤の管理人募集に応募し
まぐれで、採用が決定した。
管理人の業務は、百メートル四方の敷地内に
残る木造三階建事務所、三角屋根の工場群
それに、昭和の木造校舎を彷彿させる、二階
建て宿泊棟等を、半日程かけ、異常が無いか
点検して回ることだった。
建物の保存状態は良く、僻地にあって固定資
産税も廉価で、私が簿給に耐える限り数年は
生きながらえると思われた。
この建物群が産業遺産として認可され
未来に生きる可能性は低い。が、希望が
まったく無いわけでもない。各建物の解錠
空気の入れ換え、施錠、広大な敷地内の除草
を終えると、コンビニ弁当にありついた。
数年前、六十年間封印されていた
宿泊棟の一室を開いた。火災の危険もあり
部屋を清掃した。と、その際、住人が
残していった某詩人の詩集を手に取り
「人生は退屈だ」と言う様な一節を発見した。
その瞬間、長年溜め込んできた緊張と苦悩が
少しだけ、溶け去っていく気がした。
定刻通り、工場の敷地を出る。今日も、誰
とも言葉を交わすことはなかった。が、無事
に時間潰しができた。山間に沈みゆく太陽に
手を合わる。今日は私の誕生日。コンビニで
夕飯の総菜を一品多く買って、帰ろう。

不浄門

友人に誘われ、大きな屋敷の裏門を潜った。
裏門と離れた場所に、まったく趣の違う
鄙びた麗美な門が固く扉を閉ざしていた。
「あれが正門？」と、友人に尋ねると
「いや、不浄門。」
という答が返ってきた。
不浄門の意味がわからないまま、私は

友人に従い、城郭を彷彿される母屋へ
入った。暗く長い廊下が、この家の
歴史を強く顕示していた。

二階から不浄門を見下ろしていると
友人が、あの扉は葬儀の際にだけ
開く・・・と、聞かされ、言葉を失った。
友人の部屋にいるのが恐ろしくなり
この禁足地の様な屋敷から、一刻も早く
逃れねば・・・と、震えた。

薄暗く、大きな友人の勉強部屋で
緊張に包まれた時を過ごした。
彼の家族に出くわしたら、不法侵入者
として、叱咤されるのではないか？
という畏れが、鎌首をもたげてきた。

早くこの家から逃れたい……と、生唾を飲み
友人を仰ぎ、何度も愛想笑いを繰り返した。

と、友人は私の心を察したのか
寂しそうに「外へ出よう」と、折れてくれた。

玄関先で靴を履き終えると
不浄門に目を背けるようにして、道路に出た。
不浄門の無い、粗末な我が家が
限りなく愛おしく
健全な空間として感じられた。

宝物

学年末の学級文集作りが始まると、筆無精の
私は学校へ行くのが憂鬱になった。
作文が進まずにいると、担任教師から学級
委員のN子から指導を受けるよう指示された。
S子は才女で親切だった。教えるのが上手く
担任教師が職員室へ去っていっても
私に寄り添い続けてくれる
忖度の無い聖女だった。
文集の事は考えず、一番美味しいと思った

食べ物について書いてみない？
と、駄馬の私を導いてくれた。

彼女だけに見せるつもりで
成績不振が理由で家を追い出され
夜半、町中をさまよった挙げ句
墓地に備えてあった、蟻の群がる
肉桂餅を失敬し、その美味しさに我を忘れた
事を書いた。
S子はそれに目を通すと、
「私よりあなたの方が文才がある。」
と、煽ててくれた。
が、課題にそった作品は完成できず
クラスの同調圧力と孤独、寂寥に
耐えねばならなかった。

終業式当日、担任教師が学級文集を
配布しながら
「今年も文集課題を提出しない
和を乱す奴がいた。情けない。」
と、私を睥睨してきた。
S子の作文にだけ目を通したら
文集なんて廃棄する気でいた。
が、なぜか彼女の作文が見当たらない……。
数日後、N子に向かって
「何で？」と尋ねると
「あなたが一生懸命作文を綴ったのに
先生から『こんな、下劣な作品は
文集に載せられない。』
って、言われたの。だから、私も……。」
と、声を震わせ、悲しそうに
微笑んでくれた。以後、文集課題は
必ず提出する様にした。

半世紀以上経過した今、二人の作文の
抜けた一冊の文集だけが手元に残る。

天女様の即興詩

酔い潰れることしか知らない貴男が
詩をお書きになるとはねぇ？
でも、女心が見抜けない貴男に
本当の詩なんて、綴れるのかしら？
何なら今すぐ即興詩人と化し
私をモデルにして、何か綴ってみて頂戴。
少しくらい、脱いでも良いわよ……。

なんて、本気にしないでよ。
こんな年増女を、真剣に見つめちゃ嫌。
冗談が通じないところは
昔と、ちっとも変わってないわね。
お堅いスーツ姿も悪くないけど
今から、私と面接ごっこでもする気？
でも、こんな毒舌女相手じゃ
詩作なんて無理よね。

えっ、私に文才がある、ですって？
馬鹿な事おっしゃい。いい歳をした
女性をからかっちゃ駄目。
虎魚の心を持っていって
どうするつもり？
えっ、もう既に、私の詩を
作りつつあるって？……ちょっと待って。
本気で私の詩を綴ってくださるのなら
御礼に秘密のバッグの中身をお見せするわ。
中に納めてあるのは、素敵な男性たちから
届いた幾多の恋文。体調がすぐれない時に
読み返しているの。女性は幾つになっても
乙女心をくすぐられるのに弱いの。
情熱に満ちた、煌びやかな艶書が欲しいわ。
盗作や剽窃は御法度よ。
最初から最後まで、御自分の言葉で
綴ってくださらないとね。

私を女王に見立て、華と艶の感じられる
作品にして欲しいわ。
慈悲深き天女として、華々しく

登場するのも悪くないわね。
なんて、御託を並べているうちは
筆が進まないでしょうね。
本当の私は無教養で、罪深い阿婆擦れ女。
恋文なんて全部、嘘八百。
バッグの中身は、お薬手帳と
引く手あまたの請求書。
んっ、詩は書こうと思って
書けるものじゃなく、心を無にして
耳を済ましていると、天女様が勝手に
詩を諳んじてくださる？

じゃ、私の詩なんて、永久に
生まれてこないじゃないの。
嘘つき女に、詩を捧げられる
資格なんてないわ。
少し、意地悪を言ってみたかっただけ。
貴男の創作意欲をかき立てる女性は
私など足元にも及ばない、高雅な御方
なんでしょうね。
こんな婆が顔を覗かせたら
雅な世界も台無し。
詩を書いてほしいなんて、我が儘
言わないから、気が向いたら
天女様から授かった詩を
少しだけ拝見させて頂戴な。

◆川﨑愛弓　　大阪府

藤の花

灯りも消えて人々が寝静まった頃
白昼夢かと見紛うばかりの藤色が夜を喰らっている
闇夜の中で藤の花は　美々しく鮮やぎ咲き誇り
夜の暗澹とした面持ちを燃え広がるように
じりじりと　花弁を散らして染め上げている
きっと私も近寄ればよく燃えるのでしょう
それはやがて蜃気楼のように漂う煙へと変貌を遂げ
朧な月にか細く立ちのぼり　消えていく
存在を切り取られたようにくっきりと喰われて

綺麗さっぱり最初からなかったみたいに消えてしまう
じゃあ私が藤の花に喰われたら一体何処へいくのでしょう
私の意識もゆっくりと消えてしまうのでしょうか
静かで綺麗な月へいってしまうのでしょうか
それとも藤の花の傍に残り続けるのでしょうか
私は藤の花に存在を隠されてしまうというのでしょうか
弱々しくとも確かに差す薄白い黎明の光は
きっとあの暗澹とした面持ちの夜を覚えていない
ぐっすりと眠っていた町は夢から醒めて朝を見つめる
私も直にこのことを忘れるのでしょう
夜が来る度に同じことを感じ考えるのでしょう
朝月夜の中でも藤の花は　美々しく鮮やぎ咲き誇っている

◆小川湖子　　愛知県

マスク

窓の外は灰色に靄がかかっているようで
疎らに歩く人は目も開けたくなさそうだな
しんと静まりいつもより寒そうな夏だ
病む街は急に図書館のように整頓された
お日様だけは変わらずぴかぴか光っている

空に舞うあの小さなつぶつぶが
ウイルスなのかなあ？（いや埃かなあ？）

突然するすると緞帳が上がっていった
時代に反して私は呼吸がしやすくなった
神は私達に何を試したのか
とにかく私の周りには天使がくるくると踊り
まあよかったじゃんと言いながら
美味しそうにぴちゃぴちゃとスープを飲んだ

ああやっと皆と同じになれたなぁ
この歯並び猿のような口を隠しても
暑そうだね？とかもう言われない
どれだけ部屋から出なくても
はぁとため息をつかれることもなく

むしろ褒めてもらえるのかな、私？
ねえ？

距離をとって初めて孤独でなくなった
死ね死ね死ね死ねと打ち込んだツイッター
すなおなことば？（レッツクッキング）
こころのおくのきもち？（レッツテイスティング）
そんな可愛らしいもの
まだ私の中に残っているかな

もういちど

こうえんであそびたい

もういちど

おともだちがほしい

もういちど

ぱぱとままにあ
あーあの時は太っててても可愛いって言ってくれてたよね
ねえ！？

古い毛布にくるまり
夜はあまり変わらないな
病院の香りがつんと鼻をさす
暗闇にいくつもの目がぱちぱちと瞬きした
ああ怖い怖い
とろりとした黒い空気に
どこまでも吸い込まれて溶けてしまいそう
ああ怖い怖い
でも
毎日それを心から望んでいるのにね？

鋭く啼け！
夜明けを飛ぶカラス
そのシルエットで

空に穴が開けばいい
星がざらざらこぼれ落ちて
光り溢れ
私の願いを叶えてくれる

ぜんぶぜんぶこのまま
ひっくりかえれ！
そして
私の岩のような冷たい自意識も
このマスクの中で息をかけ
ぽかぽかとぬくまり柔らかくなりますように

◆遠藤さや　埼玉県

呼吸する秋

割かし、生きるのが下手くそなんだと実感する
自転車の椅子にぶら下がっているランニングシューズが
何処か哀しい
秋空の朝
晴れ渡る季節の狭間と、樹々の隙間から零れ落ちる陽だ
まりが何処か虚しい
紺色のスウェットワンピースを着て
ＡＴＭが開くのを待つ
履きおろしたばかりの新しいスニーカーに
あの日を見つけようとする
剝がれかけたネイルがこんなにも愛らしい

自分を死にかけた道化師だと笑って魅せて
自分を悲劇のシンデレラだと踊って魅せて
結局、あくどいことには何も変わらないのに
肩の方で外に跳ねた毛先があの人に少し似ているから
彼も私を見てはくれないかしら

「「わけがわからないよ」」
感性を否定されたことに対する復讐劇的な混乱に陥るつ
もりは毛頭ないけれど
言い訳ばかりの毎日の
言い訳に対する言い訳なのよ、と
弁明してみたいような気もする

世界は未だ不条理で
寧ろ理不尽でなかったことなんて一度もなくて
呆れるほどに幼稚な日常で
だからこそ描くのは　きっと
取り留めもないただの夢物語

今宵の夢は彼に捧げよう
夜と朝との境界線で
私は彼を見初めたのだから

理想と現実が相まみえるといつまでも信じていられるのは
はどうしてだろう
私は今宵も朧月夜に彷徨う
隣り合った存在がただただ儚い

夢は夢のままで終わらせてしまおうか
それでも期日は迫っているし
私の命も削られているし

寄り添いたい衝動と逃げ出したい臆病者
頭でっかちばっかりになって
頬を預けることはとっくに忘れてしまったのよ

さぁ、歩こう
朝の空虚を
昼の夢見を
夜の静寂を

吸って　吐いて　生きて　いきて、
そうしたら
何かが溢れて
一粒だけ、溢れて

平坦な蛍光灯の明かりの下
彼に背を向け
そっと星屑を落とした

記念写真のコルクボードに
ちいさな手作りの人形たち
私と彼は様々な物語の一つでしかなくて
それならば幸せを探す結末以外は
――――有り得なくて

でもそれってどこか能面で
ついでに滑稽で

いとおしくて

◆大江　豊　　愛知県

定年

電車に乗って
席が空いていると
―座れ
と言って　父は
ぼくの前の吊り革に
ぶら下がって　わらっていた

―置かせてね
と言って　母は
足もとに荷物を下ろし
少し　離れた手すりの辺りで
ぼくの方を見詰めていた

いつもなら　靴を
脱いで　窓の外を見るのが
ぼくの電車の乗り方で
雲よりも工場の煙が好きだった
それが　いま　ぼくは
大切な荷物番なのだ

名古屋まで　父は
吊り革にぶら下がって
何度も　腕時計を見ていた
（何でも知っているのだ）
何も言わず　ぼくの代わりに
窓の外を見ていた

黒眼鏡の目は
母よりも　ずっと
やさしかったかもしれない
そんな父が　なぜ　母を
何度も　叱りつけたのだろう

父がいなくなると
必ず　母が　やって来て
―降りますよ
と　母とぼくの間に
荷物が　あって
バス乗り場が見えた

働きバチだった
あの頃の父や　その
仲間たちことを思い出す
吊り革にぶら下がっていた
あの男たちのことを

いま　吊り革が
余って　揺れている
もう　だれも
掴まろうとしない
定年で　辞められない
世の中で　ぼくは
思わず　電車ごっこを
やっていたのだ

洟の唄

もう
洟っ垂れは
何処にも
いないよな

洟垂れ小僧が
いれば　鼻垂れ
爺さんもいた

お天道様を拝んだ
その指先が
氷柱のように細くなった
あばらの手の平で
垂れて来た
洟水を
擤むのだ

学校帰り
村外れで
ちょっぴり
込み上げてきた
電柱と
電柱の間で
次の
電柱までは
こらえながらも
わらえて　自分が
あれ　あれ

面食らう
お家までの
曲がりくねった道が
そり挙がって来て
目の前で破裂するのだ
どちらの目玉が
先に見つけたのか
いつも腕が
利かない
水たまりの
洟垂れだ

もう
子どもも
先生も
クシャミばかり
しやがって
屑籠が　いつも
いっぱいだ

◆坂倉拓実　大阪府

あるく

駅に着いたのに
気づいたら次の駅を目指してあるきはじめていた

きっと久々に傘なして歩いたから
地面を踏む足が喜んでいたんだと思う

なつの日の雨上がり
蒸し暑い夜を横切る
満月のひかり

したたる汗が気持ちよくて
ひかっている信号がきれいで
しごと終わり　三駅ほどあるいた

◆白澤侑希　福岡県

行方不明のお金

なくなったり、破れたりしたお金は、
その分、作ってるって言うけど……。
なくなったと思って、やっぱりなくなってなかったお金とか・・、なくなったと思って、やっぱりなくなってなくって、やっぱりなくなってたお金とか・・、なくなったと思って、やっぱりなくなっていなくて、やっぱりなくなっていて、やっぱりなくなっていなかったお金は、どうなるの？

生活の保障

生きてゆくのに、
必要な事と言えば、
〝管理〟されていると、
いう事

タイトル：封筒の中身は

連絡先。

◆湯谷大志　埼玉県

友情

ああ友よ、お前が身を投げた橋の下には今も、空を映した気まぐれな水面が漂っているよ。
その深くには、絵になる魚たちの棲家。お前が嫌っていた穢れを洗い流してくれると思っていたのかい。
未だ人たちの群れはお前の理想には遠く、生まれ落ちるにはまだ早い。
合図は僕が出すから待っていておくれ。お前の信頼はいつでも僕が握っておくから。

ああ友よ、お前が作った詞は絶えず、数字の足し算を続けているよ。
人の死はどんなものよりも分かりやすく、同情の恰好の的だと、お前は鼻でわらうだろう。
ものも食わず机に向かっていた背中すら、簡単に裏切るのだろう。
死んだら消してくれと言われていたそれは、お前以外にはどうすることもできなかったんだよ。
ああ友よ、お前が夢見た無垢の愛情はいま、僕の両手に奇跡として在る。
春心地は途切れることなく、まん丸の涙目が欲しそうに僕を見つめてくるんだ。
錆びれていた僕の体は新しいエンジンを手にして、ふと退屈を手放すことに決めた。
いつか溢れた愛情は、墓参りの時にそっとお供えするよ。

ああ友よ、お前がうまく隠していたつもりだった感情を、僕は知っている。
お前の腕に食い込んだ爪痕は、どんなアートよりも心に深い傷を作ってしまった。
当時に戻れるなら僕はなんて答えを残しただろうか。どんな答えも同じ運命だろうか。
僕は怖くて、それだけはお前に尋ねる気にならないのだ。

再会

久しく出会ったそばから体調に触れる
色白の素肌が雄弁に病弱を語る
大阪に行っとってね、あそこではあかんかった

右ひざのジーンズが小刻みに揺れた
君たちの興味は別の話になっとった

横並びは徐々に崩れ、僕は後ろになりました
向かう場所定まらず、君たちはいたずらに語らうばかり
静けさまとう街にひとりぼっち、背筋に氷はしる
脳を満たす音は、電車で聞いた蜂と蝶のパロディ

酒は喉を通れど、聞こえない話し声と話し声
目の前で踊る雨と映画の宣伝広告
コンビニの前で座り込む男女いつかの日の僕だ
残った氷をぺろぺろなめて待つサッポロ黒ラベル

親友の気遣いは縁が切れる前兆
吐いた言葉宙を舞って、孤独だけが濃く残る
愛想笑いは自分につく最も大きな嘘だ
勘定のじゃんけんは僕が負けて君が支払った

車窓にきらめく大人たちの命
それ見て言葉失う若者たちの祈り
僕はきっとまた会いたいよここで
最寄りで降りればジャっで別れる決まり

◆なづき　大分県

ただ暑いだけの夏

わたあめが泳ぐラムネの空に手をひたす
およそ七割を水分が占めるというから
地球とはこどもであり
こどもとは夏の空であるのだと
訳知り顔で木の葉が言った
手のひらから腕を伝って流れてくる滴が
きらきらと頷いて同意していた
私は確かに　それを憶えている

つみきの家の後悔を
砂場のすみっこに忘れられたバケツに
傷つけないようにそっと隠した日
おはじきたちはぶつかり合うことを知らずに

お互いに距離をとっていた
古いお菓子の缶にしまいこまれたビー玉が
うらやましいと泣いているのに
そしらぬ顔あっち向いてホイ

セミたちの大歓声を浴びながら
とぎれとぎれの白い道を入場行進
黒い沼におちてしまわないよう慎重に
右見て左見て
あの目が青く光っているうちに

タイムマシンはいつまでも
タイムカプセルに勝つことはできない
虫取り網をなくした心に
あの日捕まえたカブトムシは
きっとこわいものになるから

黄色の夢をピースサインで切り取って
緑の面影とかき氷を頬張った

金魚すくいは穴の開いたポイで
だって赤と黒の恋を邪魔したくて
言い訳は点滅して花火の音に掻き消された

またあしたのおまじないが
途切れてしまった悲しみに
放課後の校門で手を振っておわかれ
お菓子の缶の宝箱はどこだっけ
相棒だった虫かごも見当たらない
砂場で一緒にお城を作ったバケツも
いつのまにか　どこかに行ってしまった

てるてる坊主が傘をさして
虹の橋を渡っていった
雨は日差しのきょうだいなんだって
いつか木の葉が言っていたから
長靴を履いて陽だまりに飛び込んでみたけど
結局　虹の橋の下にはなんにもなかった

コンクリートを陽炎がとかして
境界線を無くしてしまったから
私は漂うのをやめてしまった
木の葉の声が聞こえない

なつかしいにおいが漂っている気がして
傾きかけた太陽を振り返ったけれど
風に教わった歌を忘れて
空にもらったビー玉をなくした私に
夏は　ただ夏だった

◆五島千夏　　青森県

めぐりきて

北の街に雪がふる
真あたらしい明るく光る雪がふる
ふうわりゆっくりつつみこむ
うつむき歩く人々の
灰色の吐息を
陰鬱な記憶を
銀色の雪がつつみこむ

しなった弓形の月の夜に
氷の結晶となり
くだけ散るだろう
冴え冴えと咲く冬の花火

北の森に雪がふる
真あたらしい明るく光る雪がふる
無言でほほえみ真綿のように
ひと夏を生きた昆虫たちの翅のうえに
山奥によこたわる牡鹿の死骸のうえに
おおいかくして雪がふる

春になると
白い貝殻みたいな骨が風にころがって
口笛を吹いている

森の精霊たちがうたうよ

石になっても
葉っぱになっても
小川の水になっても
あなたはあると

めぐりきて
北の国に雪がふる
真あたらしい明るく光る雪がふる

◆今西美由紀　奈良県

東北妙好人伝

自分自身になりたくて
鞄一つ
夜汽車で旅に出た僕に

泊まっていって下さいと
夕焼け色の林檎並木
ご夫婦は笑った

家族みたいで楽しかったと
列車の窓から二つの林檎
ご夫婦は手を振った

「はつゆきがふりました」
覚えて下さったばかりの文字で
ご夫婦からの林檎が届いた

桜も待たず
母さん逝ってしまったと
二箱目の林檎が届いた

津波がきて
息子も逝ってしまったと
十二箱目の林檎が届いた

感染症が広がって
仕事を失くしてしまったと
二十四箱目の林檎が届いた

今年の冬も
父さんからの林檎が届く
四半世紀目の林檎が届く

そんな風に想って
帰って下さったこと
本当にありがとう

いつかの
母さんからの文字が
胸に灯る

おばんです
元気ですよ
こちらはもう雪です

変わらない
父さんの声が
こころに響く

希望に駆け出したあの瞬間も
絶望に言葉を無くした深い悲しみも
全ては林檎と重ねてきた星霜の中に
いつの日もいついつまでも僕自身の中

◆堀越そのえ　宮城県

アインシュタインの嘘つき

ずっと思い込んでた
アインシュタインの言葉を

人生は　自転車のようなもので
ペダルを漕ぎ続けていないと　前に進めないもので
漕ぐのをやめた途端
道に倒れてしまうものだと

だから五十年　毎日毎日頑張って
私はペダルを必死に漕ぎ続けてきた

ところがある日、
突然　ペダルが漕げなくなってしまった
踏み込む力すらまったくなくなってしまった

「もうどうにでもなれ」
自転車を捨てて　その場にしゃがみこんでみた
私、死ぬのか？　もう全部終わりか？

……ん？……あれ？　あれれ？
別に大丈夫じゃね？

死ななかったし　なんとかなったし
走るのをやめたら　向こうから勝手に
欲しかったものがやって来たりもした

カラダの動きを止めてみたら
ココロが動き始めた

やりたくないことじゃなくて
本当に　ほんとうにやりたかったことを
ためしにやってみた　そしたら
人生の車輪が大きく回り始めて
気が付いたら　願ってた以上の景色にたどり着いてた

子供のころ、よく聞いた台詞
「頑張らないと　ろくな大人にならないよ」

たしかにね　だけど私
頑張るのをやめたら　「ろくな大人」じゃなくて
「楽な大人」になれちゃった

立ち漕ぎで　ゼイゼイいいながら
無理に坂道　登らなくてもいいみたい
人とスピード　競わなくてもいいみたい

ギューッと両手で握ったハンドル
自分でかけてたブレーキ　もう放そう

自力で転がすのも　自転車

自由に転がっていくまま
おまかせ自動運転でも　自転車

漕げなくて　倒れたって大丈夫
ちゃんと自分の場所へたどり着ける

あっかんべー、だ。
アインシュタインの嘘つき

◆南風原めぐみ　　東京都

細胞

緑の梢を通り抜ける彼方から来た風が
肩まで伸びたわたしの髪を揺らす
顔をおおう前髪を耳にかけるあなた
頬に触れた指先がわたしの心臓を止めた

煩わしかった風は心地よく
冷たくまとわりついた雨はやさしい
眩しさに目を細めるだけだった陽射しは
光合成でもしているかのようにエネルギーをくれる

あなたと出会って細胞が変わった
なまけていたミトコンドリアが
やっとちゃんと動き出した
鼻腔を通る風は清々しく
自転車を漕ぐ脚も軽い
筋トレは思いのほか爽快で
体重も少し減った

全細胞であなたを感じている
全細胞があなたに向かっている

青い海を渡る彼方から来た風が
新しい部屋のカーテンを揺らす
窓辺でふいに抱きしめるあなた

腰に回されたその腕がわたしの心臓を止めた

肌を撫でる風はなめらかで
冬の朝の凍てついた寒ささえどこか気持ちいい
アレルギーを助長するだけだった外気は
呼吸を通して体に入り込みエネルギーをくれる

あなたと出会って細胞が変わった
さぼっていたミトコンドリアが
やっとちゃんと動き出した
味蕾はいつになく敏感で
どんな旨味も逃さない
エレベーターを使わず階段をかけ
足首も少し締まった

全細胞であなたを感じている
全細胞があなたに向かっている

◆青木賢一　埼玉県

妄想する孤独

歩いてくるのは大西君だろうか
挨拶を交わし話しを始めた僕等が居るのは
喫茶店の中なのか公園のベンチなのか
青い空に樹枝が記憶で視界に揺れる
大西君の瞳に過去の情景が流れていく
大西君の僕の皆の創る世界が重なり世界を撫でてゆく
世界が弾ける
娘が僕の娘だと言う女が夕食は何が喰いたいかと訊くから
カレーが食べたいと答えれば
娘だと言う女は昼に食べたばかりではないかと言う
それは娘を名乗る女の世界での出来事だ
僕の世界では昼食は無かった
世界は因果律が崩壊し生起する事殆どが予期できぬ
操作方法も判らぬ機器に
日々新たな人々

友人だという大西君は思い出を語る
僕が会社の備品を勝手に持ち帰った話など
大西君は記憶違いをしている
それは僕ではない僕は会社勤めなどしたことがな
い
それに僕はその様な不法行為は幼い頃から嫌いなのだ
僕が死に瀕して横たわっている時大西君は
見舞いにあるいは看取りに来るのだろうか
消滅しようとする世界を前に娘や大西君は
君達の世界のイメージを更新するだけだ
ひょっとすると天地君君も姿を現すのかも知れな
い
会社の同僚であったと言って
君の記憶に決着をつけに
心の中で罵倒するためか在ったかも知れない愛憎を確
かめにか
そして君は僕の像を配置し直し忘れるだろう
そして僕という世界は消えていく
だのに一度生じた世界は消滅を許しはしない

閻魔の前で唯一神の前で計られ裁かれるのは
僕であり死して尚個として在ることを強要される孤立
した
世界の妄想なのだ

◆吉岡耕大　東京都

よいなつの

あなたの好きな時間はいつですか
夏の
一日の中で

わたしは昼が一番好きでした
快晴のなかに雲が少しだけあるような
風がたまに吹くような
昼が好きでした

始まりの朝と終わりの夜を結ぶ
昼を
全員が一緒に過ごす

教室の呼吸

放課後へ打って出る

記憶のひかり
ふっと鼻をつく草いきれ

夏を知っているあなたは
春が
もうこない
ことを知っている

夏を生きているあなたは
昼が
みじかくなっていく
途中を生きている

後ろをふりかえるあなたは
いまと昔をつなぐ

術を知らない

前をまなざすあなたは
いまと明日をゆわえる
指を持たない

懐かしい、と
呟くようにして
あなたは
夏をみつめている

いま一番好きな時間は宵です
昼の暑さをいっとき忘れて
寝そべることができるからです
外へ歩きに出かけるのもこの時間です

夕方でもない夜でもない
この時間が
今にもあなたに

なってしまいそうな
わたしを覗き返す

宵を進んでいく身体を
支えている
その影を
過去と呼んでみたいと思っています

宵を進んでいく歩幅を
追い抜いていく
その風を
未来と呼んでみたいと思っています

宵は
今を生きるわたしから
今を生きたわたしへ
還っていく
時間です

宵は
今を生きるわたしが
今を生きていくわたしへ
歩み寄る
時間です

宵が
繋ぎ止めている
時間

見えますか

◆シアン・クレイ　埼玉県

抱擁、そして再確認

季節の風が関わることを
言い訳にしながら
相手の心を無意識に
また確かめようとする

花弁(はなびら)が散って
朽葉(くちば)が散って
絨毯の完成と
感傷の大成が

胸の奥で応えて
体が呼応して
確かめたくなる
その、あの感情を

相手の躰を
自分の腕の中に
とどめてしまいたい
離したくないのである

「寂しさ」という名の
昏(くら)い感情の襲撃によって
無闇矢鱈滅多(むやみやたらめった)に
更に無茶苦茶に

胸を裏から擽られては
甘え上手な私の本能が
風船以上に爆発して
止まる気配もない

そんな現象を
自ら理解しておきながら
「羞恥」という理性の現れは
無理にそれを抑えてしまう

それが良くないと
知っているとはいえ
これもまた無意識に
引き起こされてしまう

しかしながら本能は
またまた対峙してしまう
こういう繰り返しを

まさに「葛藤」と呼ぶ

だからこそ私は
勇気を振り絞れない為に
口は無音と共に震える
手足もこれに便乗する

そういう姿を
もし窺ってくれていたのなら
微笑むくらいの「しるし」を
見せてほしい

どうしよう
　どうしよう
　　どうしよう
　　どうしよう……

そう内心呟き倒しているうちに
また再確認を果たせずに
一日を終えてしまう
残ったのは「後悔」だった……

霊(たま)の世(よ)

あの世に往くその前迄、
この世に私たちがいて、
この世に来るその前迄、
霊の世という世にいた。

そこには神殿の様な城が、
鈍(にび)を被って佇むや否や、
辺りの夜闇を吸収しては、
中で煌びやかに儀(ぎ)をしていた。

不意に城下町を階段から、
哀愁を纏う目で見下ろせば、
ネオンが光を放った様に、
賑やかに仲間が見送る。

扉が正面で開いてから、
その階段を上り終えると、
やはりあの神殿の光は、
寂寥を受け止めていたのだった……

◆安堂　沖縄県

声帯／やわらかい肉

は　を見逃す喫茶店でアルバイトを
始めた　三度の濃厚接触ののち　四度目で罹患し　を
失った
は借金があった　複数の　会社から借り入れ
支払いで　自転車操業を生業　している　パチンカスで
あった　彼も罹患した
は夏に子どもが生まれた　男の子だった
顔を見に来いよと呼びかけたが　残念なことに　も
行かなかった　彼以外の　誰もが
性　知らなかった　わからなかった
は県外から帰ってきた妹が発症　一週間以上前に一言
交わしただけだったが　濃厚接触者と判断された　両
親からはしらを切　働きに出ろと言われたが　入社した
ばかりの会社を休んだ　性であった
もうしばらく会っていない　会う理由もない　もうし
ばらく会ってない　必要　不必要　迫られる二択　なく
なくとも　不要不急の接見はご遠慮ください　ご遠慮
ください　遠　なる　がまたひとつ　またひとつと
わかれて　わから　できない
が見たいとは　思う　わない　う　思わない
しぼんで　たい

◆近藤太一　兵庫県

ささくれ

長い旅が終わった
列車に落ち着かせた眠気と
風を吸い込む窓の目に
木漏れ日を広げている
駅に着く頃には兄弟たちの泣き声

森で見たウグイスを思い出してしまう
家の鍵にぶら下げた手作りの鈴
ドアを開けるたびにささやいている
まるで永遠の使命を担っているようだ
いずれは腐って錆びていくのに

あの日生まれたシカはすぐに立った
言葉を発せばすぐに弾を込められてしまう
削り切った視線は尖っていて
母を求めるか細い無常を嘆く
横断幕のベッドルームより

音楽に身を委ねた夕暮れ
ひょうひょうとした旋律
せせらぐ者の真似をしてはいるが
その姿から皮膚の冷たさは剥がせない
三輪車のペダルを踏み込んだ新世界より
ちぎりながら捨てゆくパンの耳

門を出て行ったその先には
地図でも見つけられない場所がある
幾何学の罪を重ね螺旋状にばら撒いていく
知らない顔をした両親は
開けられた窓を閉めないでいる
少し風が冷たくなった
情景に囚われた明日より

いつまで経っても甘えん坊だ
窓辺に映る母の面影を残したまま烏は鳴く
未だにドッヂボールの外野だけで遊んでいる
気分屋のささくれをピンセットでつまむと
決定的な瞬間のようで胸の奥がヒリヒリする
ミントの葉っぱを噛んでいる気分に似ていた
靴を磨いたゆうべから変わろうとしていた

どこへ行っても必ず帰ってくる場所
なのにありもしないものを求めている
いつか消えてなくなる保証付きの難題

生ぬるい温度の鎖で閉じ込めていた
半年もすれば忘れてしまうのに
ふとした瞬間に思い出す
蛍光灯の眩しさとともに

毅然とした無限回廊
電子化された地図は毎回変わりゆく
破れた姿で発見されるのは
ロビンソークルーソーの置き去り事件
終電間際の夜空に近い
タバコの煙を間違って汽車だと思えるほどには
静寂は深夜の特権だと騒ぐ住人たち
上りも下りも同じ場所なのに気が付かない
箸ではつまめない風の流れ
持ち上げようとすると
するすると落ちていく
そこに彼も彼女もすでにいない
色のない扉をまたぐ
また会う日を待ちわびて

ひらいた

ありふれた話の中身はいつも感動だらけ
路上の自販機でもお金さえあれば
簡単に転がってくる言葉たち
ボタンを背中で強く押すわたしは
おととし抜いた親知らずが今でも痛い

毒々しい無数の配電線
晴れていても
カーテンレールは錆びてひらかない
生への味わいを答えることは
電気の紐をつつかない自殺志願者に
与える言葉みたい

その程度で死ぬなよって
自分が幸せな状態で
他人目線を下に向けている
唾を飛ばすみたいに惰性を吐く

目をそぎ落とす覚悟がないくせに
口元を広く抉ってもいないくせに
感情だけを主演にまかせてステージの上で吠える
ボタンひとつでスポットライトから発信する

未来の話にたったひとつだけ
手足の紐がほどけている

ノイズの海につながるドアをひらいて
巻き込まれるみじん切りにされた波
無防備ですという言葉より先に
繋がらないポケットをひらいてみせる

告白

さいしょのひとことめがみつからない
塩素の匂いを嗅いだときや
ケチャップの酸味を感じた時に
ふと君を思い出す

好きの最大値ってなんだろう
お母さんと手を繋ぐときの手と
あなたと手を繋ぐときの手は
ぜんぜん違う
温度か
それとも
ガンマ軸の方向か

新しくそしてさめざめとした怪異の管が
血を循環させている
いちごソースの作り方を教えて

伝えるのは難しい
伝えたいことの十分の一も
言葉では
言葉だけでは
言葉は大切なのに

いちいち目を向けている

重なった視線の間にはたくさんの気体
なのにときどき息が苦しくなる
六畳一間の光合成
ぶら下がった紐に想いを馳せる

誰かと一緒に行くなんて考えたこともなかった
けれどもろくなこと
明日はとなりにあの子がいる
嫌いの最小公倍数を見つけてしまわないように
手をつなぐ

◆こはく　神奈川県

呼吸の速度

わたし一人だけ、どうにも時間に取り残されているような気がします。
あまりにも時間がゆっくりで、周りの速さについていけないのです。
ほんの少し前まで、あんなにも時間はゆっくりと流れていたのに。
落ち着ける速度から、急に勢いよく過ぎ去ってしまうようで。
あまりに速くて、わたしはちっともついていけないのです。
どんどんと過ぎ去って行くのを、ただ見ているのです。
当たり前に呼吸する。
その当たり前が、ずれて上手くこなせない。
周りと速度が合わずに、息をするのもままならない。
短く切るように吸っては吐いて、何もままならない。
あなたが呼吸を二回する間に、わたしは一回大きく呼吸する。
同じ時間が流れているけれど、呼吸する速度は違う。
その違いがたまらなくつらくて、わたしは合わせようと必死だった。

どんどんとひずんでいくのを、吸って、吐いて、繰り返す。
同じようにして見せるけど何も変わりはしなかった。
ただできない事実だけが重くのしかかる。
それだけで息が詰まって潰れそう。

呼吸する速度など、合わせる必要はないのにね。

気づいたときにやっと、息を吸うのが楽になった。
通り過ぎていった時間の中で、わたしはどれほど呼吸を止めていたのだろう。

ゆっくりと息を吸って、大きく一息に吐く。

視界がすっきりとしている。
苦しさは少し晴れたような気もする。

大丈夫。
わたしはわたしの速度で、時間の流れを過ごしていいのだ。
ゆっくりでも、わたしは確かに進んでいると知っているから。

◆藤佳　神奈川県

エントロピー

君は熱力学第二法則を知っているか
長い間見向きもされなかったものは無秩序に向うという
そう　その法則だ

寂れた町のガードレール
冷凍庫の底の保冷剤
部屋のすみの埃
宇宙に置き去りにされたスプートニク
地雷の埋められた野原
飛燕の見えぬ空
プラスチックに息絶えた魚の海

それらは全て無秩序に
少しずつ、少しずつ、壊れていく

その音を聞き逃すな

棚の奥から出てきた一冊の本
日焼けして、無数に紙魚に喰われた本

君は熱力学第二法則を覚えているか
ものを無秩序にしていくあの法則だ
さて本の中身にもあの法則は通用するだろうか

秩序立てて並んだ文字は
紙面を揺蕩い
ページを羽ばたいて
身を寄せ合う
その無秩序に帰していく音が聞きたくて
そっと
耳を本に寄せた

無秩序へと向かう音は美しい

からだの中を見てみると
みるみるうちに沈んでいく
見えないように蓋をしたものたち
放っておいたあの部分
その沈んでいく断片を掴んで
引き揚げる　掬い取る
手に形は残らない

それは
温かな感情
冷たい言葉
青いときに見た夢か
はたまた
なんでもない日常か

そうか

それは記憶

わからぬものに帰していく

ほら、あの美しい音が聞こえてきた

もう君は熱力学第二法則を知っている

◆水月水果　群馬県

フリージア

心の庭にフリージアが咲いて

虹の雨が降り注ぐ

確かに生きている

本当の姿　今息をして

眠りのまじないをかけて

キラキラと長い夢を見ている

相変わらず鈍色に

時が経つのは　本当に速くて

諦めと怖さが

信じてる希望を奪おうとする

追うなんて出来なくて

見つけたいモノ、確かめる時間もないまま

消したくても消えない思いだけ

揺れてる

季節や声を巻き込んで

本当の自分を本当の気持ちを

変えようともしたけど

苦しんだ分だけ

探し求めた分だけ

答えは変わらなかった

どんなに孤独なままだとしても

変えたくない〝私の全てだった〟

種をまいて滲んでくの

自分の真実とだけ向き合う。

同じフリージア探してる。

叫び声

風に吹かれて舞い飛ぶビニール
なんにも考えずに
白い呼吸 浅く
溢れてく
今日一日分の涙

まるでトキメキをつぶすように
遠ざかり遠ざける

目で見ていても
脳まで感情が来ない道を
どんな気持ちで
どんな苦笑いで
信じるふりを続けるの
苦しくて
悲しみが入りきれない袋は
破けて散った

受け止め切れないよと
この強い風に吹かれて
飛び散るような音色だった

雨にうつって流れてく今
なんにも言わずに
心の声 暴れる
背負ってく
一生分の一部 少しずつ

まるで時間を消すように
届かず掴めない

頭で分かっていても
感情が動かずついていけない
そんな時は
どんな風に
何を変えていくのが正しいの

苦しくて
息継ぎが下手なままの
一度限りの日々

この雨が燃えないのは
焦がした傷を冷やす為ですか

熱を持つ、
流しきれない不安を
世界ごと冷やすかのように。

この強い風に打たれて
飛び散るような叫び声(ねいろ)で
僕は叫んでた――――。
二度と生きれない
今日という中で。
この僕の中で 。

光る水族館

夜はみずうみ
星はさかな

自由に泳ぎ 遠くで透ける

柔らかな眼差しが
冷たい体に熱を与えて

見えない心に愛を告げる。

見つめる度に過ぎていく
繋いで溶けた 時間の糸

泡になる吐息のそばで
いつまで浮かんで いてくれるんだろう

逃げゆく跡さえ 美しく光るから

いつ忘れられても

不思議じゃないのかな

数え切れない視線に触れて
外気から守る 一筋の夢

戻れず揺らぐ 夜のみずうみ
愛おしいだけの声が散らばる
儚くかがやく 星のさかな

目醒めの支配

記憶に潜る一瞬が
影に手を伸ばすように
光りを奏でた
悲しみはきっと
解き放ち切れない

その始まりはきっと
生まれたのではなく
眠りから目を醒ました

だけだから。

走るように降る雨
走りながら落ちていく行方
君には分からない。
誰にも分からない。

この苦痛を
失くす日なんて きっと来ないんでしょう
私が私でいる限り
救えるモノは限られてる

見失いそうになるその時
目の前はいつも海。
こぼれ落ちる体温 頬を伝う度
何度でも唱えていよう
あの香りで

ここには誰も——イナイから。

降り続ける星の雨
曇る空を夜空に変えて
その雨音の中で　どうか眠らせて

たとえ埋もれて
息が出来なくなったとしても
それも一つの　幸せと信じて
集めた祈りを手放そう。
そして飛び降りよう
暗闇から　今

生きた日々を散らすように
ただ思いは　過去を撃ち抜く
ここで静かに守り続ける
これ以上この目が　醒まさぬように――。

◆水無月真凜　福岡県

アスファルト

舗装されていない田舎道で
猫が死んでいた
車に轢かれて
死んでいた
土で汚れた猫のなきがら
群がったアリは
小さく小さく
小さく分けて
運んでいく

別の日に道を通ると
アリが潰されていた
子供の指に
潰されていた
アリを潰した
幼い子供のポケットから
ひらりひらりと
ハンカチが落ちて
忘れ去られて

そのまんま

猫のなきがら
潰されたアリ
忘れられたハンカチ
道の隅っこで
消えていく

猫も　アリも　ハンカチも
すっかり忘れさったころ
道は綺麗に舗装された

私は歩く
平らな道を
消えていった
道の隅っこの
ハンカチ
アリ
猫

アスファルトで舗装された
道の下に埋められて
そのまま

私は歩く
アスファルトの上を

夏

鮮やかな青が頭上に広がり、
太陽が輝いている。
溶けかけた棒アイスは
冷たくて、甘い

手を引いて、大人たちが入ってはいけないと言っていた
薄暗い森へと　きみを連れ出した。
広い広い森の中
蝉の声がつくる静寂の中に
二人きりでたたずんでいた

森の中には
きみとぼくだけが
たたずんでいた

暗い森の中
きみとぼくは　やがてやってくる
遠い遠い　未来の話をしていた

あっという間にその未来はやってきた
けれども　夏は変わらず

入道雲が空に浮かび、
太陽はただただ　眩しい。
気まぐれに買った棒アイスは
溶けかけていて、甘ったるい。

幼いころ、入ってはいけないと言われていた
あの時の森は
思っていたよりも　ずっと小さく

蝉の声が　草木が揺れる音が
確かにそこに　喧騒を生んでいた
森の中で
ぼくは
ただそこに立っていた

木漏れ日が差す森の中
ぼくは　通り過ぎた
遠い遠い　昔を想っていた
鮮やかな青空と
白い雲
きっと、美しい空の下で

遠い遠い
未来の話を交わした
遠い遠い
昔を想っていた

ハムスター

ハムスターがかごの中で
回し車を回している
私はえさを与え
日常に繰り出す
学校指定の靴を履いて

田んぼには農家の老夫婦
犬は吠えかけて
山は佇んで
川は流れている
娯楽が少ない田舎の学校
クラスメートはドラマの話をする
遠い都会が舞台のドラマ
流行るのはいつも似たような物語

ハムスターがかごの中で
回し車を回している
私はえさを与え
扉を開く

お気に入りのスニーカーを履いて
今日は都会に引っ越す日だ

都会には人々の流れがあって
ドッグランでは多種多様な犬がいて
ビルが立ち並んでいて
車が休むことなく走っている
物語の舞台になるような都会では
話のタネが尽きることが無いのだ

ハムスターは新居にも動じずに
回し車を回している
何も変わらずに
回し車を回している
私はえさを与え
都会の学校へ繰り出す
学校指定の靴を履いて

ハムスターはかごの中で

回し車を回している

祈り

地球の表面で　蠢いている
それらは僕らを
「星」と呼んだ

それらは僕らに
祈りを捧げる
瞬く間に　生まれて死んでるのに

ある時
「生きていたい」
と言う祈りが捧げられた
「死んでしまいたい」
と言う祈りが捧げられた

なぜ祈るのだろう？
それらの生は　八十年

瞬く間に　消えるのに
なぜ祈り続けるのだろう？
それらの死は　多すぎる
ありふれている　ものなのに

不思議に思って
考えていたら
「生きていたい」
と言う祈り
「死んでしまいたい」
と言う祈り
どちらも消えていた
地球の表面で蠢いている
それらに埋もれて
もう
見えない

不在

君は出て行った

私はそれを止めなかった

カーテンの隙間
差し込む光で目が覚める
外のほの暗い　オレンジ色の光は
影を濃く　黒く　伸ばして
部屋の片隅に横たわらせる

遠い子供たちの笑い声
信号機から流れるとうりゃんせ
車のエンジン音
目覚めるには遅い時間

ベッドサイドテーブルに
ぽつんと
止まった時計
ああ　目覚めが遅かったのは
起こす音が無いから
何かの記念で買ったのか

誕生日のプレゼントだったのか
忘れてしまうぐらいただの日常だった
止まった時計

カーテンの隙間
差し込む光は
影を濃く　黒く　伸ばして
私だけの部屋に
横たわらせる

遠くでとおりゃんせが響いている

万年筆

万年筆
箱の中に　納められた
祖父の遺品

祖母への恋文
結婚式への招待状

上京した母への手紙
孫に宛てた年賀状　……

かつて　黒いインクで
文字を綴っていた　万年筆
今は　箱の中の
純白の布の上で
横たわっている
乾ききったペン先を
しみ一つない布が　包んでいる

暖かい部屋の中で
それだけが新雪のように
ひんやりと
指先に　触れる

箱の中に　納められた
祖父の遺品の万年筆

触れられることなく
純白の布の上
横たわっている
万年筆

◆後藤　順　　岐阜県

かくれんぼ

老人介護施設の昼下がり
車椅子が群れる庭に
見習い看護師の少女たちの声は明るい
　スエノさん何か歌ってよ
　キミさん何でもいいから歌ってよ
白髪をすいでもらった心地よさに
自分の名前すら忘れ
一時床ずれで腰を犯されたヨシノさんが
寝言の口調で歌い出す
　かくれんぼするもの　よっといで
　じゃんけんぼよ　あいこでしょ
少女たちは隠れる場所もないのに

地面に伏せ　車椅子の陰に
スエノさんは空をさし
キミさんは施設の壁を
ヨシノさんは新しい眠りを始める
　もういいかい
　まあただよ
看護師たちは施設の手順表どおりに
決まった拍手し　リズムを整える
型どおりの手はずなど
歯のない口から垂れてゆく涎を
拭く少女たちにも正式な隠れる場所など
　もういいかい
　まだだよ
過去をさまよう老女が辿りつく
かくれんぼの終わりを
看護師たちがなだめすかす
ここがこの世の終の場所であると
少女たちが薄々知りながら
少女たちがハミングする

　もういいかい
　もういいよ
スエノさんをキミさんを湯灌した
その一瞬に聞えたかくれんぼの鬼の声に
少女たちは老いてゆく
　かくれんほ
　かくれんぼ
死をまぢかにひかえた老いた人が
赤子へと化身する
どこか隠れる所を捜している

藍の一生

藍染めの死に装束をまとい
乳白色の笑みが零れそうな祖母が
蝋燭の炎がたどる宿命に
真っ赤な夕陽に染まった火葬場
この世の色彩は染料で作られているのか
わずか十歳で紺屋に奉公し
ひらがなの文字すらおぼえぬまま

藍染めの鬼女と世間に呼んだ
八十九歳の生涯のなか
病児を持つ母親の哀しみを捨て
止むに止まれぬ技を伝える
己ひとりに秘めた執念が
白内障の患いを隠し
地べたを這いずり藍の若芽を
我が子のように撫でる姿に
父が嫉妬し続けた日記が残された
藍を建て　藍を染め　藍を守る
朝夕　静かに藍甕に櫂を入れ攪拌する
空気に触れる瞬間
鮮烈な緑から　涼しく深い藍の色へ
おずおずと最初に鍋底へ入れる
張り渡し絹布は純白
無我に入る一歩手前
祖母は狂気をおびた鬼になる
あとは一気呵成に魂を失い
祖母の白髪が透明になっていく

石臼をひくずる暮らしに
藍は決して応えようとはしない
ただ　紺瑠璃の美しさをたたえる藍の
艶々とした香りに
祖母は生きる全てを捧げたかもしれない
この国のすべての女たちへ
美しい藍の色合いに飾りたい
伏せくれた太い指と
痩せて渇いた爪の奥の奥まで
藍に染まった祖母の
いや　陰部までも藍に犯されていると
シベリア帰りの祖父は
沈黙の時を尊ぶまま
祖母の情念が耕した藍の畑で
心臓発作で見つめた青い空とは
凍てつく大地と華やぐ大地に
人は死するまで色彩を求めるのだろう
雑草が繁る祖母の染場
誰が壊したのか　割れた染瓶から

藍染めの血が大地へ
白く焼かれた祖母の骨を拾う
私のどこにも藍はいない
人は美しいものを見たとき
とっさに飛翔する幻覚に襲われるとの
少女から女へと変身した
祖母が紡ぎ出した色を
言葉にできなかった言葉の奥底に
この国の幾層もの白い屍がかぶしたとの
祖母が幾万回とも染めつづけた
藍の一生に
新しい女たちが指先を藍に染める

シャボン玉

老人病棟に長らえる老女が
回廊式廊下を日常の糧として
心を抑え情を堰きとめ
生きてきた時を放尿する
プラスチックの人形を背に乗せ
僅かに唇が震える
　シャボン玉飛んだ
　屋根まで飛んだ
子供たちに先立たれ
多くの歳月を生き恥だと鼻水が
奇怪な抑揚が
看護師たちの嘲笑いをうむ
病んだ時代は忘れ去られ
老いる命は僅かにぐれる
　屋根まで飛んで
　こわれて消えた
老女の涙腺はかたく閉じ
言葉は脈絡もなく過去分詞たちが
蚊のごとく血を吸い飛翔する
老女には視線には血の海が泡立つのか
心の闇に沈んだものが
苦しげに空へと喘ぐ
　風　風　吹くな
　シャボン玉飛ばそ

文字が書けないとの言い訳に
老女はなぜか
古い鏡台に自分を隠す
抽斗にあった椿油に黒ずんだ木の櫛
僅かに毛を残した歯ブラシ
ひとり　一人　独り
　シャボン玉消えた
　飛ばずに消えた
老女は笑みを絶やさない
落ち込んだ眼窩の底に漂う
空襲で炭化した母や妹が
秋の野に揺れる芒の穂に遊ぶ
夕陽が赤く赤く染まる
ガラス窓に光は無慈悲だ
　生まれてすぐに
　こわれて消えた
老女が幾度も堕胎したとの噂話に
歌声だけは呆けるほどに明るくなる
時のあずかり知らぬままに

童謡が心の沼に沈澱する
無口で生涯を過ごそうと決意したのに
透明な記憶が復讐する
　風　風吹くな
　シャボン玉飛ばそ
老女はただ静かに
シャボン玉が空の彼方へ向かう
遠い眠りの中で天命をはたす
どこに辿り着くのか
だれが吹くのか
新しいジャポン玉が空に舞う

◆三根由真　　東京都

青い血

朝方、玄関のベルが何度も鳴った
隣のおばさんが狼狽えながら立っていた

たぶんお宅の車だと思う
土手から転がって落ちている

母と走った
そう、うちの車だ

初雪が積もった斜面を転がるように降りた
逆さまになって腹が見えている車の中
親父が青い血を流している

雪が降り続いていた
ちょうど大学受験の一週間前

多分、周りは騒がしいけど
僕には無音の世界にいるようだった
僕一人、そこにいるような感じ

涙は、出なかった
人生って、こんな感じかな、と思っていた
不思議

昨夜の親父との取っ組み合いの喧嘩
車で出て行った、飲みに行くって
それが最後

物心ついた頃から
酒に溺れている姿しか見ていない

だから逃げるように街から街へと流れた
新しい世界って？
違う
知らない街と知らない人の中で
いつも戸惑い

だから子供の時から、たぶん
自分を出さなくなった
社交的って？
そうじゃ無ければ入れないじゃない

転校生
いつも

きっと親父を殺したんだ
あの大喧嘩が無ければ
いやそんなことはきっと思っていない

でも僕が殺したんだ

何で青い血なの
僕にはそう見えた

雪と青

◆松下友香　静岡県

あじさい

朽ち果てた
紫陽花の向こうに咲く
秋桜

ここに　夏はない

朽ち果てた
紫陽花はかつて
空色
青藤色
わすれな草色
あるいは
桃花色
であったかもしれない

だが　それはもう
かつての色彩をもたぬ
朽ち果てた花であった

誰も
目を止めることのない
話し掛けることもない
忘れられた花であった

それは　閉経した
女であった

かつて
母であったことも
女であったことも

少女であったことも
処女であったことも

かつて
誰かに心を奪われ
胸を躍らせていたことも

何もかも
忘れ
朽ちていくのを

ただ　待っていた

乾いた風の中
煩雑さの繰り返し
からからに乾いて
朽ちていた

夏など来るはずも
なかった

だが或る時
通りすがりの男が
足を止めた

その見ず知らずの男は
朽ち果てた花を見て
言った

なんて美しい胡桃色

その男は　胡桃色を
好きだという

女は信じられなかった
男の言葉の中に
かすかな嘘が紛れているのを
知っていた

女は信じられなかった
女の体の中に
かすかな潤いが満ちていくのを
知っていた

女は男を信じてみたくなった

その日から
男と女は　しばらくの間
一緒に夜を過ごした

忘れていた夏が
やって来たのだ

男は　女の中にあるのが
自己愛だとは
気付かなかった

女もまた
男の中に
自分の欠片を探した

それは遅れて来た夏だったのかもしれず
ただの通りすがりの夕立だったのかもしれず

男は女を愛していたのかもしれず
男は自分を愛していたのかもしれず

女は男を愛したのかもしれず
女は男に愛されたかったのかもしれず

確かめる術もなく
それらは全て　消えてしまった

◆伊織　梢　　神奈川県

犯人さがし

これで何日連続勤務か
毎晩終電で帰って朝からクタクタだ
今日は午後から雨が降るらしい
満員電車の中で傘の先が他の乗客に当たらないよう気をつける
風も強くなると天気予報で言っていた
疲れた体を左に右に電車の動きと同化させる
換気のためかゴウゴウという音がこだまする
今日はさすがに定時で帰ろう
そう決めたとたん電車のドアが開き
地下鉄のホームへと吐き出される
職場に一番近い出口は改札から一番遠い
まだ三月末だというのにスプリングコートの中は少し汗ばんでいる
G７番出口にエスカレーターはない
一段上がる毎に仕事の頭へと変換していく
空は雲が厚く今にも泣きだしそうだ
高架橋の下は車が絶えることなく
上には休むことなく電車が走っている
ここで戦闘態勢オンとキーボードのエンターキーを押す気分になる
その瞬間ピンクの花弁がひらり
夢中で両の手で掴もうとする
考えたことなんてなかった
この花びらはとこからきたのだろう
パソコンの画面はパスワードを入れないままフリーズしているかのようだ

死にもの狂いで走ってきた
同僚に妬まれても
上司に罵詈讒謗を言われても
自分の正しいと思うことをしてきたつもりだ

なぜか足が前に動かない
こんな気持ちにさせた犯人が知りたい
そして犯人に言わずにはいられない
今すぐにでも犯人を捜して言ってやりたい
そうこうしているうちにも時間は過ぎていく
今夜は嵐かも知れない
それでも私は会いに行く
私をこんな気持ちにさせた犯人に
そう思ってまた歩を前へと進める
犯人は今が一番輝いているだろう
今だけ人の目に留まるのだろう
今だけ
やっぱり今日は定時に帰る
そして闇夜の嵐の中で犯人を捜し言う
でもなんて
言葉にしようとすると出てこない

一瞬でもいい
人を喜ばせたい
笑顔にさせたい
あなたのように

少しだけ軽くなった足を止めて職場のビルを見上げて思う
私にできますか
犯人に会うまでわからない
それでもこれだけはわかる
私はひとりじゃない
前も周りも見て
みんなと共に歩くから
犯人はきっと今晩には恩人になるだろう
そう思い心の中でキーボードを叩く
arigatou
これが明日には私のパスワードになりますか
フッと息を吐き
心の中でそっとエンターキーを押す

◆秋山さや香　茨城県

春

春は張りぼて
クレーンがぶっ壊していく
土埃の向こう

ぼやけた春の空気のなか
孵る前の卵だけが　静寂を溜めて
空白のように実在している

嗄れた声を放ちながら崩れる
薄っぺらくなった屋根

空から見下ろす影は
マグリットの鳥のように
躊躇いなく羽ばたく

張りぼての向こうへ

そうして去っていくものを
いつも眩しさに見失い
さよならの声が届かなくなってから
さよならだと気づく愚かさも
許されていただろうか

身長の刻まれた柱
ひんやりとした廊下
わたしたちを隔てた壁
すべてが重荷を捨てて重なり合い
春光の温もりに　葬られていく

赤い屋根の下で
繰り返された営みの記憶もまた
解体され
あたらしい物語の上で
振り向けば
春の灯として　見つめ返してくれるだろうか

赤い屋根の下で
星座のように歪だったわたしたち
泣きながら光っていた

愛されたくて
愛したくて

耳を塞げば雨が降り出し
瞼を閉じれば星が瞬く
内側を巡った
夢の中で幾度飛んだだろう
少し重たい
両開きの窓を押し開け
飛べると知っていて飛んだ
夢だと知っていて飛んだ

夜空を閉じ込めた殻が
百滴目の朝露に
割れるなんて知らなかった

唐突に訪れる　あかるく生温い風

剥き出しとなった骨組みの
肋辺りにあった窓が
地べたに寝そべって
ひび割れた空を映している

赤い屋根の無くなった空は
広くて自由で
夢のように飛べない

あんなにも求めたものは
春という滅びのなか　土埃にまみれていて
その先はまだ見えない

迷子の視線　漂うけれど
土踏まずが感じる
春の引力だけは確かで

水を吸い上げようとするその足が
わたしのものだと思い出す

と同時に
鳴り渡る夕刻のメロディ

いま帰着地だったところから
影の方へと踏み出していく
傍らの電信柱に別れを託し
後悔を炙り出そうとする夕焼けに
背を向けて

鳥も人も夢もすべてが去ったあと
光の結晶のような綿毛が
迷いなく降りたった

かつて卵の孵った木の下に

◆嶋田紫文　東京都

between the sheets

シーツの隙間渡り歩く旅は愉しい
たった一夜ぶんのぬくもりで
満たした気になっている

私は三角グラスの中で揺れながら
新しい夜　煙草に手を伸ばす
独り占めしたくなるのを恐れて
肺を汚している

捨てたものを何度も買い物カゴへ
端から端買い占めたくなってしまう
手持ちが足りない

思い入れがなければ身は軽い
すこしばかり荷物になろうと
持ち続けなければ
失くすものがある気がする

そんな御託を並べながら
いつの間にやらシーツの隙間
一夜ぶんのぬくもりの
心地よさ　身を任せてる

だらだらと続く夜のひとこま
揺らす三角グラスと
くしゃくしゃのシーツ

残星

会社のＰＣスクリーンセーバーの中で
私のヒーローは生きている

生きたかもしれない人生
歩いたかもしれない道
すべて振り切って
大人になった

人間のふりをしていたら
梯子を外されてしまった
本当はカップ麺の出来上がり
三分すら待てない

憧れを煙とともに吐き出して
アルコールで痛みを誤魔化す
食べ物は二、三回噛んで胃袋へ放り込む
そんな癖がついたのはいつからか

はやくはやく　生きて

部屋の鍵を閉め、駅に向かう
改札が吸い込む人の波
私の魂も吸い込まれてしまえばいい

気づけば革靴を鳴らして駆け出していた
ネクタイを緩め
降りるはずの駅見送って

すべて振り切って
私はなにになろう？

◆さより　神奈川県

どこまでも低くどこまでも高く

みんな溶けあってうつくしかった。
侵食もせず離れもしないで。
どこまでも溶けあってうつくしかった。
夕刻の空に似て。

ここにはない。
無限ほど遠くかなたにある。
ここにあってほしいと切に願う魂とともにある。
乖離に胸をひきさかれる人のうちにある。

時を刻んでいた波は永遠を踊る。
枯れることのない流れが潤す。
翼はつかれを知らない。

ついにたどりついたから。
山のうえのとまり木に。
だれも見たことのないみどりあるところに。

ゆっくり歌うと涙がでてくる。恋しく、恋しく。

帰るために離れたのだ。帰るために。
帰るために生まれたのだ。帰るために。
帰るために生きぬくのだ。帰るために。

そうなれば、なにを怖がるだろう。
狂気ととなりあわせだ。
愚かさと紙ひとえだ。

どこまでも低くあれ。傲慢に支配されぬよう。
どこまでも高くあれ。うつくしさを見つめよう。

王は星は

裁判官は犯罪者の子として。

正しい人は疑いをかけられた人の胎にやどり。
王は赤子のすがたをとって。
星は異国の人のために光り。
真実はさげすまれた人の唇に。
渇く砂漠に泉が。
よごれきったところに清さが。
闇のなかにちいさなちいさな火がともった。
火は人びとによってもみ消された。
消えない炎がとどまる時まで。
消せない炎。

見えない油によって燃えつづけた。
塩も水も火も風も
人びとはきらう。
くさるまま。にごるまま。よどむまま。
荒らすことに気づかぬまま荒れるにまかせた。
石を投げた人は投げられた人を知らない。
抱きとめられた石。
石を抱きとめた人は石を投げた人を知った。
あいした。
王の傷。
だれにも負えない傷を負った人。
すべての傷を。

あさにあおいそらを

あさ、あおいそらを見あげること
雲のかたちを観察すること
木のかおりをはこぶ風を顔に感じて
風のながれを指のあいだにたしかめること
落ち葉をふむ音をたのしむこと
ぜんぶいのりです

息をして
生きることは
いのりです

◆藤井亜希　神奈川県

Alice

アリス、君は誰だったんだろうね
オンラインの向こう側で笑う君が
爪を切る君が
愛について語る君が懐かしいよ

七つのアカウントと加工されたプロフィール
君のストーリーはその都度違って
そしてどれにも母親がいなかった

アリス、君は美しい女子大生で
虐待されたクオーターで
生活に疲れた専業主婦で
前線の兵士でテロリストだ
君は医師で　ロックスターで
銀行員でエンジニアで夜の工員
アイドルで　ポルノスターで
二児の母親でトランスジェンダー
ＣＥＯでホームレスで太っていて痩せている
君は十四歳で二十一歳で四十三歳
君は優しくて冷酷で賢くて愚かで
三ヶ国語を操って男も女も誘惑して
そしていつも泣いている

アリス、君は廃墟で僕を撃ち殺した

アリス、君の好きな色は赤で　嫌いな食べ物はチョコレート
君の住む場所は雨が多くて
五月は君の愛する季節

アリス、すべてのダイアログはラブソングだ
君の肉体には心臓がなくて
僕の言葉には魂がない
アリス、いつかどこかで僕らは
視線も交わさずすれ違うだろう
そして僕らはその一瞬で
オーガズムに達して灰になるんだ

君の影　君のステータス　君のロケーション
君の痛み　君の空洞　君の中枢

Alice, you didn't exist.
You never existed.

少女

野生の目をした専業主婦の群れが
獲物を片手に夕暮れの街を往く
急行列車が通過する踏切で
あなたは立ち止まる　帰るべき場所を忘れて

老女のあなたは少女の瞳で歌う
それは古い歌　遠い故郷の子守歌
かつてあなたが与えられたもののすべて
かつてあなたが教えることのできた唯一

坂の多い街で
少女のあなたは振り返る
十二歳のあなたは初潮を迎え
あなたの母はあなたを棄てた

首から下げたロザリオは重く
汗で金のメッキが剥げる
ほつれたスカートの裾を握り

少女のあなたは老女のように泣く

その匂い　宇宙が収縮する音
やがてあなたの真紅の闇から
私は生まれ　連鎖する
愛を乞う声は死者を悼む声と同じ

さようなら
少女のあなたを私は許そう
さようなら
あなたの傷を　皮膚の下のかなしみを
血液と涙が循環する音を
拓かない膣の奥の真空を

嬌声と　パントマイムと　けだものの匂い
人ごみのなかで私は立ち止まる
あなたの手を離したのはいつだろう
私は大人のような顔をして泣く

かなしみ

十七歳の頃　わたしには
男の人が必要だった
たとえば深夜のファミレスなんかで
煙草の味を教えてくれる
兄のような男の人が
海のような男の人が

伸ばした髪を　茜色に染めて
異国の言葉を教えてくれる
夜のような男の人が
銃のような男の人が
すりきれたシャツをわたしに貸して
子守唄をうたってくれる
影のない男の人が
死のような男の人が

あのとき　動脈を切り裂いていたら
僅かでもあなたに近づけたでしょうか

わたしにはまだ旋律がなく
あなたはわたしのすべてでした

致死量を知らない処方薬と
安いドレスのレースの裾
あなたはきっと　わたしを探して
今も音もなく泣いている

あなたはそして理解する
それはわたしの姿を借りた殺戮
わたしはそしてたどり着く
それは真冬のバックシート
あなたは秘密を教えてくれた
あなたは秘密を教えてくれたの

五月の空に、軍用機

こうして
何ひとつ知ることのないまま
わたしたちは消えてゆくのね

わたしたちは散ってゆくのね

五月の空に
軍用機
世界に銃弾の雨が降っても
わたしは絶対に傘なんてささない

あなたは
知っているんでしょう？
きらめくナイフの使い方や
押してはいけないスイッチの在り処を
知っていて
それでもわたしに与えるのね
太陽と同じ匂いの香水や
心臓と同じ色のドレスを

霧雨の音は天使の羽音
あなたは気づかない感情のリフレイン
ほら　聴こえるでしょう？

プレキシガラスの向こうの轟音
よごれた宇宙を攪拌する音
足下から伝わる振動と
一瞬の閃光
わたしはあなたのなかに還る

五月の空に
軍用機
あいしてるなんて口にしないで
もうどこにも逃げられないなら
教えて
あなたがどこから来たのか

レクイエム

あなたを喪った三人の男たちは
あなたが遺したピアノを囲んだ
男たちはあなたを
花で飾った
むせかえるような大量の花の
名前をだれも知らなかった
彼らはみなやさしく有能で
すこし間の抜けた男たちだから

ひとりはあなたに手紙を書いて
ひとりはあなたに歌をうたった
ひとりはあなたの思い出をかたり
あなたはダウンロードされた　かれらの魂に

あなたが使わなかった真あたらしい傘と
かつてのあなたが着ていたコート
あなたは公平に分配された
細胞に　海馬に　日常に

あなたのいないキッチンで
かれらは泣く　声もなく
あなたが遺したうつくしい男たち
あなたを愛した手　脚　心臓

不確かなリズムでつづいてゆく彼ら
生命という名の
はてないラブソング

◆未来　　静岡県

フランケンシュタイン

ある日声を失った
その次に耳を失った
そのうちに目を失って
境界線も見失った

真っ暗闇を漂っていた
一人でなのか誰かとなのか

ある日小さな光を見つけた
どんなに目を背けても
どんなに耳を塞いでも
どんなに泣いて喚いても

失った僕には何もできない

光が照らし出した小さな欠片
もう二度と見つけ出さないように
記憶の彼方に消してしまおうかと手をのばす

それなのに欠片はすり寄ってきて
愛おしげに手中に収まる
まるでそこが家かのように
はじめからそこにあったかのように

あの日見つけた小さな欠片を僕はいまだに手放せない
年末セールでバラ売りされて
引きちぎられた僕の残骸
きっとそうだと思うことで
それ以上考えないでいられる

あの日欠片がそうしたように
僕は家に帰ろうとする

きっと誰にも僕がわからない
たとえ僕が望んだとしても

ひとつ　またひとつと
あの小さな欠片を見つけ出す
少しずつ　ゆっくりと
僕は僕に近づく

それでも家には帰れない
粉々になったあの欠片を全て見つけ出すことはできない
から
だから　今日も僕はフランケンシュタイン
探し続け　彷徨い続ける
今日も僕はツギハギのまま　小さな欠片を探し続ける

◆LDR　東京都

死季折々

私がいて、扉を開いて、セミが渇いて
気になる人がいて、初めての相手、あなたの心を叩いて
やっと季節は秋で、あなたがいて、手を繋いで
あなたの手袋を借りて、あなたはマフラーを巻いて
いつにも増して、好きが増して
花が咲いて、部屋に光が差して、あなたがいて、私がい
て
天使を抱いて、二人は嬉し泣いて、三人で泣いて
これは私の来世と呟いて
私は一人でこの世を去りて

冀望

腕を引きあなたは手のひらを掴み綴り書き
わたしは頭の中でなぞり書き
最後の文字と同時に手のひらに落ちた雫
二滴目は私
この目から落ちる雫は何色だろう
わざと心を閉鎖し錠を閉めていた自分
無くしていた女性(わたし)と鍵を見つけだしてくれた
今　見えぬ苦しみから視える楽しみ
今　少しだけあなたの匂いが作る人影を

みえた気がするんです

◆たけ虎　　愛媛県

今日、電話で兄の奥さんが妊娠したと報告があった。
まだ六週間だという。
生まれるのは三月くらいだというのに、今から嬉しくてたまらない。
もうすでに心臓は動いていて、そこに生命が宿っている。
そう思うと、じわりじわりと胸の中に熱いものが溢れてきた。
これはなんだろう。どうして私は泣いているのだろう。
兄が父になって、母が祖母になる。
そして私は叔母となる。
それが不思議でたまらない。命がひとつ生まれることでこんなにも変化が生まれてくるのか。気持ちが追いつかない。
愛しさ、まだ出会っていないその命にそう感じてしまう。
私の血も少しは混ざっているんだ。
命の繋がりとは本当に凄いことだと思う。
私がいつか母になることがあれば、この気持ちをもっと明確にできるのだろうか。
不思議な不思議な命。尊い命。
どうか無事に生まれておいで。
みんなに祝福されながら生まれておいで。
私は君が少しでも喜んでくれるようにいっぱい絵を描くよ。
まだ出会っていない君へ。

◆E　　静岡県

世迷い言

死んだ様に生きて　生きる様に死ぬ
これが僕の人生
僕は　この世のすべてに負けながら　何とか生き長らえている

このまま虚しく生きるのは　辛く苦しい
自分以外の人間の様に　適度にストレスと向き合いつつも

己が人生を　煌々と瞬きながら愉しむ
僕も　そんな人生を歩んでみたかった
こびりついた苦しみが　僕の心を蹂躙する

僕の人生ってのは
盛大にむせながら走っているところに
お構いなしに　食べ物や飲み物を突っ込まれてゆく様な
もの　そんな気がする
訳が分からないよな　自分でも何を言っているのか分か
らない
心ん中に砂漠でも飼ってんのか？　と思うよ

でも理不尽だなんて思わない　当然の報いだ
だって僕には能力がないんだ　本来は淘汰されるべきだ
ったんだ
それなのに　エゴで無駄に生かされて続けてる
果たしてそれは　「幸せ」と言えるのだろうか？

僕にとって　「生きろ」と励まされるという事は
何の変哲もないただの人間が　突然こう命令されるのと
同じなんだ
「今すぐ何の道具も無しで　空中を飛び回れ！」ってね
ヒーローでも化物でも　何でもないし
僕にはそれくらい　無理難題を押し付けられている様に
感じるんだ

行きたくない　生きたくない　生きていたくない　消え
てなくなりたい
「ない」物強請りの自分が嫌いだ
振り返っては　自己嫌悪に陥る
負の記憶は僕を縊り上げ
何度這い上がっても　底なし沼で手を離す
その内　這い上がる気力をなくし
重力に従って　頭の先まですっぽりと闇に飲み込まれて
ゆく
そして　逝く宛も無く　奥深くへと　延々と
沈み込んでゆく

死ぬ為に生きて
遺書を書く事が　ささやかな毎日の楽しみで
その為に辛うじて今を生きている
そんな僕を肯定する天使と　否定する悪魔が
今も頭の中でせめぎ合っているんだ
死を強要する事は罪になるのに　生を強要する事は罪に
問われないのか　可笑しな世界だ

終活アプリを　入れては消して
墓じまい　相続　遺言書――
本来実践するには当分先であろう知識だけが　どんどん
膨れ上がっていく
学校帰りに　百円ショップを梯子して
気まぐれにエンディングノートを買った
そしてまた　それをほったらかして――
僕の人生は　こんな毎日の繰り返しさ

不本意ながらも
「生きてて良かった」と上書きされる日が　極稀にある

しかし　それもつかの間
すぐ「死にたい」にリネームする
今まで脳内に「死にたい」と
「名前を付けて保存」したファイルは　一体幾つあるの
だろうか
きっと　夜空の星も驚く程の　夥しい量だろうな
心の背骨がグキグキしてる
そのうちスカスカになって　崩れ落ちるんじゃないかと
僕はそう思っている
もしもその時が来たら　一体僕はどうなってしまうのだ
ろうか？
不安という名のタールが　まっさらな心を　じわじわと
どす黒く染め上げてゆく

こんな事を延々と考えている僕は　既に手遅れなのかも
知れない
薄々　気付いてはいたのだが
誰の手も届かない　そんな地の底へと
落ちて行ってしまった　そんな気がする

四面楚歌　針の筵

今までの人生は　何だったというのか
いとも簡単に崩れ行く　希望の架け橋
何と脆い事だろう
生きた数だけ　鎖が絡み付いてゆく
藻掻けば藻掻く程　赤や紫が滲む
纏わり付く　味のしない灰色の世界
いつからこうなっていたのだろうか
もう思い出せない

僕はなぜだか　記憶が飛ぶ
どうやら　心理的負担から来るものらしい
失われた記憶の分　新しく僕が作られるのならば
今まで何人もの僕が　犠牲になってきたのだろうか

人間をアンドロイドに置き換えて　人格を自我を持つＡＩに例えるとするならば
僕と同じ製造年の奴らは　既に何度も何度もバージョンアップを重ねた　完全無欠のＰＲＯ版のＡＩ
それに比べて自分のは
まったく改修されていない　セキュリティホールで埋め尽くされた
欠陥だらけの　古ぼけたＡＩ
外界からのちょっとした刺激に　すぐダウンしてしまう
落ちこぼれ
年齢という名の推奨ＯＳ環境がどんどんアップデートされていく中で一人取り残され
とっくにサポート対象外の自分
通常出来る様になっている筈の事が　いい年こいて　未だ一人で出来ない
こんな時代遅れの不良品　居なくたって誰も困らないだろう？
むしろ　とっととスクラップにした方が良い

人生を漫画で例えるとするならば
クラスのマドンナのあの子は　ときめきいっぱいの煌々した少女漫画の世界

よく遊ぶアイツの人生は　爽やかな青春少年漫画
肝心の僕の人生はと言えば
この世全ての社会の闇を煮詰めた様な　どす黒い青年漫画だ
どうしてこんなにも　人によって「人生」の難易度が違うのだろう
こんなリセットもコンティニューも利かない
バランス最悪なクソゲーなんて　真っ平だ

こんな事を延々と頭の中で飛び交わせ　僕は「生」と「死」の狭間を彷徨っている
決してはまる事のないピースを集め続けながら――

◆保田　恵　　神奈川県

車窓

走る快速急行の窓
薄水色の秋の空
電車を追いかけるように
羽ばたくハクセキレイ
飛行機がキラキラと
電車と反対方向へゆっくりと向かって
のんびり浮かぶ
コッペパンのような雲たち
電車は走る
通り過ぎた駅のホーム
スマートホンをのぞきうつむく人々
影絵のように皆同じ姿して
何が現実で
何が虚構か
私の脳で、エラー音が鳴り響く

ガラクタ

わたしは古びたフランス人形

通勤電車に今朝も詰め込まれ
関節はあらぬ方へ曲がり
揺れれば皆同じ方へ倒れかかり
長い髪は乱れ

わたしは古びたフランス人形
声を出すことも
大きく息を吐くことも禁じられ
気配を消して
都心へ輸送される

白やけしたガラスの瞳で
隙間から見える
窓の向こうの青空を
ずっと見つめてる

怪獣

ホームで止まった電車のドアから
怒ったような顔とか
髪がツンツン立ったガタイの良いのとか
眠そうな顔の大きいのとか
ぞろぞろ降りてきた
あぁ、これ、虫からしたら
怪獣の行列のようだな
ドシンドシンと
地球を土足でずかずかと我が物顔で
蝕んで壊して
この星ダメだって他の星に移ろうだなんて考えてる

地球にとって、私らウィルスみたいなもんだったんじゃ
ないか

そうすると、新型コロナウィルスって
はたして悪者なのか、って

声が頭を
よぎって消えた

眠れない夜

こんなにかわいいほっぺが
目の前で笑っているのに
わたしの疲弊した脳は
この眩しい生命の存在を
ぼんやりさせている

こんなに澄んだ声で
キラキラと歌っているのに

わたしの疲弊した脳は
それをノイズととらえている

いつか過去になってしまう
今この至上の幸福を
ゆっくり見つめることなく
せわしなくやり過ごそうとしている

目の奥は柿の渋がついたように
こんなに眠いのに
疲弊した脳はくだらない心配で
今日も私を眠らせない

午前三時

君が寝返りを打ちながら
ウフフフと楽しそうに
笑った

寝られそうな気がした

にせもの

コンクリートで塗り固められた地球の地肌
ビルの背景になった三日月と薄藍の空
星は3つだとあの子は言った
整えられた芝生の道
これは幸福な人生という名の
作りものじゃないか
この世の核心は覆い隠されて
私はどう演じればいいんだろう

◆灰島　雷　　神奈川県

万霊節

騒ぎたてる声もまた
麦の穂たちの揺らぎだった
一番星かがやく
昏い夜

さびしかろうな
さびしかろうな　という

あの古い家の　光のおくに
灯油と蜜柑の匂いは残る
丈の長い　灰色の外套が
玄関に吊るされている

歩くには静かすぎる
歩むには愚かすぎる
わたしは
帰り道を誤れないまま

一番星かがやく
昏い夜

胎動

あなたの教育は間違っていた
あなたの教育は間違っていた

あなたの教育は間違っていた
あなたの教育は間違っていた
あなたの教育は間違っていた
牙のある者から牙は生まれ
毒を呑んだ者が毒を吐く
あなたの教育は間違っていた
止めてみせろよ
蛇をまさぐる右手が
牛を捌く刃を握るのを
月の下でわらいながら
流血を夢視て泣いている男を

草原

みんなして口を衝く風がするどすぎてつかれるね
たくさんの目玉が泳いでいるからつかれるね

争いあった時代を生きたひとなら
わたしたちを根なし草というのだろう
どうぞ　そう呼ぶがいい

みどりの根なし草たちが
水底で透きとおる藻のように
やわらかな秋の波にそよいで
天の下で　ゆるされていればいい

こうして　夜の前の野に立ち
風とともに青くなってゆく
掌を見れば
なにもない
陽の名残りのほかには

夕暮れの先に白い星は置かれ
だれのことも見ている
光を絶やさないでいることもない
きみは直視しすぎた
傷から滴る雨など流れてゆけばいい

◆大森瑞希　埼玉県

海
大原
と 交わりて 天変海異
大空
天

夜
真中
と 交わりて 黄昏時
白夢
昼

風
殺景
と 交わりて 百花風乱
花雪

吹
福
七神
と 交わりて 百神夜行
阿羅
修美

審眼
と 混じりて
白眼青眼
一眼
隻

◆茉莉亜　埼玉県

白いチョーク

商店に並ぶ旭日旗のキャップに眉を顰めた母が僕に買ってきた星条旗のTシャツ
刻一刻と生き返る空を映す水鏡の国旗があれば死ななく

て済む人がいるだろうか
読書家の少年の不道徳さをボールを追いかけて風になる
彼らは知る由もない
僕んちの犬と同じ遊びをしている彼らは活字に張り付いた少年を指差して、うちの爺ちゃんみたい、と笑う
黙ったのは蓋をしたからじゃない
飲み込んだからだ
大人の身体になればなんだって消化できるようになるよ、アルコールも怒りもなにもかも
僕の耳打ちに少年の耳は桃色に熟れ、先生の指先から白いチョークがぽきりと落ちた
優しい人、それは虹を見つけても誰にも教えない狡さを隠し通せる人
テレビの中でアフレコされる子犬が僕に何かを訴えかける
人間の言葉を覚えてしまったからお前の気持ちはわからない、言葉にならないとわからない

ビッグクランチ

君と別れてから十一度目のパウンドケーキを焼く
バターを買えば幸せの小人が私を嗅ぎつけてくるはずだから
二十四時間営業のスーパーだけが私を包んでくれる気に酔った
ヒットチャートで蓋をしても言葉は私をすり抜ける
てくてくてく、と唱えて歩こう
とぼとぼとぼ、にならないように
枯れ葉になった人間に残された最後の機能は空を見上げること
私が神様なら夏と春とが混ざったこの夕暮れにアガーを加えて羊羹にするのに
街と共に私の切なさに金箔をまぶして透明な世界に閉じ込めてよ、神様
飛行機の音がするがどこを探しても機体はなくて、胸の奥に蟻地獄が生じる
蟻地獄は君だよ
私、幼い頃からこころに神様を飼っていた
今は君が住み着いている

君が神様を食ってしまったんだね
孤独ではなく渇望
涙は五臓六腑に染み込み
氷がきゅるきゅる鳴くような私の芯
バターが安くなったり高くなったり
上司の白髪が増えたりツバメの巣を見つけたり
いつだって脈絡なくビッグクランチははじまる
君に吸い込まれてその先にはなにがあるかな
諦めながら足掻く私は踊っている風に見えたりするかな

めがね

教卓にあなたが現れた間延びした午後
変なふうにポッキーを口に含んだのを小さく後悔した
あなたは春に手を引かれてここまで来たのでしょう
薄ピンクのワイシャツが張り切っていたもの
チャイムが鳴ってわたしはめがね屋さんへ走った
中学生ぶりに真面目に走った
あなたのめがね姿が歯を磨いたあとに金平糖を噛み砕くことよりもすてきで
どの夏のいかなるバッテリーのミットに吸い込まれるボールのインパクトより馴染んでいて
あなたになりたいとこころの石が震えたから

コンタクトの方がモテるのに、とサークル仲間がどうでもよさげに呟いて
それを含めてわたしは満たされていた
あなたとのあいだに二枚のガラスの壁があって
守られている気がしたり
果てしなく遠くに感じたり
このガラスは真っ赤な嘘をついていて
あなたは幻ではないかと疑ったりもした
上手に笑えないあなたの冗談をわたし以外誰も笑わないのに
あなたは薄ピンクのネクタイやベストを春夏秋冬身につけているから
希望が見込めないほど枯れたラベンダーに水をやりたくなるような穏やかさ

あなたはフッサールの文献を読み上げるとき、めがねを外す
一枚、壁が壊された
わたしもめがねを外す
二人のあいだに壁はない
レジュメを理解することと現象学をすることは丸っきり違うのだとあなたが力説するから
文字を追うのをやめてあなたを見ているのに
あなたは文字に追われてつっかえてばかり
視線と視線が触れ合うことはない
さみしいような
ほっとするような
フッサールに妬くような
雲が講義室に浮かぶ
やがてあなたはめがねをかけてタンブラーへ手を伸ばす
わたしもめがねをかけてテーブルの下で恋人に返信をする
チャイムが鳴ればあなたがすすめた本の感想を伝えに駆け寄って
わたしの恋人への不満をあなたは哲学で返して
前に話していたフランケンシュタインのＤＶＤを
幾何学的なデザインの紙袋に入れて貸してくれた
ＤＶＤもめがねも割ってしまいたいな
でも視線が抱きしめ合ったってお互いわからないのだから
めがねを褒め合ってまた木曜日ここで会えればいい

前触れ

不安定に安定する性、テレビショーに昇華されることもなく、生まれてから死ぬまで生活は地続き。晴れ男も雨女も神様気分で羨ましかった。陽射し、曇、雷、雨、雪、雹がいっぺんに襲撃する月曜日に手を伸ばす、タラップに登ってひとり。潰れた腿が巨人用のブレッツェンみたいでいつまでも撫でていた。蝶の軌道を誰も咎めないように、私の腿もそうであると疑わず。そういう時代じゃないから、というナンセンス。味方されても仲間じゃな

い。ムーブメントで終わる人権。理解してくれてサンキューな。浮かび上がる非常口案内板が天国への入り口。呼び方くらい、と言う人は言葉の呪いをかける側。バームクーヘンの穴に溜まった幸せを掬い取る癖が浮き彫りになる街角。0キロカロリーの幸せは有り得るのか。太るなら我慢するまで。使命のない人生を私たちはもっと喜ぶべきだ。女性アイドルの寿命は短いから(短いのに)アイドルに憧れる。どっちみち傷つけられるならかわいいと言われたい。アスファルトにガソリンでできた虹。飲み干せば大吉が怖い私は消えるかな。いつの日か試し読みの漫画に満足できなくなる。巨大化した女の子からの卒業を決意する前触れとして。

◆黝　東京都

青い町

青とモノトーンがあり少しだけの赤と緑があるこの世界
という名のテーブルの上には
ガラスにプラスチックなどの人工物が正確に間を空け置
かれている訳もなく散らばり転がっている

程よく聞こえる雨音と虫の鳴き声が風を贈る朝。今日も夜更かしをし「また眠れなかった」と少し呟くこの時間、
ガラス越しの弱い青が部屋を包み落とす
まぶたが少し重くなるこの光は優しく昼に連れていく
青い空間と一体になるこの部屋にはただ唯一の僕だけの
一人だけの青い町。

東京レイン

ほんの少しほんの少しだけ何か変わりたかった。ここで
傘を畳み少し走りまた全速力で走る小雨の中。傘を持ち
走る僕はほんの少しだけほんの少しだけ何か変われた気
がしたんだ。
傘を差さずに向かった駅には濡れた階段に立てかけられ
た足元注意それを見る濡れた鳩
滴る髪の雨
落ちた水はまた上に行き雲になるのだろう。そしてどこ
かの国へ行き雨になり誰かを癒し誰かを濡らすのである
そんな雨に憧れてそんな雨に打たれながら走るそんな夜
を僕は少し誇らしいのである

死ねないヒーロー

光がくっ付いていたキラキラ光り輝く訳ではなくそこに落ちていた。
こんな夜だからこそ項垂れている人を横目に見ながら魂が着いてこないぐらい走り出した。
あの人が言ったんだよ「お前は俺のヒーローだヒーローは死なない」
俺は死なない死んではいけないあの人のヒーローだから。

慣れという名の盗み

好きな詩を読んで読んで読んでいつも感動する。だけど読んで読んで読み尽くしたころ感動は減り最初の感動を忘れてしまった。返して欲しい全て心と頭と詩に取られてしまった。

失恋の空は確か五月の空の青い青い青い空でした。

神なんて居ないだろうけど君が祈るなら隣で祈っていいですか？

君が欲しいって言ったからあげた僕の髪の毛一本。
知らず知らず撮ってるキャラクター№・０２５番
二十歳になって、鬼ごっこ。重い足に血の匂い
指切ったと言ったから、養生テープを渡す君

◆豊田隼人　東京都

ブラインド

声の弱った愛を
盲目と呼んでいます
衣擦れの音は飛行機の音より高く
皮膚のこすれる音は何よりも大きい
この世界における音楽のルールは
それが弱っていくほど　強くなってしまう
屍を三回、その骨で踏むといいよ

まろやかなこころもちですべてを討てる
オーケストラの微かさも立派さもわかっていて
舌鼓を打つ暇もないから大気の貌を抱いている
深夜零時を過ぎたなら寝てない奴は追い回されるよ
目を閉じてから布団に入ってなにかの足を掴む
追い回されるのが怖いから目を閉じている
守ってほしいから知らない足を掴んでいる
ああ　漂白済みのコットンがからっと晴れて
イチゴオ・レをこぼしたらしいシミを作っている
もしかしたら　いや、どうにも
この世界がとてつもない速度と呼吸で回っていて
誰かを支点に十回まわったあとの
景色がとても正しいのかもしれないと思う
血管が身体を取り囲んでいるのは
重力から人間を守るためで
みんなが惑星を血液に混ぜて流したばかりに
盲目を苦しみととらえている
耳を欹てれば見えるものだけで構成されている愛を
コーヒーにスティックシュガーを入れる時と
同じ力を作用させて攪拌します
光のカーテンを通過していくガラスの輪たちを
アシストしてあげることだけが快適さを生む
弱らないこと　なにも教えないでいること
ぜんぶ混ぜることで　おいしさになります

◆cofumi　北海道

孤毒

話せるだけの過去があるならいい
月を舐めるように凝視しても
何の希望も見いだせず
夜空を流れる雲にさえ
鼻で笑われるような人生だ

己の道はどれも短くて
足元から崩れていく崖のようだ
石ころ一つ転がらない
まるで句読点のないこの人生

後ろをランタンで照らすと
焦げた道しか見えやしない
所々黒ずんで見えるのは
そうだ流した涙のシミだ

隣を歩いていた奴は
呑気に遥か先で笑ってる
適当にやればいいじゃないか
もう靴はボロボロだ

雨粒の一滴が傷に沁みて
首をうなだれさせる
心の溝を綺麗に洗い流してくれ
そうすれば過去を生きながら
明日を見なくてすむだろう

他人様の幸せに嫉妬し美しさを羨み
己の心の醜さを土に埋めたくなる
あと小一時間で日付が変わる

土に未来を葬るのは少し先にしよう

◆暁夜曖生　埼玉県

弱いままだ

長い髪が孤独を引きずる
僕は惰眠を貪って

カミサマなんて
この世には絶対いない
カミサマなんて僕が作るもんなんだ

倒れた僕を見て
人差し指を向けて笑う大人たち
スマホを向けて笑うＪＫ
希望なんてないなあそうだろう？
僕の涙は枯れる

あぁ僕は弱いままだ
守られなきゃ生きてけない

それが悔しくって悔しくて
暗い夜道を一人歩く
あったかいのはコンビニ弁当

長い髪が過去を引きずる
僕は薬をゴクゴク飲んで

カミサマなんて
この世には絶対いない
そう思ったとき君が来たんだ

倒れた僕を見て
嘲笑う群衆
そこで君が僕の目を隠して
「希望はここにあるだろう?」
僕の涙は止まる

あぁ僕は弱いままだ
守られなきゃ生きてけない

それが悲しくって悲しくて
でも一人じゃない

長い髪をバッサリ切った
孤独と過去にサヨナラ言えるかな?
手にぶら下げたのは奢ってもらった飲み物
あったかいのは君の温もり

◆明蓮 陽　静岡県

夢

紺色の塊が点在する教室
沢山のテキストに埋もれている塊や
呑気に放課後の予定について話す塊
私はあくびを噛み殺しながら窓側の席に座っていた
校庭で紺色のジャージが走りまわるのを
向かいの建物たちが背伸びして覗いている
それを思いっきり睨むのが昼休みのルーティン
でも、そんなの建物たちは痛くもかゆくもないらしい
いつも生暖かい笑みを向けてくる

けれど、今日はどうだろう
あいつらが、いや、町全体が、
物凄い速さで遠のいていくではないか！
走りだしたのはあいつらの視線に嫌気がさした我が校舎
新幹線のような快適さで海の方向に向かっていく
けらけらけら、けらけらけら
私の喉が、肺が、体が振動する
けらけらけらけら、けらけらけらけら
悲鳴と困惑の視線が私を貫いていく
私たちを呑み込んだ化け物はまだ逃げている
もうあいつらは見えなくなったのに逃げている
きっと頭が可笑しくなってしまったんだろう
だから、ほら
ついには湖に身を投げた！

あっという間に青い腹の中
いよいよ全てがばからしくなった胎児は
静かにうたたねをした

熱中症

青リンゴの瞳に若草の上半身、方解石の翅。瞳孔が開く。酸素が無造作に入ってきて、怠惰な心臓が途端にやる気を出し始めた。血管が拡張するのを感じる。ぬめった手を服で拭き、虫取り網を握り直す。
間違いない。ギンヤンマだ。
後ろ姿だけでも分かる。だって、春からずっと見てきたから。

彼と出会ったのはクラスが替わってすぐ行われたグループ活動でのことだった。たまたま彼の向日葵がこちらを向いて咲いたのを見た。そうしたら夏の正午にタイムスリップして、たちまち熱中症になってしまったのだ――

ホバリングしているギンヤンマに悟られぬように、一歩ずつ踏み出す。高揚感から、口角が上がっていく。
一、二、三、四、もう虫取り網が届くところまで来た。
喉を鳴らす。いよいよだ。
虫取り網を振りかぶり――

ギンヤンマのすぐ横に振り下ろした！

私は、確かに熱中症になった。熱中症であることを暗に示しもした。しかし、決して彼に看病をして欲しいわけではなかった――

虫取り網を認知したらしいギンヤンマは、猛スピードで逃げていく。それを私は必死で追いかける。

春から毎日のように続いているこの遊びが、未だに楽しくてたまらない！

ただ、ずっと熱中症にうなされていたかった――

しばらくすると、いつものように彼を見失った。いつもならここで終わりにするが、今日はなんとなくまだ終わらせたくない気分だった。

池の周りをぐるぐると探しまわる。

暫くして、二匹のギンヤンマを見つけた。

しかし、彼は私と同じ種ではなかったらしい――

瞳孔が小さくなる。酸素がゆっくりと入ってきて、心臓はやる気を無くす。血管が収縮していく。

そうだ、結局のところギンヤンマはギンヤンマにすぎない。きっと、私とは違って種の存続に関わらないという選択肢は無いのだ。失念していた。

そうと分かれば、途端にギンヤンマへの興味が失せていく。もう、何で昆虫に興味を持ったのかすら分からない。

二匹に背を向けて家路へと一歩踏み出せば、腹の虫がぐぅと鳴いた。

◆岸本知也　　石川県

地球の住人

猫は知っている。

この鬱々としたビル街が、

太古の昔、おいしげる緑の草原だったことを

身をいっぱいに伸ばしていた獣たちの、

わななきの声が、猫には聞こえる。
人間たちは、草原を我がものにし、
火を使い、水を呼び、
大地をひっくりかえして、
もくもくと、煙をまきながら今日まで来た。
猫は草原が帰ってこないことも、
この世が煙でいっぱいになることも、見通している。

猫は怒りをこらえて黙っている。
俺も、もう歳で長くないし、
自分たちの種が滅びるのも、天の定めだ。
飯をくれる人間たちと仲良くやっていくほうがいい。

それでも、人間をゆるせない気持ちから、
いくら人間が声を甘くして呼んでも、
そっぽを向いているのだ。

生きる

一月一日、まだ夜が明けきらぬ前に、
雪靴を鳴らしてやってくる。

昼夜の様子を頭に入れて仕事にかかる。
二十四時間、三六五日、医療介護の世界は、弛まなく動いている。

技術を磨き、苦労を乗り越えていく。
競う訳ではないが、手は抜かない。

職場では笑う事もあれば、哀しい事もある。
時として死に際に付き添うこともある。

そんな日々を過ごせるのは、
人が人として生きるために。
その為にやっている。

十二月三十一日、暗くなってから、
夜勤の職員に、良いお年をと声をかけて帰る
明日待っているね、と返事がある。

緊張感と喜怒哀楽が混在した、
人が人らしく生きる世界だ。

◆松本涼花　千葉県

零下

限りなく0に近い日
空気中の酸素にさえ
気付かれないように
古書に身を潜める

レイカ1度に近い日
木の葉に包まり
世界が薄紅色になるよう
お呪いをする

限りなくレイカ2.度に近い日
鉛は這い上がり
森の木々と清流に意見を問う

限りなくレイカ3度に近い日
バナナを食べ
着替えて
電車にのり
同化する
振り遊びだ

限りなくレイカ4度に近い日
自分から自分を解放し
自分は部屋の隅から
自分の抜け殻を
見守る

限りなくマイナスが5に近い日
雲に包まり
マイナスがそれ以上
進行しない事を
ただ 祈る

地球人でなければ
違ったのかな
火星でも結局は
こうなのかな
果てしなく広がる
宇宙では
何処でも
どうやら
結局は
自分の体温は
自分の力で保つのかな

地球で生きるということは
思った以上に難儀なこと

またやってきた
レイカ1℃からのループ

さらばカメレオン

何を食べても
チーズの周りのカビの味がします
美しい物を見ても
荒涼としたヨークシャーの丘にしか
見えなくなり
私は私ではなくなりました
悪魔が囁くようになり
悪魔は人の不幸を願うようになりました
そこで笑う幼子の不幸でさえ願うように
なりました
透明だっただ液はどす黒くなり
そのうち血液も色を変えていくことでしょう
日々の教会は
悪魔が私を支配しないように
日々の沈黙は
老廃物が口から溢れ出ないように
日々のうたたねは
瞳から膿が流れないように

それでもやめなくてよいですか
それでもやめるつもりはありません

原子の誕生

原子は無能
宇宙の果てに蹴飛ばされ
その無能さを
その無能さ故の
純粋さを
キラキラと
ばら撒いておくれ
そうすれば
君は無能ではなくなる

神は銀河の眩い純度に
不吉さを覚え
こう言うだろう
恐れないで
それ以上傷付かないから
君はそれ以上の
何者でも無いのだから

原子が産まれた
無能な塊が
ただキラキラと光線を放つのだ

午前十一時十五分

隣の奥さんがピアノの練習を始める
外から聞こえるてくる雨音と
隣の奥さんが奏でる月光
それ以外の音は排除してしまおう
例えそれが我が子の鳴き声だとしても
午前十一時十五分だけは
無でもなく
有でもなく
白でもなく
黒でもなく
希望でもなく

絶望でもなく
授乳でもなく
ゲップだしでもなく
躍る心を 思いのままに
部屋中いっぱいに
撒き散らせる
フワフワと舞う感情
十一時十五分の軌跡

◆武中義人　　岡山県

得られるべきもの

ぼくに移項する時がある　それは
桜の花びらが一面に川面をピンクに
染める時　新芽が木々に群がり
蝶のように羽ばたく時―

そして　ぼくに移項する時が充ちる
ぼくのペン先がその蝶の羽根を
描く時　それがペン先から更に
向こうの青空に生きてゆこうとする時―

ぼくは生きている　と感じる　生きて
ゆける　と感じる　この永遠なる
季節の中をほころびとしてでも―

新しきもののために　ぼくに何が
できるであろう？　単に生きてゆき
生かそうとするその感情の裡に於いて―

けだるさ

立体の平面に到る影よ
僕たちの真昼は賛成した
それが長くなれば　ぼくたちは
移動するであろうと―

苛烈な火の滴りよ　逃げ水が
逃げてゆく　国道の上を―
そして　国道は交差する

ぼくたちのお臍の辺りで―

はち切れる情欲が　木の
先から太陽に射精する
太陽は女か男か―

この両性の相ひしめきで
ぼくたちは潤される　それまで
太陽は多産的であり得る

◆辻　洋一　　栃木県

巡　礼

ドアを開ける
突然　不可思議な形が飛び込んでくる

主張を拒んだ色彩が飛び交いだし
古生代のシダや
ムカシトンボの黒光りする目玉や
雨に濡れたステゴサウルスの背中に

薄日がゆっくりと照り返りだすと
たちまち　営々と受け継がれた約束に
私という木霊が
記憶とともに行方不明になる

万象が何処から何処へ誘(いざな)われてゆくのかなんて
ここでは誰一人聞こうとはしないのだ

沙羅双樹のさやぎ
迷彩色のこの曼荼羅の中では
私が誰なのか知る必要もない静謐が染み渡り
ほぞの緒に隠された永遠の暗号ばかりが
賑やかに眠り続ける

ドアを開ける
　私は消え
ドアは崩れる

私の中の

ノブのないドア

私はいつか
そこに辿り着こうとするのだが
真実の詩を謳ってやまぬ
それは　あてどない輪廻転生…の果てに行きつく
私という壁に彷徨う一滴の雨つぶに似て
世界をその宇宙に飲み込みながら
気がつくと消えてしまっているもの

消えたことも忘れてしまうもの

◆秋乃夜永　　山形県

白昼夢

曇り空　薄暗い光が
質素な部屋をぼんやりと映す
鳥が鳴いて　バスが停まって　洗濯機が唸って
ずっと遠くにサイレンが響いた
白い壁を見つめながら　静けさに耳を澄ませ

目を閉じて　それからそっと　見据える

色鮮やかな残響

空白を埋める

色鮮やかな残響

平凡から少しだけ
逃げて

色鮮やかな残響

楽しさを試みる

色鮮やかな残響

そして、目が覚めた

◆辻　香名美　　愛知県

コトダマ

あの頃の弱い自分を壊した
幻聴という名の見えない声は
私に構わずいつも優越感に浸っている

この地獄のような日々は
忘れられない悪夢で
涙が枯れるくらい私を狂わせた

その出口のない場所から救い出してくれたのは
私の意識を変えてくれるほどの優しい歌だった

テレビから流れたその曲は
今までの私を励まし
これからの私に道しるべを与えてくれた

その曲をきっかけに様々な曲を聴き
歌詞の言葉たちが私の支えになっていった

今ではそのコトダマが
私の強さの糧(かて)になり
人を気遣う優しさに変わった

あの頃の弱い自分を変えた
歌詞という見える言葉の声は
私に構っていつも優しさを与えてくれる

◆井川芽衣　　埼玉県

なんというか、こう、心をからっぽにしたいときがある。動画見たり、本読んだり、人の話を聞いたり、辛いニュースを見たり。
色々と頭につぎ込みすぎてもう嫌だって体が拒否する。頭に、外に出されないままの言葉が沢山詰まっているものだから。
だから、たまにこうして吐き出してあげなきゃいけない。ぐちゃぐちゃで、うまく言葉にできなくても。言葉にしてあげようとすることが大切なのだ。

何ならいっそ何もしなくたっていい。
ぼんやりと、その頭に詰めすぎたことを流していく。
順番も、正確さも良くわからないけれど、きっとそれを
見つめることが体が求めていることなのだ。
だって現に、見てあげるだけで満足したかのように引き
出しの中にしまわれていく。
それでいい。
それがいい。
ゆらゆらとわかだまりか消えてゆくような感覚。
ぬるま湯に浸かったような感覚。
今日も、一日頑張ったねと。言われるような。
何もしていなくても、いいんだよ。って許されるような。
たぶん、このために私は、今日も。

◆なかむら　みほ　　福岡県

モグラのおじちゃん

実家の田舎では
お年寄りも
よその家に遊びに来る
おじちゃんは
茶の間からやって来た
信じられない
手土産を持って

「あんた達に見せてやろうと思って」
虫かごみたいな罠の中に
見たこともない生き物
「これがなあ
芋とか大根とか食べてしまうけん
退治せないかん」

マンション暮らしの子ども達は
黒い奇妙な生き物に見入った

「今から川に持って行って水につけるんだ」
子ども達は顔を見合わせた

おじちゃんは自分が育てた
大根と白菜を置いて
川に向かった

この日から子ども達は
おじちゃんを
「モグラのおじちゃん」と呼んだ

今は
モグラのおじちゃんも
モグラのところに行ってしまい

子ども達の中に
モグラとモグラのおじちゃんが
仲良く
生きている

◆塚本貴文　神奈川県

江戸城跡地

あまりにあっけらかんとした芝生のうえ
長蛇の列、美術館を諦めて九時四十分の日曜日
ぼうぜんと歩き、
ぐるぐるまわるうなり声をきく
遠くに。

◆江口久路　京都府

たんじょうび

よる
くらいだいどころで
おかあさんがせなかをむけてたっていた
ねえ　おかあさん
そんなくらいところで
なにしてるの？
ねえ　こっちむいておかあさん
…ううん　やっぱりむかないで

むかし
ひとがころされたばしょだって

おねえちゃんがいってた
かべに　ちが
いっぱいついてたって

こんなひには
きっとあらわれる
こんなひには
きっと
であってしまう
きっと　かげがあらわれる
じぶんという　かげが

へやから　ものがきえ
なにもかもが
しろいきりのなかに
うもれてみえなくなる
しろいほねが
いっぱい

ひとりぼっちのたんじょうび
だれもいない
おはかのなか
ひとりぼっち

だからほら
ぼく　おかあさんを
ころしちゃったじゃないか
だからだめだって
いったじゃない

だから
ねえ
おかあさんぜったい
こっちむかないでね

◆はし　のぶしげ　　広島県

勝者敗者

川沿いの遊歩道

雑草が思い思いに伸びて道をふさぐ
光りの恩恵を受けた草木が腹を膨らませて排出物を吐き出し
わたしの鼻腔を攻撃する

川沿いの遊歩道
伸びていた雑草が刈られ
茶色に変色して数メートルおきに束ねられている
道端に横たわり水をくれと叫んだ
雑草の倒された道は
ひとが草木に勝ったあかし

わたしは原爆資料館で見た絵を重ね合わせる
黒い色で塗りつぶされて道端に横たわる
ひと　ひと
ただ　ただ　上を見ている
天をにらんでいる

雑草はひとに負け　日本は戦争に負けた
雑草は刈られたあと自らの力で芽を出し再び緑色に輝く
広島の街も多くの犠牲と苦しみを積み重ねて笑顔を取り戻した
ひとは自然と闘い　そしてひとと戦う

日本は七十六年前敗者になった
そして勝者の傘の下にいる
戦争の犠牲と苦しみを過小評価して見栄をはり
先進国として肩を張って戦っている
狭い地球で富の奪い合い
何が共存だ　何が平等だ
弱者の側に立たない思いやり
勝者が敗者を見下すための口実

木は大きくなり枝を伸ばせば
隣の木と戦う
枝と枝は絡み合い折ったり曲げたりして伸び続ける
ひとも自我を持つ限り戦うのが宿命

わたしも同じ
寒さに耐え　酷暑を乗り越え　天災と戦う
ひととは狭い器の中で
受験戦争　就職戦争
そして隣人と戦う
不治の病を背負ってからは
生活と戦い　自分と戦う
ひとという檻の中での戦いに傷ついた　疲れた
わたしはいつまで戦い続ければいいのだろう

自然と戦い　ひとと戦い　自分と戦い　今がある
古希を過ぎ天に問う
わたしは勝者だったのか　敗者だったのか
天の両親が応える
生きていること　今在ることそのことが勝者なのだと

◆ツチヤタカユキ　大阪府

幽霊地球

終電逃した神様が始発待つ間に作った、
新しい生き物は、エレキギター片手に、
世界一悲しい歌を歌う。

月の裏側にある街で、
マッチングアプリ起動したら、
ものすごい数の、リトルグリーンメン。
迎えに来るＵＦＯは、アダムスキー型。

幽体離脱して、空から自分の後ろ姿を見たら、
あんな所に寝癖ついてる。

スキップ機能付きの走馬灯で、
飛ばしまくった学生時代の全部。

ペットボトルロケット
ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＮＡＳＡで、
たどり着いてた惑星は、幽霊になった地球。

エイプリルフールについたウソ全部、

現実に起こる世界で、
「ママは生きてる」って言ったら、
生き返ったママが、
後ろから私を抱きしめてくれた。

◆阿多　秋田県

しんせきのおばあちゃん

しんせきのおばあちゃんがあと二週間と言われているときいた
癌
この間私はネックレスをもらった

あのおばあちゃんがくれるモナカがいちばんおいしかった
どこで買っていたのかきけばよかったかな

物心というものがついてから私は初めて人間が死ぬところに立ち会うんだ
幼い頃に親戚の葬式には何度か行ったけど
私は思い出のある人をこれから初めて亡くすんだ
凄く変な気持ちになっている

内臓の腐ったにおいがしたおばあちゃん
あのとき抱き締めておけばよかったと思うかな
私はまだ「この人の葬式で泣くんだな」としか思っていない

葬式にはきっともらったネックレスをつけていくよ
場違いだとか叱られでもしない限りきっと

二週間の内にお見舞いに行けるかな
そのときにもつけよう
似合うでしょと自慢してあげよう

おばあちゃんのところの猫が寂しがるねって母と話した
あの子なら強がって「平気よ」って言いそうだねと母が言った
私の頭には「平気よ」のあとに「すぐついていくもの」

と言う猫背が浮かんだ
私はまだ泣いていない

◆林やは　愛知県

麓の穴

山の麓の穴で
肉をえぐられ
背骨をひとつ
抜きとられる
ざらついた肌も
なめらかな肌も
等しい
血肉から
真っ白な骨が
現れると
ひとは
安堵する

「(たまらんね、偽りのないことは、たまらん)」

骨が
岩場に
捧げられると
ひとは
元のように
肉と皮を
縫い合わされ
ひとつの骨が
足りないまま
住処へもどる
ひとがいなくなった穴に
ひとつの骨が
ひとつ、ひとつ、ひとつ……
古いものから
ていねいに
並べられる
肉体があるより

深閑として
山が
深まる

朽ちることに
似ている

(だれもおらん穴で)
(しずかに寄与する)
(風化しては)
(来りんと)
(こえがするもんで……)

ひとつ、ひとつ、ひとつ……

麓の穴には
幾万もの骨がある

ひとつ、ひとつ、ひとつ……

◆ウロタンケツ・ケタ　青森県

中毒

以前、ちょっとした病気で入院していた時分のことです。病気といっても特別体調が悪いでもなく、ただただ時間を持て余していた時に、それほど親しいわけでもなかった知人が見舞いに来てくれました。

大変でしたね。僕にできることがあったら何でもいってください。

彼は菓子やら本やら、いろいろ持ってきてくれました。とにかく時間を持て余していた私は、それはもう嬉しくなり、面会時間が終わるまで彼との会話を楽しみました。

次の日も、その次の日も彼は来てくれました。彼の持ってくる菓子は同じ病室の面々にも好評で、彼が来ると病室の皆でわいわいと語りあうようになりました。

そうそう、庭の植物にはちゃんと僕が水を与えていますから、心配しないでくださいね。いや、気にすることはありませんよ。困っている時はお互い様。僕は、あなたのお役に立てることが心底嬉しいんですよ。

彼の言葉に偽りはないようで、その目は歓びに輝いています。勝手に庭に入った、ということが少し引っかかりましたが、よかれと思ってしてくれたこと。彼に感謝を伝えると、彼ははにかんでうつむくのでした。

頼みもしないのに、彼は私のためにいろいろしてくれました。私の行きつけの食堂に足を運んで私の病状を伝えたり、溜まっていた郵便物を、大家さんの許可を得て持ってきてくれたりしました。

いいんですよ、僕とあなたの仲じゃないですか、と彼は嬉しそうに笑います。

予後は良好で、ついに私の退院の日が決まりました。おかげでようやく退院だよ、と伝えると、彼はよかった、自分のことのように嬉しい、といってくれたのですが、どこか寂しそうです。

じゃあ、僕がここに通うのももうすぐ終わりなんですね。

彼は窓の外をしばらく眺めていましたが、不意に私の手を取り、涙ながらに訴えます。

もう少しだけ、病気でいる気はありませんか

◆蟹江道悟　東京都

雨の日の窓

朝から雨が降り出している　土曜日の朝
寝床から見る窓ガラスは
なんだかどんよりとしている

時折雨粒が
窓ガラスを叩きつけているのを聞いて
外へ出るのも　億劫になる

今週は
仕事であまり良いことがなかった
ミスが連発し
その度に　気持ちも凹む

自分は　何をするために
東京へ来たんだろう

自分の目標だった夢は　叶ったものの
現実は　甘くなかった

これから先　自分には
どんな道が待っているんだろう

まだまだ険しい道か
それとも　幸せな明るい道か

雨の日の窓でも
ガラスに差し込んでくる光は
とても眩しかった

◆大島明日香　　愛知県

唯一の　手

たまらなく淋しい午後は　ユーミンを聴く
目を閉じる
熱くなった瞼の裏側に　少女が写る
あの夏　押し寄せる水を歪んだ口元に無理やり呑み込んで
そのまま　暗く揺れる波間に潜んだ

許される命なら　誰にも言わず　このまま潜っていよう

どうしようもなく哀しい夜は　ミスチルを聞く
上を向く
ぼやけて遠のいた天井に　少女が映る
あの冬　凍りついた湖を尖った爪で叩いて砕いて
そのまま　冷たく揺れる氷の隙間に沈んだ

ゆるされぬ想念(おもい)なら　自分にも内緒で　このまま凍ってしまいたい

重い扉が　外の世界と少女を　遮断した

ここはくらいよ　なんだかこわいの　にごった水だよ　ながれてないの

ここはさむいよ　ひとりなの　わたし　いつまでここに
いるの？
だれか　わたしを　み･つ･け･て

あの日　春風に誘われて　ふと扉に触れてみた
いつからか　それは　永遠に開かないものと思っていた
のに
冷たい身体をくるむことのできない　記憶の底に
それでも　微かに残る温もりを拾い集めようとしていた

お父さんは　どこ？
あぁ、そこにいてくれたの？
知らなかった
お母さんは？
一緒じゃないんだ
でも　捜してくれてるのね
見つかったら　ちゃんと連れていってあげてね

あぁ　よかった！　おとうさんがいたんだ

あの夜
春風に乗って　君は訪ねてきてくれた
少女は　その温かさに並ぶことのできない自分を告げた

ふるえる言葉をくるむように　そっと掌に受け止めて
気がつけば　君の手は軽々と扉を開け放っていた

不意に　やわらかな光りにつつまれて
少女は　少しとまどった
それから　泣いた
初夏のまばゆい光に　見つめられて
少女は　ようやく面を上げた
その瞳に　君が　いた

差しのべられた手の確かさに
閉ざされる扉のもはや無いことを　感じていた

◆堀　大海　　大阪府

瞑想

自分を客観的に見るということは、とても酷たらしいことだわ。

だってね、それはまるで、
手綱を握られた競走馬が、

前に走るしか許されないかのようだから

三月十七日

目を覚ますと吹き抜ける天井
飛び起きるとまだ五時

お茶を淹れたら、温度差でお腹を下すんだ
いつまでも学習しない自分

夢を仕事にって価値観変われば夢も変わる
時給三〇〇円が現状さ
社員になれば何か変わると思った

待機命令、そんな日々にも鬱になりそう

限りある時間
何も考えてないように見えるかい
誰よりも後悔したくない

活気に溢れた心の声は
倒れるまで暴れ続ける
世の中の大人は現実を見ろというだろう
退屈な日々を退屈だと言って何が悪い

これが私の人生だ、リセットボタンなんてあってたまるか

猿人

『わたしは今
明日の取引先の要件について
考えている…
考えている…』

発車五分前となると
終電の一つ前でも関係はなく
自動開閉ドアと座席の間にある私の特等席は
どこぞの洒落た女学生が
あくことなく小さい箱を更新する

『つまりだ、残業しているのだよ、
　残業しているのだよ、賃金をくれ』

消費期限の切れた
捨てられゆく食モツたちは
私の腹の中へと無理に詰め込まれてゆく
そう、語る口など持たない
栄養になれるかも知り得ない

『そんなバカな話があってたまるか』

一七分の時、鞄に入れた三冊の本
決め切れないでいる
幸せの箱を手にすれば一件落着
何も考えなくていい
一件落着

『この国じゃ人の最もユニークな考えるという仕事に価値はつかないのか』

一駅と二駅の感覚は
相対性理論も超越する
この電車内に正義などない

◆森下万尋　　千葉県

早春の欅をめぐり

スズメの遊び場のような
ささやかな公園にも
ふたつみっつ　またひとつ
冬を脱ぎすて
うごく影がふえてくる

忘れ去られた片隅の
一本の欅の樹に
うす緑の風が吹きぬける
高みめぐる細えだは
空に描かれた線画のまま
春告げ鳥が　目覚めの針を
回すというのに

遠くへ流れ去ってゆく
わたしの思いの泡
苦しみ　悲しみ　よろこび
寒さと暑さの波をうけ
欅の幹は太り
きしきしと外皮ぬぎさり
新たな木肌を晒す

風がしみる
光りがささる

その樹の傍にわたしは
静かに立ちつづける

節くれた幹のなかでは
ある日ゴトリと音がして
歯車が動きだすかのように
梢の先まで水の粒子が
押し上げられる
やわらかな陽ざしの下に
若葉を誘い出そうと

わたしは聴こえぬ声に
眼をむける

永訣の火華――ある女性の想い

痩せた手を引きながら
うす闇をかきわけ
石のかいだんをのぼると
すでにあちこちにシートが敷かれ

先客たちの影がゆれている
　　パチパチ　ドドドン……
ビルに浸食された穹に
一瞬　鮮やかに咲いては消える
大輪の菊や昇竜　しやだれ柳――

ほのかな閃光のたびに
浮かびあがる母の顔
　　きれいねぇーこうして
　　ふたりでみられるなんて
　　うれしいわ……
いさましい響きのあい間に
か細い声がささやく

傍らを過ぎる若やぎの声が
路を転げてゆく
ひと群れの流れに身をまかせ
打ち上げ近くにゆけば

華々もあざやかに観られよう
でも　母とわたしは
ほど遠からぬこんな場所がいい

あの日　思わぬ生気がもどり
喜んでくれたものの
ほどなくして彼岸へ旅立った

夕風の待ち遠しい時季に
ふる里に帰りくれば
ひと時　川堤にすわり
夜空の宴
つかの間の火華を楽しむ

母の気配がして――

◆谷町蛞蝓　　大阪府

蝶の棲家

小さな青虫がプラスチックの壁に懸命に糸を吐いている

いよいよ蛹になるのだ
不器用なのか一向に場所が定まらない
仕方なく電気を消して眠る
こんな静かな夜に
変態プロセスは進んでいる

顔も洗わず覗いた虫かごに
頼りなくぶら下がった逆さまの蛹
歯磨きを終えて戻ると
底に敷いた新聞紙に落っこちていた

「蛹　落ちた」
検索候補に同じような語句がずらっと並ぶ
困り果てているのは
こいつと私だけではない

蛹ポケットと呼ばれる小さな筒をつくるといいらしい
自由の効かない手で紙を切る
糊をつける

割り箸に筒をくっつけ
その中に蛹をそっと入れる
一瞬ピクッと体を折り曲げた蛹は
安心したのだろうか
じっと大人しくなった

目が覚めたらまず虫かごを覗く
九時から一七時
震える指先で書類を封入しつつ
蛹のことを考える
機械のように管理された身体も
蛹のことを思うと
かろうじて人間になる

蛹はやがて薄い緑から濃い緑に変化した
うっすらと羽の模様が浮きあがり黒くなった

きっと今日に違いない
そんな日も七時五三分の電車に乗らなければならない

殻を破った蝶がすぐにつかまれるよう
虫かごに布切れをいくつか垂らし
私は家を出た

薄暗い部屋の電気もつけず真っ先に向かった虫かご
そこには抜け殻を引きずった小さな蝶がいた
片方の羽はかろうじて開き
もう片方は絞った雑巾のように固まっている

あぁ羽化失敗だ
落っこちたときに
もはや駄目だったのだ
弱かったのだ

虫かごの蓋を開けて手を差し伸べると
蝶は私の指にしがみついた
抜け殻を引きずったままの蝶を
ベランダの植木鉢の土にそっと乗せ
ひとまず風呂に入った

立ち昇る湯気に苦々しさを混ぜ
こわばった足を
こわばった手でもみほぐす

弁当を温めテレビをつける
ふと空になった虫かごが目に入る
ベランダに出て
植木鉢をスマホのライトで照らすと
蝶は羽ばたこうとしてはひっくり返り
羽ばたこうとしてはひっくり返っていた

私は嗚咽した

なぜこうもうまくいかないのだろう

蜂蜜を水で希釈し脱脂綿を浸す
それをペットボトルのキャップに詰めて蝶の口元に運ぶ
蝶のクルクルと巻いたストローを爪楊枝で伸ばす

蝶はしばらく何ごとかと暴れ回っていたが
ついに観念したのか
おそるおそる蜜を吸った

最初はストロー部分が微かに動くだけだったが
やがて頭を上下させて
ごくごくと蜜を飲んだ
それからじっと止まり
茶色い液体をお尻からじわりと出した

何日か経つと
私の震える指先でストローを伸ばすとき
蝶は察したように
じっと待つようになった

そんな息の止まる瞬間を私と蝶は共有した

九日目の朝
それも終わった

羽につんつんと触れれば連動する触覚や手足も
もはや自ら動き出すことはない
蜜にストローを触れさせてもぴくりとも動かぬ頭と乾いた目が
蝶がこの世のものではないことを告げていた

死んだのだ

私は蝶を手のひらに乗せ
ベランダに出た

しばらく見つめ合ったのち
どんよりとした曇り空に向かって
放り投げた

しかし蝶は
くるくると小さな円を描いて
真っ直ぐアスファルトに落ちた

周囲には鳥が何羽かいた
私は思わず目を背けた

蝶のいなくなった家では
時間が規則正しく進んでいた

私はペットボトルのキャップを洗い
こわばる手で鞄をつかみ
家を後にした

◆みつだ桃月　東京都

愛犬

小さな駒さながら　しゃんと首を立て
対の灯火(ともしび)のような双つの目で
前だけを見つめて
粛々と並足で行くおまえは
どんな風に吹かれていたのだ
心にどんな風が吹いていたのか

おまえが逝った今
おまえの歩いた道が　わかる

一本のリードでつながって
私と並んで歩くことで　おまえは
私を連れ戻す旅をしていたのだ

まいにち　まいにち
すぐに追いつめられてしまう私を

◆坂宮のりつぎ　兵庫県

悲しい幸せ

十月も終わるころ
君と見た海と夕日
ベタかもしれないけど
君は愛おしい笑顔で
喜んでくれました
夕日で赤く染まった顔で

きっと他の人を思う君を
わたしはただ見つめていることしか
できません
きっとあの日僕一人が
幸せだったのでしょう
あなたの寂しさを埋めることもできずに
ただ一人幸せに思ってしまっているのです
それはとても辛いことでした

◆油布晃　竹田市

牛蒡削ぐ

立秋は過ぎたけれども
暑い日が続く
買って来た牛蒡を削いでいたら
部屋中が土の匂いで一杯になった
若き日の母の匂いだ

牛蒡掘りは大変な仕事なので
母は私に手伝うように言った
母が少しでも楽になればと
私は快く応じたが
子どもにはそう簡単には出来ない仕事だった

やっと抜けた牛蒡を母は削いで
キンピラゴボウや鳥汁にしてくれた
服は土がついたままで
顔も土をつけたままで
台所に立っていた母
あの時の
私たち兄弟が「旨い！うまい！」と言って
食べてくれるのが
ただただ嬉しい母の姿だ

この香が私たちを育ててくれたんだ
もっと
自分の体を大切にしよう！

ドクダミの花

この深い谷の名前は何だったろうか
谷を覗くと水のせせらぎが聞こえて来る
昔はすべての谷間に田んぼがあって
母は「手間戻し」のために田植えに出かけた
母の帰りを待ちかねて
ここまで迎えに行った事がある

薄暗い湿地から
十字架の形をした
ドクダミの花が
白い蛍光色を発しながら
奥へ奥へと続いていた
私はとても怖くなって小走りになった

すると
暗がりの中から
笑い声が聞こえて来た
キツイ仕事の後にキツイ坂を上る
このキツさを跳ね飛ばすための笑い

家で待つ者を想う倖せ
これで今日は終わったという母たちの安ど感

これを私に見せるために
ドクダミの花たちは
照らしていたのだった

◆日比谷プール　東京都

デネブ

今しがた渡ってきた桟橋が揺れている。ぐるりと水面、そしてカラフルなスワンたち。それなりのスペースがある筏には幾つかの椅子やテーブルが、離れすぎず近すぎない心地よい感覚で置いてあった。背もたれのボタンが取れかかった特等席のソファに身を預けて彼女は編み物をしていた。
「この湖は鳥が羽ばたいている形をしているのよ」
何も知らないのに、羽ばたくのは白鳥だと直感した。この筏はちょうど尾の付け根の位置に存在していた。憂鬱だ。ため息が白い。今すぐではないことだとしても僕に

はわかっていた。きっと彼女もわかっていた。それでも彼女はふわりとした表情で編み物を続けて、時折その作業を止めて遊覧船の客に手を振り、また編み物を続けた。山の天気は変わりやすく、頭上を雨が通り過ぎてもさっぱり席を立つそぶりを見せないので、僕はさっき買ったビニール傘を広げて立っていることしかできなかった。筏の上に吊り下がっている幾つかの電球が灯り、空も水面もピンク色になった頃、彼女は編み上がったマフラーを僕の首に巻いた。

そうして幾つかの季節が過ぎた後、彼女は星座になったのだ。

処方箋

昨日までは
ゆるくおだやかな絶望だった
特効薬は存在しない
あったとすれば
それは貴方だったけれど
副作用が酷くて使えやしない
代わりにこれを
「残り寿命分くらい出しときますね」
この手に収まるくらい小さな薬
大量摂取
一つ取りこぼしても気にならないくらい
じわじわと
じわじわと遅効性の毒のような
（毒も薬も同じようなもの）
少しずつ蓄積される
それでいて毒にも薬にもならない水、温い

私にだけ効く薬
小さくて軽いそれを常備して
身体からも世界からも離れることを肯定して
薬があるからあんしんだ
何も感じないということは
すべてを直感で泳いでいるということ

薬があるから
それは毒にも薬にもならない空気、温い

【内服】愛　用法：１回あたりいくつでも
　　１日何度でも
　　総投与数：８０年分

波打ち際で

砂と砂利と水が
素肌のまま
波を受けるための形に
押し固められている
愛おしい三角たちよ
冬の長い夜は
彼らの嘆息が聞こえる

「人工物」というものは、人間の手によって人為的に作られるものだ、と定義されるならば、私も貴方も人工物と言えるのではないでしょうか。

歩き出しそうじゃない？

愛というものの果ての存在が
この世の仕組みを知らぬまま
波打ち際の窪みで
押し黙っている
愛おしい三角たちよ
薄青い空気の今は
私と等しい存在である

離世症

東京都道四〇九号日比谷芝浦線沿い
あるはずの赤い光を
見つけられなくて
こっそりないちゃった
二〇時にはすでに
いなくなってたんだって

口元にかみさまが
宿ることなんて
望んではいないから
白い不織布の下で
小さなおさかなを
飼おうとおもう

ゆ

現実は地続きだということを
忘れてる人たちが
桜の下に飽和している
のを、毛布の中でうらやんでいる

ゆ
ゆ

窓際のサボテンと
口の中のおさかなだけが
殖え続けて
私の世界はここだけに
なってしまった

ゆ
ゆ
ゆ
ゆ

◆杉野弘美　石川県

石川県立中央病院

夫を育てた二人は
「有り難う」と二千円置いて降りる
「帰る時間に　また電話してください」
貰ったお金で甘いものを買って帰ろう

迎えに行った　帰りの車内は
「思ったより早く済んだよ」と

安堵で緊張もほぐれた空気が漂う
「管に膿が溜まるから注射で三本抜いたのよね
命に関わることじゃないんだから
人間思い方次第だからね、お父さん」
と夫の母が言っている
私は静かに聴いているが
いつも何か話さないとかなって
少し気まずく汗をかく

車窓からは秋晴れのススキがきらきらと風に揺れる
こんな日は警察が隠れて見張ってるから気を付けよう
たんぼの真ん中には墓の群れ
目撃者を探していますの看板
園児の戯れ　鳥の群れ
倒壊した家屋
あの神社を一度は探険してみたい
もうすぐ家に着く
結婚してここに来た十七年
同じ敷地に別宅で暮らす

◆カンマ　千葉県

今日も明日も明後日も

歩いて
走って
休んで
食べて
眠って
起きて
また歩いて
また走って
また休んで
また食べて
また眠って
また起きる
そのくらいで良いと思う
そのくらいがちょうど良いと思う
それに飽きたら
跳んでみれば良いと思う

それにも飽きたら
回ってみれば良いと思う
生きるのは案外単純で簡単かもしれない
いや、
単純なことを熟す方が難しいかもしれない

もしかしたら
生きるのは複雑の方が楽なのかもしれない
少し辛くて
少し怖がって
少し悲しんで
たまに嬉しくなって
たまに楽しくなる

感情は複雑で面白い
そう思えた方が幸せだと思う

今日も明日も明後日も
単純で複雑であってほしい

それが、豊かで幸せなのだと思う

◆伊藤大作　　東京都

select shop

駅の近くにあるセレクトショップ
真っ白に映しだされたホワイトキューブに
白いタイルに映える窓は、大きなガラスに
陽が差込んでいる。

店内に入ると
ちりばめられた僕の分身達 が
ダイヤモンドの原石のように
キラキラ輝いていた。

カウンター越しから見える
景色はどんな世界なの？

ほのかな香りを漂わせ
笑い声が聴こえてくる。。

『売れたよって！』
言ってくれた貴方の顔

はにかんだ笑顔に映える瞳が
とっても愛らしくって、誇らしくって、
僕はとても嬉しかったんだ。。

今だから言うけれど
本当はね。。

貴方の笑顔の為に
作っていたのかも？

あの日、
ふとしたきっかけで
放たれた言葉たち。。

大好きだったゆえの

裏返しの詰りあい。。

弱い者をさらに弱く
牙を剥いて襲い掛かる

そう言葉はいつだって
化けるんだね。。

怒ると叱るの違いも分からず
もう、もとには戻れない
恋人達のように。。

はかなくも砕け散った
ガラスの桜花

僕はこの店に
恋をしていたのかも
きっと貴男にもね。。

思いで残る街角に
いつか笑いかけて おくれよ
永遠に。。。

◆永井真水　京都府

写真を残さない話

やることならたくさんあるはずなのに
何も手につかない。
まるで言い訳のようなそれに
呆れてしまうけれど
やっぱり、ぼうっとする。

ときどき、お母さんがあおかったときの話をする。
つたなく、おぼろげに、大人じゃあない顔でしゃべる。
つまらない話。
ずるいと思う。
汚れて、きらりともしない宝石みたいだ。
わたしは思い出に残す努力すらしなかったというのに。
幼い頃の友だちもほとんど覚えていないというのに。
私の宝石はくすむこともしないし、きらりともしない。
箱に閉じこめたまま、どこかに飛んでいっちゃったから。
傷つかないし、いとしくもない。
むなしくないわけもない。

それでも、ただ過ぎていくだけの日常に
置いていかれるままに、
流れていくままに
やっぱり、ぼうっとする。

◆山岳三峯　福岡県

教訓

花びらをむしられて、花はうなだれていた。
そこに手が差し伸べられた。慈悲に満ちた手。
花は、世界が明るくなっていくのを感じた。

死ぬまでずっとこのままかもしれない。
それでもこの手が癒してくれる。

この手となら生きられるかもしれない。
手は優しく愛でてくれる。
面倒見の良い手に、心を許してしまう。

その手は、私があなたを幸せにすると言った。
花びらを失った花は、その言葉に心を許してしまった。

衝動的な言葉に永遠はない。
それは決して約束ではない。
花は気がつかなかった。
言葉の危うさ、脆さに。

手はやがて、花が疎ましくなった。
花の為に犠牲になっているかのようだ。
疲れを感じたので、花から去っていった。

花は混乱した。
誰か、どうかこの茎を捩じり切って。
こんなくだらない感情を、これ以上抱かせないで。

明るかった世界は教訓となった。
花はうなだれ死ぬことも出来ない。
ただ出来事だけが過ぎ去っていく。
死ぬまで終わらない。

◆熊倉省三　東京都

海彦に会いに行く

日本の神話では海や山を神として崇拝した。

ドルジ君が我が家に遊びに来た。
ドルジ君はモンゴルの人で
息子の学校の留学生だと自己紹介した。
パッと見、モンゴルの人と日本人は
区別がつかないほど顔がよく似ている。
似ているだけではなく、なにやら現代の日本人よりも「古風」に感じる。
想像をふくらませると、ドルジ君にふるきよき時代の日本人を感じる。

無口で、ひかえめで、聞かれたことしか喋らず、
自分の等身だけで誠実に生きているかつての日本人である。
日本人とモンゴル人は似通ったところがある
たしかに、日本人のルーツの一説として、
同じモンゴロイドに属するモンゴル人の祖先がある。
共通の祖先とはいうものの
元来、日本人のイメージは温厚な農耕民族で
モンゴルの人というと勇猛果敢な騎馬民族または遊牧民族。
性格は異なるが共通するところもあるにちがいない。

ドルジ君と息子と雑談した。
息子が夏休みに海水浴に行くという話になったとき
ドルジ君は「海水浴？」と息子に聞き返した
息子が「海に入って泳ぐことだ」とこたえると
ドルジ君は、いちども海を見たことがないといい
モンゴルの人のほとんどは生涯海を見ないで死ぬとつけ加えた。
ドルジ君が目にしたことのない海は
包容力ゆたかで、日本人の使う漢字では、文字のなかに母がいると話し
海は南太平洋のある島の憲法の前文では「海は我々を分かつのではなく一つにしてくれる」とあるそうだと話すと、
ドルジ君は「モンゴルの草原と同じだ」とこたえ、
古くから大自然に包まれているのも同じだと言う。

ドルジ君は遊牧民族の家に生まれ育ち
子どものころは標高三千メートルの高原で羊と戯れ
夜はパオくるまれて大きな星空のもとで寝た。
農耕民族の日本人と遊牧民族のモンゴルの人は「水」については
認識のちがいがある、とドルジ君は言う。
モンゴルの人は草原に水溜りがあると大きく迂回する
たずねると、ドルジ君もその理由はわからない
水溜りをよけるくらいだから、むろんお風呂にも入らない。

モンゴル高原は乾いている。垢がすぐに干からび、あとは風がもってゆく。
これは空気浴といってよいだろう。
叱られてしまうが、うらやましいとさえおもう。
モンゴルの人は古くから魚は食べない。ドルジ君も頑として受け付けない。
おいしいからと無理にすすめると「日本の海の民に感謝して」と言って食べた。

ドライブに誘われた。
息子はドルジ君に海を見せたいという。
ドルジ君はクルマのなかで「海だ、海だ」とひとりはしゃいでいた。
海辺にたどり着いたのは、海が金色に染まる時間だった。
海は生きているようにうねり、黄金を撒いているかのごとく光を反射する。
「綺麗だ……」
クルマを降りた私たちは、立ち尽くしたまま息を飲んだ。
ただ「美しい」と吐息のように呟いた。
ドルジ君は、海辺のほうに歩いて行った。すると途中でドルジ君は眩んだようにその場にひざまずき、岩のように動かなくなった。
その場に屈したドルジ君はやがて、そばにあった石を集め、ちいさな石の山を築き、海に向かって、呪文のようなモンゴル語を唱えだした。
古代の人の自然崇拝の儀式ようにおもえて、はるかむかしの神話にある海の民として暮らした「海彦」と言葉を交わしているようで感動が胸に押し寄せた。
海のほうも、このような古代の心と対面するのは何千年ぶりであったろう。

失くしたもの

何も予定のない春の日のゆるやかな午後、マンション七階の窓からベイブリッジが臨める、かなたの東京湾を眺めていた。この日はひとりだった。霞んだ東京湾を眺めながら、書棚から若いころ読んだカフカの『変身』をと取り出し、ぱらぱらとめくっていた。本を伏せ、窓を離れてトイレに行った。白い便座に腰かけた。突然、左腕

が何の前触れもなく、ストンと落ちた。まったく持ち上がらない。そのまま絵のように時が止まった。
数日後、集中治療室で目が覚めた。

ある日突として左腕を失った
わたしの左腕は風のなか
警察に紛失届を出した
紛失届書は左腕の特徴を求める
左手の甲の人差し指の二センチ下に
鉛筆の芯が黒子のように埋まっていると書いた
理由は私的諍いが原因なので省いた

医師によると脳のほぼ中央にある視床下部の血管が破れた
同時に左腕がまったく動かなくなった
脳と腕の関係を理解する脳も同時に破壊されたのか

自分で捜すことにした
電信柱の貼り紙「どもり、赤面治します」の横に
「左腕さがしています。謝礼はずみます」と貼り紙をしたが音沙汰なかった。
戦地で傷ついた傷痍軍人のように白い病衣を着て
「私の失った左腕を捜してください」と書いたカバンを下げて街頭に立った
小銭を投げられただけであった　ほしいのはお金ではない
やむをえず占い師にも観てもらった
両方の手の手相を見なければ鑑定できないと断られた

たじろぎ黙り込む消魂落胆自棄
わたしの左腕は風のなか
ご飯の茶碗はお膳に置いて犬食い
右手が痒いときは柱で痒く
ウイスキーグラスを傾けながらテーブルの肴をとれない
ズボンのベルトを締められない
寝巻の浴衣の帯を結べない

わたしの左腕は風のなか

感激の拍手は空振りになり無関心無表情
人類平和の「人間の鎖」は、わたしのところで遮断される
再会の親友とは、無愛想で手抜きの片手ハグ
カラオケボックスで身体を揺さぶりながらの
リズムにのれないパーカッション

左腕は風のなか
わたしの同意なしに失踪　失踪　失跡　蒸発　神隠し
自由になった左腕はわたしの同意を求めない
別れはいつも
去ってゆくものだけが美しい

パラリンピックの父と呼ばれるグットマン博士は
「失ったものを数えるな」と言う
それはそうかもしれないが
左腕は日常当たり前になっているうちは有り難みに気付
けないもの
なくなって初めて、そのとき、気づくもの

それはだれだって追いたくなるであろう
片輪　片手落ちは差別の言葉
わたしは被差別人間として保護されない

通りすがり脳学者が言った
視床下部は諸欲を司る
左腕を欲しがってはいけないと
脳はわたしの支配者
従わないと、わたしは死ぬしかない

◆妄想カフカ　　福岡県

白

痛みの最速は 熱い

音も消し
見てもないのに点けてるテレビや
らしいコメントしてる

コメンテーターのニュースの転がし方
会ったことも無い他人の作品に
出逢ってしまえば
熱くもあり、かなしい
こんなこと、気づかないで生きていた方が
しあわせだ
彼女だっていて 仕事もあって
コロナになっても誰かといるのに
幸福だって、思っていいのに
熱い
あなたが、ここにいてほしい
恋人に、そんな話をしたけど

僕だって、きっと そこにいなかった
しあわせだ、こんな事に気づかない方が
しあわせになれたのに
恋人 その人にも、なりたい自分がいた
ぼくは、そんな人に会いたくなかった
痛みの最速は熱い
きっと、退屈に しあわせだったはずの二人は
一緒に作ったご飯を食べたり
二人暮しを夢見ながら ウェディングフォトでも
撮ってた筈だ
少年を廃車置き場のトランクに閉じ込めて
いろんなニュースや、作品を

インスタントに消費して

普通に生活したい筈だった。

普通を　わすれてしまった

こんな感情無い方が　しあわせだ

痛みの最速は　熱い

◆睦月　　栃木県

数え歌

ひとっこ一人いやしない　市場の残骸踏みつけて
二つの廃村すぎたけど　虹の麓まで来たのだけど
眉間のしわは深まるばかり　散々な苦労してきたとばかり
四つ葉のスープと紫蘇に塩　よんで朝陽の狢汁
いつも芋ばかり食べるから　誤解されてしまうんだ
むくつけき紫の痣が治らない　ろくでもない、どうしようもない
七つの薬宝探し旅ゆく　ななしの俺は
破れかぶれのやさぐれ狩人　八方塞がり七転八倒
ここの辻までお供して　急な変更よしてくれって
遠き麗日に手紙をかこう　充満する帆風浪漫の薫りをそえて

◆ヤツキマオ　　茨城県

生きたい

死にたい
そう思うほど
怖くて仕方がない
辛くて苦しいはずなのに
生きづらいはずなのに
死ぬのが怖い

この生きづらい世の中で
それでも小さな幸せを願い

足掻いてしまう

認められたい
ただそれだけなのだ
生きていていいという自信がほしいだけなのだ

だから生きなければならない
認められるまで
自信がもらえるまで

死にたい
そう思うほど
死ねない

◆げん　神奈川県

渇き

かつて獣と人間を隔てるものは薄い皮一枚ほどの差でしかなかった。貧弱な藁屋根と土間しかない頃の人間の住処は、野生の獣どもからすれば逆らうすべもない裸で吊るされた生肉のごときものであった。夜は今とは違い灯りはなく真っ暗闇に包まれる。こんにち、電気のある生活に慣れ切った現代人にこの闇の恐ろしさを実感することは困難だ。見渡す限りの闇の中で蠢く獣。獲物を狙う血に飢えた遠吠え、闇の中、地場から入り込む人間の匂いに飢えた虫や蛇ども
飢えた呪いの涎

渇きの記憶を抱き　まず河から語り始めるとしよう

かつて高度成長という名の重工業重視の時代に大牟田川は紫の濁流の河だった
空を暗くするほどのゴウゴウと煤煙を吐き出す煙突　それよりもインパクトのある紫の人工的なにおいを放っていた河　それは人間の血管の中に流れるどす黒い欲望を切り開いて見せ付けているような烈しい勢いで　いつもいつも流れつづけていた　それがぼくにとっての最初の「河」だった。

弟と裏山の墓地に探検に行った　最近そこを尋ねたら
火葬場ごときれいサッパリ整地され　小奇麗な住宅地に
なっていた　いくらその住宅地を眺めていても弟とこわ
ごわ探検した湿った墓地　幾千本の手が地場から生え
獣達の雄叫びが夜空に木霊す　そんな妄想はもう出来な
かった
愛犬を連れて散歩する見ず知らずの人　立派な表札をな
がめながら
あのころ　いく筋もの煙がたなびいていた火葬場　それ
が遠く巨大に見えたのに　それはこんなにも小さな土地
だったのか

夏なのに涼しい日だった
弟とぼくは　墓地の間を抜ける細い道を　運動靴の音に
もおびえ　ザーと時折吹く　風にもおびえ　あるいた
誰かに見られている。いや獣たちが闇からこちらを見て
いる
喉がガラガラに渇いた

地面からは何百本も手が生えている
そのとき弟が古銭をみつけた　真ん中の穴が欠け錆びき
った「寛永通宝」が数枚落ちていた　土の色と寸分変わ
らない古銭　ぼくは拾ってはいけないような気がしたが
弟は躊躇なく拾った

あの時の渇きは今でも忘れられない　そこに　獣の一群
が追って来た　痩せた肋骨が浮き出た野犬のような獣の
群。飢えた呪いの涎
その場を離れようと　足は重く　はあはあ息を　必死で
吸い込んだ。
獲物を狙う血に飢えた遠吠え
だが弟は何故か古銭に夢中になり笑っているだけで動こ
うとしない
おい　このままじゃあの群に食い尽くされるぞ

何度も何度も
ここで目が覚める

弟は昨年　死んだ

◆八城裕貴　　宮城県

時間

時間

ノスタルジーは鳥の
あとに
おちかかっている
つくえの
うえに

ひとつの海は鳥の骨として
地球を
青くしている

生命は
影の

おくで木星にうかんでいる

ノスタルジーを
浜べに
うちあげている
波は
ひとつの星のまえにとまっている

ノスタルジーは
壁にうちつけられている

ノスタルジー

白紙は
星の
空をつつみかくしている

草原に
うちあげられている

鳥の
したいは
ペンをおとしている

ひと

ひとつの
月は
ひとを
うめつくしている

鳥は
月のなかに
沈黙している

鳥の
なかに
星はとまっている

ひとは
鳥の
からだを
白紙に写している

ひとの
骨は
地球にある

時間

◆水色綺麗　福岡県

八月

僕は 二人の壁を　心　の 海底　に残して
永遠　と　流れ続ける　砂時計　と　一緒　に
ただ、　沈黙　を羨んで　季節　と　漂流して　い
く
だけ　花　に　水　を　あげるときに　君　が
生きていた　ということを　思い出すのだろう

ただ、それだけなのだ　それでも　僕　は　花　に
水　を　あげつづけるよ　君　が　安らかに
枯れてもいいように　過ぎ去った　風は
身体　に　取り入れないで　沈黙　のある　森
の中　に　投げつける　のが　大人　だと　思う
でも、　僕　は　その　風を　倒れるまで
受け止めつづけるよ　来世　まで
生まれ変わろうね

硝子水

この先　行き止まりです
この先　生き残るには　夢　を毎日見続けてください
存在もしない　何かを　見続けるということ
それがきっと　あなたを救う　と私は考えました
首を　結んで　来世に　繋いでみる　これが　あな
たの
夢　なのですね　僕　は　間違えました
あのとき　子宮を　踏み潰しておけば　よかったのだ
と　考える　が　もともと　地上に　ママ　はいなか
ったのだ　君　は　海　から　流れて　きて　行き
場　を　失った　ガラスの破片　のような　ちっぽ
けな　心　だ　でも　水を　通す　と　綺麗だ
と
あなたは　言う

証跡

歳　を　とる　度　に　思う　やん
　あたし　なにも　残せてない　ばってん、
髪だけは　長かろ？　おかしいやろ
そんななか　みんな笑ってるやろ？
　あの子　が　死んでも　結局　みんなは　笑うんよ
朝　も　泣かないくせに
落し物　探しに行った　ばってん、
何も無かったねん
届出　出しても　帰ってこんやったんよ
これって　おかしいやろ
近く　に　あるはず　なのに　遠く　に
行きたがったんかね　自分　も　なくされたいわ

いきている

二ヶ月ぶりに外の空気を飲んでみた。美味しい。

澄み切った空。カラスが鳴いている、巣に子どもを残して。救急車のサイレンも遠くから近づいて来ている、気がするだけだろう。

僕は習慣のように、電車の扉が開くと、クシャクシャになった紙のカバーの文庫本を開き、ポケットの中のグシャグシャに絡まったイヤフォンを、解く作業を行う。ただそれだけのことでも、僕は怒りを抑えられない。そしてまた、今日も、電車が家に連れ戻そうと動き始めた。

まもなく博多、博多です。

電車の席が空いた。僕が乗車する前からずっと乗っているかのように静止している見るからに頭の毛が少ない。マスク越しにもツーンとした汗の匂いが伝わってくる。その男性の前に座ってしまった。僕は電車の中でいつもしてしまう癖をこの男にもしてしまった。ある。太い毛むくじゃらの腕の先、左手の薬指に。僕の隣のニンゲンも、前のオンナも、ある。ニンゲン達は電車で、帰るべき家に、愛する家族の元に、身体を引き戻していく。

こころの外側

僕 の 震源 は心 の 外にある　　森　に　釜戸 を作り

斧を投げる　そうすれば 綺麗になる　火の海　は

暖かく　心地が良くて　ゆっくり ゆっくり

流れていく　　内側には　川 が 流れ　子どもたちが 消化器を　持ち歩いている、　彼らは　使い方を

知らない　ので　ただ、ただ、ひっくり返す

睫毛が 飛んで　いった　僕の　顔筋より　赤く

煌めいて　いる　　ことを　知っている 僕一人

老人ホーム　の おじいさんが　笑った

老人ホーム　の　おじいさんが、笑った

寝息 を 聴かれたくなかっただけなのに

僕は　　捕まって　しまった　のは仕方がないこと

揺れる　心臓　に　毛が生え　寒い　気もしなくも

ない　火傷　で 焦げた マフラーで　首を絞める
あつい、あつい、あつい、
海沿いを歩いてもこける 僕 、
警官　と　共に　街へ 走る　彼らは 僕の
未来 を 知っている

◆たたみイワシたかと　東京都
あたたかい汗と
どこにも行けない気持ちと
足の裏に吸いついた生きた土

混ざらず　まったく混ざらず　どれもとんでもなく混ざらない
たかく伸びて　そのまま柱となった
たかくたかく　そびえ立つ柱となった

彼は見た
空ははじめて見たような
なんとも言えない色だった

赤くもなく　青くもなく
黒くはないけど　すこし白かった

裸足の彼は動けない
いつからか支えている
いつからか支えている
いつからか

◆坂井雄大　東京都

シミ

悲しいことがあったあと
無理矢理作った明るい歌に
滲み出てしまっている
悲しいシミを見ている

それには抵抗がある
下に向いた矢印に
抗う摩擦もある
上に向いた矢印との

抵抗があり　摩擦があり
だから触ると火傷する
慣れない　ちゃんと痛い
歌うたび　ちゃんと痛い

土深くまで沈めずに
空高くも浮かべずに
蹴っ飛ばされそうな高さに
転がっている

生きている
生きている
生きている

沈みきれず
浮かびきれず
蹴っ飛ばされそうな高さで
僕は生きている

悲しいシミのように
熱いシミのように

歌うという罪（こと）

入り込んでしまっている
と同時に　入り込まれている
ひとつになった瞬間に
完璧な一人になる
友達も恋人も関係なく
敵もそうじゃないも関係なく
僕以外の人たちが
同じ距離のところに
均等に並ぶ
円になり僕を囲む
そのころにはもう
僕は僕である必要が
なくなっている
そこから始まる
やっとそうなって始まる

あっという間に終わる

僕はこの罪を繰り返す

それはあっという間に終わるが
あっという間のその中に
一瞬はいくつかある
丸い形をしている
その一瞬の中では
丸い空間の中では
僕はもっと僕であり
大切な何かがあり
大事な誰かがおり
そこからなら
例えばその誰かのためだけに
歌うこともできる
そうやって終わる
やっとそうなって終われる
がまたすぐに始まる

僕はこの罪を繰り返す

◆西いづみ　熊本市

花の種の首飾り

咲かない花の種を　首飾りにしてる
乾いた軽い種と　細い鎖の音色

小さなガラス窓に　雨粒と砂ぼこり
連なり重なり合う　何の音もさせずに

まなざしの裏側の色を　誰も知らないまま
確かにある　ここにある
意味はなく　ただそこに

欠けた空に　月が落っこちる
隙間から覗く　虹色の雲の中
溢れかえる　空を覆うように
零れ落ちる　やわらかい花びら

空気と雨の　優しい香りをさせて
世界中に舞い降る

咲かない花の種を　首飾りにしてる
一人で居ることが好きな
あのこのところにも
降り注ぐ　音もなく

◆松塚犬　　神奈川県

墓石の夢物語

爛散と、太陽の照り尽く時刻は夕闇。
カラスの涙が柿の蕾に落ちたような香りが、辺りにたむろすることを許される時。
傾斜は好むように、その橙色の光を甘んじて受ける。
そうさ、坂さ。坂にある墓さ。
墓は恥じらうことなく、その夕日を手に取り、苔むした体に当てる。
カラリとした苔の深緑。
それは徐々に熱を溜め込み、墓に恩返しするが如く、墓の疲れて冷たい体を温める。
墓は四方を五輪塔で囲われていたから、大した持ち主がいたんだ。
持ち主は慕われていたんだ。
持ち主はずっと前に生きていたんだ。
朝の、白い光に愛されていたんだ。いや、夕方にだって。
夜の、紫色と黒の間の夜空色にだって。

*

墓が、すんっと、涙を堪えて鼻をすすると、ミミズの臭いが真っ先にした。
土砂崩れが起きた。坂に生える木々は流れていった。五輪塔も一緒に流れていった。茶色はお供えの色物を好んだ。
墓は。墓は流されなかった。だが、土砂の濃い色は恋をするが如く、墓に覆いかぶさった。
墓は泣いた。泣いて、ただ、持ち主を思った。
暗さに馴れ、暮らしは成れ果てへ。
あの日から墓は、土の中でモグラとミミズの追いかけっこを繰り返し見ていた。ずっと、ずっと、顔触れは変わ

るが、種族は変わらず追いかけっこが為されている。
モグラは追いかける側だから、無邪気を持て余していた。
無邪気はミミズをほっぽって、墓の悲しさを嗅ぎ取った。
諸君、この墓を助けてやろうじゃあ、ないか
モグラたちは合唱し、えんさえんさと穴を掘った。
掘って進めて、ほら見ておくれ。
少しだけ残っていたぞ。
＊＊
賛成の声高々、モグラの行進は土の中で行われた。僅かに残った昔の骨は、モグラの陽気に当てられて、しっかりした形を取り戻した。
やい、モグラさん共。どこに私を連れていくの
お黙りになってくだせえ、吃驚させにいくのだから
骨は尾根を辿る心算で、モグラたちの背を慎重に乗りこなす。
揺れ揺れ、候。チクチク、候。
着いたぞ、という先頭車両は、ふんすふんすと興奮していた。興奮は全車両に伝わって、骨をわっしょいわっしょい。
前に押し出された骨。
さて、そこで見たものとは。
＊＊＊
散閑と、太陽の取り付く時刻は朝焼け。
スズメの羽音が、立ち上る霧に反響するような自由が、辺りにたむろすることを許される時。
光の影に隠れる傾斜は滑るように、その朝露を含んでは絞る。
そうさ、坂さ。坂にある墓さ。

墓は涙を流しながら、その輝きを切望する朝露を受け入れ、苔這う体に纏わせた。
ピタリとした苔の深緑。
それは徐々に濡れ溺れていき、墓に恩返しをするが如く、墓の寝起きで火照った体を冷やしていく。
墓は変わらず、四方を五輪塔で囲われているから、大した持ち主がいたんだ。
持ち主は慕われていたんだ。
持ち主はずっと前に生きていたんだ。
今もずっと、愛されているんだ。大人にだって、老人にだって。ほら、こんな小さな子供たちにだって。

二人の子供は見上げてた。じっ、と墓を、見上げてた。

墓夢半ばに、知らず内にも幸福を。
幸福童を呼び込んで。語るは喜怒哀楽、積もらす人生。
尋常に、悩みを掬い、息を飲み。
夢の続きを、その小さな足が生きて行く。
墓はその小さな背中を見送ると、懐古を体に巻き付けて。
昼に向かって歩むお天道様を、穏やかな心地で一心に浴び続けていった。

◆若葉　山梨県

その映画の最後

その映画の最後
主人公が独房から連れ出され
闇が破れて
彼女の目が　光で眩む
闇の中に留められ

闇から光へと落下のように
足元が崩れ
周囲が飛び去る
墜落まで
湿気が、臭気が、呻きが薄れる
それまで彼女に覆いかぶさっていた闇
今は　光が

今、空が上に、
空間が
彼女の肌に直に触れる
透明な　光が
空が　上で口を開ける
終わりなく、
限りなく、

処刑人たちが彼女を引きずる

終わりの時まであと数歩、
そして上には
空が
冷たい光が満ちた空は白く張りつめ
銀色の雲の縁が
空に砕ける

処刑人が歩み
頭は左右に振れる　　空もまた。

空がこれほど明るく、　これほど透明に
あるのなら

これほど明るく、これほど透明な　　空が
彼女の目の中で揺れているのならば

後数分の
地上での瞬間は

彼女の時間は
満ちているのか？　光に　空に

たぶん　そうでは　　ない
空は明るく、澄んで、
彼女は地面の上に、
連れ去られるのを待っている　この空間、
いかに美しかろうとも
空が

空の下に
この隙間こそ
底がなく
届かない

彼女の瞳で揺れる
空
彼女の最後を
救わない

では何が

では何が、
その瞬間を

その恐怖を、その苦しみを、
かき消すことはできるのか？

空にはないのなら

地上には

どこに

何かが

◆冬埃　北海道

マルがつかない世界で

ため息
みんなが同じだったらよかったのに
そうしたら君と、もっと楽しく話せたはずなのに
僕たちは違うところばっかりだ
違うことを怖がって、ためらって、何も話せない
せめてなにか、ひとつだけでも
間違いのないことがあったらいいのに
誰と話しても楽しい、わくわくするような
そんな話があったなら……

ちがうから　知らないから
話すのが楽しいし　わくわくするの
全部知らないし　全部できないから
なにかを知ることが　できるようになることが楽しいの
完成形なんて知らないまま　完成に向かって走るから
時は過ぎて　人はぶつかって　また歩き出して
みんなが同じだって前提が　なくなっていくの

なにかができない子も
なにかができる子も
見た目が違う子も
考え方が違う子も
心を持たない子も
身体を持たない子も
みんなの中の一人だと　教えてくれた人も
同じなのは　ここに生きていたこと
違うことが多すぎて　話すのが嫌になったりもするだろう？

？？！

違う分だけ　世界は可能性を秘めていて、
知った分だけ　世界は広がって、
楽しんだ分だけ　世界は色づく
そんな世界が　あぁそんな世界に、生きている！
わたし色のパレットを持って話そう！
まだこれから　だれも語り尽くせないほどの世界に、ずっと知らない色があふれている！

ため息は幸せに満ちていた

◆高梨粋　　東京都

やさしさ

赤信号で待つ余裕、あなたにあったらいいな
自然と目覚めること、雨が降ってきても傘をささないような
下の名前で呼べないような純粋さ、あなたにあったらいいな、

月を見て、立ち止まってしまう、考えすぎてしまうなんてこと、あなたにあったら
カエルの音が、蝉の音が、優しい音を聴ける耳が、
風を感じる肌があなたにあったら、いいな

恋人

あなたから貰った音が、言葉が私の中で生き続け、動きはじめる
静かな水面、小さな波の上で動く音をきく
この行為、または感情に言葉をつけられるのなら私は「恋」と呼びたい
鼓動の音が聞こえる、息を吸う音、吐く音、
子供の笑い声、車が走る音、サイレン、
あなたがそこにいたとき、その場面が再生される
静かな水面の上にいるときだけ、私達は恋人

◆藤井康夫　東京都

穴水町比良の思い出

目の前に広がる　静かな波の日本海
光る波間は　海化粧
海へ通ずる川面には　蟹が歩く姿が
見え隠れ
低学年は　蟹取りに
高学年は　川釣りしてる
引いてる　釣れたぞ　またボラか

山では　網で蝉を追いかけ汗をかく
喉が乾けば　神社で水を
ぶどうが実って　婆ばが取って
皆んなで食べる

昼飯は家で飯食えと　こんかいわしを焼いている　お茶漬けにしてサッパリと食べ
ちょっと静かな　昼寝の時間
一人起きると　皆起こし　海に行って
大きな声で　遊んでくれてありがとう

宿題してるその姿　頭がコクリと傾いて

半分寝てる　布団に入れ
そんな毎日　比良の村暮らし

◆パク　　東京都

命と文明の尊さ

桜の芽が出てきた頃に成田空港から一年間の海外勤務に旅立ち、目的地の空港に夜中着き荷物が出て来た頃は朝になって五時間待たされました。
空港の職員は少し運んで休憩の繰り返し
やっと荷物が出てゲートを出て、迎えの人に初めて会い挨拶をしてひとまず宿舎に着きました。
とにかく暑い日々、日本と違い憩いを感じる事を知りました。
一年間この国で暮らす不安が大きくのしかかってきていました。
自分が暮らす場所は、土漠の中にプレハブ小屋を作り周りには何もない所になります。
プレハブ小屋に移って、不安となんとも言えない感情が心を支配していました。
顔には出さないが、心の中はパニック状態でした。
自分の仕事を進めなければならないし、アシスタント二人と会ってもいない。
驚きでした、アシスタントはタイ人二人で
タイ語しか話せない人だったのです。
仕事はタイ人と、土漠に居る日本人の食事づくりです。
三六五日三食休みなく作るため、責任感が重くのしかかっていました。
それに、タイ人とどうやってコミュニケーションをとり意思疎通を図るかが壁になりました。
結論、自分がタイ語を覚えるしか無いと思い、日本人からタイ語で一つ教えてもらった言葉は、「アンニ　パサタイ　アライ」
でした。「これタイ語でなんと言う」です
毎日少しずつ片言のタイ語を覚え三人で意思疎通を図っていきました。
温度は昼五〇。以上夜は三〇。以上で、雨も降らず乾燥した日々でした。
土漠では、サソリがいるので靴を履く時は必ず中を確認

してから履いていました。
水道はありません。タンカーで水を運んでもらい大きなタンクに溜めて使っていましたが、ごみや油が混ざっている水でした。
半年間は風呂は無く水シャワーだけでした。
日本人技師がドラム缶風呂を作り、半年ぶりに風呂に入った時の気持ちよさは忘れられません。秋から冬にかけて昼は三〇。以上
夜は氷点下で雪が降っていました。
その時は、ドラム缶風呂の有り難みが身に染みました。
タイ人三〇人たちとも仲良くなりタイの国王の誕生日パーティーに招待され楽しい時を過ごしました。
金曜日がアラビアでは日曜日になるため、
一日全員で遺跡を巡る事をしてくれました
スパイラルタワーやバビロンの遺跡などを見て悲しくなりました。
爆撃で破壊されて遺跡です、その中の遺跡を一つ持ち帰り戦争で失う命や遺跡や物や
学校に行けない子供達を今も忘れない。
イラン、イラク戦争で爆撃を体験して生と死は紙一重だと感じ一年間の出張を終えて帰国しました。

◆かな　東京都

からっぽ

からっぽ埋めたい
からっぽ埋めたい
頂き登る　地平線またぐ　赤道縫う
着飾る　着飾る　これでもか
からっぽ怖い
高くて美味しい　おいしいは高い
シャンデリア　真っ白ナプキン　銀色たち　笑い声
からっぽ脹れる
そっぽ向くと　底光る
あんただれ　歯みがき　あんたこそ
紙に文字書く　言葉の形交ざる　つむぐ
つむぐ　つむぐ　そう　わたし　つむぐ

◆浅井乃衣　神戸市

夜

その小説は
歯を磨きながら読んでよかった。
読むべきだった。

繊細かつ物静かで
時として炎が揺らめくような
心の動きと儚さを秘めていて。

きっと
シャカシャカという音がないと
少し寂しくなるような
そんなところが魅了的だった。

才能とか知性とか突出した容姿とか
なにもなかったから。
努力するしかなかった。
毎朝起きて決められたルーティンで
白湯を飲んで。

筋トレ。
サラダ。
鳥のささみ肉。

それくらいしても
辿り着かなかったと思う。

どれだけ心を病もうが
どれだけお腹の虫が騒いで一日中なにも手につかなくても。
だからと言って。
スタートラインにすら立てなかった。

きっと
努力が足りないんだと思う。

もっともっと
早く
漕ぎ続けなきゃならないし。

もっともっと
全力で
走り続けなきゃならないから。
その先の怪我は気にせずに。
もっと早く。

夜になって。
寂しくなって。
ぬいぐるみを抱えて寝ていても。
早く走れなきゃ意味がないだろうから。
こうして言葉を紡いでいる間にも
足がもげるまで漕がなきゃならないだろうから。

漫画の中の恋愛をどれだけ見ても
自分の心は満たされないことを知った。
とても最近。
いつまで経っても王子様は現れないし。
ヤンキーなんかに絡まれもしなかった。

そこまで考えて
寂しくなっても
生きているのだから。
心の中に穴がぽっかり空いたとしても
別に死にはしないのだから。

考えることを放棄して。
お風呂にも入らない。
筋トレもしない。
白湯だって飲まない。
ストレッチもしない。
サラダだって食べない。

早く寝たい。
夢の中ではヒロインになれるから。

でも、心のどこかで信じている。
自分はまだ主人公だと。
信じているうちは

頑張れるかもしれない。

◆西ヶ開公一　　京都府

無人駅

寂れた無人駅のホームに立つ
あらゆる想念が滞留する駅舎
時間軸が歪んでいるのか
過去からの叫びが聞こえる
ここは想念の墓場

あの子は言った
「デビューするまで戻らない」
あいつは言った
「俺は絶対に成功してみせる」

叶わない夢
今もその想念が彷徨っている
彼らだけではない
飽きるほど繰り返されたドラマ

私も同じ
何者にもなれずこの無人駅に佇む

全てをかけて挑んだ夢
ほんの一瞬捕まえたかにみえた
だがそこまでだった

何度も諦めようと試みた
人格も変え死んだように生きた
それでも増殖をやめない
夢というウイルス

なんて恐ろしい病
楽になりたいのに

心を破壊してさえなお私の魂は求める
何者かでありたいと渇望する

これは死に至る病だ

罹患した者には絶望が待っている
そして絶望は激しい想念となり
この無人駅を彷徨うのだ

絶望という名の想念
救えるのは自身のみ
私は私を救うことができるだろうか
自縛の想念を

私は一人無人駅に佇む
ここは想念の墓場

◆小川雄大　　東京都

夜中

眠れずに今日も夜中に風を喰う
胸がざわつく静けさと
闇に沈みきらない町明かり
とりあえずあの駅の喫煙所までと
用もないのにどこへも行けない

街灯がいやみったらしく影をつくる

大きな公園の池の前のベンチに
見捨てられたおじいさんが寝ていた
そこから少し離れたベンチに座って
何もしない
何も出来なかった

神社や墓地のある道
住宅地に入り込んでしまった古いラブホテル
玉川上水の生い茂った緑
人がいない分気軽にあちこちへ

――少し遠くの駅まで歩いてしまって
歩く気力が失せてしまって
闇から抜け出しそうな空の下
始発を待っている

◆秋寄歩美　　熊本県

後悔

自転車で家に帰っていると、
三歳くらいの女の子と父親が、車の通っていない道路で
ボールで遊んでいた。

私もパパに遊んで貰ったのかなと
振り返ってみたけれど、
そんなに思い出せなくて、
二人から目を背けた。

理想の親とか、正直わからないし、
いい人間なんて正直わからない。
でも、パパと呼んでもいい人がいて、ママと呼んでもい
い人がいることは確かだから、
どんな方法であれ、私がここまで成長できる生きる場所
を与えてくれた。
育てて貰ったことは贅沢なことなのだと、
大人になって気づいた。

だから、もっと早く気づいていれば
天国に旅立った父という人に、
どんなに嫌な思い出があろうが、死ぬ０・１秒前に
父の顔を見られたかもしれない。

◆皆川莉穂　　大阪府

無気力

壊れた。潰れた。消えた。
本体だけがあって中身が壊れた。その本体はほんの少し
裂傷している。

モノなら修理できる。モノなら破棄できる。モノなら返
品できる
けれど残念なことに、私の役柄は［ニンゲン］で
誠に残念なことに、簡単に治せないもので
誠に残念なことに、簡単に捨てれないもので
誠に残念なことに、簡単に返品がきかないもので

仕方なく、それとなく、有耶無耶に、なんとなく、

私はニンゲンをしています。
来世の役柄はどうか、痛みも、悲しみも、苦しみも感じず
楽しみ、快楽、幸福、ほんの少しの痛み、ほんの少しの悲しみ
ほんの少しの苦しみ、強靭な精神と、美しい容姿と
清らかな心というオプションを兼ね備えた［ニンゲン］にしてください。それでは左様なら。

◆皆川明日花　埼玉県

ゴースト・ダンス

琳子は自分のことがわからない。

プラムを剥いて食べたら、おばさんは剥かないで食べた。
服に汁が落ちる。洗って落ちなくてもいい。
水溜りに入って泥がついた靴下を気にする？
マコちゃんが言っている事、わかる。
おばさんに「へえ、早めに見つかってよかったねえ」と言われる。
「よかったね。早めに見つかって～」繰り返す。
後ろ向きに歩くおじさん。健康法？大きな音でラジオが流れている。
小学生に教えてあげる。医者に言われたことと同じ事。
「ねえ、それだれのはなしー？」
「りんこ」
高い丘の上に登る。
マコちゃんが言っている事、正しい。
家に帰る。大きな観葉植物、ピアノ。

セゾン

涙が出そうな日々、力づくでも手に入れたいもの、
人。

あらゆる出来事の残骸が難しく一人の夜に降りかかるので、
半分より少し大きな月を見て君に教えてあげました。
素っ頓狂な声をあげるのをやめて、触れただけのありったけを食べていたい。

◆安食康孝　埼玉県

幸せの形

探し求めている物がある。
薄れゆく記憶の中に。

エースが三枚揃ってポーカーフェイス。
相手はフラッシュ崩れのおかしなレッド。

お気に入りのワンピに袖を通してアクセでコーデ。
何か足りない。さまようジグソーパズル。
人生ってシャッフルできないかしら。背中を向けて君は言う。

失敗できない現場がある。
緊張が張りつめる
この一瞬の静寂が好きだ。

緊張の糸を手繰ると
見えてくる景色がある。

あざ笑う風。ほほ笑みかける光。

遠くに見える山は綺麗だ。
近づくにつれ見えなくなる幸せの形。

探し求めている物がある。
薄れゆく記憶の彼方に。

◆武田　和　香川県

そして私はきっと貴方が

色の無い風に煽られて洗濯物が空、泳ぐ

かみさまが青のバケツをひっくり返して
今日の空、青まみれ
腫れた瞼などお構い無しに
白旗、群青に浮かぶ

こんなに艶(つや)やかな青、私知らなかったのよ
わざと傘を忘れてみたりしたのよ
その日は結局、柔らかな雨に打たれて帰ったわ
そんなひとりの空騒ぎに少し疲れてしまったの

だからおねがい
どうか聴かないふりをして

だからおねがい
私の　素敵　切り取って
並べて繋げてその勢いで
貴方への言葉、どうか形になって

私は

身を溶かす優しい雨がすき
温(ぬる)くなったミルクがすき
紫陽花が雨粒に頷く姿がすき

そして私はきっと貴方が

◆矢野堅太郎　　大阪府

太陽と光線

うだるような暑さに
アスファルトが溶けていく
指ですくって舐めてみたら
あの夏の午後の夕焼けを思い出す

未完成な満月は
狼男を加速する
不可逆的な時間原則に
ボルヘ・ルイス・ボルヘスが欠伸する

あなたにかけられた呪いは

千の魔法でも解き明かせない
オーロラは天使のカーテン
南極は宇宙の入り口で

雲を掴んだヘラクレスは
群青色に塗りつぶされる

わたしのからだのてんごく

わたしのおくふかくに
はいりこんでくる
いっぽんのめす
はらわたをえぐりだし

ないぞうをきれいにあらって
またなかにもどす
さぎょうはたんたん
しゅこうもばっちり

なにひとつふそくはない
はずなのに
どうしてこんなにさむいのかしら
わたしというへいげんは

うちゅうとかことげんざいと
みらいへつながるてんのはしご

詩人が道化のメイクを落とすとき

言葉を知らない小鳥たちはパイプオルガンの奏でる木漏れ日の中で
あの北斗七星に願いを込めて自殺した
炭鉱のカナリアは煙を嗅いで一声鳴こうとしたが
腕のいい猟師に頭を撃ちぬかれバラバラに砕け散った

砕けた肉片は弧を描きそのまま星座になった
すべてが終わってしまった後に涙を流すのは簡単だ
あなたが愛しいと思うことはビッグファーザーにはお見通しで
抱き上げていたあなたのぬいぐるみも既に取り上げられ

てしまった

私とあなたの自由は喧嘩してばかり
故郷も文明も文化もとっくに滅んでしまった
そんな更地を美しいと思う私は愚かであろうか？
公平も攻勢も中立も社会も肉塊もすべて

Massacre！
鏡を見ないあなたの顔はとっくにピエロのメイクをしている

カナリアの炭鉱はもう鳴かない

もうすべての歌声は歌いつくしたと人は言うだろう
私もその意見には賛成だ
オリジナリティなんて言葉はもはや今では深海の中シーラカンスと踊っている
ツグミも小鳩もウグイスや鴉ですら
同音異曲の歌声を披露しているに過ぎない
あの自由な時代よもう一度！
と叫んだところで後ろには新たな子供たちが並び列がつかえている
もうすべてが遅すぎた
全てが悲しく彩られた気がした

だがこの新たな子供たちに聞かせる寝物語を考えたとき
やはり私が歌うのはシーラカンスの歌だった
子供たちが眠りについてこれは悪くないぞと思った
我々の中に眠る古代は遥か未来へと現在をいざなう歌であり物語であったのだ

私はその歌い手であり語り部の声をつぶしたカナリア

◆犍陀多　　埼玉県

花

鮮烈な一つの原色の様に
有象無象が霞むひとひら
すっと振り返るだった一瞬に

酷く見惚れました
憧れを胸の伽藍に潜めて
戸惑う程に貴女の虜
澄んで寂しげな遠い姿を
秘めるように想った
此の眼の底で燃える彩りは
紛う方も無く貴女でした
その頬に咲かせた
花の名前は何ですか？

貴女を連れてく花盗人にきっと私は為れやしないで
只 その散り際見つめて哀し

貴女が映えるその美空深く
遠く遠く風に乗り行きたい
例い破戒の終わり方でも
貴女の心の中で死にたい
届かぬ科白 赤らむ僕と
憂い白百合と貴女は心中

幻の様なあの俤は
僕の心奪い消えていった

貴女を摘み取る花盗人になんて為れる筈もない
只 貴女は徒花 何も残さず
哀しく激しく此の世を捨てた

破落戸哀歌

破落戸の名に責められて
俺は良心が解らない
破落戸の名に汚されて
俺は美しさ解らない
チンピラの看板を掲げ
義理を下らなく棄てちまう
誰の所為にもしないけど
誰かの悪意が有ったのさ
誰を恨みもしないけど
置いてきぼりにされたのさ
破落戸の名は重たくて

その分命が軽くなる
歩んでく道は寂寞の
俺独りだけの道なのさ
愛する人は居るけれど
独りの心は変わらない
生きて行く先 死ぬ先も
修羅がつづいて終わらない
どうにか足掻いてみるけれど
釈迦の掌廻るだけ
通るこの道は寂寞の
俺独りだけの道なのさ

嫌悪

貧乏臭い顔め。
さぞ薄幸だろう。
お前のその傲慢さには目眩を覚える。
性根は曲がり腐ってしぶとい蔦の様だ。
他所様を敬う心の欠片も無く、
世間を遍く馬鹿にして、
天狗にでも為ろう気か。
大嫌いだ。大嫌いだ。
お前に直接云ってやりたい。
お前に会って、直々に云ってやりたい。
お前の事がどれだけ嫌いか、
どれ程お前の事を考えているか、
今でも、こんなにもお前の事を強く想っているか、
伝えたい。
もう一度お前の悪態が聞きたい。こんなにも。

喧嘩

その声の尖りは、
自分をも刺してしまうでしょう。
言い争いの激しさに、
心だけは虚しく音も無く、
冷たく為るのをかんじます。
眦を決して、悪態を殴り棄て、
静かに決別へと歩いて行く心地です。
感情の荒ぶりが涙を流して、

自らが吐いた別れの科白を滲ませます。
それでも、言葉とは裏腹に、
僕が去った後の貴女の幸福を思い浮かべてしまいます。
僕は非道い人だから、ごめんねを言わずに
然様ならを一つ置いて行きます。

パンザマスト

宵闇の手前 鳴るパンザマスト
もう何処へも行けやしないんだね
忘れ物ばかりでどう仕様も無いが
御終いさ帰らなくてはね

夕暮れを追い掛けるパンザマスト
君は然様ならに連れて行かれそう
引き止めても良いかい？
その代わり僕等は前にも後ろにも
行き場は無いさ

掠れたノイズのくパンザマスト
心が割れる程
強く強く響いてしまう
家路は何処だろう
分からなくなる

十九の冬の日の

白い吐息の流れる先を見て
この塀を静かに越えてくれと
私はそっと思うのでした。
この土地の中で
私は真っ黒な罪を背負い
薄氷を踏んで償います。
鉄の格子の窓の外
小さな針葉樹に風は吹く。
この場所では
生きる理由を見失いそうで
私は鉛筆を握って
必死に手紙を書きます。
それは十九の冬の日の…

私のやつれた愛でした。
十九の冬の日の…

十代

美味くも無い煙草の味を
メンソールで誤魔化した
煙がぼやけて消えるまで
風の無いビルの隙間に隠れていた
夜が来る前の空気は
半透明でまるで僕達みたいだ
大人に為る前のほんの少しの
行き場のない不安握り締めて
つまらない今日と つまらない明日を
区切る時間まで
音楽でも聴いていようか

貴女の夜は海

僕は臆病者だから
貴女が眠る頃に抱き締める。
貴女は布団の中を泳いで
きっと誰かを探してる。
ここは深い深海です。
何処まで沈んでいけるでしょう。
どれ程冷たいシーツの中でも
二人は浮かび続けてる。
夜明けの光は届かないけど
貴女に舞い降りる朝は優しい
辿り着けない海底に
きっと僕等の愛は在る。
見えなくて良い。触れずとも良い。
幾ら流れても海は一つです。
何時でも貴女の夜は海。

街並み

終わり間近の夕暮れ一つ。
青く燃えだしたネオンガラス。
埃散る空と月の白さが
君の儚さに僕は見える。

誰しも前を向くで無く
ぼやけた眼を引っさげて
形無い今日を精一杯。
僕の震える足並みは
どうにか過去を歩もうと
この街並みを追い続け
ビルの谷間の影を這う。
終わり間近の夕暮れ一つ。

◆多田有希　　岩手県

運命

始発電車の中…
君はどこに行くの？
誰に会うの？

力なく俯き
スマートフォンに目を落とす
その瞳に
幾つものドラマを感じた

「この列車は当駅で四分間停車いたします。」
いとも簡単に電車は交錯した

◆幽玄虎也　　東京都

女

前を歩いている女が
やけにぎこちなく歩く
きしきしと音を立てながら
電気か何かで動いているようだ
まるで機械みたいに

後ろ姿をぼんやりと眺めながら
あと百年も経ってしまえば
機械と人間の違いすらも
僕らにはわからなくなるんだろう
それさえ興味のきっと外側で
古ぼけたこの眼鏡から
世界を覗くのだろう

女が道を曲がるとき
ふいに見えた横顔には
黒い液晶が張り付いていて
ぎこちない動きのわけがわかった
まるごと機械と何か
違いがあったのだろうか
どうせすれ違ってしまうのなら

それとほぼ同時に
耳に流れ込んでくる悲しげな音楽が
僕も全く同じだと告げて去った
イヤホンで仮想の耳を持ち
眼鏡で仮想の目を持ち
衣服は仮想の皮膚だ
なんてことだ
僕ですら文明に包まれている
自分の国でしか使えない

特別すぎる兵器で
今日もミサイルをうち放ち
正義のじゃんけんを繰り返している
罪なのは
そんな全てに気づいていながら
駄目だ駄目だと罵って
結局別物の正義を押し付けるだけ
鏡みたいに等しいいたちごっこだ
しかしそれしか僕らにはできない
生き物の枠を超えることなどできない
神を呪えば気でも済むのか

君と僕が違うことを受け入れられない割には
やっていることはほとんど同じで
象が見たら笑うだろう
もっと大きくなればよかったのにと

きっと文明は
僕らの制御装置なのだろう

平和を愛して止まぬがゆえに
戦争を愛して止まぬ僕らが
矛盾を知り破綻を知り無常を知り
その先の何かを知り
奥底まで沈み込む
そうならないように
制御しているのだろう

あぁあいつはもう駄目だ！
そう信じていられれば僕らは
人の世にとどまることができる

だから僕の眼鏡は
僕が本当に見てはいけないものを
隠すためについているのだとすれば
あの女が機械に見えたのも
本当のことを隠すためなのだな

その後ろ側には想像もつかぬ

恐ろしいことが用意されていて
それに触れてしまわぬように
女はぎこちなく歩いたのだよな
そうなのだよな
そうなのだよな、、

◆大日向 美紀　千葉県

シロ

自由も不自由も同じだと思った
鎖をつけられたまま見た世界では
誰もが同じような顔をして
何かを追い 追われるように歩いた

その人は不意に現れた
息苦しい程の春を連れて
眩しそうに 細められる瞳が
稲妻になって 僕を射抜いた

せわしなく鳴る踵の音

危なっかしくて 笑えてしまう
知らぬ間に 頭はちゃんと覚えていて
解った自分が 誇らしい

僕等は違う言葉を遣うから
気持ちを通わせるのに時間が掛かる
だけどそれでも 歩み寄ってくれるから
伝えたいと そう思うんだ

鎖が外せないまま迎えた春
霞む空の向こうから
慈しむように 綻ぶ口許が
陽溜まりを呼んで そっと寄越した

待ちきれない 爪先立ちで
呼んでしまう
我儘な 声を可愛いと言って撫でて
笑った君に もう会いたい

僕等は違う言葉を遣うのに
気持ちが通うのはあっという間だった
思い込みじゃない 触れてくれる手に
確かめたいと そう思うんだ

時の速さも 光の速さも知らなかった
遠くなっていく君に気付いた一瞬
離れたくない 揺れる瞳が
今まで感じた事のない程熱くて

僕等は違う速さで歩いていくけれど
確かに二人は同じ世界にあって
やさしさをくれた 幼い君を
忘れはしないと そう思えるんだ

ねえ 君の事を 本当に好きだった
少し先に僕は行くね
待っているから ゆっくり来て
また出逢えたら 一緒に遊ぼう

ああ こぼれたなみだが
まだあたたかいよ ありがとう

君と同じだ ありがとう

◆篠崎亜猫　広島県

サルスベリの紅涙

ノイズをまぶした真っ白いラジオが
窓の外で泣いているのを聴きながら
私はひとりで草葉の汁を顔に塗る

薬品の匂いがする
茶褐色の瓶が私を見ている
静かに
骨格標本になりたいと思いました

苔むした道端の岩を信仰していたころの
心を持ったままホルマリン漬けにされたかった

（サルスベリの紅涙）
（肌に反射した慨嘆の焔）

向こうで百回目の宣誓が聞こえる
私はひとりで草葉の汁を顔に塗る

◆Tanio　秋田県

猫背

今日も下を向く
背を丸めるのはクセというか何というか
腰が痛む

ソファに座ると
前屈みか横柄になるか
あまり良くない

猫もたまったものではない
丸まった背を例えられ
マイナスに捉えられ

腰が痛む

いつか上を見れたら
明るい方を見つめたいと思う
いつか前を見れたら
明るく生きてみたいと思う

今日も下を向く
背を丸めるのは次の一歩をぶっ飛んでしまいたいから
腰が痛む
生きてる代償だ

でもまぁ
猫背は治したい
いつか前を向くために

◆燐廻　　埼玉県

極楽地獄娯楽

夕焼けに照らされながら今日も帰路につきます。
伸びる影を踏もうと思ったけど
死んでしまいそうだからやめました。
夕日が眩しすぎて
吸血鬼ならきっと死んでいますね。
週末は
私にとっては終末なのかもしれないですね。
だって、次の週が来るのって
とても絶望的じゃないですか。
また名もない一週間が幕を開けてしまう。
ああ、嫌だ。
そうだ、
どうせ始まるなら終わるまで楽しめばいいんじゃないかと思いまして。
今日は奮発しました。
乾杯！
なんて一人で呟いて寂しいですね。
皆さんもこういうことするんでしょうか。
し――――ん。
そういえば、

十年片思いしてた人が
彼女と同棲を始めたみたいです。
と、人伝に聞きました。最悪。
ショックだから今日はとことん呑みます。
人生ってこんなことの連続なんですか。
あまりに報われなさすぎる！！！！
なんて、やっぱり皆さんも思うでしょうか。
本当はぶん殴ってやりたいけど、
私は大人なのでやめます。
おや、そろそろ世が明けるみたいですね。
一秒一秒消えていくんですね。
そうやって何も無くなってしまうのでしょうか。
ということも、忘れて
また一つ大人になっていくんですね人は。
悲しくはないですよ
それがきっと正しいんですよ。

◆金閣寺＆茶楽茶丸　東京都

葛西臨海公園のマーメイド

恋は凪模様さ　わたしはここで
海をみていたいだけ
夜に吐いた煙は　少しほろ苦い
毒が強くなるようだよ
カニの群れに出会えば　人恋しくもなるさ
なんて健康でしょう
ここかしこを痛めて　産んだ感情なのさ
それを愛せるように
生意気になったり　憎んだり　走って逃げたりしたのは
歪んだままどこかを目指そうとしたのさ
波に　揺れる　恋すら正しい場所を
探して歩いてる　もうじき流れてくるはずさ
葛西臨海公園のわたしはマーメイドだわ

ひとり暮らし

牛乳を注いだ　寝起きの午後は
不思議なくらい腹は空かないな
楽しみにしていた　誰かとの約束を
破った午後だ

食器は重なっていくな　ピサの斜塔も
重力に負けていくんだろうな
少しのビタミンを探して
冷蔵庫を開けた
優しい人たちは溢れているな
疑う心を持ちたくない
けどいつかは誰かの嘘を暴くだろうし
許せないことを許すかもしれない
見てないフリで見つめてたいの
浴槽の穴に詰まるゴミ
机の上を通る蟻
ビタミンは健康を保つよ

しぃる

かさぶたをとった　新しさを
絆創膏で包んだ夜に
今日もあなたは優しい人になる
苦しいときも　悲しいときも
あなたはそうやって笑うのかな
なんか腹立たしいな　悲しいな
目を凝らしすぎて　傷付かないように
片目に思いきり　貼り付けたか弱いシールだ
目の前の世界は　ぼやけてよくみえないな
それでいいだろう?愛しいよ
盲いた目で知った恋も
馬鹿らしい終わりにはがれても
そのシールはずっと捨てないで
瑞々しい温度を保って
またあなたの目を隠せるように

スロースタート

追いかけたその甘い蜜は
澄みすぎて直視するのを避けた
はりつめた冷たい温度だけを
ずっと保ってほしくて
裁かれた初めてのエゴは
名曲になって苦しめるんだろう
深青色の水の中で耳をふさいでる

痛い　それに気付いて以来　その表情が
七色に染まっていく
すらり伸びた姿勢
正体を明かさないまま進んでくれ
決して脇目を振らないでくれ
遥か後ろからそう願っていた
僕は紛れもなくエキストラだった
正面の風に目がしみたら
涙が出てくるのを少し待とう
心包むのは透明な温度
その女神の前髪つかむために

◆藤﨑欣也　群馬県

あらかじめ、ひとことだけでも

両肩に透明な虚しさがまとわりついた
そんな私は　夏の夕暮れを彷徨いました

「暑くなる」そんな予報は大外れ
夏半ばとは思えない　冷たさが町に満ちていた
夕焼けに　真っ赤に焼かれた飛行機雲が
あなたの手首の傷のようでした

蝉が一匹鳴いていた
ミンミンとつんざくように鳴いていた
返事は帰ってこないようだ
宵闇に　しんと消えてく鳴き声は
あなたの支えになっていた
そう思っていた私の上げた
泣き声のようだと思いました

そうして今
予報もなしに
蝉はどこかへ消えてしまった

◆COSEN　東京都

足りている

すごいはやさですすんでいく

心がばくばくとせかされて
くらしの愛はうすまり　スピードだけがあがっていく
これ以上潜ってだいじょうぶだろうか
つかれている
つかれている
いきがしたいと
地上に上がったその日
おちつきのない子犬はわたしひざでいつまでもねむり
降ってくる蝉の音は鈴のように美しかった
はやく泳ぐヒレはいらない
この子を見つめる眼があれば
なでてやる腕があれば

◆岡部將生　東京都

夕映えコロッケ

町のお肉屋さん
母さんに手を引かれて入った　お店のショーケースを眺める
茜色　カーマイン　カッパーレッドの鮮やかなお肉が
塊で　ぶつ切りで　薄く切り分けられて並ぶ
だけど今日買うのはこの新鮮で濡れ濡れしいお肉じゃない
「コロッケ三つくださいな」
母さんの声音と一緒に　わたしの心も弾む
「あいよ」
お肉屋さんは言って　熱いラードの中にパン粉をはたいたコロッケの元をくぐり入れていく
じゅ――――　ぱちぱちぱち　ぱちっ　ぱちん
揚がっていくコロッケの音は　わたしの胸を高鳴らせる
ずっと鼻をくすぐるラードの匂いが　わたしの空腹をいや増させる
ラードは香りじゃない　匂いなんだって　なぜだか強く訴えたい
なんて考えているうちにコロッケはできあがったみたい
「二百十円だよ」
母さんはお金を払うと　ほの温かい袋をわたしに握らせてくれた
うちにつづく坂道を　夕陽が柿色に染めている

すれ違う人が振り向いた
きっとコロッケのラードの匂いに誘われたのだろう
夕焼けの帰り道はいつもと同じ　いつもと違う

◆ひさてる　　北海道

太陽と月

僕の心の中の太陽は、
傷ついていないのに、
みんな、傷ついているよ、
と言う。

僕の心の中の月は、
太陽と仲良くしていたのに、
みんな、仲が悪かったよね、
と言う。

そんなとき、僕は、
あなたのことを忘れていて、
透きとおった涙が、
ひとりでに、頬をつたう。

はるか遠い天上の、
星々に尋ねてみたい。

誰もが、誰かに愛されていて、
星々に祝福されて、
生まれてきたことを。

◆鴉蝶　　三重県

午前七時

都会の人ごみ
信号が進めの合図を出す
動き出す　人も　街も　時も
流れに逆らいながら　狭い空を見上げ　短い溜息
まわり始めた時が　こんなにも　窮屈だと
それからまた歩き出す
午前七時

淹れたての紅茶
溶け始めた砂糖が広がる
動き出す　人も　街も　時も
流れを見つめながら　同じ壁を見上げ　長い溜息
まわり始めた時が　こんなにも　退屈だと
それからまた進みだす
午前七時

旅

戻らないモノ
こぼれたミルク　割れたガラス
過ぎた時間　消えた言葉
ひとつの命　忘れた思い
閉じて行く記憶　消えかかる炎

〝死〟とは悲しいもの？
〝死〟とはうれしいもの
神様がくれた唯一平等な終わり
大切なモノ
片隅のピアノ　あの日の歌
棚の上のマスコット　水槽の魚
手の中のぬくもり　素敵な色
私の感覚　今という時間

◆玉井砂帆　神奈川県

幸福な人

青すぎる空　白すぎる雲
寝返りをうちながら
私はこの詩をかいている
今は何時だろうか　ちっとも腹は空いていない
背中にはじんわり汗をかいているが
目に染みるほどの汗はない
きっとどこかの街で捨てるだろう
惰性を拾ったあの街で

世界

風が吹けば　葉が揺れるように
春になれば　虫が遊ぶように
暖かくなれば　散歩に出たくなるように
空が晴れれば　友達と笑いたくなるように
この世界はできている
それでもどこかで
道端で死ぬ　かえるのように
夏に降る　氷のように
影しか見てない　オトナのように
異常な世界ができている
人間　にんげん　ニンゲン…

◆械冬弱虫　　東京都

リビングデッド

包帯を巻く
その下にはなにもない
いや　見えないだけ
ほんとうは　血だらけ
ことばは　ナイフで
弓矢で　ありとあらゆる凶器になる
そんな凶器の　見えない傷がついた
だから包帯を巻く

包帯だらけの　生ける屍が
街のあちらこちらを　闊歩している
手に手に　凶器を持って
誰かの傷を増やしている

そんなことにも気づかずに
夢中になって　包帯を巻く
自らの身体にだけ　包帯を巻く
他人の傷には　見向きもせずに
ただ　我が身のために　包帯を巻く

包帯で　顔の見えないわたしを
誰か　愛してくれるでしょうか

返り血で　目の見えなくなったわたしを

誰か　抱きしめてくれるでしょうか

◆ホック サディアザンナット　兵庫県

荒波

頑張って生きている人が報われますように
悲しくて泣いている人が報われますように
辛く苦しい思いをしている人が報われますように
侮辱されてもただひたすら前を向いている人が報われますように
歩いて、走って、立ち止まって、逃げて、また歩く不器用な人が報われますように
涙いっぱいのぐしゃぐしゃの顔で、この荒波に飲み込まれぬよう歯を食いしばって耐えている人が報われますように
心が荒んでもなおこの世界を静かに叫けび続けている人が報われますように

◆畠山隆幸　長野県

父の戦争

戦争　父の生きた時代は
戦争が人生を左右した
好むとも好まぬとも
己の力でどうにもならない
時節というもの

徴兵　兵隊検査
きな臭い匂い

それでも父たちは生き抜いた　耐えた
そのエネルギーは尊敬に値する
根性　いや　ど根性
今のおいらでは耐えられない

時節というものに振り回され
歯車の如くこき使われた

地袋の上で微笑む父よ
何か言葉はないか　しゃべりたまえ

昭和五・六年頃

どんな時代も
不学歴は心を押し潰す

誠実　真面目だけでは
世の中を渡れない
戦時中ならばまして惨めだろう
どんな姿で逃れたのか
思い出しもならない

不退転の心で
生きるしかないだろう
夕日の丘に陽が沈む
ここは満州異国の地
大砲の轟く音がする
敵機が空を飛ぶ
軍歌が響く　上官が騒ぐ

「戦争ああ戦争」
無情の雨が戦夜に降りそそぐ
軍馬が進む　戦争の音が轟く
幾歳月　幾霜雪
心が宙を飛翔する　「戦争ああ戦争」と
月がはぐらかす　心がすさぶ

◆穴澤由佳　　東京都

恋はラズベリーパイ

あなたの瞳と出会ってから、私の身体の中心にラズベリーパイがいることがわかった。瘡蓋みたいなパイ生地でジクジクした傷口みたいな赤めろのラズベリージャムを覆っている。

◆極楽浄土ちゃん　　東京都

午後六時二一分
部屋の窓を開ける
空は斑な鼠色
今日は珍しく泣いていないみたい

生温い風が優しげに見せかけて
どこか精悍さもあって
隣の家の晩御飯のにおいが
化粧水で湿った私の頬を少し乾かす

たくさんの涙を流し終えた後こそ
次に魅せる鮮やかな表情を引き立てる
梅雨があるからこそ
勇敢で溌剌とした夏が映える

凛と鳴く虫やざわめく緑
心地よく揺れるカーテンの紐
それらに嫉妬を仄めかし
よれたTシャツでスイカバーを頬張る私が言う

「夏に追いかけられるのは悪くない、だけど早く私の隣を歩いて。」

◆恵山花　愛媛県

こころ

自分が分からなくなって
自己嫌悪で，後悔で，過去で，
ガラスになった
飛んだ破片を拾ったら
傷ついて赤く染まる
うっすら残る傷跡は
目を背けても消えはしない
ひとつ，ふたつ，みっつ…
傷跡は止まらない
その破片を貼りつけた
元の形へ戻すため
粉々な破片は戻らずに
本当の気持ちは見えなかった

◆菅沼きゅうり　新潟県

煎じ詰めれば、こういうこと

コンビニの自動ドアを出ると自分が

右から来たのか左から来たのか、さっぱり
わけが分からなくなった。
そんなにべろべろでもなかったけど、
とにかく一度落ち着かないとな、と思い
駐車場の車止めブロックに
腰を下ろした。
そして、袋から缶チューハイと
ジャーキーを取り出し
ちょっくらココで、ひと休み。
ぐびっと、缶を傾けるごとに増す、酔い。
カチカチのジャーキー。
そして、冷たい夜風に吹かれながら僕は
あれやこれやと考える。
買い出しに行かせた、女のこと。
映画の続き。
最後に言わなくてはならない言葉。
ずっと好きな人のこと。
右のことや左のこと。
やがて僕は腰を上げ、ほの暗い
歩道の方へ歩きながら思う。
今わかったことは、僕がたとえ帰らなくても、たぶん
彼女は気にもしないということ。
あるいは僕が、あの部屋に戻りたくないということ。
あの子のことが忘れられないということ。

◆kesun4　三重県

月のない夜に

疲れたと少し眠る　目を覚ました時には
オレンジ色の空が　すっかりと色を失くし
月が何処かに隠れてしまった
黒と青の混じった空に
いくつかの星が
点々と佇んでいた

今日と明日の間を
本来ならば夢の中へと誘われる時間に
私はゆっくりと歩いていた

携帯の中の文字はいつもと変わらず
私の目は右から左へと文字を追う
静かな街の片隅では
時折、波の音が聞こえ
まばらに走る車の音が
何かを運んでいた

世界がおかしくなって
虚な世界に飲み込まれた私は
月のない空に違和感をなくしていた
いつもと違う時間に
いつもと違う空の下で
また、明日の事を考えていた

◆小川勇大　東京都

あなた

燃え上がる恋心が
作り上げたイメージを守ろうとして
あなたを歪めてしまう

可能性が輝くから
寂しさは影になって
どこまででも纏わり付くよ

あなたはどうやって生きているのだろう
繊細な肌に風を泳がせて街の中

◆みぃ　愛知県

惰性を保って…

ただいま
虚しくワンルームをこだまする
代り映えしない毎日
中身のない冷蔵庫
アルコールを押し込んでいく

暖かかった食卓は
お湯を注ぐだけになった
火傷する程熱くても

特に気にもならなくなった
腹は減ってない

蓋を開けて注ぐ熱湯
三分間の沈黙

煙草に火をつける
考えることを止めようと考える
苦い煙も特に感じなくなった
無感覚な振りしてる

疲れた
ただただ言ってみただけ
労いなんて求めてない
とか考えてみては
アルコールを流し込んでいく

笑う為につけてたテレビ
今では埃をかぶってしまって

拭うほどの気力もない
特に気にもならなくなった
リモコンどこだっけ

勝手に開く蓋を執拗に抑え
明ける沈黙
灯した火を消して
ガラ入れに強引にねじ込む
美味しいとも感じなくなった

無感情の振りしてる

◆Yoshi　埼玉県

プリズンシティ（東京ダークサイド）

街を歩いていると
孤独に出会う

孤独はシティーをプリズンに変えるようだ
慣れれば、このプリズンはいい遊び場だ

この街の行く末
破戒？
妄想？
破滅？

俺はただゆらゆらと揺れている

◆羊飼いの財布　兵庫県

死にたいと頻繁に口に出す
そんなに死にたいの？どうして？と聞かれた事がある
生きたいって思う時も勿論ある
でも生きたいのなんて当たり前でしょ
今確実に生きているのだから
それをわざわざ声に出して言う必要も無いかなって
そんなこと言い出したらいずれ死ぬ事は分かっているから何も必要無いかなって
そう思うけどお腹は空くし屋根のある場所で寝たいし好きな服を着ていたい
誰にも頼らないで一人でいることは不可能らしい
誰にも頼らず一人でいたい私はこの世にいれないのかな
そうして死にたいと口に出す
私は今確実に生きている

◆鈴蘭　石川県

再会

皐月の頃
初夏の風に髪をなびかせながら
陽だまりの香りをすぐ側に遊ばせて
わたしは　どこか楽しげな
移ろいやすい心で
想いを馳せていた

空模様は
晴れ
時々曇りの予報

わたしの考えていることも

未来のことばかり
けれど時々過去のこと

花は蕾だった頃を忘れない
まだ種や球根のときでさえ

覚えている

思い出していた

ちょうどその時
ひらり
空を背にして
美しい羽の模様が世界に広がった

幸福が
もうすぐそこに来ていることを知らせに

探し物

泣き場所を探していた
喧騒が遠くに聞こえる
人目のない所が良かった

休む場所を探していた
引きずり込まれるような深い眠りのなかで
朝の光が届かないことを願った

逃避する場所を探していた
傷口が塞がらないうちに
小石をぶつけられるのは
ひどく痛んで苦しかった

そうして
そんな場所なんて何処にもないと
歩き回って
ますます膿んだ悲惨な傷に
薬をつけてくれる人さえいないと

諦める場所を探していた
自分さえ肯定できない私が
抱き起こされなくても自分で立てるように

隠れる場所を探していた
なんてことはないからと
笑って誤魔化す術を得られるように

そうして
疲れ果てた私は
何も出来なくなって

逢えなくなった
遠すぎるほど昔の
優しいあなたのことを
思い出していた

どうか

今を生きているあなたが
私の姿を
その胸に思い描いていませんように

◆星水かほる　埼玉県

今日わ

私の嫌なモノを
全部消毒しよう

太った紫が
足を引きずる

電車は
上ったり下ったり
大きな音を立てる

小さな子どもが咳をする

自転車の前カゴに

盗難防止のカバー

昨日見た空には
ヒバリが飛んでいた
高く飛ぼうともせず
一生懸命でもなく
ただ
生き生きと
鳴いていた

これでいいか

小犬の目が問うている

明日は雨の予報

◆I.me　　京都府

鯨鐘

吸い込まれていく水の中。

深く深く見上げながら。
暗がる辺りに遠のく光。
陽の光はどこから見ても陽の光。
こんなにも沈んだ暗がりの中でも大きな星。
深く深くまだ深く。
吸い込まれていく水の底。
吹き出たのは星屑の泡。
一際なおおいぬ指先に触れた月。
泡の音に塗れ吐き出した夜空を眺めて沈む。
微かな水の音と泡にしばらく暗がりは暗闇へ。
何が見えているのか何を見ているのか。
真っ暗に響いてきたのは鐘の様な音。
何処からか遠くから聴こえてくるごおんと轟音。
音の響く身体の隣りに居たのは大きななにか。
だらりと沈む私に触れた髭と、そっと触れたそれの身体。
不思議と恐怖は感じない。
頭も尾だって見えないけれど隣に居る彼は鯨だった。
深く深く沈んでいく。
大きな鯨と彼の声。

その口元は笑っているのかな。
何も見えない暗やみで、彼の姿と僕の涙はよく見えた。
新しい友達ができた気がしたんだよ。
水の音と彼の声に目を閉じた。
途端に思い出した息に、慌てて開いた目。
目の前に広がるのは陽の光が差し込む水面。
苦しさに泳ぐ背中に響くごおんごおん。
振り返ると暗がりの中に君がいる気がしたよ。
また会えることはあるのだろうか。
また聞くことが出来るだろうか。
あの大きく澄んだ鐘の音を。

スノードーム

頭の中で降り注ぐ雪。
腰を着いて眺める私。
雪に似ている結晶。
スポットライトの直ぐそばで。
降り積もっていく結晶に結晶。
光に当たらないように眺める私。
ふわりと添えられていく君。
降り注ぐように突き刺さっていくあなた。
滴って模様になる僕。
ずっとそばで眺めて見つめている私。
降り積もって形にならない君。
降り注いで歪になるあなた。
滴って滴っただけの僕。
手を加えて形にしてみる私。
偶然を装った君。
メイクアップするあなた。
背伸びする僕。
彼等はいつも素敵な形。
手を加えた私は見上げる。
そのままの彼等が愛おしい。
形にこだわる私に仕立てられた形よりも。
何度見上げたことだろうこの雪を。
何度降り積もったことだろうこの雪が。
何度舞い上がっただろうあの雪は。
そうして腰をつかす。

スポットライトの直ぐそばでまた。
舞い落ちてくる雪に、吐息さえもかからぬよう。
口を覆いながら、今日もまた。

◆せせらぎさらさ　東京都

ねえ貴方

あたし、女の子に生まれて良かったのかしら。
だってほら、こんなにものっぽで貴方よりも目線が上よ。
手を合わせてみましょう、あら、あたしの方が大きいわね。
体重だって貴方よりも重いはずさ、そのぶん気持ちもね。
重たいわよ、あたし。

でも、やっぱり。
あたし。女の子に生まれて良かったって思うの。

春の桜を見に行くのは、やっぱり女の子と一緒じゃないとつまらないでしょう。
夏の青空とお友達になる方法は、真っ白のワンピースを着た女の子がいちばんよく知ってる。
秋の夜を過ごす縁側で、膝枕をしてあげるのは女の子なものよ。
冬は、そうね、冬。寒いからくっつきましょ。

あぁ。あたし、貴方の女になれてよかった。

◆ギザギザ仮面　神奈川県

パフォーマンスフィンガー

暗い空
半月だけが
光ってる

肉を喰う
酒を飲む
海を飲む
地に潜る

カエルの卵

オタマジャクシ
講釈師

煩い煩い

野菜喰う
水を飲む
河舐める
地を返す

明るくなる
気温が上がる
力出る
太陽が賑やか

カラス飛ぶ
真っ赤な血

二つ包丁

刻み食
六本木
昼になる
ヒルズ

太陽沈む
ツキが出る
月に行く

煩い煩い

ナッツ喰う
文字を飲む
布団喰う
枯れていく

月沈む
真っ暗
雨

雲に敬礼
貯金箱

空けて41円を
拾って
投げる
向こう側

何でも喰う
何でも飲む
死ぬ

◆田中楓　沖縄県

心地の良い風とともに運ばれてくる出来立てのご飯の香
りに風本来の匂いが混ざる
遠くから響いてくるバイクの音をかき消すカエルの鳴き
声
緑に入り混じった黄色や赤の花たちに寄り添う猫たち

少し肌寒い夜の少し暖かいランプ
一人の時に食べたしょっぱいお菓子
引き出しから引っ張り出してきた紙に絵をかく
明日も同じ　何一つ変わらない

＊

通学路の下水道に落ちている落ち葉
バス停前の閉まった弁当屋
親しみの湧いてきた古い一軒家
ここを知らない人にとってはつまらない場所だろう
私たちにとっては落ち着く場所だけれど
いつかは去ることだろう　けれど私はまた来るだろう
また会いに来るだろう　その時まで

◆葛飾ロビンソン　兵庫県

ブリキの金魚

あるシーンと音のした冬の日
空っぽのプールに無造作に転がるのは
あの慌ただしい夏を夢見る
撥条を巻く人が居なくなった

奇妙に錆び付いたブリキの金魚
カタカタカタカタカタカタタタ
理由も無くゆるり流れる涙
数え切れない程のサヨナラの涙声
そしてキミのエロチックな匂い

ある憂鬱な冬の日
空っぽのプールに厳かに雪が降る
夢を見ることが出来なくなったのは
汚れ過ぎてしまったブリキの金魚
カタカタカタカタカタカタタタ
カタカタカタカタカタカタタタ
雪にすっぽり死んだ

◆半谷妃菜　福島県

愛の容（かたち）

彼から硝子の首飾り
爪先ほどに閉じ込めた愛で
殺めてしまった
彼はまるで看守のよう
暴れる体を座らせた
彼はそのあとマリアを宿し
泣き喚く声を抱きしめた
温かくて優しくて
ここが硝子の中だなんて
気づくはずもなかった

◆水越晴子　三重県

曇り眼

月日の流れであなたは死んだ　目に
泪が溢れたの　月桃茶が奏ではじめた夜
だったね
そういう感覚の　壊死をしることはなかったから
ゆるやかに死ぬ　を　みつからないように、みつけられ
ないように
辺りはしいんとしずまった。
嗚呼　もう居ないんだね　番を失くしたかのように文鳥
が急き付く

狂おしい夜のはじまりです　朗読者が　労働者はあまたの音を消す　と云うを
わたしは逃れ、傷付いた蟷螂の役目を尋で留め
月夜が桃の木のせいじゃくを　殺しはじめたので　はては　はて
あとから来るであろう　お客様と曇天が煤す
「まあ見事な」
……の後　あなたの死んだ眼に映らぬ清らかな鷂
胡乱に喉元が、枯らす。ちりとなって死する鷂だ
「ようこそ」
声で仕草が遮られる　ここはこの世かあの世かのはざま
あたり見渡した曇眼　どんよりと死んだ魚のなみだうかべた

◆花渕邇湖　宮城県

無題

あなたの彼女は私の友達で 私の彼はあなたの友達で
あなたと私はただの友達。
似たもの同士のただの仲良し。

今にも降ってきそうな程の星空の下、
私とあなたは内緒で何度かキスをした。
その後あなたは決まって「惚れんなよ」ってカッコつけて見せるから
お返しに「もう遅い」って返事する。
それがワンセットになっていて、
そうすることでふたりのキスは冗談ってことになり
ほんとは可笑しくもないのに私たちは笑いあう。

心の底から冗談だと思ってるみたいに装っていた私たち
決して好きと口にはしなかった。
抱きしめ合うことはあっても
抱き合うことはない――。
友達同士のふたり。

それは突然の出来事で。
真夏の或る日、あなたは遠い星のひとつとなった。
イカロスみたいに翼を広げ
夏空へと飛んで逝ってしまった。
“ねえ、高層マンションに住んでるだけじゃ物足りない
なんて 随分わがままだよ”
私は独り言ちてみたけれど さっぱり笑えなかったな。

今も思う。
一度も抱き合うことなく さよならして良かったと。
けど。
一度くらい抱き合ってしまいたかったと。
あなたが惚れんなよって言って 私はもう遅いよって返
事して。
そして静かに微笑み会えてたら。
そんな風に思うんだよ。

無題

絶望するって意外に簡単。
自分の内側をほんの少し覗けば 心はたちまち絶望の淵
だ。
そこからこの世を斜めから見て
理不尽を そして絶望を歌う、詩う。

けれど希望は?
絶望を叫ぶだけじゃ哀しすぎやしないか?

希望を歌う人がいる。
希望だけを詩う人がいる。
理不尽も絶望も飛び越えて その向こう側にきっと在る
希望を。

ひとは言うだろう。
単純だと。青臭いと。この世の中 そんなものじゃないと。
訳知り顔で言ってくるだろう。
けれど私は
目の前に横たわり続ける理不尽の、

いつ終わるか知れやしない絶望の、
その向こう側に在ると信じてる希望を　詩う人でありたい。

希望を詩う人であり続けたい

◆るりなつよ　茨城県

沈黙にたたずむ月

「饒舌よりも沈黙を…」

インフォーマルな時間
教室の中の
太陽にはなれなくて
本が友達だった

日の光にきらめく
教室の支配者達から
幾度となく問われた
沈黙の理由

空間を埋める
談笑の嵐

床の上に散らばる黒い糸くず
幼き頃の＊mutism

過ぎ去りしあなたも
初対面のわたしに
グレーのラベルを張り付けた

じめじめと
二項対立の支配を感じ

起業女子
ワーキングマザー
そういったものからは
どこか蚊帳の外で

天候は慢性的曇天
メーターの針は
左寄り

それでも

「話し言葉よりも
書き言葉を…」

保存中のドキュメントを開くと
糸くずから
変貌を遂げた文字達が
ずらりと並ぶ

そして
新たな組み合わせを探し
紡ぎ始める

出来上がった言葉の連なりが

金剛石なのか
石ころなのかは
知る由もない

ただ
〈こっち側〉でなら
生きていける
そんな気がしている

わたしは
わたしの色で
歩んでゆく

「太陽よりも月を…」

マットの上に立ち
部屋の窓から
夜の沈黙の中に
たたずむ月を見上げる

よろこびにしろ
かなしみにしろ
メーターは
右へとふれてゆく

いのちのエネルギー
満月に捧げる
＊＊チャンドラ・ナマスカーラ

よろこびにしろ
かなしみにしろ
メーターは
左へと戻ってゆく

手離すエネルギー
新月に捧げる
チャンドラ・ナマスカーラ

今なら肩を並べられそうな
かつての太陽の申し子達は
まだ輝きを放っているだろうか

天井や壁が取り払われた今
同じ月ぞらのもと
祈りを捧げる

この月のめぐみが
そこらじゅうに降り注ぎ
そして
めいめいの色で
輝きを放つように…

＊mutism
場面緘黙症（ばめんかんもくしょう）。家庭などでは話すことが出来るのに、社会不安のために、学校などある特定の場面・状況では話すことができなくなる疾患。
＊＊チャンドラ・ナマスカーラ

サンスクリット語で、ヨガにおける月礼拝を意味する。
太陽礼拝と対比される。一呼吸一動作で立位のポーズを連続しておこなっていく。

◆板倉萌　兵庫県

命のスープ

心をこめてスープを作る

子ども達の手を借りて
自慢のスープを作る
おいしくなるように祈りをこめて
手間暇かけてスープを作る

自分の体の値段を交渉して
お金を紡いだり
生き延びるために
あらゆる人を配置して
セーフティネットを作ったりしていた

そんな自分をミキサーで粉砕し
バターとコンソメで味を調え
ミルクで溶いてスープを作る

心をこめてスープを作る

海を越える

喉を潤すために
水を飲まないといけない

苦痛を和らげるために
薬を飲まないといけない

家庭の平和のために
自分と闘わないといけない

愛する人のために
苦痛に耐えないといけない

乾いた陸を歩き続けるために
海を越えないといけない

人間交差点

あの人もあんな人も
私の上を
通り過ぎて行った

私も
あの人やあんな人の上を
通り過ぎて行った

時には道案内してもらい
時には私が道案内して
歩道橋
川沿い
お祭りも見ながら
そぞろ歩きした

帰属意識を持たない
檻にも入り切らない猛獣は
誰にも
自分にさえも
懐くことがなかった

あの若いエネルギーで
むせ返るような
人間交差点を
今歩いているのは

私の十代の子ども二人です

過ぎ去りし自分の姿を
重ね見ながら
静かにやわらかい眼差しを
彼らに送ります

恋の飛び石

恋の飛び石
軽やかに飛んだ
次々に迷うことなく

幻想だって人は言う
そういつだって
夢を見ていた

電車は制服の少女を運ぶ
神戸へ大阪へ京都へ
揺れる吊り革は
座る少女をじっと見る

未来がこんなに通俗的とは
想像もしなかった
睨んだ社会の役に立つなんて

でもこれでいい
他人を支える仕事が嬉しい

家で身内に支えられるのさえ

飛び石して駆け抜けた
疾走感のままでは
世間を生きられないので
スピード感は創作活動だけで
お楽しみください

飛んだ石と
海の石　山の石
拾い集めて
城壁を築くことにしました

ありがとう

◆家事キング　京都府

あいのころも

川から吹く冷たい風は体だけでなく
心からも温度を奪っていく

ついさっきまで一人夜景を満喫していたというのに
寒いああ寒い
必死に着飾った孤独の美学が脱がされた

一人が好きだというあの人は
必死に着込んだに違いない
でなければ耐えられるわけがない
もし着込んでないというのなら
きっとあいで縫われた服だろう
でなければ耐えられるわけがない

以前はこうでなかったのに
いつぬいでしまったのだろうか
桜が咲いたあのときに
ぬいでしまったのだろうか

◆おとこのこころ　茨城県

石垣

押しつぶされそうなものも
隙間を埋めるものも
調和がとれていないようで
調和の中にある

押し合ったり
ぶつかりあったりする日々も
大きな調和の石垣の中にあればいい

いつか　すべて崩れ去っても
調和の中にあった私たちが
歴史になれば　それでいい

◆安部さやか　東京都

校舎

此処はサーカスあなたは道化
六つのローファーステップ刻む
三つのプリーツヒラリと舞いた

此処はサーカスあなたは道化

誰かはきっと気づいてる
それでも素知らぬふりをする
あ、また覗いた玩具箱

此処はサーカスあなたは道化
朝は坊やのロボットで
夜は千切れたヌイグルミ

カッターナイフは十字架で
罪で罰で私の聖書
赤く濡れた童謡の
ちたんとたらりんたとたたん

紅いリンゴは不格好
赤い滴を片付けて
赤い雨子が泣き止んだ
ちたんとたらりんたとたたん

目を開いたら耳塞ぐ
息を吐いたの白い息
二〇と一は引き消えた
……
机の上の花たちは
淡い金魚と泳いでた
プリムラ・オブコニカの花は
スピーカーが踏み潰す
ちたんとたらりんたとたたん

至極丁寧に踏み潰す
ちたんとたらりんたとたたん

◆幸　亜有美　　大分県

産まれて来たので

ピカッと　何かが光った
薄暗い水の中で　暖かく浮かび
心地良かったのに
水面からひょっこりと顔を出した途端

暗くて　暖かなトンネルを出口の方へ
一心不乱　一心不乱に前へ進んで行った

何かを　掴み離さぬ様に　暖かな光へ
何かに　抱きしめて貰う為　その光へ
何かに　喜んで貰える　　そう信じて

出口は　マサカな入り口だった　ダカラ
只　　ヒタスラに歩き　迷い転んでも
只　　進むしか無くて　蹴飛ばされ様が
只　　今はスキップ駆け出して

時には　暴れん坊になり足を休めて
時には　涙と友にベッドに横たわり
そっと深呼吸をする

時には　この世にこんなにも愛おしい光を
放つ宝ものをこの手に

抱く事も出来た

我の歩き方は　我が決めればいい
我の歩幅で　　我の歩み方で

只　ソレデいい
只　そのままが　　良い

左肩骨折にて手術にて
退院して来た今日
又新たな書き始めの私の為の
もう一つの心のリハビリ
詩ん愛なる友へ

そっと蓋をするその日迄
大きな　鍋の中をグルグル歩いてた
大きな　鍋の中に得体の知れない物を

ドッカーンと放り込まれ　唖然　憮然

小さなオタマでグルグルとかき回された
グルグルグルングルグルと

その渦は予想以上に大きな渦となって行った
この渦は大きな不安と疑心暗鬼を拡大させた

あっ鍋の中を歩いて居たんだ

只　この道を歩くしか道は無い
只の道なのに　歩き憎し難し険し
只の道と思えば歩き易し優し進むし

二〇二〇は蓋を開けたり閉めたり
二〇二一は一品キチンと仕上げねば

あっ忘れてた火をつけたのは誰？
鍋の中をグルグルとしたのは誰？

あっ駄目だ目の前に鍋が有る何か仕上げねば

その先に　きっと蓋を開け光を浴びた
絶品を味わえる事を信じて
忍耐強く待ちたい途中蓋を開ける事無く

そっと蓋を開け光を見
そっと蓋を出来る日迄

樹木の魂

はて　果てしない樹木の樹齢を
はて　羨ましく思うモノが居るのだろうか

ワタクシは　羨ましく無い
寧ろ何百年も生きれると考えただけで
頭がどうにか成りそうだ
欲を言えば最期の時
声をかけられ返事が無いママ
眠る様に　行って居ければが　理想で有る

ケレド　そんな風に事は上手くイクとは

カギラ　　無い訳であって
ダカラ　懸命に目の前の事を何とか
コナソ　　うとする
ダカラ　といって　樹齢を羨ましくは無い

只　樹木に対する尊敬ノ念は有る
彼らは　無償の愛で人々に　愛と勇気
彼女ら　カエリを求めず　癒しをくれる
只　果たして彼らが其れを求めてる
只　求めで無いは分からない
　　無機質な命なのかも知れ無い
ダカラ　樹齢が羨ましい　とは思わない
ケレド　尊敬果てしなく続く尊敬ノネン

穴

穴から出て来た　ケレド
穴は選べ無い　　ケレド
余儀なく　許可無く　意識無く
　穴から放り出された

　貴方は可愛いだの
　女　男だの何かが騒いで居る
笑みの光の様な感じでは有る

アナは異物を入れ
アナはそれに気づかず
体内を這いつくばる
体内が壊れて行く

穴は選べ無い
穴は穴は貴方は　何処へ

出来るものなら
貴方の穴へ還りたい

其々の月

アーもう真新しい表紙をビリリと
ア～曲がってしまった真っ直ぐ破く

と年初めの一月だと言うのに二日は
学息子　マナ息子の生誕の日
一つが二つになった日
正確に言えば二つが三つ目に成った日
たかが日めくりを真っ直ぐ破きたい

ビリリと破く少し早めに
綺麗に破れた破いた
一日は愛する人の母の命日
この人をこの世へ贈り出した事
感謝の言葉しかない

三回のびりりは普通だ
まさか昨年同様に続くとは
桜の下のブルーシートは見れぬママ
今は去りし祖母の誕生日記憶は
生き続ける

四月入学した一年生で
登校する学童の多さに目を細める
皆がマスクする姿だけど
元気な姿で歩く姿に
希望を見る

五月　いつかは思い出と化して居る
鯉のぼりを泳がせると言うか
垂らすと言うか親の自己満で十分幸
今は幼き子らの前にて
ボランティアにて絵本を読めて幸

六月梅雨時だから
紫陽花がたいそう綺麗
雨粒の演出が彼女ら彼らを
輝かせる　シトシト憂いを成して
一九六九アポロの月面着陸の月に
着地した記憶は無いが
アジサイと梅雨は嫌いでは無い
洗濯は乾きニクイが　笑

七月太陽が元気を出して来る
七回目の破り六回も破ったか

八月の破りの頃
マスクのしたの唇が安堵へ
向かって居るのだろうか
オリパラピックは

九月のシルバーデー
笑顔に溢れるシルバーデーで
あって欲しい

十月結婚記念日の今年も
泊まりはできぬのか
其れでも日々は確実に重ねてる

十一月と十二月
キチンと破れる様に

日々マスクに守られながら
過ごして生きたい
過ごして行きたい

そしてビリッとピッっと
一枚最後の月をやぶれたら
月夜の晩にそっとそっと
感謝の手を合わす

◆田中教平　静岡県

生活

眠りより目覚め
また、いつもの天井だとおもった
昨日の朝も、いつもの天井だとおもった
痩せた体
石鹸のようにすりへってゆくこころ

大丈夫
緊張はしても

疲れない

日々、日をていねい暮らす
黙って工場靴を履く
扉を開ければ
風が薫る
風は
吹きたい方へ吹いているだけ

クタクタになって
今日も汗かき、恥をかき
じっと座りこむ
本当の自分にかえる
でも本当の自分が
さいきんわからなくなりつつあるよ
小説は、
読めなくなってしまった
いい言葉が世に溢れたら不安だ
それだけ人々の魂が
雑になっている、
ということだから

おはようございます
今日も　食パン　コーヒー
目玉焼き　で、はじめます

◆張佳晏　　東京都

湧水

時々、歩みを止めて道端に目を配ってみる。時々、何となく佇んで空を見上げてみる。いま、この瞬間を、ぼくは生きている、という感覚をなぜ、覚えることができないのだろうか。時々、そう思う。息づいている合間に、ほんの少しだけ。でもやはり、思ってしまう。

下方へ引っ張られて
ちりや粒子と掠め
終端速度に至ったときでさえ

何も考えず
何も考えることなく

しかしぼくは考えてしまい、重ねて考えてしまう。いま、踏みしめている土壌の匂いが鼻腔の中を充満させる。いま、見えないものが波打って、流体が優しく通り過ぎてゆく。アスファルトの裂け目から立ち上がり、橙色の実を見せるこのさりげない、いま。

しみ込んでは通り抜け
台地のふところも
崖線の軒先も
呼んでいるようで呼んでいない
呼んでいないようで呼んでいて
湧き出てはたまって
たまっては流れ

しかしぼくは流れずにいて、ようやく動き出してもまた淀んで、ぼくの周りをぐるぐる旋回するいまを、ぼんやりと眺めてしまう。なぜ、いまここにいて、何もない空虚を見据え、何も語らない音楽を聴いているのだろう。時々、そうやって、自分を形作ってきた思い出を抱え、覚えたことのない水たまりの中に立って、思ってしまう。ぼくは誰であって、何を生きていて、なぜ、いまというここにいて、自分に描けというのだろう。

広大な水域に着いてはのぼり
南寄りの風に乗って
何も考えず
何も考えることなく
ささやかな循環をもう一回見せて

◆佐々木千賀子　大阪府

父へ

これといった趣味もなく
ビール一本と二級酒一合を飲みながら
テレビで阪神の試合を見ていた
日頃は無口な父だけど

少し酔いがまわると
公務員だった頃の話をした
労働組合でデモの先頭に立った
セピア色の武勇伝
地方の農家に生まれ
電車の運転手に憧れて町へ出て
市電の運転手になり
車掌をしていた母と出会って結婚した
あの頃　私は若すぎた
ああ　また昔話かと
話の途中で席を立って二階に上がった
階段の途中で振り向くと
手酌で酒を飲む父の背中が見えた
今年も父の命日がやってくる
戦後を遮二無に生きた　私のお父さん
ごめんね
お酒を注いであげたこともなかったね
もっとあなたが生きた時代の話を
聞いておけばよかった

いや　一緒に酔っ払って
くだらない話に笑えばよかった
いまじゃ　私もお酒を飲めるんだよ

◆あけぼむ　　福井県

自分の為

もう分かってんでしょ?未来が無い事
気付いてんでしょ?追いつかない事
優しくしてみせて
尽くしたふりして
笑わせないでよ情で許して
真実の愛なんてここには無いの
とっくの昔に捨てて来たわ

そんな頑張ったって無駄無駄無断
いつか一緒にって夢見過ぎ
何その態度って逆ギレ御免
アンタが怒ったとこで未来は無いの

追い掛けられると思ってんの？
優位になれるって勘違い

尽くして欲しいの見え見栄御免
抜殻だって知ってんでしょ！

ねぇ本当に好き？って与えられるモノなんて無いわ
利用してんじゃない？ってどう接したらいいのよ

くれるなら貰ってあげるわそのかわり
求めて来たって抜け殻だから与えれないわ

勝手に怒って傷ついて
態度急変！仕返ししてるつもりなの？

アンタが求めるモノなんてここには無いの
お疲れ様です柄にも無いわ

素で居てそんな怒んないでよ

疲れたから休んでんじゃん
利用してる？って逆ギレ御免
アンタも散々頼ってんじゃん
使ってんじゃんオアイコサマナノ

いい加減楽になったら？ゲーム感覚
酔わせて落として飽きたら捨てるの
そんなアンタ見てきたわ

そんな私簡単じゃないの
ラスボスくらいはあるかもね？
難しいからって暴力反対
プライド高くてごめんなさい

もう分かってんでしょ？未来が無い事
気付いてんでしょ？追いつかない事
優しくしてみせて
尽くしたふりして
笑わせないでよ情で許して

真実の愛なんてここには無いの
とっくの昔に捨てて来たわ

そんな頑張ったって無駄無駄無断
いつか一緒にって夢見過ぎ
何その態度って逆ギレ御免
アンタが怒ったとこで未来は無いの

ノルマクリアしたつもり？
時間切れですお疲れ様！
一時的では足りないわ
継続しないと終わりなの

そんな顔して同情かって掴んだつもりでどうしたの？

くれるなら貰ってあげるわそのかわり
求めて来たって抜け殻だから与えれないわ

勝手に怒って傷ついて

態度急変！仕返ししてるつもりなの？

アンタが求めるモノなんてここには無いの
お疲れ様です柄にも無いわ

あの日の私はここに居ないの
いつかの夢見たって帰って来ないの
中身がないのよお疲れ様
時期が来たらこの身体もその内流れて消えてくの

今だけでいいなら夢みてて
ただの抜け殻で良いならね？

良い思い出ばかりのアンタの本体
悪い記憶だらけの私のメモリー
合わさる時が来るなら多分
同時に壊れて無くなるの
残されたメモリー私の分身
私のコピーをどうか忘れないで

◆吉川長命　京都府

象の皮膚のかけら

象の皮膚のかけらやら朽ちかけた高い塔が夢に出てきた
実際僕は小学校のころから象といわれてきた
理由は乾癬で粉をふいたような体だからだ
うつると言われボコボコにされたし彼女もできない
就職活動でも落ちまくって中学中退でもできる旗振りや
ドカチンしか
僕にはまったく縁がない
身体を使う仕事は乾癬には相性が悪い
汗をかきすぎるとすぐ悪くなるしどんなに薬を使っても
ダメ
それでも見栄えが悪いと監督に怒られるから真夏でも長
袖を着て仕事をする
そして物が二重に見えたり頭が割れるように痛くなった
りして
休憩時間に大量の水と解熱剤をのんでやり過ごす
冬は冬で空気が乾燥するからまた皮膚がガサガサになる
そうなったところをつねってくる先輩もいたりする
やっとこさ役職がついても見た目のせいで彼女はできず
休みでも右手かアプリとお友達
こんな病気誰も選んでなんかいない
こんな病気と誰も付き合いたくない
なのになぜか僕は乾癬と
これからもずっとお付き合いしなければならない
最低　最低　最低
ほんとにクソ最低の人生
それでも僕は生きていって
死んで自由を手にしたい
死んで自由を手にしたい

◆岸明日翔　東京都

水の感性

手から残らず落ちる水のように
乾いた葉の死体が浮いた水面の様に
それでも私の涙が透明で鮮明であるように

ただ張り詰めて震えた手を伸ばして
そこにあった水を掻き混ぜて

裂いてみたり　叩きつけてみたり
撫でてみたり　掬ってみたり

溢れない様にそっと「できたよ」と
母の前に差し出す「水」
私が凍った水を解すように
深く根本に染み渡る「涙」

水の魔術師　指から落ちる一滴一滴が
心が乾いた部分を潤していく

飴坊も驚かず　鯉も寝たままの水面に
私は水に這いそっと口付けた

もう一人の自分が　水に揺れている
優しい顔をした自分が　水面で揺れている

裂いた水面の傷を癒すように
私は自分の水を重ねて行った

手に溜まったまま落ちない水の様に
落ちた葉がリラックスする水面
口角が少し上がった日差しの様に

私は少し笑った　今日も水は揺れている

◆月　　宮城県

人魚

何処へなりとも凪ぐ大気の低空を
夕暮れは包み込む海風

ずっと長い間のこと伏せてきた
眼差しは何時しか前を視ていて

心に悼みながら気持ち冷たく差しこんだのは

貴方の口笛だったのかもしれない

鳴らせば高い音階が古い傷跡へ滲みるから
夕陽にそれとなく伝えてほしい
ずっと長いこと孤独だったこと

私は人間になりたくて紡いでいた言葉
それとなく舌足らずでしょうか

片鱗だったとしたところでも
尊さを胸に秘めていたい泡沫(うたかた)に

如何しようもなく投遣りになっては
上空へと掠れ雲の染まり加減

斑(まだら)ならばそれはそれで好きなのですが
支えを必要としている寄る辺のない
私の在り処は漣へと呑まれて

私の在り処は漣へと呑まれて。

◆雑魂草

言語(ことば)

俺には言語がある
吾が手に生る言語！
雛壇の優等生らの遊びじゃない！
一字体自体がギラリと燃えて居る！
キラリと光るコトバ
肺腑を打つ言葉
右と右のハザマ、左と左のハザマ、
真ん中の間のハザマ。
で、ひっそり凝っと光って居る
何千年だって待って居るのだ！
その隙間々々から掬い出して
文字として実体化させ
本来の姿を出させるのだ
脳髄の時空、体内総言語を「今」に現わす
自己陶酔でも構わない

ヤツらはどれ程歓ぶか！
サアわれ原子われ原子と喧しい子供たち、因りいい言葉
の楽曲に変身せ！
踊るんだ、踊れ！
下手に触ると、怪我するぞ！
鋭利に尖った水晶の切っ先の様に－－－
埋もれてる凝っと埋もれてる「今」も。
闇に言葉はない
失敗の人生に己れに
慰めと活を入れる
たった一つの言葉を選びとり
白いノートに篆刻する
一字一句は命である
個性を充分吸い出し「陽」に当てる
だが時空の（はざま）で
金銀の文学文字も
その色彩を落としていく
さあ、俺が手を伸べよう！
さあさあ！言葉達の歓喜の舞いの始まりだ！

◆玉井秀男　福岡市

今日の色

今日の気分の色は「赤」
真っ赤な太陽は青春のシンボルなんだよ
そして、「赤」は熱く燃える恋の色
そしてね、そしてね、エネルギッシュで勝利に導く革命
の色でもあるんだよ
元気になるんだ
でもね、でもね、「赤」は吸血鬼が好む血の色なんだっ
て

今日の気分の色は「白」
白い動物の存在は神聖なシンボルなんだよ
そして、「白」は穢れのない純真な色
そしてね、そしてね、ジャスティスで悪を正す善の色で
もあるんだよ
清々しくなるんだ

でもね、でもね、「白」は冷たい死に装束の色なんだって

今日の気分の色は「青」
空や海などの広大な自然のシンボルなんだよ
そして、「青」は若さと夢を謳歌できる色
そしてね、そしてね、リラックスでき開放感のある色でもあるんだよ
爽やかになるんだ
でもね、でもね、「青」は未熟さから不安や悲しみを抱える色なんだって

今日の気分の色は「黒」
雄々しい強さと権威のシンボルなんだよ
そして、「黒」は神秘的な雰囲気の色
そしてね、そしてね、ステータスが高く自己主張する色でもあるんだよ
憧れるんだ
でもね、でもね、「黒」は陰気で孤独な老人の色なんだって

今日の気分の色は「黄」
爽やかで明朗快活なシンボルなんだよ
そして、「黄」は知性を刺激する色
そしてね、そしてね、フレンドリーで心を弾ませる可愛らしい色でもあるんだよ
楽しくなるんだ
でもね、でもね、「黄」は軽率と甘えから危険を招く色なんだって

今日の気分の色は「緑」
生命力と再生のシンボルなんだよ
そして、「緑」は心や身体の疲れを癒す色
そしてね、そしてね、エコロジーで安全安心を約束する色でもあるんだよ
ホッとするんだ
でもね、でもね、「緑」は現実から逃避する弱者の色なんだって

今日の気分の色は「紫」
高貴で地位の高さのシンボルなんだよ
そして、「紫」は古風で華麗なる色
そしてね、そしてね、ミステリアスで神秘性の高い色でもあるんだよ
わくわくするんだ
でもね、でもね、「紫」は協調性に欠ける自分勝手な色なんだって

◆岡安啓　平塚市

レモン

坂の上にいた婦人の抱えきれない茶色の紙袋から
レモンが一つ二つ落っこちて転がった
坂の麓にいた私はそんな滑稽な
また、黄色の小粒の塊の、転がる姿が
何と美しく映ったであろうか
坂の下まで転がってきたレモンを私は拾うと
返そうと躊躇ったが
レモンを一つ握り一目散に逃げ出した

自宅の机の上に置かれたレモン
タバコをくよらせながら眺めていた
我ながらこの茶色いレトロな机に合うものだと思った

夕暮れが近づきまたレモンに目を向けるとさっきまでの
美しさがたちまち消え
何か滑稽な形をしたスポンジに見えてきてしまった
がっかりした気持ちと腹立たしさでその２階の部屋の
窓から眼下に見える地面に叩きつけた
破裂した瞬間のレモンの美の崩壊が、なんと綺麗であったか
例えるなら精巧なガラス細工を叩き割った瞬間に似ているとで言えば良いか

窓から離れ、部屋を見渡すと黒やら茶色や灰色の部屋の
模様に埃が舞っていて乾燥した風が横切った
レモンはもう確かめることもなく部屋になかった

窓の外の砕けたレモンをまた見たけれど
無様な格好なそれは美とは言い難いものだった
窓をピシャリと閉めてベッドに横たわると
私は眠りについた

◆落知之仁美　　神奈川県

入水

誰かに打ち明けるより
この静かな殺意は
海に沈めておきましょう…

永続的な約束を誓う事で
愛の安らぎを憶える
そして羽根を切り落とし
皆が望む安寧に基づき
舌がもつれるまで
戯言を吐き出して

今日迄、生命活動をさせて頂きました。

この身が存在を証明する為には
永遠と言う名の暴力から
逃避することのみであります

生きるという免罪符は
もう手元になど残って有りません事よ。

最期に何か御言葉を頂戴したいのですが
今この瞬間さえ
少しの眠剤のおかげで
深海の底の様な
意識の朧げさに興じている
己の稚拙さ
可笑しいですね

又天使が全裸で暗黒の海へ
夜の憂いや悔み
その情け全てを

清く儚い涙たった一粒で
浄化しに勇ましく向かう
心地よい分裂した感情
お嫌いですね

世界で唯一の無垢な笑み
細い純潔の四肢と共に
あるいはその未熟な脳細胞さえも
仄暗い海底にて
差し出す予定であります
いつか抱き締めてやって下さい

足元から腰へ
肩から鼻腔の粘膜へ
目元から海中へと
緩やかに
海水の逆流が始まる
あの日の様に息苦しく
咽返っては喉元を傷めつける

酸素は尊い賜物でした
その凍てついた恐怖心や
薄っぺらな告白すらも

凍りつき出した感情線は
脊髄から錆びた脳髄へ
そして嬲るほど愛おしい横顔へ
今世との別れ時を伝達し

又非情な冷たさに感銘を受け
己の魂が淘汰される事を
心より渇望する手筈である

それ故延々と震えて
華奢な頭蓋骨は崩れ堕ち
水中で真珠の宝石として

愛しの彼女は、散り散りと成った。

さてはて
知らぬ誰かがくれた絶望と
世間に捧げた希望とやらは

何処の浜辺で、何時に彼女の為を想って
最期、息絶えてくれるのだろうか。

◆伊藤範子　　三重県

時を捉えて

ケアというルーチンは
それほど重くないけど
ルーチンの変更された午後は重い
変更されたのは
ふつうでないことが起こったから
重い大きな袋が肩にのしかかってくる
ショートステイのお帰りなしの今日は
人生の荷物って重いな

いつも担いでいて
家の中でも持っている
いっそ放り出してしまいたい
ボードレールは
どこかへ行こうとしきりに魂と相談する
魂の重さはいろいろで　ときどき呻く
透明とか薄いグレーの無定形物みたいな魂
ユートピアへ行こうか
それってどこにもないよね
「この世の外ならどこでもいいわ!と叫ぶ魂　分かるな

「あなたの心のゴミ引き受けます」
資源回収のビラが誘っているが
重くたって
心の中の荷物は貴重な金銀珊瑚だ　捨てちゃもったいない
掃除はしない
一生運ぶゴミだから

ハイッ　積み上げました一日の所産　測るのは誰
目には見えないただのチリかも　でもいちおう所産だから
秤にちっぽけなヒスイが乗っかっている

知っていることをすますだけの日々って怖い
ルーチンは目隠しだ
時を忘れさせるための
たとえば閼伽を替えるとか
介護の手順とか
常に酔っぱらえってボードレールは言う
酔っぱらって目隠しをする
飲めない人は美の探究者たりえないだろうか

創作の闇に呻吟するひとが
冬の海岸で
死のイメージを温めていたが
接がれた鎖骨は極端に狼狽していたことだろう
自分は異物として
百億年の孤独で目を凝らしているつもりなのだが
創作する人である所有者は
プレートに永遠退去を命ずると決意したようだ
プレートは異物だから
ゴミとなろうと空のかなたへ行こうと知ったことではないが
袖すり合うも他生の縁だと考えている
飛びこむ前に考える
北村太郎は死とか愛とかなどは卑しい語だと言う
できるだけ避けて言い換えること
愛と書かずに立ち尽くすとか

桜が豪快に咲ききった
花吹雪になる前後　つまり花の一生
四月下旬は一日一匹桜の虫を始末する
虫はちょっと動かしたら死んでしまった　例外なく
五月のつつじがもう
今生まれたばかりの真っ盛りで
時間の足はゆるみも疲れもないが　つつじは

咲くときに静止を考えることはまずあるまい

岩山に上らなくてもキッチンは景色で一杯だ
ひつようなものは全部ある　キャビネットに
日用薬から木のスプーンまで
キッチン宇宙に
一人　この一刻を
休み　食し　働き　楽しむ
唯一人の生の舞台で
山椒の芳香がキッチンをマヒさせるが
フジの長さも高さもまちまちであるように
芳香というのは一つの見解にすぎない
シンクの三メートル下ってどんな臭いなのだろう

ティッシュが　複数同時くしゃみの音を聞いて
不安そうに震えている
矛盾だらけのテーブルから目をそらし
キッチンを見回す　ウインクして
ペーパーの氾濫の中からブダペストみやげの
グラスのマグと手鏡がのぞいている
ブダペストの地下ツアー
一つの通りの道から入って　もう一つの道へ抜け出た
そこがホテルの玄関口で
ディナーのグヤーシュスープを一口すると
スタッフが
黄色のブーケをブラウズにさしてくれた
一瞬めまいを感じた　生きていた
カテドラルのオルガンが耳に入ってきた　聴きに行こう
ブダペストの町で見たホイール付きの砲台は
昨日戦場から帰ってきたみたいにピカピカだ

キッチンで
夜を耐えたイスが今日を待つ
腰かけ　離れ　また腰を下ろすことに対応して
イスはひたすら支える
なにかを見ているようだ
生活の重要なポイントに
もたれられていることに気づくときだけかもしれないが

身を離す人を凝視しているようだ
テーブルはもう寝ている
明日はジャーマンオムレットを作ろう

「遥か古
　結びし縁に
　想いを馳せて」
宗教団体の建物の入り口に掲げられた今月の言葉
縁が結び絡まり今日ここにある　と言っている
存在動詞
岩とか石は「ある」であって「いる」ではない
いると言えるとしたら　でもそれは
石の知ったことではない

無であるのに存在感があること
時空は無と一体なのに
存在感を持つから
色があり音がある
最終的に叩き落されたアオバエだって

コミックの意味を知っていたわけではないが
ぺちゃんこの存在感は緑金の笑い
北村太郎の言う過激への親近感をもって
生に対して言葉の根源に対して存在に対して
真摯であるということ
最も純粋な形でだいじにすること　自分も
結局ぼくは何なんだろう　と言えるなら
三ヶ月は大丈夫だ　その後も続くよう努力すれば
大丈夫だ

本を一緒に読む時間が終わった　帰り行く人々が
カタルシスを胸と足にくっつけて
おなじ空間にいた主催者へお辞儀をし
横に向けた初夏の顔を
ベールが隠す前にのぞく他者は
無機質で社交的な体質
という矛盾が去った空間には
遠くまで真っ暗に伸びる溝だけがある

生活って詩とはかみあわないね　といわれそうだ
キッチンのモノたちは表情はつねにおなじで
いる場所から動くわけではない
じっと一点でたいてい同じ方角を見ている
そんな均一不動性になにを言っても無駄　ましてや詩へ
のベルトコンベヤに載せようたってそりゃ無理だ
どこからかくすくす笑いが聞こえる
惰性でときどき動いたりする以外は
動かない物体たち
生活空間九七パーセントを占めるものたちは
陶器もガラスも木のマグも
四千年先にどうなっているかは知らないが
目下キッチンの居住者である
ものの充実に圧倒されて　そっと座り
そっと見てみる
もの　と　自分
ここに生きている

皮を切り裂く必要は消えないにしても
日常時間とその働きには蓋をしておいて
今ここを解剖しても
せいぜいサピエンスの歴史について読むことと
それを納得したか計ることしかない
ありうべきことのすべてとその限界を知れば　もう
言葉はこれ以上ない　あまりない

多すぎるか少なすぎるか　イマジネーションは今
ラフレシアが発する死臭とか永遠の発情とか
一点の個として想像してごらんと誘う
ヘリオスの陽光は圧倒的な感覚で
言葉を覆い隠す
人間の息は四方に飛び交い　ためいきをつく
イマジネーションは真実と結託して
空間にさざ波の音をたてる

カラフルな花キルト　パーマネントのふるまい
短縮も延長もない時間の伴走をしてくれる
すべて無　あれ　なにか匂うぞ

それだけは確かで　死臭　腐肉　ようするにここに匂う
狂って恩寵を微笑む人

人間の体って骨の袋みたいだな
体が働くとき
感覚は完全でなくとも支障なし
不完全な嗅覚と美味感覚は共存するし
あらゆる事象を生み出した人間のイマジネーションのおかげで
心の平和を保ちながら
皿へ移されテーブルへ運ばれた食材が食べられるまで
フライパンに目を落として
わたし骨入り袋は
そっと耳うちする
聴覚はパーフェクトなんだ　だから
耳で味見しよう

一瞬って　たとえば
歯ブラシが歯にかからずおっとっと

さざ波ざんぶ一瞬　そこへ
一瞬小鳥が点描された
疲れた目をさまよわすと
そこに堅固にいるよ
家は私の上にいる

じっと動かない　あるいは　動くのだが
感知しない時の経過の中に
とらわれている自分
その閉塞感は意識の原点で
感じ悶え絶望するのだ
毎日とか　毎時間とか一瞬とか　何か荷物を
飛び去る時間に
運ばせたい　その重みが少しは慰めになるかもしれない
今あることの原点とはなにかは分からないが
とりあえず　今を生きるために　今
息をするために

肉体は外の現象に振り回されながら

中で緻密な臓器の連携作業が行われていている
耳をすませば
微かに聞こえる　ガタンごっとん　シュワシュワ
くちゅくちゅ　グワァッ　かみ砕き溶かし流し　大きな
ポンプが
ぶるぶる震え　細い管がねじれ　ストレスの味つけとか
善玉と悪玉の計量とかあって
骨の袋の中の戦いはそのうちに終わるまで
てっぺんで脳はひたすらもだえ続けるだろう

光のない朝だ　でも
小雨一つ一つが輝いて落ちてくる
海面の水鳥が力こめてもぐる
薄いグレーの外界は固い冷たいスチールではなく
いのちあふれる
川面の魚かカメか
凛とした黒一点は今を生きているし
繁茂する松のめしべは笑って
今豊饒にむせかえる

散歩から帰り
部分的にぬれたレインコートをはたいたら
陽炎がゆれて
逆立ちしたい気になった
朝は始まったばかりだ

未来に通じる音は過去の色
連想をふるいにかけて
ハレとケ　光用意　時々明暗反転し
遥か未来を見る過去の目　または逆に
過去を見る遥かな未来
私はもういい
はい　でんぐり返ってお立合い

ひどくなかったことって数えるほどしかない
たいてい自分の思っていない方向へ行ってしまい
途方に暮れていても　まだまだ
まだまだこれからがあるというのは
至福ではないことは明らかだが　絶望でもないんじゃな

いか
というふがいない自分に見切りをつけたら
とほとんど毎日考えるが
なにがしかの夢と希望のしっぽが離せない
その意味でも宙ぶらりん
中ぶらりん　なにかの真ん中で待っている
最後の待つは言わずもがな

グレーの空のグレーが真っ二つに裂けて
真っ赤なベロが出てくるかもしれない
ペロペロ町をなめて
全部グレーの世界の
色つきの部分ををきれいにして
あとはぜんぶグレーのまま
途方に暮れたベロがなめた
百年の錆がピカピカになった
町はグレーが一番だと思う

迷いなく一日がきえていく　グレーのまま
残虐な戦争が世界のどこかで激烈を極めているこの一瞬
今飢えている人間がいて
今交差点でひき逃げされた人間がいる
それでも迷いはない
一直線の時の消滅

二十四時間
いつも不安だ
外へ出る
不安は何キロなのか重さは分からないが
肩にずっしりと重い
社会と足の位置は対峙しているのだろう
ちょうどいい歩幅はわからないままに
振動する頭　けいれんする胴　もつれる足指　いっそ
シソ巻きにして頭から食べちゃうぞと念じながら
歩き続けた

しらうめねずというグレーの空は時が止まったようだ
グレーはほかの色が際立つようにつつましやか

そして最も厳粛に容赦ない時の色
ものものしいものはなく　著名人が死亡の記事も
終止符が打たれたアスベスト裁判も
ペンディングの入管法改正も
グレーの中で進行する
グレーに飽きたら
色が炸裂するミステリーにもどろう
被介護者が帰宅する前に

ちゅうくらいの平凡なので
反抗する気さえ起らないときは別として
不満はあらゆるものへ　ボードレールのように何にでも
かみつきたい　死　倦怠を鞭うったり
希望や青春を笑ってしまうなど　その前に
それらはみな面と向き合って罵倒したり　ほめあげたり
する
そんながっぷり組みうつ実体がないとき
呪詛を受け入れる娼婦はいないし
降りしきる雨にものを押しつけることだってできかねる

雨は静かだし　約束は従順に果たされ
時間がいかなる変態性も持たないし
癒し手であると同時に駆けゆかせるものであるよき師の
ところへ頼っていく一歩手前だ
自分の足は　まだついている間に
生と死　時間と意味　その他　考えなければいけないこ
とが目白押し
ミステリーが呼んでいる
たいていは解決の道筋を名探偵が教えてくれる
遊覧船がはしゃいで　川の高低差が消えた
と思ったら
船上のバーベキューでハーレクインは
血しぶきのワインを
のど元に嬉々と流しこんでいる
梅雨の間を駆け抜ける五月の風と
降りそそぐ陽光
歓喜と満足
自然がそのままに自然で
人はひとらしく息し　生業に励んで

安息の家に眠る日々だったらもうそれでいいのだろうか
何も他にはないのだろうか
どうだろう
全くそれとは反対が裏の顔であり
真実は欺瞞に満ちているとしたら
敬虔に押し戴くありがたいスートラの響き
完成された音楽の歓喜にふしまろび
今日もノルマは果たされた　喜べ
はい　でも
こころに居座るしかめ面した悪魔はなんだ
倦怠というどす黒い異形の影が
高笑いする　その時間は午後もだいぶん進んで
もうすぐ夕方へと太陽が孜々として
行程をこなそうとしている
どういう解釈も可能だが　のみこんだら
明るく胸が晴れる言葉はないものか
そんなネクタルを飲んでみたいのだ
早すぎる梅雨　だからと言って新鮮ではないし
反復はたいてい惰性だ　ただ眠い

シャッターがどこかで開き
五月の風が
幼い日の夢の国に吹きわたる
大きな池があって
白鳥の形の足漕ぎボートが池の面をすべっていく
池から見上げると
丘の上にニュータウンが広がっている
一世代契約の真新しい家々がピカピカ光り
窓はセルリアンブルーの池を見下ろして
白鳥形ボートと
原っぱに忘れられたフリスビーはワルツを踊る
回れ回れ今日の歓喜　今日の忘却よ回れ

丘を降りて高架までが雪国で
その向こうは青空で
メルヘンは終わりだと分かっていた
その高架の手前に　赤錆に覆われた廃工場があり
巨人のもがれた腕のような鉄塔があって
それを見るとなぜか舌に血の味がした

消えた赤錆の残骸を通りかかるときいつも
その情景を油絵にしたくなった
なぜか分からないが
錆びた腕に抱きしめられた雪女に
激しく雪が降りそそぐイメージが浮かんだ
希望の反対のもののイメージ
オレンジ色の希望を収めた倉庫のカギは見当たらない

こころに言いたいことがわいてきて
ことばをさがす　すると
ことばは上質の酒のように
豊潤に五感をくすぐる　いや
そんなふうに手には入らない　ことばは
天上の甘美な色と音だよと言って
少しダレているではないかと言われたら一言もないが
確かに聞いた確かに匂った
臍を噛む一日の終わりに　それを
かたつむりは紫陽花とたわむれる

青黒い触角には
凝縮された行為が詰まっているみたいだ
無意識に犯したかもしれない罪と罰が
青黒くたまっていって
凍りつくことなくそこにいる

ひしめくいのちが空の下に　土の中に
刈りこまれた緑の茂みの下にはあって
あふれかえるいのちがあって
金属の擦れ合うような音がしたら
闇が始まる
歩く影はほのかに
晩鐘は消えゆき
空間の中に何か見えないか目を凝らす
一つの点としてでもいいから
影だけだ
黄昏どきのフクロウに言いたい　早朝も真夜中も
怯え上がる心に寄り添ってと
絶え間ない絶望の癒しはだれから期待できようか

朝昼晩の命の満ち足りは知っているのだから
いっそ鉛の巨人がいいかもしれない　癒し　ときどき
怯えるばかものに恐怖を思い起こさせてくれたらいい
この上まだ怯えさせるのか　いや
無限に変わらぬと一見見えるライフの恐ろしい歩みを可
視的にしてもらうのだ

平和でなにごともなく幸福で　それが
窒息状況をひきおこすのだ　ならば
氾濫しないよう水が囲われ　道が整備され
安穏に満ちる生のそっと聞こえるバズバズ
黒茶の羽が頭上を暗くかすめる
ではないとしたら　ではなくあってほしい
息をするために　窒息は退屈により　いや
退屈は窒息によって　おしくらまんじゅうで
こちらは息がつまる
首なし坊主　ニタニタ笑い
だれなのか
口だけ青くパクパクする

お抱え役人は朝昼などなく
戸を開けたら絶壁だから　開けたら
クワー　クワー　鳥は飛んだ
あ　空はうすい青で　どこまでかわからないが
あ　落ちてくるぞ　わーーーーー
人より長く生きる優越感で　木々はふわーと笑う
水　空　土　不吉な安穏　呼びかけたい　誰か
すりよる　そこで止まるのだ　たしかにいいものであり
多分待ってました　ついに止まるもの　かもしれないが

うすぼんやりした影が幽霊のように歩いている
蒼茫のゆうぐれ
思い出の棘が刺さる血まみれのこころ
三白眼でもないが
生を感じたいのに
無言でさまよい　首をたれる体たらく
生はみなぎる
額に入った絵はヒラメ
皿に乗ったヒラメがじっとこちらを見ている

静物たちや景色たちが漫歩を楽しんでいる
知らん顔した骸骨がカタカタ話し
リンゴやオレンジがおいしそうでしょと美を振りまく
生きているわたしの見る時間は
とりこんだ生だ
絵は生き
骸骨が笑う　泣いた骸骨は見たことがない
薄い灰色の五時からもう少し暗くなるのを待っている
紫陽花はハギをからめとる　いや
ハギが紫陽花ののど元を噛む　明日は
たぶん逆にはならない
消えてしまった記憶の位置替えしてもだめだし
空は裂けない　ないこと　でも絶対ないとは言えないこと
無数の虫の命がなんでもなく　人間だって虫けらみたい
に死に
いのちは膨張と収縮の形さえない
どこかにそれはある　いたるところにある

朝の目覚めはさわやかにリフレッシュして　ではなく
なにか柔らかくどす黒い澱が何センチか
たまっている内臓のドアを後ろ手に閉めると　起きたら
さわやかさを売り物の太陽に首を振り　この首め
この足め　とつぶやきつつ　一日のクルージングに
何とか乗りこみ
気に入り風景となじみの顔をぜんぶわがものに
したつもりで
もうこれで午前の意味は分かったから
靴の底が圧しつけ離れ　圧しつけ離れ
大地
ぐるるころろ　ぐるる　たしかに鳥だろう

想いではとつぜん未来にあらわれる　あのときの
あの影は影そのものとして歩いているようだ
群生する黄色いスイレンが静止しているとき
耳をすませたら太古が
大通り下の暗色の池に黄金がうなっていた
裏道

◆舞雪野　北海道

部屋

その部屋は
静かに息をする。

真夜中の色を帯びて群青になった白いカーテンが揺れる。
それはまるで深い深い真っ暗な海の底でたったひとり
ただ静かに静かに深呼吸する様に膨らんでは萎んでいく。

その隙間から見える白い洗濯もの達が
ベランダの無骨な鉄柵にひっかかり、ぼんやりと暗闇を
泳ぐ
輪郭が浮かび上がる。
その奥では、肩を寄せ集めてひっそり息を潜めるように
連なる建物の光が点々と転々と
不規則に連なり、星の瞬きのように見える。

そこだけ時間が、そっと取り残されているようで、
いつも、もう少しゆっくり進んで下さい、と願う。

その部屋にいる時
私は、暫く、その光景を見つめる。
そしてただ、その空気を、吸っては、吐く。

古い鉄筋コンクリートと畳と煙草と、もうすぐ側迄来て
いる予感がする
冬のにおいが静かに静かに混ざり合う様な音がする。

吊るされた霞草と吾木香の影が
濃く、壁の木目に映し出されているのを
じっと見つめる。

横で眠る男の胸に耳をあてて
私は力を抜く。
優しく波打つ心臓の音が底の方から響いて聞こえている。
少しの時間その音を聴き、私は男に背を向け、再び、呼吸し続けるカーテンを見つめる。
ゆっくりと水面に近づいているのを全身で感じる。
目前のそれは夜と朝の間のような明日の色となり始めている。
それはこの後徐々に本来の色取り戻しつつも、時間が経つ毎にその日だけに見ることのできた色となり、また、白くなって消えて行くのだが、それを見るまでは、ここに居られないと分かっている。
私は、束の間、目を閉じる。
その、目を閉じていても感じる柔らかい温もりと光の気配は
少しずつ
今、
橙になりつつあった。
そっと男から離れ、玄関まで向かう様子を、
息を止めてそこに存在する全ての物から一心に見守られているような気になる。
（いつも扉を開ける前に、ほとんど半分に破れた、ウォーホルのポスターと対峙した。あの、剥かれたバナナのシルクスクリーン。どこかに貼ってあったのを、とってきたのだと男は言った。）
音を立てないよう注意を払い、鍵の壊れた扉を開ける。
扉を開けると、このアパートの鉄筋コンクリートの隙間

から
向かいの燻んだ白いアパートのベランダが見える。
煤けた室外機と、銀色の柵にぐるぐる巻かれた青いホースと、子供が遊んだ後の積み木の様に乱雑に配置された植木鉢達が、
あまりにも美しかった。
まるで、近頃男の部屋にあった本の
フランスかどこかの芸術家の絵の様に見えた。
それは今迄見た事の無い様な、鮮やかで無限に広がる
形と色彩のダンス　　であった。
目前には、小さな子供用のプールが
息を吐き尽くしぺしゃんこのまま彫刻の様に
（ずっとずっと大昔からそうであったかの様に）
しっくりとそこに佇み
その左側には、錆びた華奢な鉄製の灰皿スタンドに、
煙草の吸い殻が数本、それぞれ、思い思いの寝姿で横たわる。
先の見えない洞窟の様に狭くて暗くて細い
重苦しい鼠色のコンクリートの階段を下りて外に出ると
一瞬でその周辺の景色の全てが
ひんやりとした明朝の空気と共に
その日の光と色の全てが
私の奥の奥まで流れ込んで来た
細胞という細胞に、染み渡るのを感じながら
低いビルとビルの隙間から
私の所まで影と光が伸びて来て

私を呑み込んで仕舞おうと
迫り来るそれらと
私の頭の中が急速に溶け合い
混じり合い

男の部屋で見た
数々の
昔いた異国の芸術家が生み出す

命魂　迸る　色彩となった

突然
わたしは、
動くことができなくなり

一粒

右目から涙がそろり

零れ落ち、

それっきり、
何も
見えなくなった

余白

女が死んだ。
死んだ女は一冊の小さなノートを
大事そうに持ったまま、
死んでいた。

女の死んだ顔はどこか可笑しそうにも、哀しそうにも、

嬉しそうにも、愛おしそうにも、泣き出しそうにも、

怒り出しそうにも、見えた。

そのノートを女の手から盗み出し、

日が暮れそうな浜辺で、殆ど油のない使い捨てられた粗末なライターで小さな火を灯し
ゆっくりと一枚一枚　捲って行った。

獰猛なここの土地特有の浜風は、
その日は幸い穏やかな
曖昧な季節の境目の夕暮れであった。

その浜風を、山背だと、
何時かの母親が呼んでいたことを、
何故かぼんやりと思い出した。

あの港は夢の中のようで、
わたしは、見るたびにうっとりとしました。

真夜中は、真夜中で、すべてが真っ黒ななかに
きらきらと、ちいさなたくさんの灯りが、水面にも反射して、いちだんときらきらと、

そこだけ、夢のように
煙が空へ空へ立ち上ぼり
薄くひかれた雲の線と同化していったし、

朝焼けは、朝焼けで、
やさしい桃色と、藤色の世界、
そのすべてが

まだまだ水面にもきらきらと煌めく無数の工場の灯りとともに、

変わらずに、煙だけ、
濃い橙になりつつあって
水面から逃げるように

空へ空へ立ち上ってゆきました。

まるで、

大気圏が
薄桃色の、薄い、美しいオーガンジーになってしまった
ような、

そんな空の色でした。

南の空は、

いつだって淡く、人に近い場所にあるようでした。

北の春のような空気のにおいが、
南の冬で、した気がしていました。

工場地帯の海の、
雨や曇りの日の夜は、
その灯りを、ぶあつい雲が反射して、
いつの日も

灰色の夜空だった

その灰色は、
なんだかとてもあたたかく、
心地が良かったのです

それにくらべて、
北の空は、

いつも、高くて、透きとおり、
手には届かないところにある

あの地での日々は
毎日が、感情を揺さぶり、本当に詩のような情景の日々
でした、

たとえば、おそらく、もう閉店したであろう、その街の
喫茶店
（遠い異国の地の言葉で、暦を意味するお店の名前でし
た。）
の、老夫婦は、

わたしの生まれ育った北の国があまりにも好きで、店を閉めたら、のんびりと列車で二人きりで旅をするのだと、おっしゃっていました、
帰る日も決めずに。

なんて素敵なご夫婦なんでしょう！

毎日通って、少しずつ、扱いの慣れないこの写真機で、写真を撮っていきたいとも思っておりましたが、結局二、三度だけ行ったきりでした

その地では、とても繊細で心が優しく撫でられている様な

花鳥風月日本画を描かれる〇様と

まるでわたしの心の中を見透かしているのでは無いかと

ハラハラしてしまう様なそんな色遣いの重厚な心象画を描く▲様との
出会いがわたしを変えてしまいました

その地の冬は、生まれ育った北国の春の匂いがしました

その街の小さなお花屋さんで買ったクレマチスという花の種は
ふわふわのやさしく柔らかい薄小金色の綿毛になりました

野生の金木犀のかおりは、あまりに香しく
からだの全ての細胞が橙で金色のぷつぷつになり

空気中に、溶けていってしまいそうでした

その地の空は、いつも淡く霞んで、夕焼けは水彩の桃色でした

空気中の水分が、多いせいなのかもしれないと思いました

それは本当に絵画のようで

そこでの生活
たくさんの出来事
とにかく
全てが
本当に本当に、美しく、息苦しい、詩のようで

いつまでも消えずに残っているのだと思います

わたしは、常に空虚の中にいます
どこにいても、常に
空虚とともにあります

わたしは自分が人嫌いだと思っていました

でも結局

人によって、土地に惹かれていたのです、、、、

暦の喫茶店の老夫婦が店を閉め、女の故郷である北の国へ、
旅に行けたのかはわからない。

その列車は、
一度、行方知れずになった

誰も信じていないのだけれど

（北の国の入り口ら辺で、少しずつ少しずつ、誰にも気づかれず、ひっそりと浮き始め、気づいた時にはもう、月の入り口であった。）
その列車には乗客がたったひとりだけ
乗っていた。

ただ、それだけの話。

【　】

わたしの中のついさっきが、いつかのわたしの

思い出になるのが、本当に不思議

どんな、色になるのだろう

どんなにおいが、するのだろう

好きな、記憶は、透明になるし、

透明にさせる、

においがつく、

からだの奥を、つんとさせる、

特に、背中の辺り

未完成の、完成。

ふたつにひとつなの、

すべては、ふたつにひとつ、

生きるか、死ぬか、

みたいなもの、

人は小さい囲いから大きい囲いへ移動するだけ

曇りやすい、人を見るとき、

判断するとき、ちゃんと、こすってから、

最近、

であうひとであうひとが、

誰かににてる気がして、

この人は、あの人に、

過去に出会った人たちに、

すべてじゃなくて、
どこかの一部分が、
強く、

クリームソーダの、さくらんぼと、
とけたマーブル

人は、いいように、記憶を操作する、
なんだか、息苦しくなった、

あの人に聞く、この人の話
この人に聞く、あの人の話

違うのだ、
同じ時間を過ごした、
その記憶も、
違う色や、
形となって、
染まっている、

この世の不思議、
無限に多面体である人

なんだか、言葉を口にするのが、
怖くなってしまう、

だって、
人のことも、
自分のことも、

何もわからないのだから、
わかっていないのだから、
恐ろしい、
美しい、
悲しい、

この世の真実、
なのだろう

人に相談はしない
しないほうがいい
していいことがない

薄の揺れる窓の外をながめて、
強く死を意識した四さいのころ

吸い込まれるような高い夏の空
爆弾が落ちてくるんじゃないかと
土曜日はいつも走って帰った

自分をさらけ出すのが苦手
とても時間がかかる

恥の多い人生

お気に入りの本は
大人になってから読んだ本より

小さい頃に読んでいた本ばかり
頭のなかに残ってる

服のトンネル

学生時代の校内写真
自分のも、他人のも、
人の写真なんて全然ほしいと思わなかった

細胞に染み込んでる？

愛と、欲の反比例について、

星を見に行く？
妻と？

荷物が思い　重い

わたしという存在は？

花菖蒲
デルフィニウム
大根と生姜のスープ

鍋でミルクをあたためると、

鍋のミルクはすぐ、さめてる

コップの中のミルクは

まだあたたかい

空気の接地面のもんだいなのかな

これで、

お終い、さようなら

あとがき

二〇二一年度も多数のご応募を賜り感謝申し上げます。

地方の小さな賞ですが、海外からも、また少年少女からもお寄せいただきました。

それこそ現代詩の潮流からかけ離れた選考基準ですが、心の奥底、魂に触れてくる詩篇を求めています。

パンデミックやロシアの侵略や様々な出来事に翻弄されますが、繊細で孤独な営みを忘れることなく、これからも共々に金澤詩人賞を作ってゆきたいと願います。

金澤詩人倶楽部　代表　近岡礼

金澤詩人　第十八号

発　行　二千二十二年三月十日

発行者　金澤詩人倶楽部 代表 近岡礼

発行所　九二〇-〇〇三六

金沢市元菊町一三-一一-二〇一

〇九〇-三二九八-一六八二

mimi.7.kei@gmail.com

金澤詩人 第十八号 二千二十二年三月十日発行 九二〇-〇〇三六 金沢市元菊町一三-一一-二〇一 金澤詩人倶楽部 〇九〇-三二九八-一六八二